女原遺跡 4

—第1次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1053集

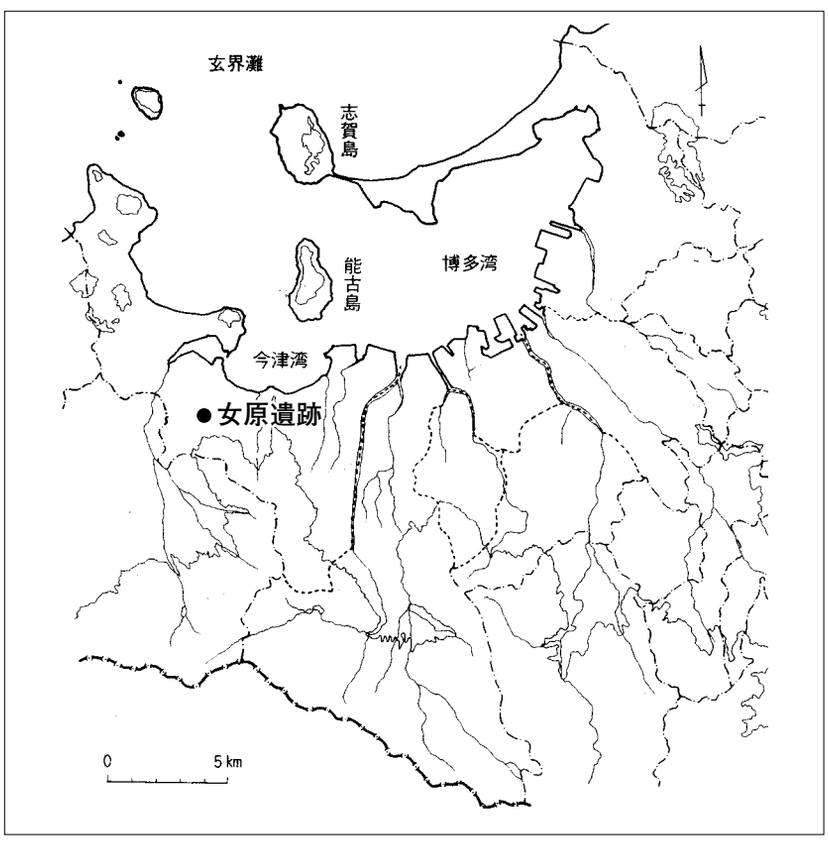
2009

福岡市教育委員会

女原遺跡 4

―第1次調査報告書―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1053集



調査番号：８５１７
遺跡略号：ＭＢＲ１

２００９

福岡市教育委員会

1．女原遺跡調査区遠景（南から、矢印地点）

2．391-1 地区遺構出土状況全景（西から）

1．7 号支線 SC06 住居跡出土状況（南西から）

2．7 号支線 SC06 住居跡カマド出土状況（南西から）

序

福岡市の西郊に位置する今宿平野は、中国の史書「魏志倭人伝」に記載された「怡土国」の東辺にあたり、弥生時代～古墳時代を通じて多くの集落遺跡や前方後円墳群がよく残されている地域です。

しかしながら、この地域ではJR筑肥線の複線化や大規模区画整理事業の計画などが進行しており、豊かな歴史遺産の保存にも影響を与えつつあります。

福岡市では、このような開発によって失われる埋蔵文化財については記録保存のための発掘調査を実施し、その保護に努めて参りました。

さて本書に収録しましたのは、昭和60年度に「女原地区圃場整備事業」に伴って発掘調査を行いました女原遺跡の1次調査の報告です。

調査から刊行までに長い時間を要しましたが、これも関係各位より頂いた多くのご理解とご協力の賜物であり、心からお礼を申し上げる次第です。

なお、最後になりますが、本書が地域の歴史を理解する上の資料として、また学術報告書として十分に活用していただけましたら幸甚に存じます。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　山 田 裕 嗣

例　　言

1．本書は、昭和60年5月27日から同年8月12日に女原地区圃場整備事業に伴い、発掘調査を行った女原遺跡（西区女原）の第1次調査報告書である。

2．本書に使用した遺構実測図の作成は、下村　智（現別府大学教授）・横山邦継が行った。また、遺物実測図の作成は、職員の他に調査員 平川敬治が行った。

3．本書に使用した遺構には記号を付し、竪穴住居跡（SC）・掘立柱建物（SB）・土坑（SK）・溝状遺構（SD）とした。

3．本書に使用した遺物類の整理は、副田則子、松田弘子、花田友美子で行った。

4．本書に使用した遺構及び遺物の整図・トレースは、調査員の他、副田則子が行った。

5．本書で使用した遺構写真は下村が撮影を行った。

6．本書の編集・執筆は横山が行った。

7．本書で使用した方位は、磁北である。

8．本書にかかわる図面・写真・出土遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

9．表紙題字は、地元女原在住の三島聖明氏にお願いした。記して感謝いたします。

本文目次

第一章　はじめに …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．調査の組織 …… 1

第二章　遺跡の立地と環境 …… 3

第三章　調査の記録 …… 5
　－概要－
　１．竪穴住居跡 …… 6
　２．掘立柱建物 …… 45
　３．土坑 …… 45
　４．溝状遺構 …… 74
　５．柱穴出土遺物 …… 78
　６．遺構検出面他出土遺物 …… 81

第四章　おわりに …… 89

挿図目次

Ｆig.１　女原遺跡周辺の遺跡分布図 …… 3
Ｆig.２　女原遺跡調査地点図（1/5000） …… 5
Ｆig.３　女原遺跡第1・2・3次調査遺構全体図（1/2000）……(折り込み)
Ｆig.４　2号支線道路1～3区、6号支線道路1～2区遺構全体図（1/250）……(折り込み)
Ｆig.５　2号支線道路4・5区、7号支線道路、8号支線道路、391－1地区遺構全体図(1/250)（折り込み）
Ｆig.６　SC01竪穴住居跡出土状況実測図（1/50） …… 6
Ｆig.７　SC01・04竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 6
Ｆig.８　SC02竪穴住居跡出土状況実測図（1/50） …… 7
Ｆig.９　SC02竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3） …… 7
Ｆig.10　SC02竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/1） …… 8
Ｆig.11　SC03竪穴住居跡出土状況実測図（1/50） …… 9
Ｆig.12　SC03竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3） …… 9
Ｆig.13　SC03竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/1） …… 10

Fig.14　SC04竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 10
Fig.15　SC 04竪穴住居カマド出土状況実測図（1/20）…… 11
Fig.16　SC 04竪穴住居跡出土遺物実測図（1/2）…… 11
Fig.17　SC 05竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 12
Fig.18　SC 05竪穴住居カマド出土状況実測図（1/20）…… 13
Fig.19　SC 05竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）…… 14
Fig.20　SC05竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/2・1/1）…… 15
Fig.21　SC06竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 16
Fig.22　SC06竪穴住居カマド出土状況実測図（1/20）…… 17
Fig.23　SC06竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）…… 18
Fig.24　SC06竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/2）…… 19
Fig.25　SC07竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 20
Fig.26　SC07竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）…… 21
Fig.27　SC07竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/3）…… 22
Fig.28　SC08竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 23
Fig.29　SC08竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 23
Fig.30　SC09竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 24
Fig.31　SC09竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 25
Fig.32　SC11竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 26
Fig.33　SC11竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 26
Fig.34　SC12竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 27
Fig.35　SC12竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 28
Fig.36　SC13竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 28
Fig.37　SC13竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 28
Fig.38　SC14竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 29
Fig.39　SC14竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）…… 29
Fig.40　SC14竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/2）…… 30
Fig.41　SC15竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 31
Fig.42　SC15竪穴住居カマド出土状況実測図（1/20）…… 32
Fig.43　SC15竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）…… 33
Fig.44　SC15竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/3）…… 34
Fig.45　SC15竪穴住居跡出土遺物実測図（3）（1/2）…… 35
Fig.46　SC16竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 36
Fig.47　SC16竪穴住居カマド出土状況実測図（1/20）…… 36
Fig.48　SC16竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 36
Fig.49　SC17竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 37
Fig.50　SC17竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 37
Fig.51　SC18竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 38
Fig.52　SC18竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 38
Fig.53　SC19竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 39

Fig.54　SC19竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 39
Fig.55　SC20竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 40
Fig.56　SC20竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 40
Fig.57　SB01掘立柱建物出土状況実測図（1/50）…… 41
Fig.58　SB01掘立柱建物出土遺物実測図（1/1）…… 41
Fig.59　SK01土坑出土状況実測図（1/40）…… 42
Fig.60　SK01土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 43
Fig.61　SK02・03・04・06・07・08土坑出土状況実測図（1/30）…… 44
Fig.62　SK02・04・11・12・13土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 46
Fig.63　SK05土坑出土状況実測図（1/30）…… 47
Fig.64　SK09・10・11・12土坑出土状況実測図（1/30）…… 48
Fig.65　SK13・14・18・19・20・23土坑出土状況実測図（1/30）…… 49
Fig.66　SK15土坑出土状況実測図（1/30）…… 50
Fig.67　SK15・16・17・18・20・21土坑出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）…… 52
Fig.68　SK16土坑出土状況実測図（1/50）…… 53
Fig.69　SK17土坑出土状況実測図（1/40）…… 54
Fig.70　SK21・22・26土坑出土状況実測図（1/30）…… 55
Fig.71　SK19・22・23・25・29土坑出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）…… 56
Fig.72　SK24土坑出土状況実測図（1/40）…… 57
Fig.73　SK25土坑出土状況実測図（1/30）…… 58
Fig.74　SK27・28土坑出土状況実測図（1/30）…… 59
Fig.75　SK29土坑出土遺物実測図（1/40）…… 60
Fig.76　SK30土坑出土状況実測図（1/30）…… 61
Fig.77　SK30土坑出土遺物実測図（1）（1/3）…… 62
Fig.78　SK30土坑出土遺物実測図（2）（1/3）…… 63
Fig.79　SK30土坑出土遺物実測図（3）（1/1）…… 64
Fig.80　SK31土坑出土状況実測図（1/40）…… 65
Fig.81　SK32・36・42土坑出土状況実測図（1/30）…… 66
Fig.82　SK33土坑出土状況実測図（1/40）…… 67
Fig.83　SK31・32・33土坑出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）…… 68
Fig.84　SK34・35土坑出土状況実測図（1/30）…… 69
Fig.85　SK37・38土坑出土状況実測図（1/30・1/40）…… 70
Fig.86　SK39・40・41土坑出土状況実測図（1/30）…… 71
Fig.87　SK35・36・37・40・41土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 72
Fig.88　SK42土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 73
Fig.89　SD01溝東壁土層断面図（1/20）…… 74
Fig.90　SD01～03・07・08・10～14溝出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 75
Fig.91　2号支線道路・6号支線道路・7号支線道路・SP出土遺物実測図（1）（1/3・1/2）…… 77
Fig.92　7号支線道路・391-1地区SP出土遺物実測図（2）（1/3・1/1）…… 78
Fig.93　2号支線道路・6号支線道路・7号支線道路・391-1地区遺構確認面他出土遺物実測図（1）

（1/3・1/2） …… 79
Ｆig.94　遺構確認面他出土遺物実測図（2）（1/3・1/2）…… 80
Ｆig.95　各区遺構確認面出土遺物実測図（3）（1/1） …… 82
Ｆig.96　各区遺構確認面出土遺物実測図（4）（1/2） …… 83

図版目次

PL. 1　女原遺跡遠望（南から）
PL. 2
1. 2号支線1区全景（北から）
2. 2号支線3区全景（北から）
PL. 3
1. 2号支線4区全景（南から）
2. 2号支線5区全景（北から）
PL. 4
1. 7号支線全景（西から）
2. 391-1地区全景（西から）
PL. 5
1. SC01住居跡出土状況（2号支線3区）（北から）
2. SC02住居跡出土状況（2号支線3区）（北東から）
3. SC02住居跡出土状況（2号支線3区）（北西から）
4. SC03住居跡、SD07溝、SK20土坑出土状況（2号支線3区）（南から）
5. SC04・05住居跡出土状況（7号支線）（南から）
6. SC04・05住居跡出土状況（7号支線）（北西から）
PL. 6
1. SC04住居跡カマド出土状況（7号支線）（南から）
2. SC05住居跡カマド出土状況（7号支線）（南から）
3. SC06住居跡出土状況（7号支線）（北西から）
4. SC06住居跡出土状況（7号支線）（南西から）
5. SC06住居跡カマド出土状況（7号支線）（南西から）
6. SC07住居跡出土状況（7号支線）（北西から）
PL. 7
1. SC07・12住居跡出土状況（7号支線）（南西から）
2. SC07住居跡遺物出土状況（7号支線）（北西から）
3. SC08住居跡出土状況（7号支線）（北東から）
4. SC09住居跡遺物出土状況（7号支線）（北から）
5. SC09住居跡出土状況（7号支線）（西から）

6. SC09住居跡出土状況（7号支線）（北から）

PL. 8

1. SC12住居跡出土状況（7号支線）（北東から）
2. SC13住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）
3. SC14住居跡出土状況（2号支線4区）（東から）
4. SC15住居跡出土状況（2号支線4区）（東から）
5. SC15住居跡カマド出土状況（2号支線4区）（南から）
6. SC16住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）

PL. 9

1. SC16住居跡カマド出土状況（2号支線4区）（南西から）
2. SC17住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）
3. SC18住居跡出土状況（2号支線4区）（南から）
4. SC19住居跡出土状況（2号支線5区）（北東から）
5. SC20住居跡出土状況（391-1地区）（東から）
6. SC20住居跡出土状況（391-1地区）（南から）

PL.10

1. SK01土坑出土状況（2号支線1区）（南西から）
2. SK05土坑出土状況（2号支線1区）（南から）
3. SK07土坑出土状況（2号支線1区）（北東から）
4. SK08土坑出土状況（2号支線1区）（南から）
5. SK09土坑出土状況（2号支線1区）（西から）
6. SK10土坑出土状況（2号支線1区）（北から）

PL.11

1. SK11土坑出土状況（2号支線2区）（西から）
2. SK13土坑出土状況（2号支線2区）（西から）
3. SK21土坑出土状況（2号支線3区）（南から）
4. SK22土坑出土状況（2号支線3区）（北から）
5. SK23土坑出土状況（2号支線3区）（北から）
6. SK32土坑出土状況（391-1地区）（南から）

PL.12

1. SK37土坑出土状況（6号支線1区）（西から）
2. SK41土坑出土状況（6号支線2区）（北から）
3. SP08小土坑出土状況（2号支線1区）（北東から）
4. SP04・05小土坑出土状況（2号支線1区）（東から）
5. SK24土坑・SD07溝出土状況（2号支線3区）（南から）

PL.13

1. SK01土坑・SD01溝出土状況（2号支線1区）（南から）
2. SD01溝東壁土層断面（2号支線1区）（西から）

PL.14

1. 6号支線2区全景（南から）

2．8号支線全景（東から）

表 目 次

Ｔab.1　女原遺跡調査一覧
Ｔab.2　検出遺構一覧

第一章　はじめに

1. 調査に至る経過

昭和 59 年 4 月 1 日付けで教育委員会文化部文化課に農林水産局農業振興課より西区大字今宿女原地区の圃場整備計画についての事前審査願いが提出され、同対象地について埋蔵文化財の有無について協議を重ねた。その結果、対象地は文化財分布地図には周知の遺跡として登録はされていないが、周辺の遺跡分布状況から試掘調査を行い判断する事が必要とされた。

これに基づき、昭和 59 年 12 月 17・19 日の両日に試掘調査を実施し、全域の遺跡の有無について把握に努めた。なお、対象地は高祖山系から北側に派生する低丘陵に挟まれた谷部であり、南側から北側へ緩く傾斜する地形にあり、水田が棚田となっている。また、南･北地点の比高差は約 20m を測る。

試掘調査は、対象地に試掘溝を設けて遺構の探査にあたった。最も低い北端部（第 1・2 ﾄﾚﾝﾁ）と中部（第 3 ～ 6 ﾄﾚﾝﾁ）及び最も高い南端部（第 7 ﾄﾚﾝﾁ）の 7 本のトレンチである。以下簡単に成果を記す。

第 1 トレンチでは、深さ 0.5 ～ 1m で砂礫層が現れ、東から西へ傾斜する。遺構･遺物の検出は無い。層位は、耕作土－床土－暗灰色土－黒色粘質土－砂礫層となる。

また、第 2 トレンチは、第 1 トレンチの状況とほぼ同じである。中央部が窪み、谷部を形成する。

次に第 3 トレンチは、深さ 0.4 ～ 0.5m で径 30 ～ 40cm の柱穴 2 個が検出された。地山は黄灰色粘質土である。古墳時代～古代の所産と考えられるが、出土遺物が無く、時期は不明である。層位は、耕作土－床土－黄灰色砂層－黄灰色粘質土となる。

次に第 4 トレンチでは、トレンチ全面より柱穴・土坑・住居跡が多く検出された。柱穴は、径 20 ～ 40cm で、土坑は径 1m を超えるものもある。土師器・須恵器が出土し、古墳時代と考えられる。深さ 55 ～ 75cm で検出される。基盤層は、黄褐色砂質土である。層位は、耕作土－床土－茶褐色砂質土－黄褐色砂質土となる。

次に第 5 トレンチでは、全域より柱穴・土坑・溝・住居跡等の遺構が多く検出された。深さ 43cm で遺構は検出される。第 4 トレンチと同一時期と考えられる。

次に第 6 トレンチでは、東寄りに柱穴・土坑が検出される。東から西へ傾斜し、西端では深さ 1m を測る。

次に最南端の第 7 トレンチでは､全体に少数の柱穴が検出された。深さ約 80cm で遺構が検出される。第 3 ～ 6 トレンチの遺構とは埋土が異なり、黄褐色粘質土である。出土遺物は無いが、中世の遺構と考えられる。層位は、耕作土－床土－黄褐色土－黒褐色砂質土－灰白色砂層－黄褐色粘質土となる。

以上のような試掘成果から、対象地には古墳～中世期にかけての遺構が主に中部～南端部付近に遺存することが明らかとなった。このため事業の実施にあたって失われるこれらの文化財の保存について担当部局及び圃場整備組合と協議を行った結果、新設道路及び一部圃場部分約 3,000 ㎡について本格調査を実施し、記録保存を行うこととなった。

なお、本格調査は、昭和 60 年 5 月 27 日から開始し、途中、梅雨も活発であり、調査に難渋することもあったが、同 8 月 12 日に無事に終了した。

2. 調査の組織

調査委託　　農林水産局農地整備課

調査主体　　福岡市教育委員会　　教育長　佐藤善郎

調査総括　埋蔵文化財課長　　柳田純孝
埋蔵文化財第一係長　　折尾　學
調査庶務　埋蔵文化財第一係　　岸田　隆
調査担当　試掘調査担当 松村道博・山崎龍雄、調査担当 横山邦継・下村　智
調査補助　大庭友子
調査作業　池田由美、鬼尾喜代子、鬼丸邦宏、平田信吉、池　弘子、柴田シズノ、柴田タエ子、清水文代、杉村文子、瀧良子、筒井ひとみ、富永順子、中島栄子、中牟田サカエ、西嶋タミエ、西嶋初子、能美八重子、野坂三恵子、原　早苗、平田政子、藤野ふじ子、古井モモエ、松本愛子、松本マサ子、宮原富代、森友ナカ、柳井順子、山下サノエ、吉岡アヤ子、吉岡タケ子、吉積ミエ子
整理調査員　平川敬治
整理作業員　副田則子、松田弘子、花田友美子

Tab. 1　女原遺跡調査一覧

次 数	調査番号	所　在　地	調査面積(㎡)	調査期間	概　要	報告書
1	8517	西区女原 395 他	3,000	850527 ～ 850812	古墳・中世集落	1053
2	8626	西区女原	2,270	860714 ～ 860904	古墳集落	未刊
3	8660	西区大字女原	5,550	861110 ～ 871031	古墳・中世集落	224
4	8720	西区女原	8,000	870701 ～ 870710	古墳集落	224
5	9746	西区女原ムロ 279 － 1	250	971008 ～ 971027	弥生・古墳集落	616
6	0625	西区大字女原	2,580	060614 ～ 061101	古墳集落	1010

第二章　遺跡の立地と環境

女原遺跡は、福岡市西郊から前原市にかけて東西に延びる高祖山山麓の北側一帯に広がる今宿平野の西端近くに位置する。（**Fig.1**）

この今宿平野は、南部の裾部を高祖山から北側に派生する小支脈に区切られた多くの谷地形を形成し、また北部の今津湾沿岸には砂丘が発達しており、近世期以前では砂丘の南側は山麓近くまで湿地がしめる地形であったが、弥生時代以降の多くの遺跡群が残されている。

今宿平野は歴史的には広義の糸島平野の東部を占める位置にあり、弥生時代から伊都国の領域であったと理解される。分布する各時期の遺跡を見てみよう。

弥生時代では、遺跡の北側 3.5km に前期末～中期にわたって九州北部を中心に玄武岩製の太形蛤刃石斧を製作･移出し続けた**今山遺跡**（**17**）がある。本遺跡は､標高 80m 余を測る独立丘陵に立地し、全山玄武岩でなる。その製作素材には剥落母岩や転礫を利用し、打剥整形→敲打→研磨の製作工程を丘陵の斜面や裾部に多くのアトリエを設けて行っている。従って当該期の周辺弥生時代集落から出土する磨製石斧の殆どを今山産が占めると言える。

また、製作活動に対してもたらされたものか遺跡東南側に広がる砂丘上のいくつかの墓地の中には細形銅剣を副葬した墳墓も知られる。

また、北東側 2km には**今宿五郎江遺跡**（**12**）がある。最近の調査では微高地上に弥生時代後期の環濠集落の存在が明らかとなった。内部には掘立柱建物を中心とする建物群やガラス・青銅器の鋳造を示す遺物が出土し、以前調査でも小銅鐸の出土が知られており、後期の伊都国の集落構成の一端を

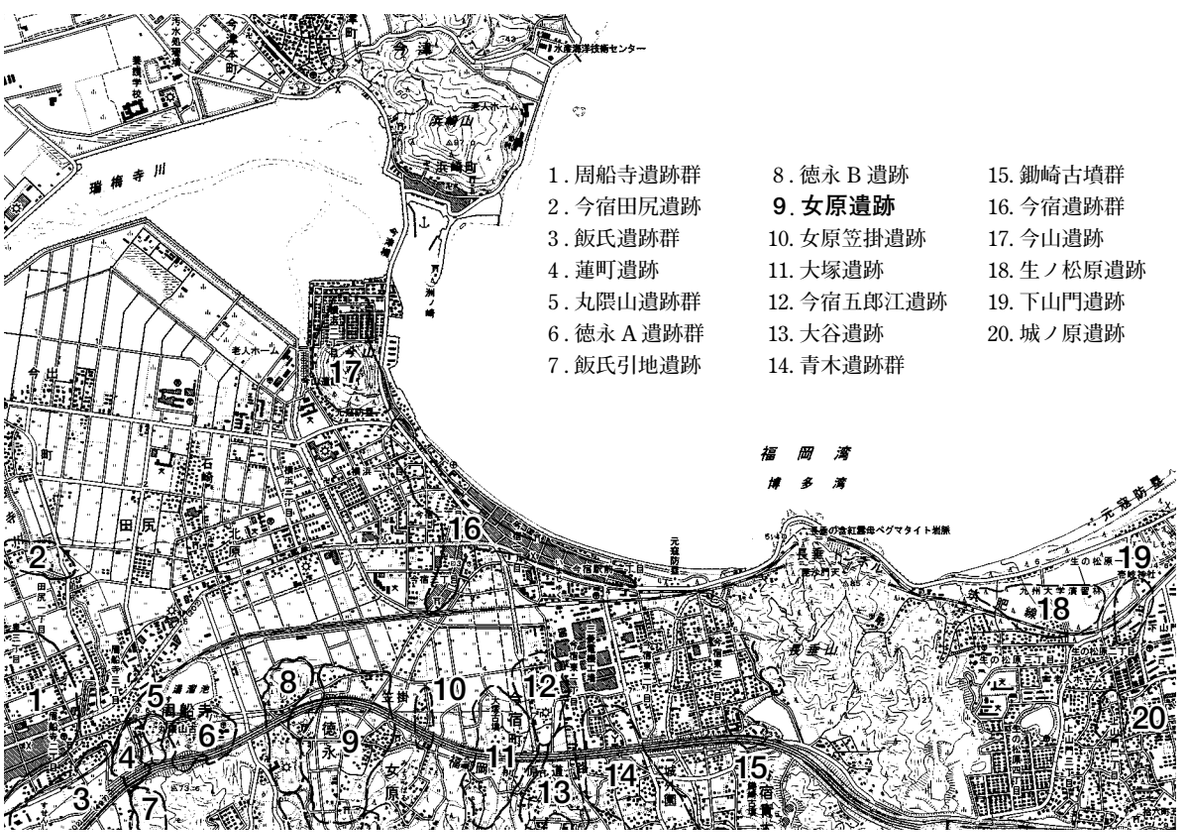


Fig.1　女原遺跡周辺の遺跡分布図

示すものとして興味深い。また、最近、JR 筑肥線複線化に伴う発掘調査では、東部の長垂丘陵の西側七寺川左岸の砂丘上で供献の小壺を伴う弥生時代前期の木棺墓主体の墓地が知られる、

次に古墳時代の今宿平野では、伊都国の奥津城とも言う事の出来るほど多くの古墳群が顕著に造営される。特に東端部は長垂丘陵の南麓に当たる**鋤崎古墳（15）**から最西端に位置し、古墳群中で最大の**丸隈山古墳（5）**までの間の前方後円墳は消滅を含めて計 13 基を数える。この中、前～中期では、派生する低丘陵上に築かれた舟形木棺を主体とし、三角縁神獣鏡・短甲を伴う**若八幡宮古墳（9）**、その北側に位置する**山ノ鼻 1 号墳（9）**、割石積みの竪穴系横口式石室に箱式石棺を埋置する丸隈山古墳、内部主体は未調査であるが、埴輪列や周堤帯が特徴的な大塚古墳、九州では最古とされる竪穴系横口式石室をもつ鋤崎古墳等がある。そして山腹近くのには**谷上古墳**など横穴式石室を内部主体とするの小型の前方後円墳が知られる。また、これに続く後期には、13 ～ 15 群からなる群集墳約 350 基以上が形成されており、これらは 4 世紀後半から 6 世紀後半までの連続する大古墳群となっている。

また、この古墳群に対応する集落も古墳時代後期を主に狭隘な谷に沿って検出される。

次に古代～中世では、太宰府政庁の船舶を所管する機関の主船司が置かれたとされる周船寺周辺で、**徳永 A 遺跡（6）**や**徳永 B 遺跡（8）**などで越州青磁などの出土が知られるほか、五郎江遺跡では古代掘立柱建物が検出されている。また、**青木遺跡（14）**で中世の掘立柱建物・土壙墓、五郎江遺跡でも 11 世紀中頃～ 13 世紀中頃の柱穴・井戸跡・土壙墓などが見つかっており、有力な集落が点在していたことが知られる。

（関係遺跡既刊報告書）

(5)『丸隈山古墳』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 10・142・479 集」 1970・1986・1996 年　福岡市教育委員会

(6)『徳永 A 遺跡』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 306・479・583 集」1992・1996・1998 年　福岡市教育委員会

(9)『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 2 集』1971 年　福岡県教育委員会

(12)『今宿五郎江遺跡』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 132・238・479・737・872・924・1009 集」 1986・1991・1996 ・2003・2006・2007・2008 年　福岡市教育委員会

(14)『青木遺跡』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 169・350・583・734 集」 1987・1993・1998・2003 年　福岡市教育委員会

(15)『鋤崎古墳』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 112・506・697 集」 1984・1997・2001 年　福岡市教育委員会

(17) 中山平次郎『今山の石斧製作址』 福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第 6 集　1969 年

浜田昌治『今山遺跡第 5・6 地点発掘調査を終えて』 1980 年

下條信行『今山遺跡』「福岡市歴史史料館調査研究報告」（市埋文報告 22 集） 1973 年

『今山遺跡』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 75・534・835 集」1981・1997・2005 年

福岡市教育委員会

第三章　調査の記録

－概 要－　今回調査は、女原遺跡の南西側を調査したこととなるが、時代的には弥生時代から中世期にかけてであり、遺構では方形～長方形竪穴住居跡 19 軒、掘立柱建物 1 棟、不整形土坑 42 基、溝状遺構 14 条、柱穴群等である。住居跡の分布は遺構全体図（Fig.5）に見るように南西側の 2 号・7 号支線道路の調査区に集中している。一部に 5 世紀代のものが混じるが、大半が 6 世紀後半の古墳時代後期の集落である。また、建物などの明らかな遺構は検出出来ないが、廃棄土坑や溝遺構及び共伴する輸入陶磁器から 12 ～ 13 世紀の有力集落の存在が明らかである。

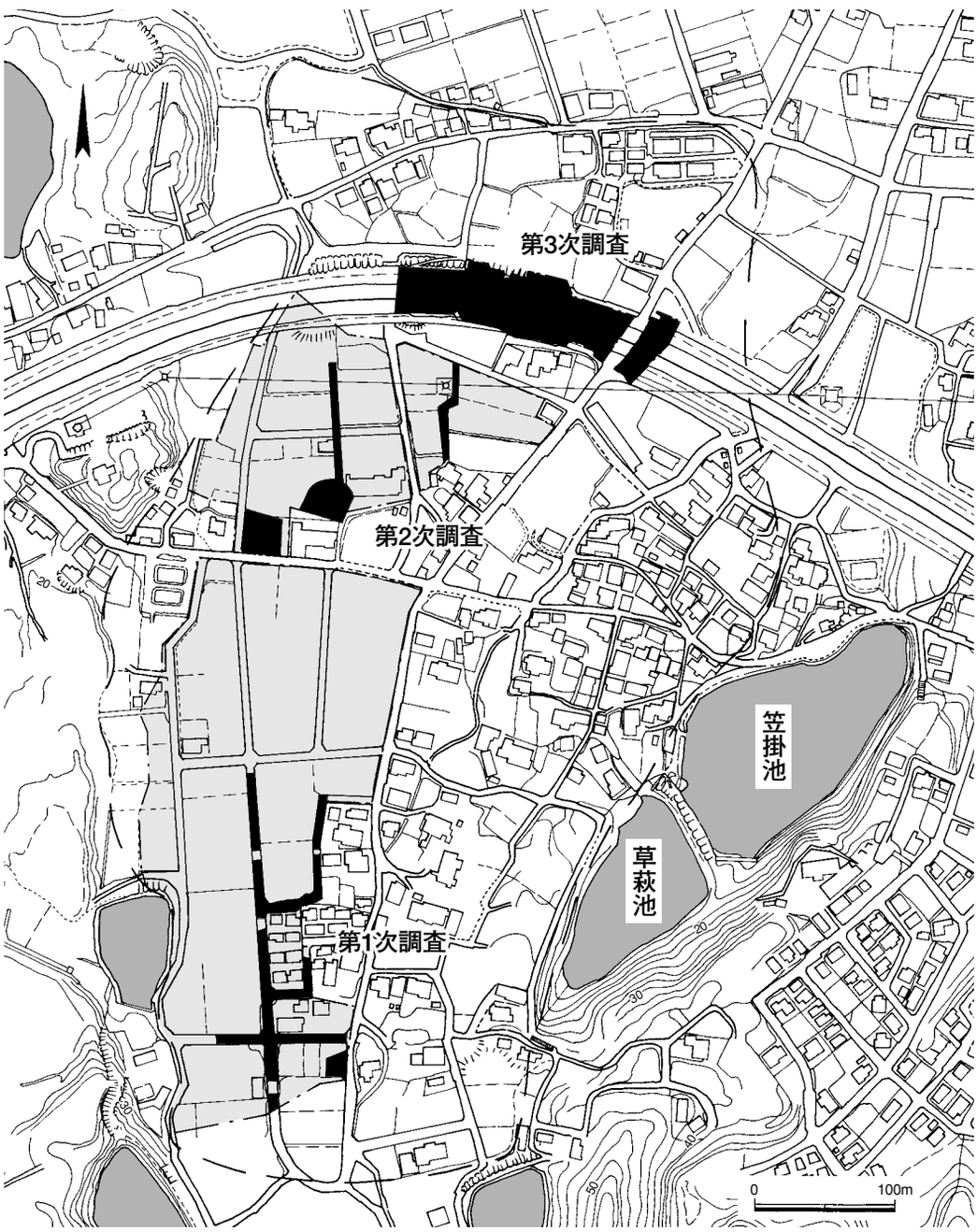


Fig.2　女原遺跡調査地点図（1/5000）

1. 竪穴住居跡（Fig.4 ～ 56、ＰL.2 ～ 9）

―概 要―　竪穴住居跡は、調査区の南端部にあたる 7 号支線道路・2 号支線道路の調査区を中心に計 19 軒が検出された。2 号支線道路 3 区で 3 軒（SC01 ～ 03）、同 4 区で 6 軒（SC13 ～ 18）、同 5 区で 1 軒（SC19）の計 10 軒である。また､7 号支線道路で 8 軒（SC04 ～ 12）､391-1 地区で 1 軒（SC20）である。住居の平面形は、長方形～不整形をなし、カマドは北壁に集中して付設されている。
また、時期的には、須恵器を伴う 6 世紀後半代のものが多く知られる。

SC01 住居跡（Fig.4・6・7、PL.5）

本住居跡は、2 号支線道路 3 区の南端近くで検出された方形～長方形プランの住居と考えられる。壁面及び床面を後世の耕作による畝溝によって削平されている 。コーナーは明瞭ではないが、西辺長 4.5m 前後、南辺長 2.1m 以上を測る。壁高は、良く残る中央部で 0.2 ～ 0.3m である。埋土内からは多数の土師器甕破片と共に土師器高坏、須恵器杯身などの遺物が出土した。

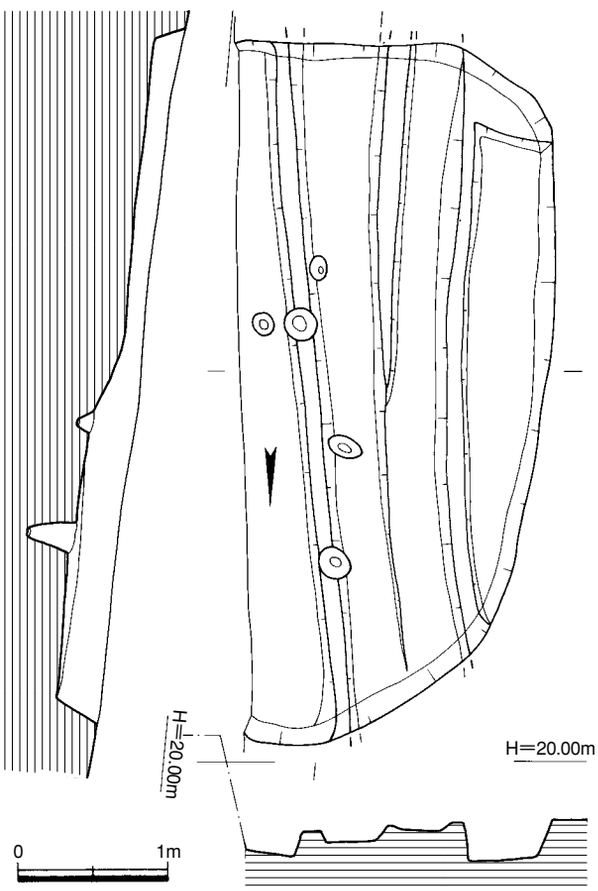


Fig.6　SC01 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

出土遺物（Fig.7）

00001 は、小形の須恵器杯身である。受け部の立ち上がりは低く、内傾している。器面調整は、底部の下半部に回転ヘラケズリを施す。他はヨコナデである。器色は、外面が暗灰色で、内面は青色を呈する。胎土には石英・長石粒を若干混入し、焼成は堅緻である。復原受け部径は 14cm を測る。

00002 は、土師器高坏の杯部破片である。杯部は浅く、口縁部は緩く外方に伸びる。器面調整は、荒れのために不明である。器色は、内外面共ににぶい橙色を呈する。胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は、堅緻である。復原口径 13cm、残存高 3cm を測る。**00003** は、大型の土師器甑である。胴部以下を失う。器面調整は、荒れのために詳細は不詳であるが、内外面共に荒いハケメ調整を施す。器色は、内外面共ににぶい橙色を呈する。胎土は､密であり、

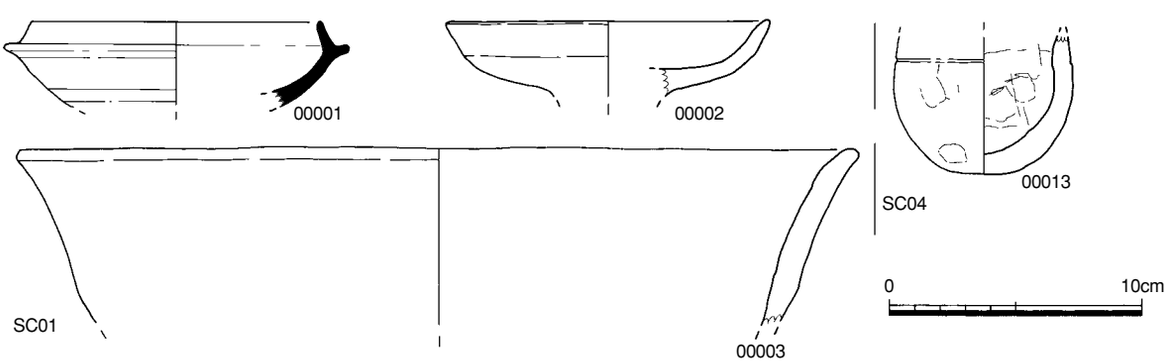


Fig.7　SC01・04 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

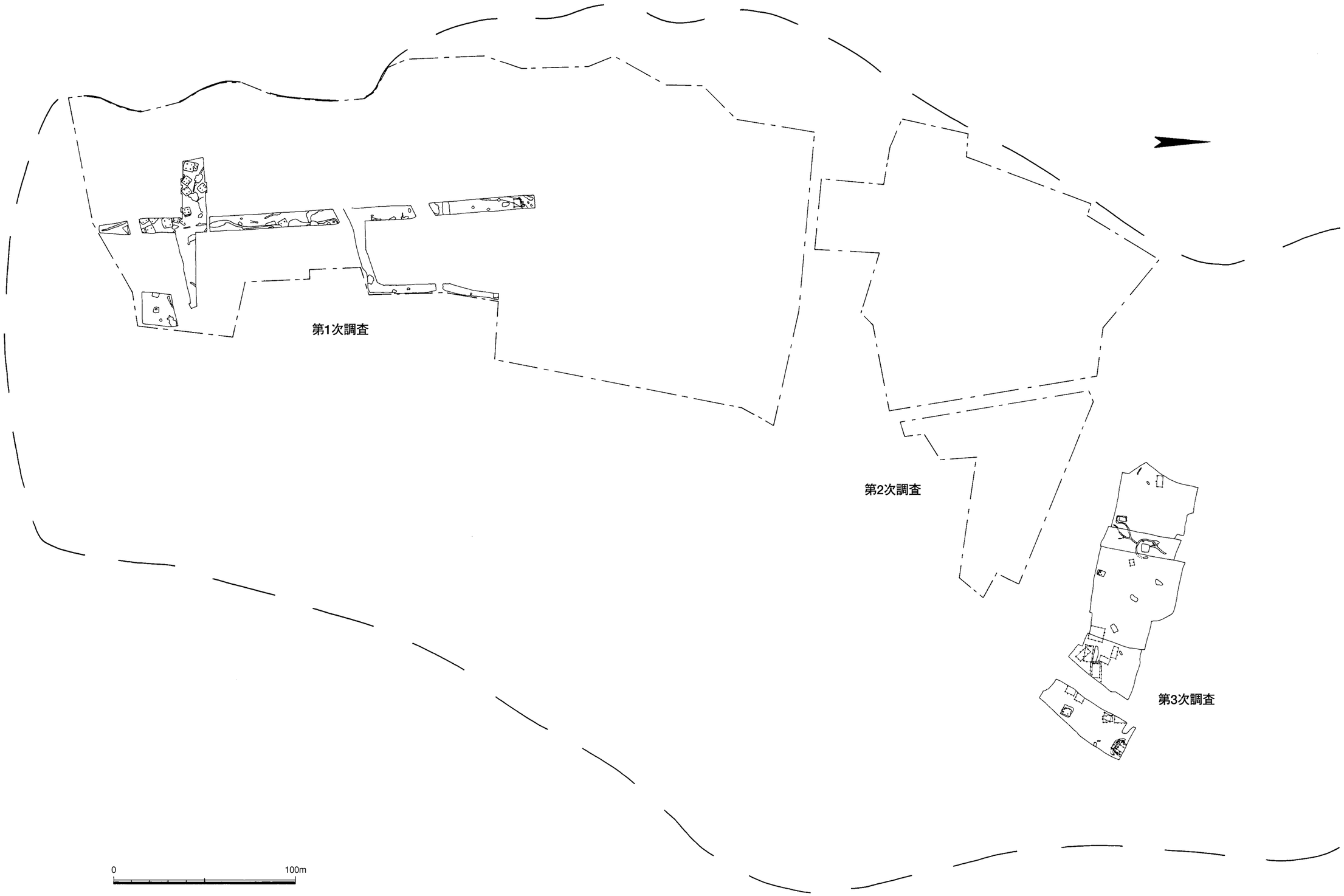


Fig.3　女原遺跡第1・2・3次調査遺構全体図（1/2000）

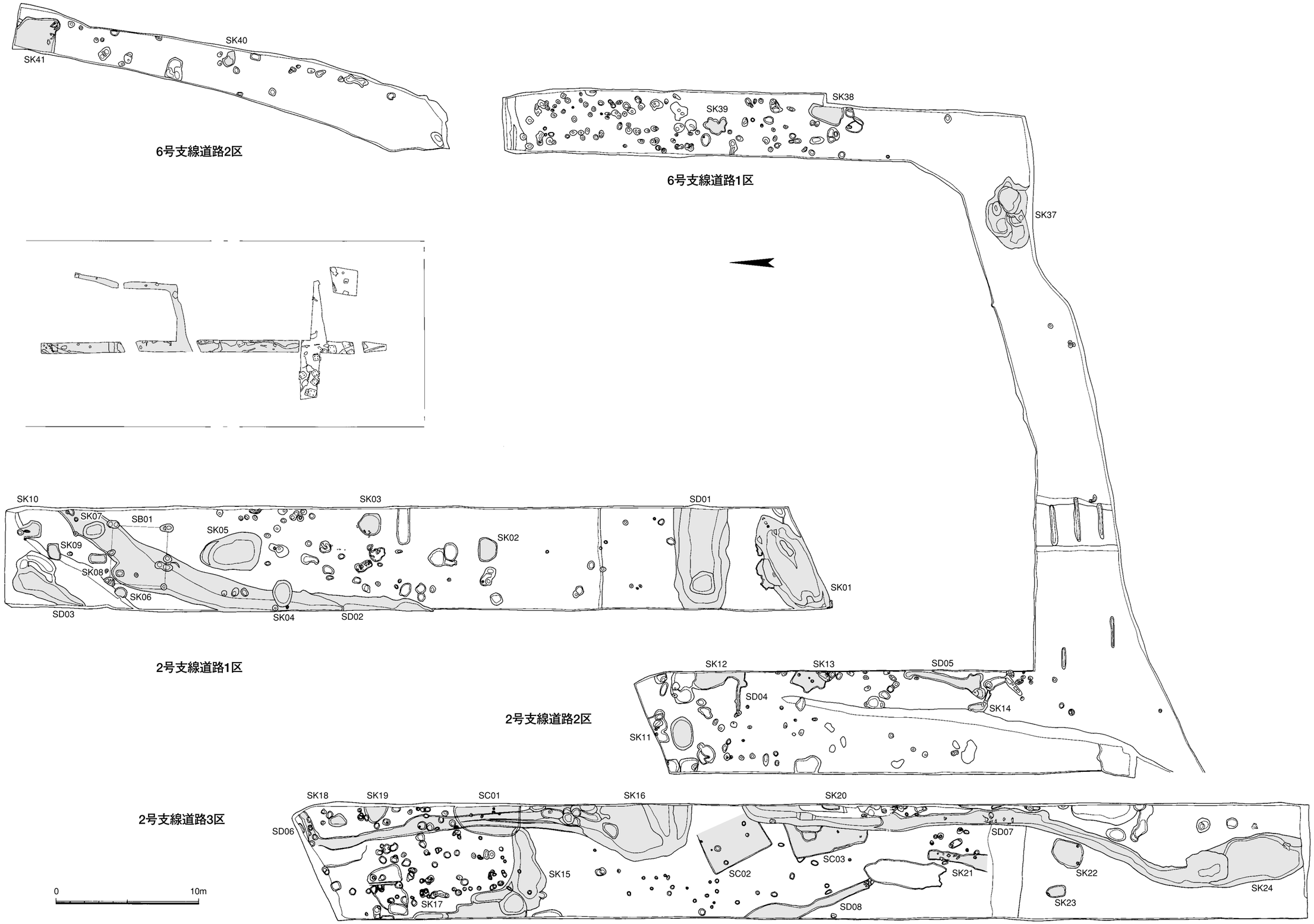


Fig.4　2号支線道路1～3区、6号支線道路1～2区遺構全体図（1/250）

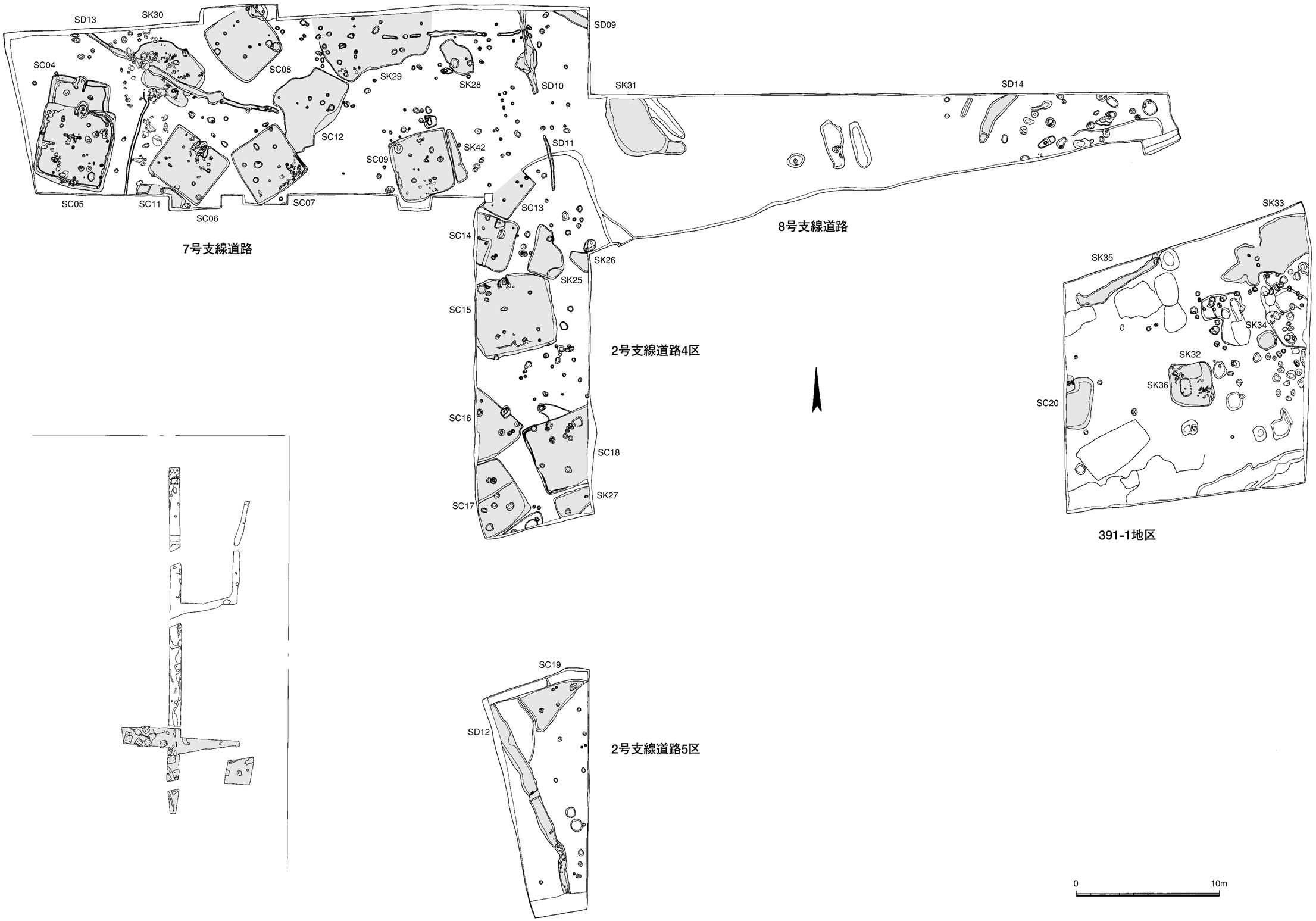


Fig.5　2号支線道路4・5区、7号支線道路、8号支線道路、391ー1地区遺構全体図(1/250)

焼成も堅緻である。復原口径は 34cm を測る。本住居はこれらの出土遺物から 6 世紀後半の時期と考えられる。

SC02 住居跡（Fig.8 ～ 10、PL.5）

本住居跡は、2 号支線道路 3 区の中程で検出された長方形プランの住居跡である。東半部壁を失うが、西壁長 4.6m、北壁長 3m 以上、南壁長 1.8m 以上を残す。また、壁高も残りが悪く、西壁 0.3m・北壁 0.15m・南壁 0.25m を測る。住居跡床面には北壁寄りに 2 ヶ所に炭化物の集中する部分が見られる。また、

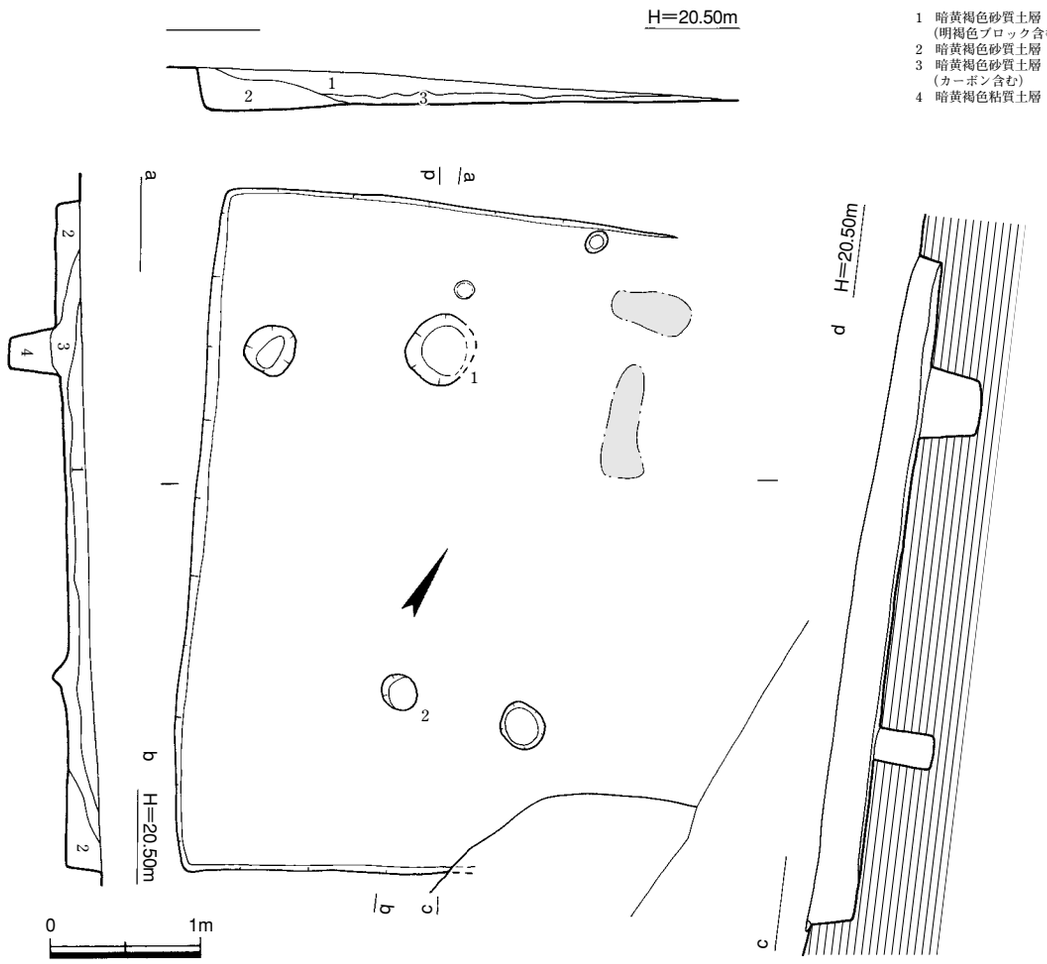


Fig.8　SC02 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

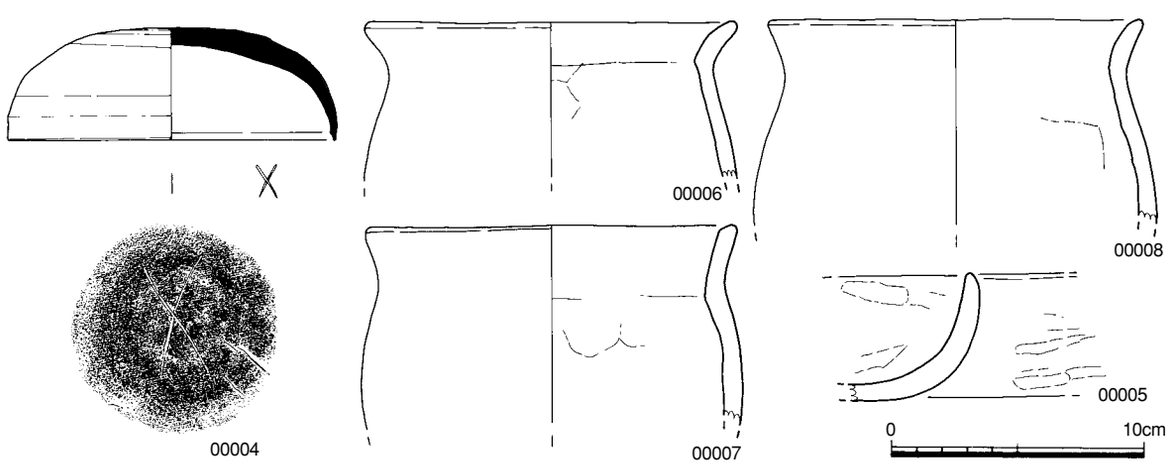


Fig.9　SC02 竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）

埋土は3層に区別出来るが､床面直上の第3層はカーボン混じりの暗黄褐色砂質土が全面に広がる。

また、主柱穴は西壁に並行する2本が認められる。主柱穴1は0.45×0.4mの不整円形をなし、深さ0.40mを測る。主柱穴2は径0.28mの円形をなし、深さ0.40mを測るサイズである。両柱穴間は心身で2.35mを測り、西壁端からはほぼ1.5m、北壁からは0.95m、南壁からは1.15mの位置に配置されている。

住居跡の埋土中からは多数の土師器甕類の破片が多く出土したほか、土師器盤や須恵器搗杯蓋、混入遺物に磨製石斧・二次加工のある剥片が見られる。

出土遺物（Fig.9・10）

00004は、須恵器杯蓋である。半球状の天井部をなし、細い口縁部の内側に小さい段を有する。調整は、天井部の上端付近に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデ調整である。ロクロは時計回りである。天井部の内面に「×」印のヘラ記号を残す。器色は、内外面共に暗青灰色～青灰色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。復原口径は15.2cm、器高4.5cmを測る。

00005は、土師器盤小破片である。口縁部は内湾気味に立ちあがる。器面調整は、荒れのために明瞭ではないが、内外面共にヨコ・ナナメ方向のヘラナデと考えられる。器色は、外面が橙色で、内面はにぶい橙色を呈する。胎土は密で、石英・長石と僅かに雲母を混入する。焼成は堅緻である。

00006は、口縁部が短く「く」字形に屈曲する土師器の小形甕である。器面調整は、荒れのために外面および口縁部内面は不明であるが、胴部内面にナナメ方向のヘラケズリが残る。器色は、外面が淡赤褐色、内面で黒褐色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を若干混入する。焼成は堅緻である。**00007**も土師器甕破片である。差々直線的に立ちあがる口縁部を有し、胴部のふくらみは小さい。器面調整は、荒れのために外面及び口縁部内面が不詳であるが、胴部内面の口縁との境に指オサエが認められる。器色は、外面が灰褐色で、内面灰白色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原口径は15cmを測る。**00008**も土師器甕破片である。口縁と胴部の境が不明瞭な甕である。器面調整は、外面と口縁部内面が荒れのために不詳であるが、胴部内面にヨコ方向のヘラケズリを加える。器色は、外面が赤橙色で、内面は褐色を呈する。また、

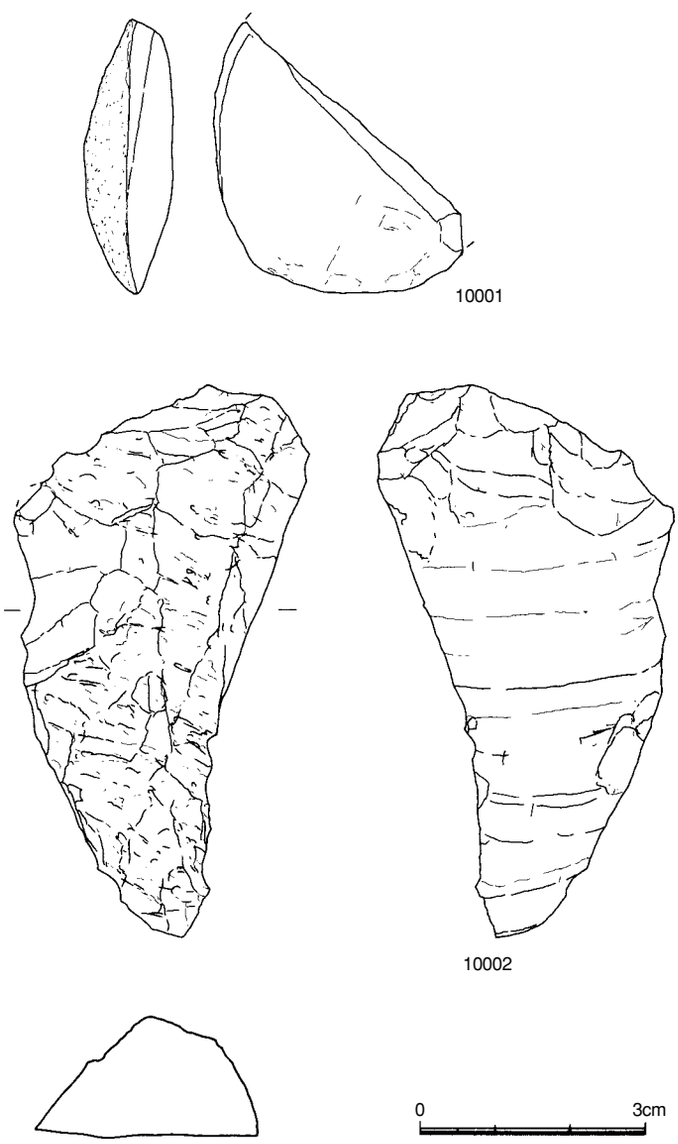


Fig.10　SC02竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/1）

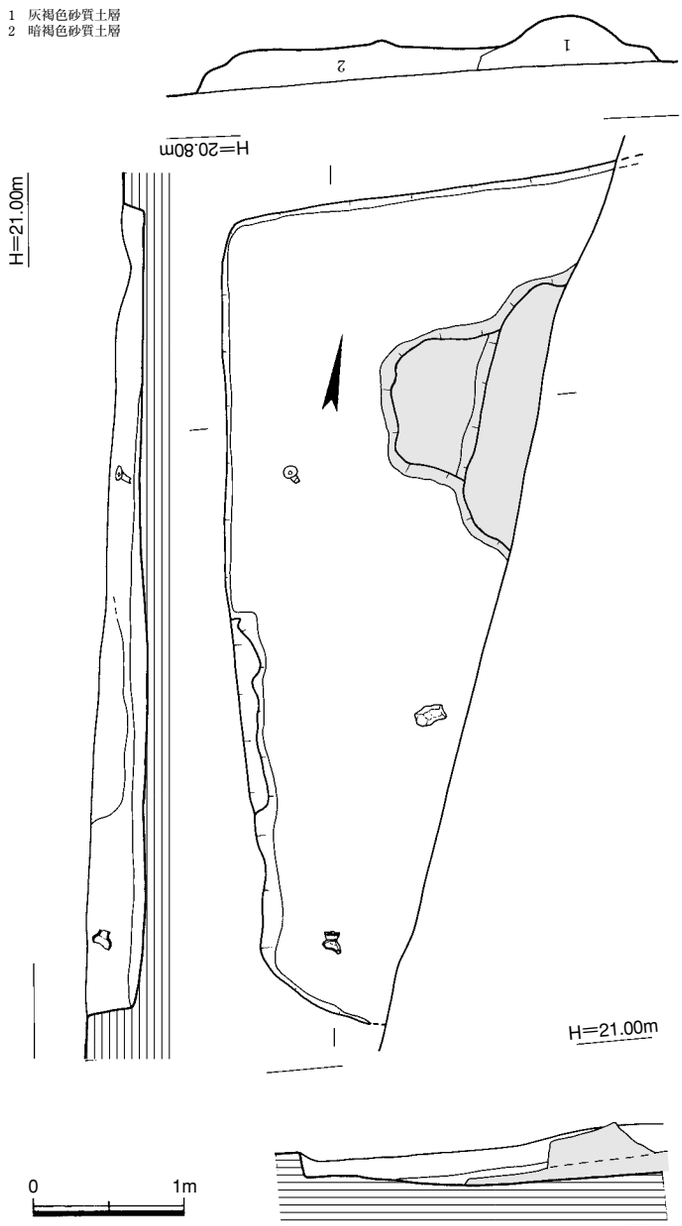


Fig.11　SC03 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

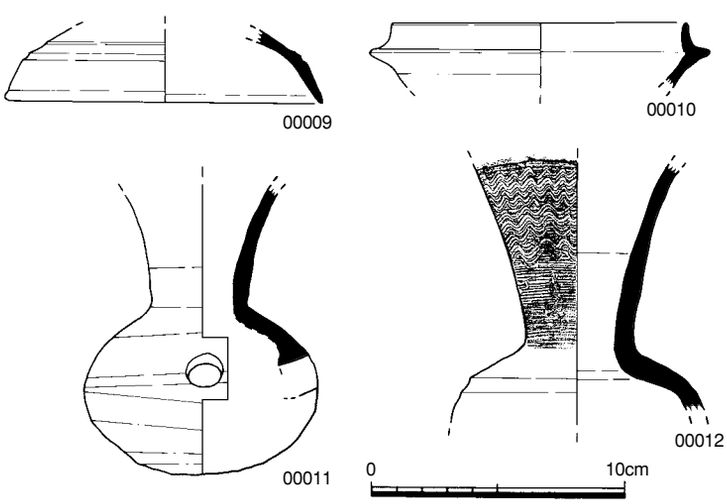


Fig.12　SC03 竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）

胎土には石英・長石粒を若干混入する。焼成も堅緻である。復原口径は 15.2cm を測る。

次に **10001** は、太形蛤刃石斧の刃部付近の小破片と考えられる。敲打痕を残す。玄武岩製。

10002 は、縦長剥片の打瘤付近や側辺部及び裏面の頭部・側辺部に荒いリタッチを加える。法量は、長さ・幅・厚さが 7.3 × 4 × 1.7cm、重さ 36.87g を測る。サヌカイト製。

これらの出土遺物から本住居跡は 6 世紀後半の時期と考えられる。

SC03 住居跡（Fig.4・11 ～ 13、PL.5）

本住居跡は、2 号支線道路 3 区のほぼ中央で検出された長方形プランの住居跡である。住居の東半部は、中世溝 SD07 によって切られており、壁を失っている。壁は、西壁が残り、辺長 5m を測る。また、北壁は 2.6m、南壁 1m が残る。壁高は、南壁が 0.35m、北壁・西壁 0.15m を残す。床面では主柱穴は確認出来ない。北壁近くには東西 1m 以上・南北 2m の範囲に粘土塊が残る。

住居跡の埋土中からは土師器甕破片や須恵器杯蓋や身、ハソウ、磨製石斧破片などが出土した。

出土遺物（Fig.12・13）

00009 は、天井部の低い須恵器杯蓋である。外方に広がる口縁部をもち、天井部との境には浅い横沈線を巡らす。器面調整は、内外面共にヨコナデを施す。器色は、内外面共に青色を呈する。胎土には石英微粒子を少量混入する。焼成は堅緻である。復原口径は 12.8cm を測る。

00010 は、須恵器杯身である。全体に細造りで、受け部の立ちあがりは低く、反転気味に立ちあがる。器面の調整は、内外面共にヨコナデを施す。ま

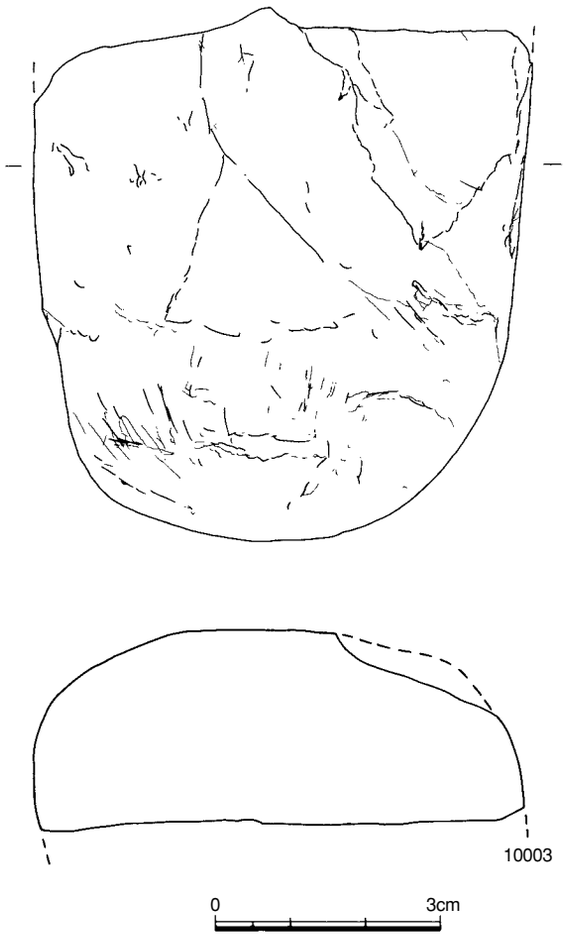


Fig.13　SC03 竪穴住居跡
出土遺物実測図（2）（1/1）

た、器色は、内外面共に灰白色を呈する。胎土には黒色微粒子・石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。復原口径は、13.8cm を測る。**00011** は、半球状の胴部をもつ須恵器ハソウである。口縁端部を失う。胴部は肉厚で、下半部に回転ヘラケズリを加える。他は内外面共にヨコナデを施す。器色は、外面が暗灰色で、内面が青灰色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量混入する。胴部最大径は 9.4cm、残存高 11.6cm を測る。**00012** は、頸部に波状文をもつ須恵器ハソウ破片である。胴部は、下半を失うが、肩部に浅く、幅広の横沈線を巡らす。頸部は上端を欠失するが口縁に向かってラッパ状に開く形態である。また、器面の調整は、内外面共にヨコナデであるが、頸部外面には荒いカキ目調整後に緩い波状文が描かれる。器色は、外面が紫灰～灰色で、内面で灰～灰白色を呈する。胎土は密で、黒色微粒子を含む。焼成は堅緻である。頸部径は 4.4cm を測る。**10003** は、太形蛤刃石斧の刃部破片である。使用によるものか片面が破損している。玄武岩製。以上の出土品から本住居の時期は、6 世紀後半と考えられる。

SC04 住居跡（Fig.5・7・14 ～ 16、PL.5・6）

本住居跡は、7 号支線道路西端で検出された長方形プランの住居跡である。南側に隣接する SC05 住居跡と重複し、これに先行する時期の所産である。全体の 1/2 以上を失い、南壁は完全に窺えない。北壁のコーナーはしっかりとしており、中央部に作り付けのカマドを配置する。

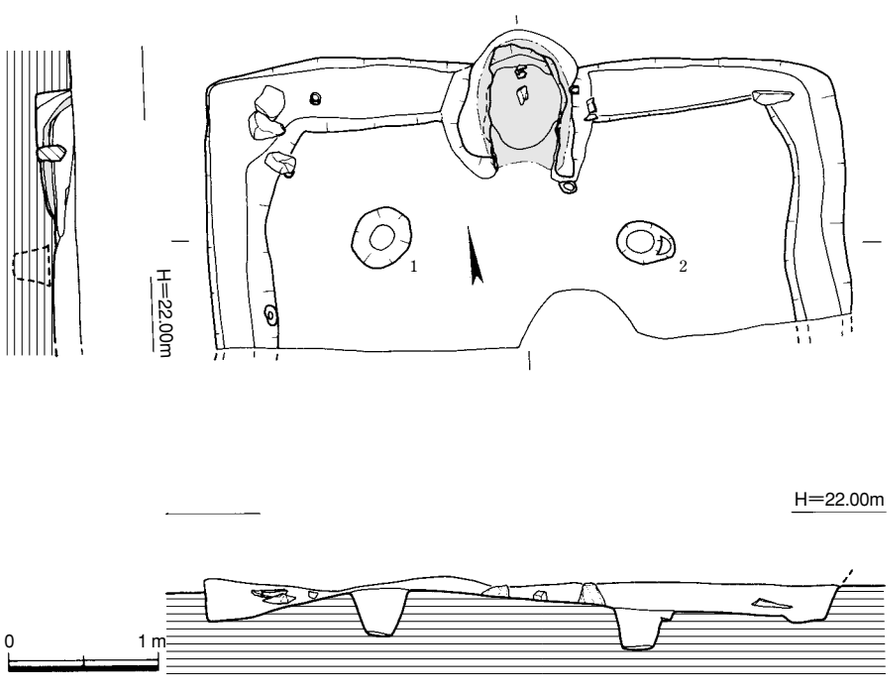


Fig.14　SC04 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

残存する壁の規模は、北壁が 4.2m で完存し、東壁 1.65m 以上・西壁 1.7m 以上を測る。また、壁高は、ほぼ 0.2m 程度を残す。

また、壁直下には幅 0.4m 程度で、浅い壁溝が巡らされる。床面では、北壁に並行して 2 本の主柱穴が認められる。主柱穴 1 は、0.4 × 0.35m、深さ 0.35m 規模の長円形掘方をもつ。主柱穴 2 は、0.4

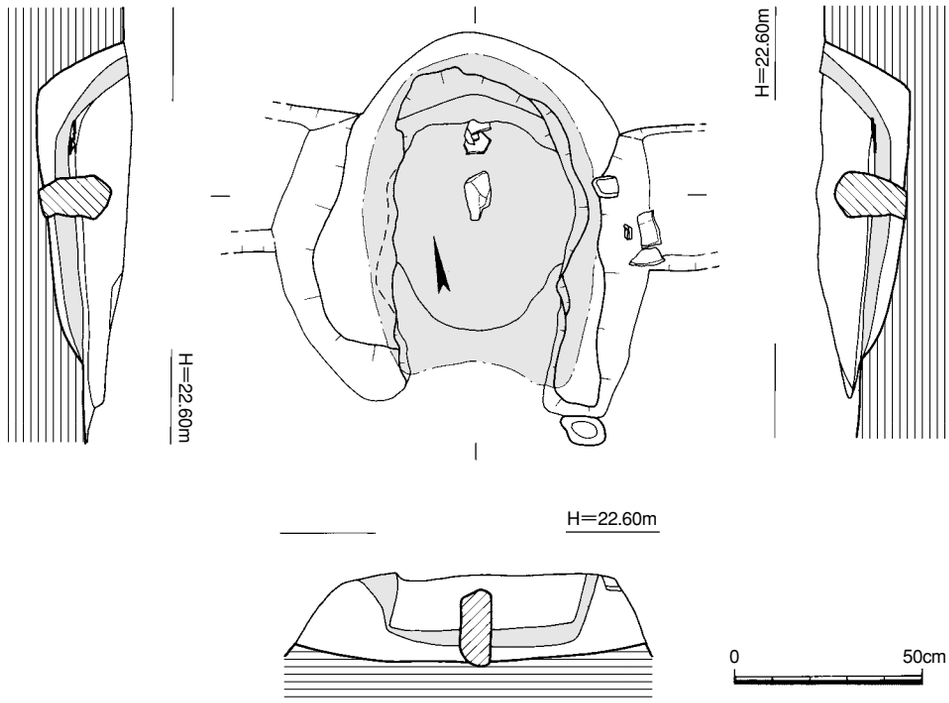


Fig.15　SC04 竪穴住居カマド出土状況実測図（1/20）

× 0.25m、深さ 0.25m 規模の長円形掘方をもつもので、両柱の心身間の距離は 1.7m を測る。また、北壁端からは 1.2m で、東・西壁からも同様な距離に配置されている。

カマド（Fig.15）

北壁の中央にしつらえられたカマドは、製作にあたって壁の延長線上から更に 0.25m 程北側に食い込んだ掘方を行い、全体軸長 0.8m、幅 0.5m 規模の長円形をなす。これに粘土塊をもって袖部をつくっており、全体で焚き口から奥壁まで約 1m、最大幅 0.8m 規模となる。更に燃焼部は、長さ 0.7m・幅 0.5m の規模で、その中央に花崗岩角礫を垂直に立てて煮沸甕の支脚としている。燃焼部とカマド周辺には二次焼成を受けた少量の土師器甕の破片が出土したが、原位置を保つものは無かった。

出土遺物（Fig.7・16）

住居跡に伴う遺物類で図化の可能なものは少なく、土師器 1 点とカマドの支脚に使用された花崗岩角柱のみである。**00013** は、土師器の鉢形手捏ね土器である。口縁端部を失う。器面の調整は、荒れのために不明瞭であるが、内外面共に指頭痕が痕跡的に残される。器色は、外面が褐灰～明灰褐色で、内面が明褐灰色を呈する。胎土には石英･長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原胴部径は 7.2cm を測る。

10004 は、カマドの支脚として火床に据えられた花崗岩の角柱である。細くとがった方が下部で、頭部の幅広い部分には側辺に打剥を加えて整形を行っている。頭部付近には差々摩滅部分が見られる。

その法量は、長さ・幅・厚さが 21 × 10.3 × 5.9cm を測り、重量は 1.535kg である。

このように本住居跡では共伴する遺物は少ないが、そ

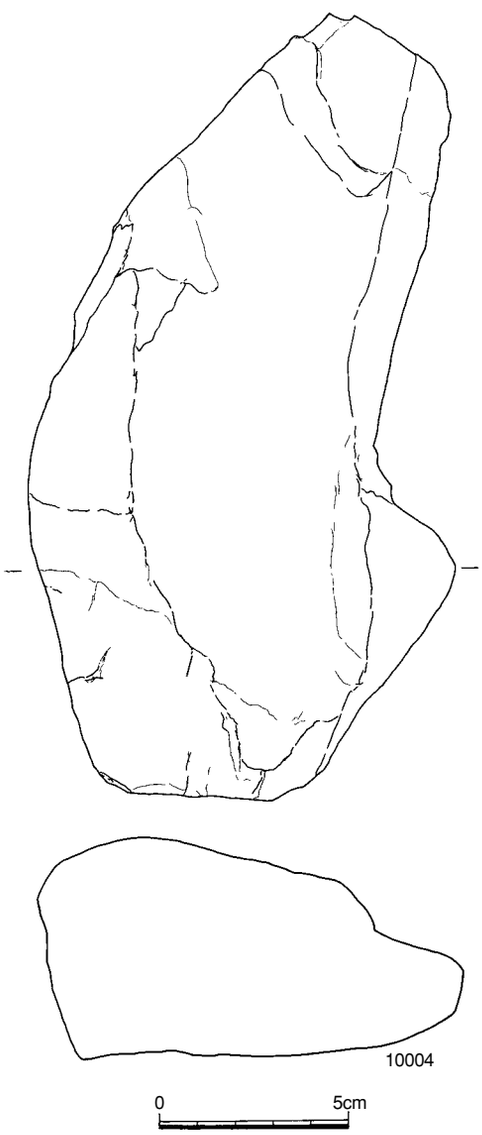


Fig.16　SC04 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/2）

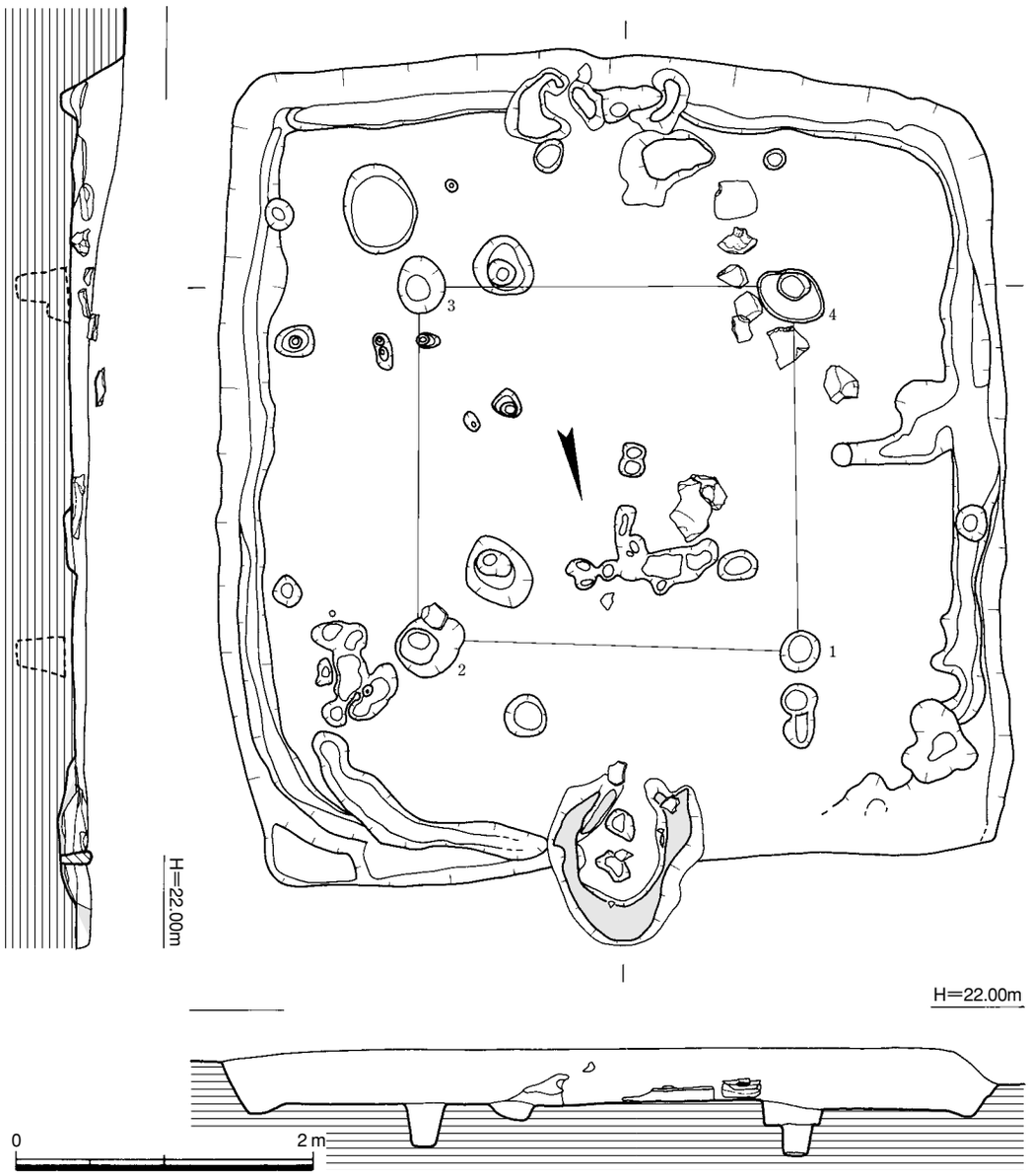


Fig.17　SC05 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

の仕様から 6 世紀後半と考えられよう。

SC05 住居跡（Fig.5・17 ～ 20、PL.5・6）

本住居跡は、7 号支線道路の西端部で検出された長方形プランの住居跡である。平面プランを全面調査できた数少ない例である。北側で重複する SC04 住居より後出の所産である。北壁中央に作り付けのカマドを配置する。

住居規模は、東壁長 5.5m、西壁長 5.2m、南壁長 4.85m、北壁長 4.85m を測り、最も残りの良い南壁では壁高約 0.4m 程度が残る。

また、各壁の直下の全周に幅 0.1 ～ 0.3m 程度の不整な、浅い壁溝を巡らす。住居床面には 4 本の主柱穴が認められる。主柱穴 1 は、径 0.25m、深さ 0.3m の円形掘方である。主柱穴 2 は、径 0.4 × 0.45m、深さ 0.3m 弱の長円形掘方で、柱痕は径 0.25m 程度か。また、主柱欠 3 は、径 0.35 × 0.3m、深さ 0.3m を測る円形掘方である。主柱欠 4 は、径 0.5 × 0.35m、深さ 0.35m を測る長円形掘方で、柱痕跡は径 0.2m 程度と考えられる。また、北壁のカマドと対向する南壁中央には粘土塊が集積されたように出土して

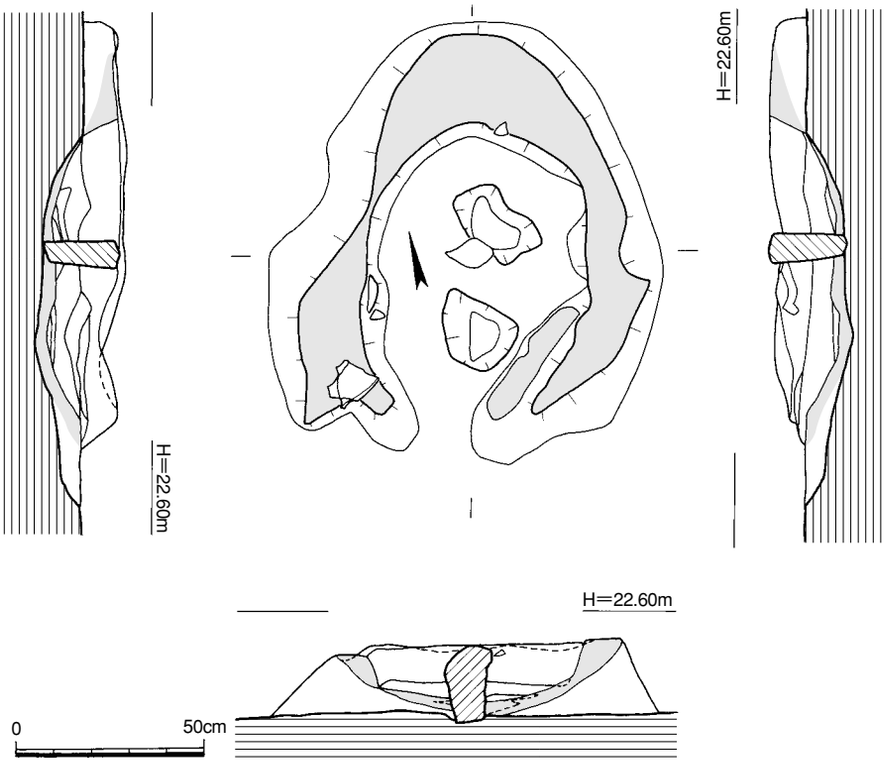


Fig.18　SC05 竪穴住居カマド出土状況実測図（1/20）

いる。

カマド（Fig.18）

北壁の中央部に配置されたカマドは、壁延長上から更に 0.5m 程北側にはみ出して掘方を行い、軸線で約 1m、幅 0.8m 規模の長円形をなす。これに粘土塊をもって袖部及び燃焼部を作り出している。その現存する内壁の規模は、焚き口から奥壁まで 0.8m、幅 0.6m 程度である。また、燃焼部中央には花崗岩角礫を直立に据えて煮沸甕の支脚としている。

住居内埋土からは須恵器杯蓋、土師器甕・丸底壺・高坏・甑等の遺物が出土しているが、その殆どが床面にほぼ密着して出土したものである。

出土遺物（Fig.19・20）

00014 は、器高の低い須恵器杯蓋である。口縁部から天井部へは緩く移行し、その境には緩い稜線を有する。器面調整は、荒れが著しく不詳である。器色は、外面が灰色で、内面で灰白色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。復原口径 14.3cm、器高 3.6cm を測る。**00015** も須恵器杯蓋である。口縁部と天井部との境は小さな段をなす。器面調整は、天井部の上半部に回転ヘラケズリを加え、他はヨコナデである。また、ロクロは、時計回りである。天井部の外面には「×」字のヘラ記号を付す。口径は 14.5cm、器高 4.7cm を測る。**00016** も須恵器杯蓋である。小さい口縁部を有し、天井部との境には低い段を巡らす。また、器面調整は、天井部の上半に回転ヘラケズリを加え、上端部は平坦となっており、他はヨコナデ調整である。器色は、内外面共に灰～灰白色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を若干含み、焼成は堅緻である。復原口径は 14.2cm、器高 3.7cm を測る。**00017** は、器高の低い須恵器杯蓋で、カエリは細く反転する。器面調整は、荒れのために不詳である。器色は、内外面共に灰白色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成はやや軟質である。受け部復原径 15.6cm を測る。**00018** も器高の低い須恵器杯蓋である。口縁内端は低い段をなし、天井部との境は細い沈線 1 条を巡らす。また、天井部の全面に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、青色を呈する。胎土に石英・長石を含み、焼成は堅緻である。復原口径 13cm を測る。

00019 ～ 00029 は土師器である。**00019** は、底部と口縁端部を欠く丸底壺である。頸部のしまりが少なく、器形のシャープさに欠ける。器面調整は、外面頸部～胴部下半の一部にナナメハケが残り、口縁部内面ではハケメ調整後にヨコナデを施す。また、内面頸部ではヨコ方向のヘラケズリが一部に見られる。器色は、外面が灰褐色で、内面はにぶい橙色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。復原胴部最大径 10.8cm を測る。

00020 は、鉢の小破片である。底部は分厚い丸底で、肥厚する口縁部は緩く外方に引き出されている。器面調整は、摩滅のために不詳である。器色は、外面が褐色で、内面は灰白色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原口径は 14.8cm を測る。

00021 は、高坏脚部破片である。円筒部は差々中位が膨らみ、脚裾は強く屈曲する。器面調整は、荒れのために不明である。器色は、内外面共に橙色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、

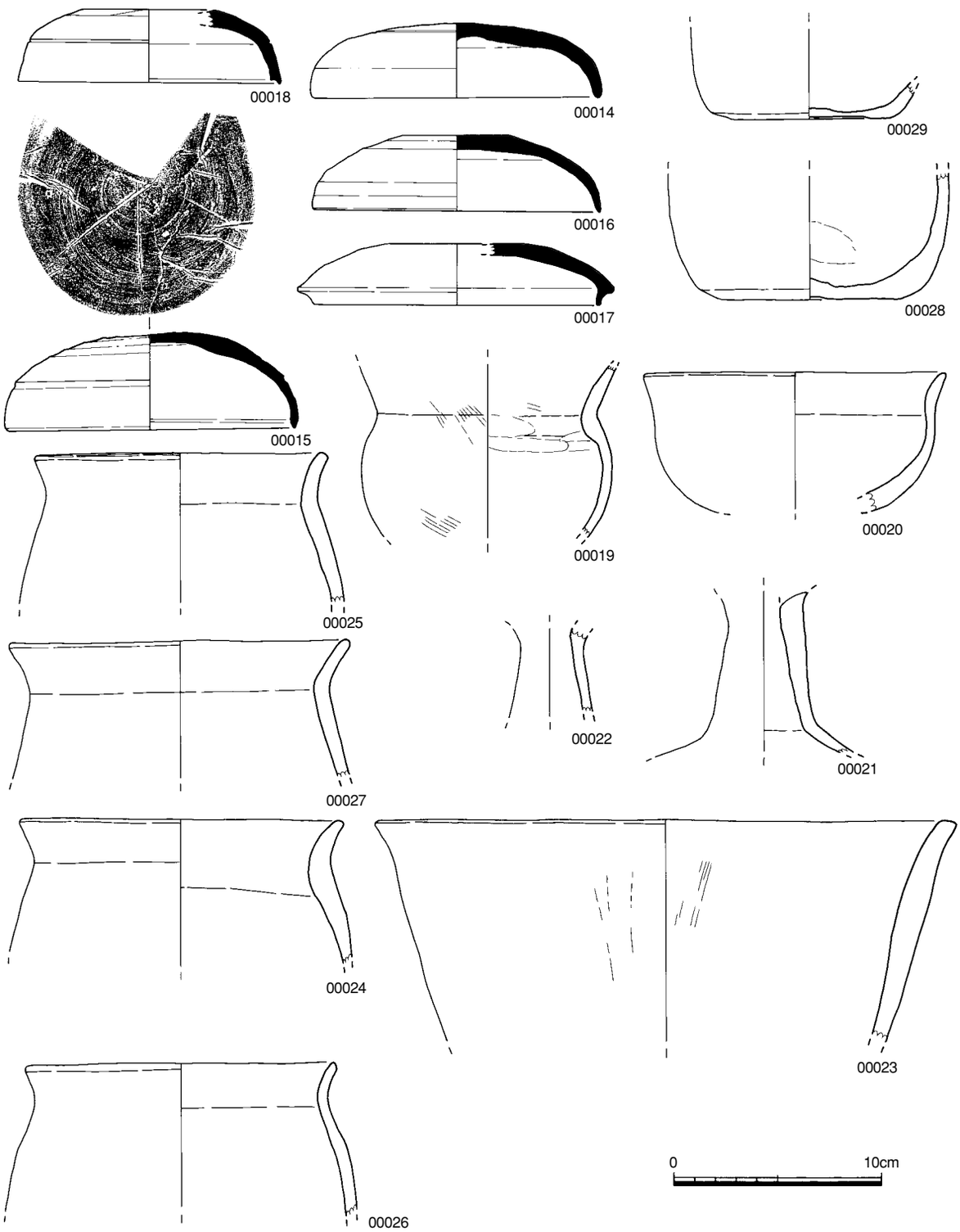


Fig.19　SC05 竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）

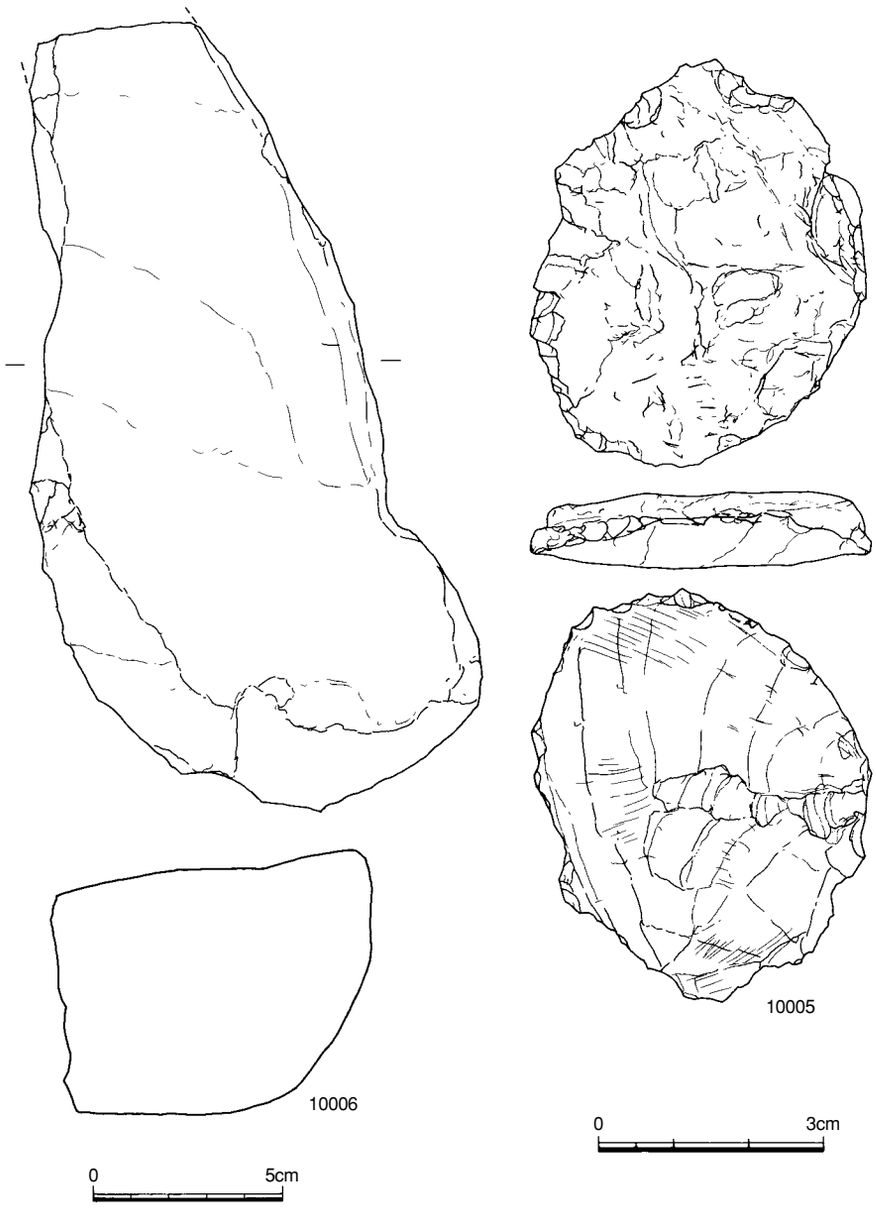


Fig.20　SC05 竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/2・1/1）

焼成は堅緻である。

00022 も小形高坏の脚部破片である。器面調整は、荒れで不明である。器色は、内外面ともに淡赤橙色を呈する。また、胎土は密で、焼成も堅緻である。

00023 は、甑の口縁部破片である。胴部下半を失う。素直に外開する口縁は端部近くで肥厚し、上端は平坦におさめる。器面調整は、荒れのために明瞭ではないが、内外面共にタテ方向のハケメが痕跡的に見られる。器色は、外面が黒色で、内面はにぶい橙色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。復原口径 28.8cm を測る。

00024 は、頸部が肥厚する甕破片である。口縁部は短く、緩く外開する。器面の荒れのために調整は不明である。器色は、外面が明褐色で、内面は褐灰～褐色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。

00025 も短い口縁部が緩やかに外開する甕である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は、外面が褐色で、内面は褐灰色を呈する。また、胎土には石英･長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。復原口径 14.4cm を測る。

00026 は、非常に薄造りの甕で、頸部との境を感じさせない程に口縁部が緩やかに立ちあがる。器面の調整は、荒れのために不明である。器色は、外面が褐灰～黒褐色で、内面は褐灰色を呈する。また、胎土には石英・長石を大量に含み、焼成は堅緻である。復原口径は 15.3cm を測る。

00027 は、口縁部が明瞭に「く」字形に屈曲する甕である。頸部内面には弱い稜が搗く。器面の荒れのために調整は不明である。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は褐色を呈する。また、胎土には

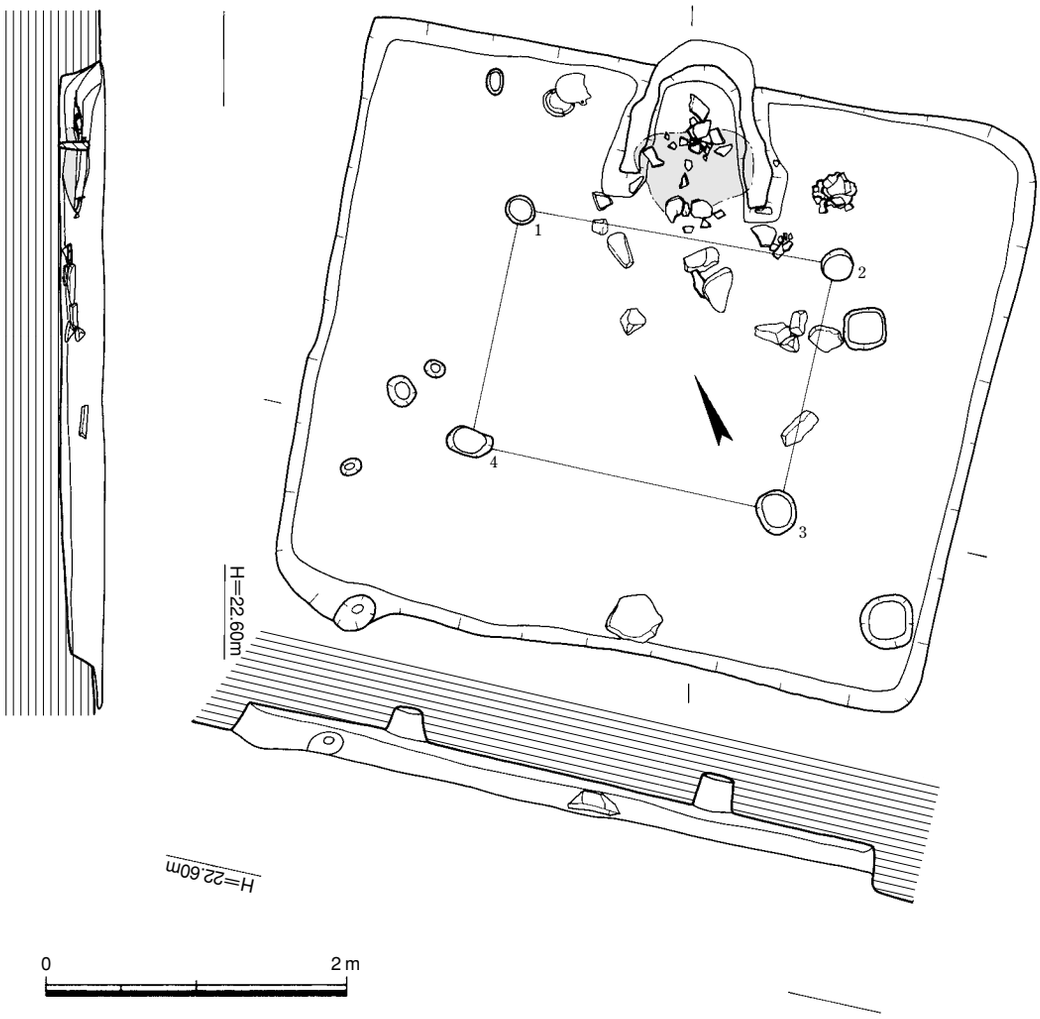


Fig.21　SC06 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

石英・長石粒を多量に含み、焼成は堅緻密である。復原口径は 16.8cm を測る。

00028 は、平底の小型甕底部破片である。外底部端は丸みをもって上部へつながっている。また、外面中央は上げ底状に窪む。器面の荒れのために調整は不明である。器色は、外面が褐灰色で、内面は灰褐色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。復原底部径 9cm を測る。

00029 は、小型の甕底部破片である。薄造りで、外端部は丸みをもって立ちあがる。また、外面はやや上げ底気味に浅く窪む。器面は、荒れのために調整が不明である。器色は、内外面共に褐灰色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。底部径 7.8cm を測る。

次に **10005** は、バルブを残す寸詰まりの円形剥片の側辺に両面からリタッチを加えている。主要剥離面側では主に側辺に、また自然面を残す裏面では剥片端に二次加工を施している。スクレイパーとしての形状を備えている。黒曜石製。

10006 は、カマドの支脚に使用された花崗岩角柱で、細くとがった方を火床に突き刺しており、頭部の側辺に打剥を加えて整形を行っている。その法量は、長さ･幅･厚さが 21 × 12 × 7.3cm を測り、重量は 2080g である。

以上の出土遺物から、本住居跡の時期は、6 世紀後半～末頃と考えられる。

SC06 住居跡（Fig.5・21 ～ 24、PL.6）

本住居跡は、7 号支線道路西端部近くで検出された長方形プランの小形住居跡である。こちらも平

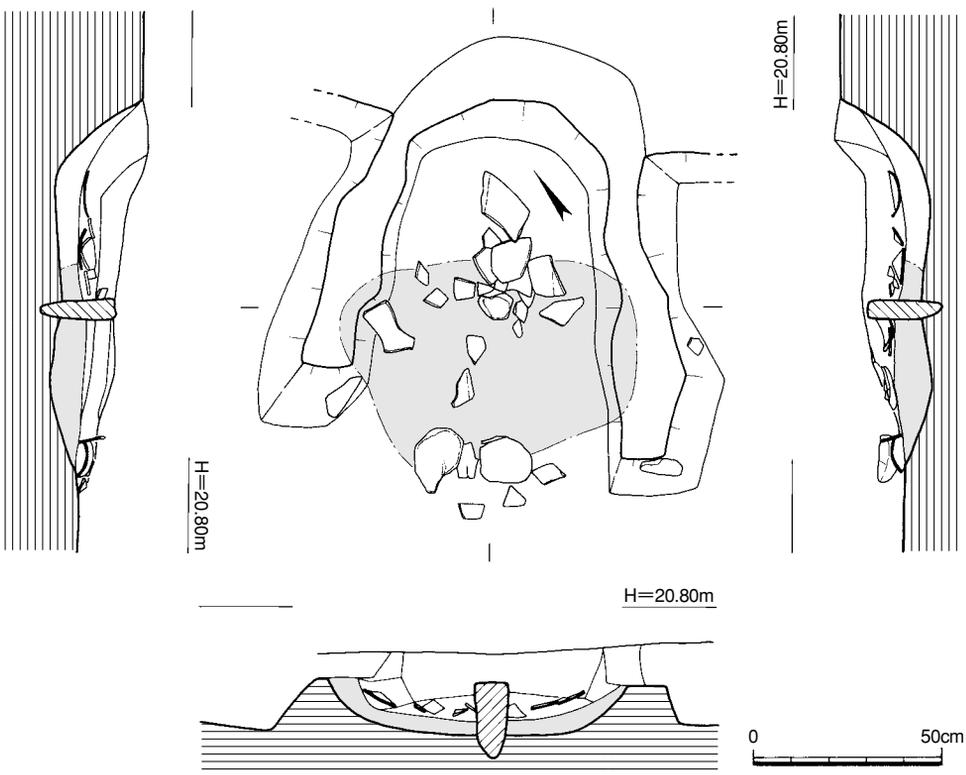


Fig.22　SC06 竪穴住居カマド出土状況実測図（1/20）

面プランの全体を調査できた数少ない例である。住居は、北壁の中央に作り付けのカマドを配置する。

住居の各壁の規模は、東壁長 3.9m、西壁長 3.8m、南壁長 4.3m、北壁長 4.5m で、東西に長いプランとなる。

また、壁の残存は、最も良く残る東・西壁でも 0.3m 程度である。各壁下には壁溝は見られない。床面には 4 本の主柱穴が整然と配置されている。主柱穴はいずれも小形の円形掘方をなしている。主柱穴 1 は、径 0.20m、主柱穴 2 も径が 0.20m、主柱穴 3 は径が 0.25m・深さ 0.25m、主柱穴 4 は径が 0.3 × 0.15m で、深さ 0.2m を測る。また、床面直上には図化した土器類の殆どが密着して出土した。

カマド（Fig.22）

北壁中央に付設されたカマドは、壁延長上から約 0.25m はみ出して掘方を行い、軸線上で 1m、幅 0.8m の長円形をなしている。この周辺に粘土塊による袖部や火床の製作を行っている。また、火床の中央には花崗岩の角礫を使用した煮沸甕のための支脚が立てられている。また、カマド内からは二次焼成を受けた土師器甕などが出土した。

出土遺物（Fig.23・24）

00030 は、須恵器杯蓋である。口縁部と天井部との境には低い段を巡らす。また、口縁内端部は斜めに面取りして緩い稜をなす。器面調整は、天井部の上半部に回転ヘラケズリを加え、他は内外面共にヨコナデである。器色は、外面が暗青灰色で、内面は青灰色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。復原口径は、4.3cm を測る。

00031 も須恵器杯蓋である。口縁部は小さく外側に引き出され、天井部との境は鈍い稜となる。天井部のヘラケズリは、上端に近い約 1/3 程度に止まる。ロクロは、時計回りである。器色は、内外面共に青色を呈する。また、胎土には白色微砂粒を若干含み、焼成は堅緻である。復原口径は 12.6cm、同器高 3.6cm を測る。

00032 は、口縁部と胴部下半を欠失する提瓶破片である。器面調整は、胴部で荒い平行タタキ調整後にロクロ回転による同心円状のカキメ調整を加える。また、頸部の内外面はヨコナデを施す。更に胴部内面はあて具の痕跡である比較的細かい青海波文やその端部が移動した痕跡が顕著に残り、後にこれらにヨコナデ調整を加えている。器色は、内外面共に青色を呈する。また、胎土には石英・長石

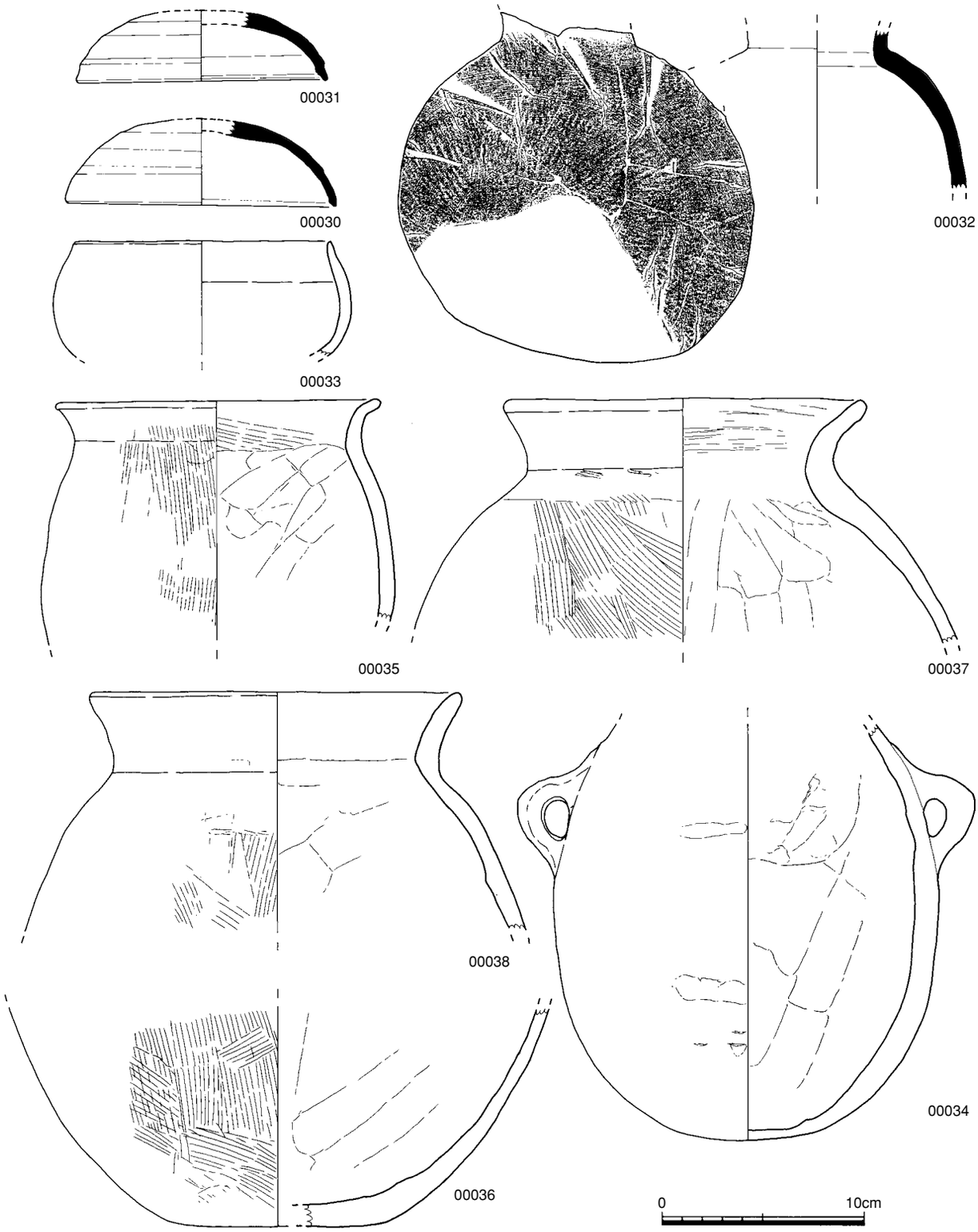


Fig.23　SC06 竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）

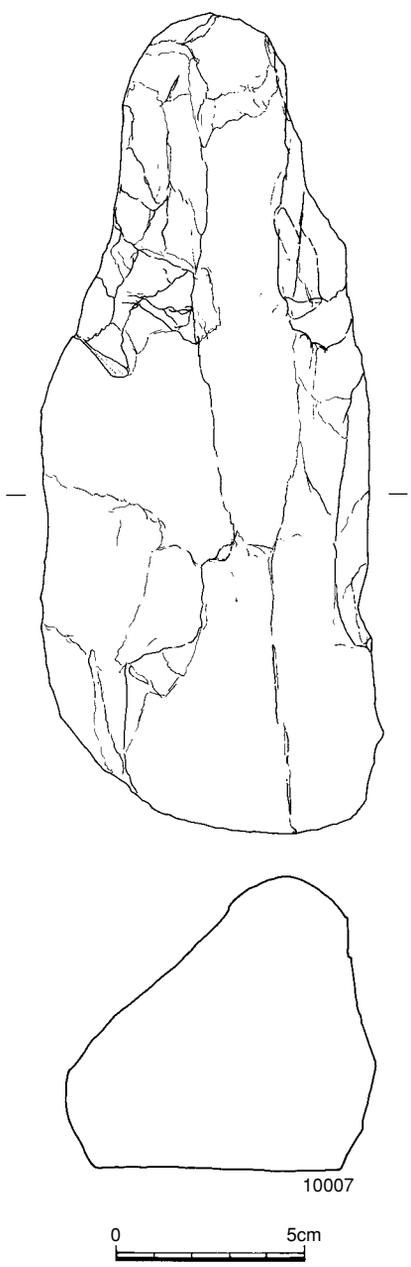
粒を少量含み、焼成は堅緻である。復原頸部径は 7cm 弱である。

00033 ～ 00037 は土師器である。**00033** は、底部を欠くマリである。扁球状の胴部から立ちあがり、口縁端部を小さく外方に引き出す。器面調整は、剥落のために不明である。器色は、外面が赤褐色で、内面は灰褐色～橙色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。復原口

径 12.8cm を測る。

00034 は、胴上部に耳状の把手を付す甕破片である。口縁部を欠く。扁球状の胴部は器壁が厚く、底部ヘラケズリによる調整で薄く仕上げられている。把手は整形後に貼り付けられる。器面調整は、胴部下半にヨコナデが残り、内面は荒いナナメ方向のヘラケズリを施す。器色は、外面が灰白～明褐色で、内面は明褐色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原胴部の最大径は 19.4cm を測る。

00035 は、緩く外反する短い口縁をなす甕破片である。器面調整は、外面が荒いタテハケメ調整で、口縁部付近はこの後にヨコナデを加える。また、内面は、口縁部で荒いヨコハケメ調整後にナデを加え、胴部にはナナメ方向の荒いヘラケズリが残る。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は灰赤色を呈する。また､胎土には石英･長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原口径は 16.3cm を測る。



00036 は、大型甕の底部破片である。不安定な平底をなし、緩やかに胴部へとつながる。器面調整は、外面が外底部以上に荒いヨコ・タテ方向のハケメを施し、内面は比較的粗大なナナメ方向のヘラケズリが残る。器色は、外面が赤褐色で、内面は灰赤色を呈する。また、胎土は石英・長石粒を大量に混入する。焼成は堅緻である。復原底部径 10.6cm を測る。

00037 は、短い口縁が緩く外反し、分厚い器壁を有する甕破片である。器面調整は、外面胴部に荒いナナメハケを施し、後に頸部・口縁部付近をヨコナデ調整する。また、内面は口縁部でヨコナデ。胴部は荒いナナメ方向のヘラケズリを施す。器色は、外面が赤褐から褐色で、内面はにぶい橙色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。口径は 18.2cm を測る。

00038 は、断面が「く字形に屈曲する甕破片である。器面調整は､胴部外面に荒いナナメ方向のハケメが残るほか、口縁内面にヨコハケメ、胴部内面はナナメのヘラケズリ調整を施す｡器色は､外面が灰褐色で､内面は黄橙色を呈する。また、胎土は石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。復原口径は 18.6cm を測る。**00036 ～ 00038** はカマド出土。**10007** は、カマドの火床に立てられ支脚として使用された花崗岩製の角柱である｡握り槌状の形状をなし、断面が分厚い三角形をなす。細く調整して尖った部位を地中に突き刺して使用するためであろうか、素材の角礫縁辺部に細かい打剥を加えて整形している。また、頭部に当たる三方の面には細かい敲打を加えて面を整えている。

法量は、長さ･幅･厚さが 21.8 × 9 × 7.8cm 程度を測り、重量は 1991g である。

Fig.24　SC06 竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/2）

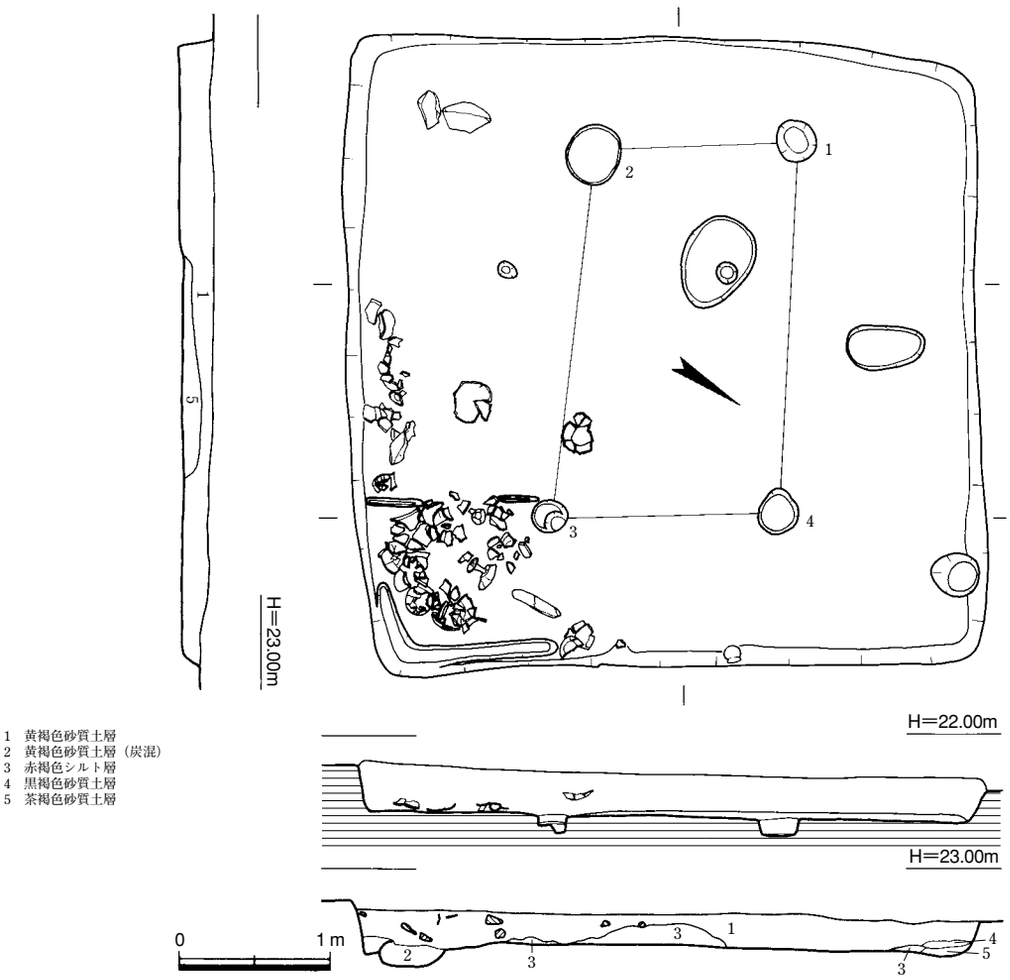


Fig.25　SC07 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

SC07 住居跡（Fig.5・25 ～ 27、PL.6・7）

本住居跡は、7 号支線道路西端部近くで検出された方形プランの住居跡である。プランとしては完形で、カマドなどの施設は見られない。東側コーナーには僅かに浅い壁溝が見られ、これと対向する約 1m の位置に細い切れ切れの小溝が知られる。壁長規模は、4.1m、壁高 0.2 ～ 0.3m を測り、残りは良好ではない。床面の主柱穴は 4 本で、長方形に配置される。主柱穴 1 は、径が 0.3m の円形掘方である。同 2 は、径が 0.4m の長円形掘方をなす。また、同 3 は、径が 0.2m の円形 2 段掘方で、深さ 0.1m・柱痕は 0.1m 規模か。同 4 は、径が 0.3 × 0.25m の円形で、深さ 0.1m を測る。また、主柱穴間の心身の距離は、1 → 2 が 1.4m・2 → 3 が 2.45m・3 → 4 が 1.5m・4 → 1 が 2.5m を測る。

また、住居に伴う遺物類は、平面図に見るように東コーナーから南壁付近の床面近くで纏まって出土した。

出土遺物（Fig.26・27）

図示した遺物は全て土師器である。**00039** は、小型の手捏ね鉢である。器色は、橙～褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。底部径 3.4cm を測る。**00040** も手捏ね甕である。器色は、褐灰色を呈する。胎土に石英・長石粒を若干混入する。焼成は堅緻である。口径 6.6cm・器高 7.7cm を測る。**00041** は、手捏ねの小型鉢である。内面に指オサエが残る。器色は、にぶい橙色を呈する。胎土に石英・長石粒を若干含み。焼成も堅緻である。口径 9cm 強・器高 4cm を測る。**00042** は、手捏ねのマリ形土器である。外面はヘラナデで、内面にヘラケズリを残す。器色は、にぶい橙色～灰色を呈する。

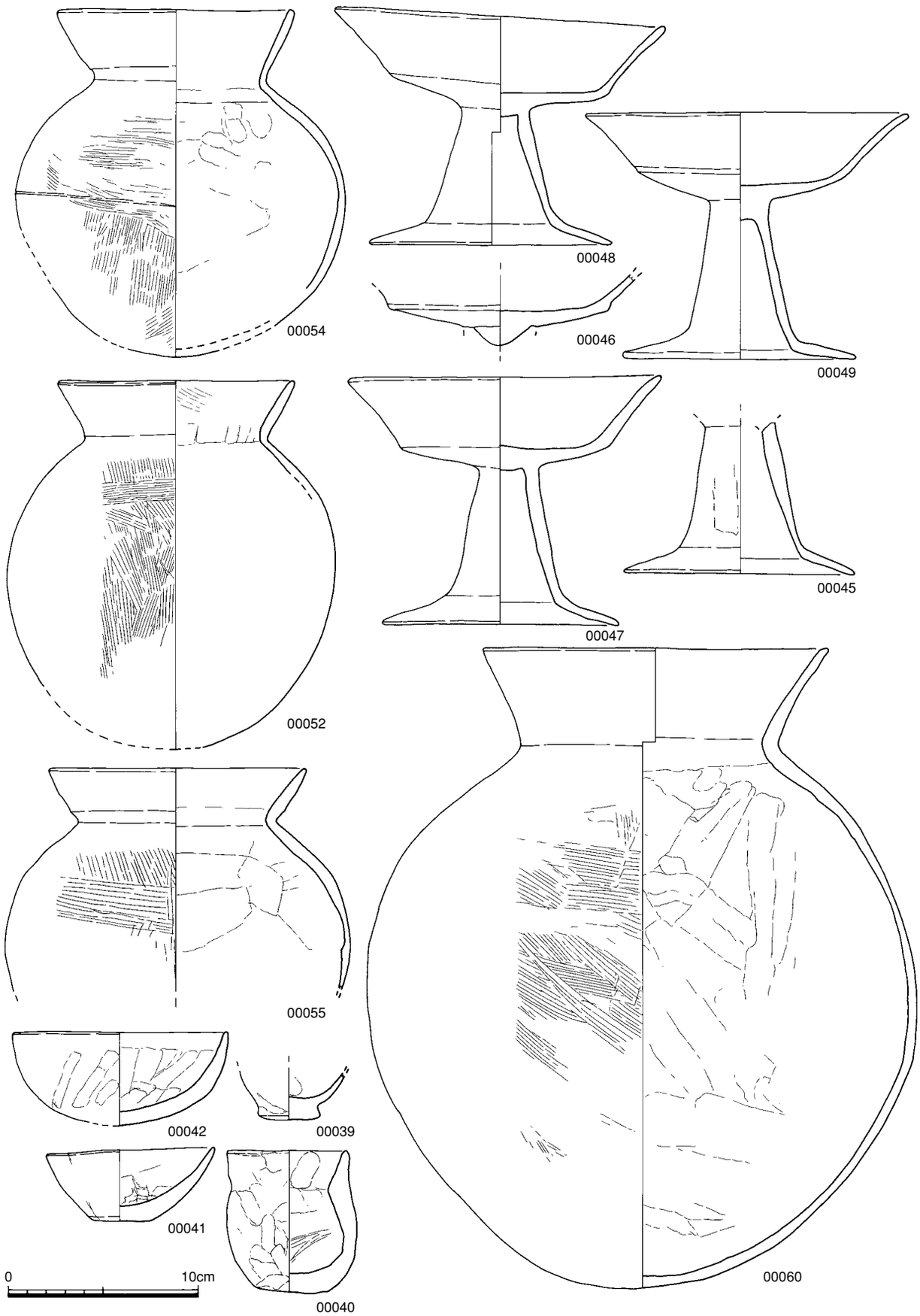


Fig.26　SC07 竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）

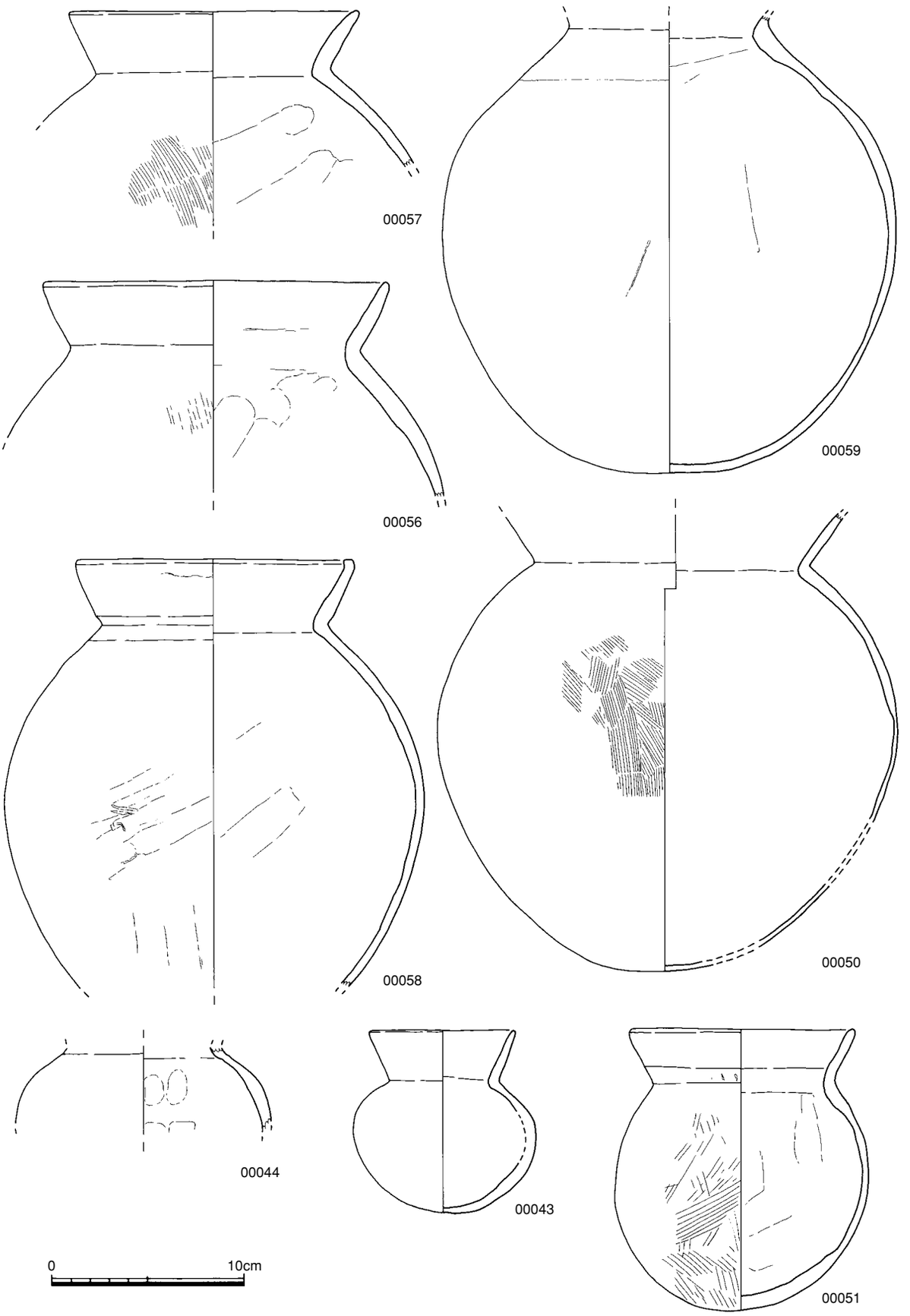


Fig.27　SC07 竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/3）

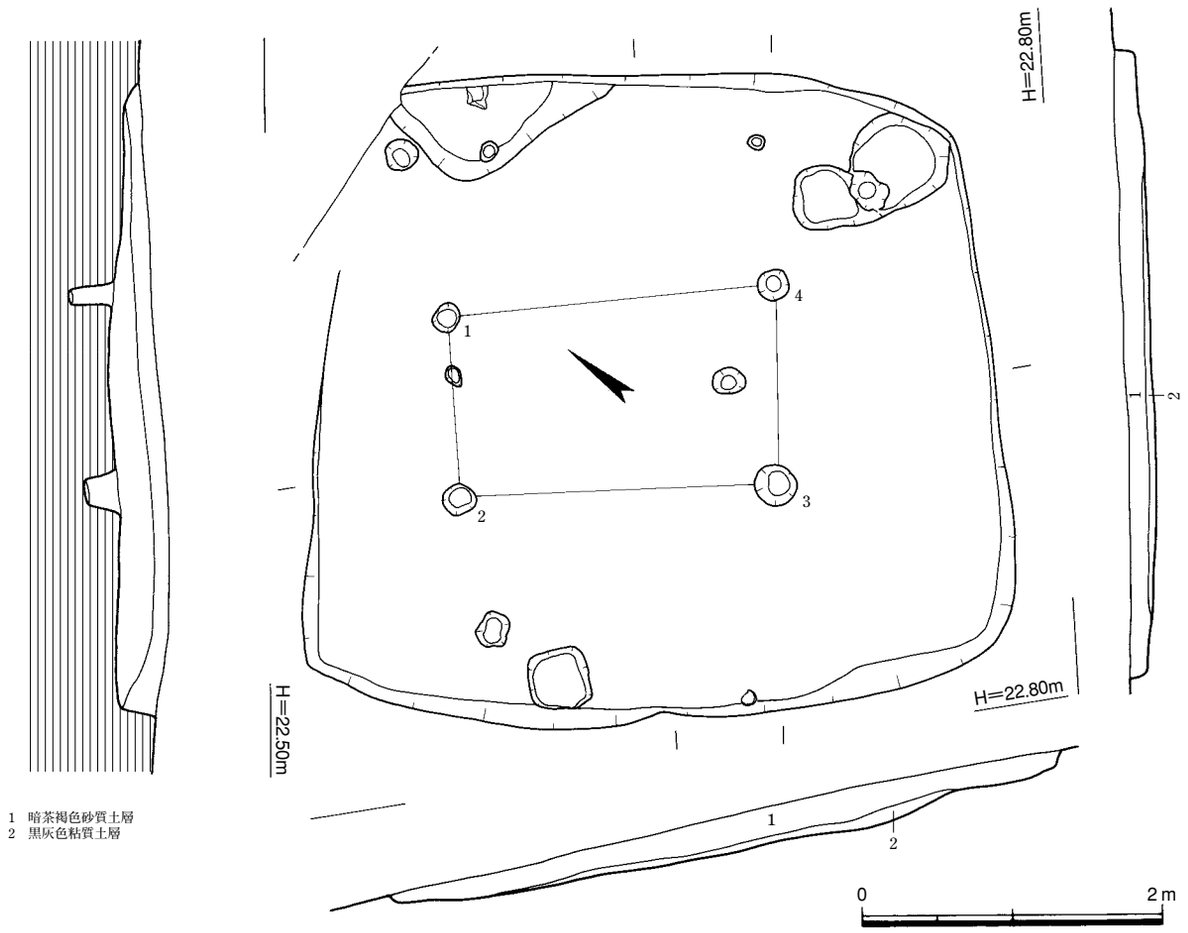


Fig.28　SC08 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

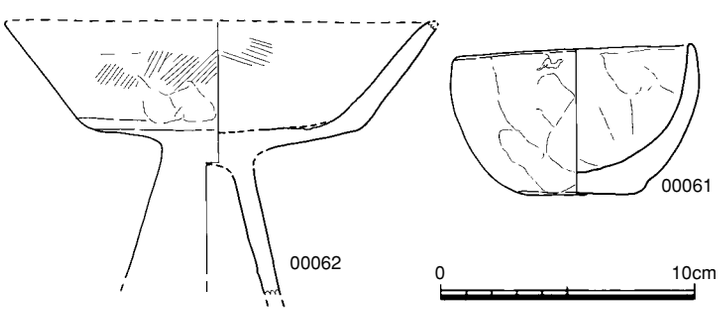


Fig.29　SC08 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅緻である。口径 11.5 ～ 12.24cm、器高 5cm を測る。**00043** は、小型丸底壺である。整った扁球形の胴部に内湾気味に立ちあがる口縁部を有する。器色は、明褐～にぶい橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 7.8cm、器高 9.7cm を測る。

00044 は、中型の丸底壺である。口縁と胴部下半を欠く。外面調整は不明で、内面には指オサエが残る。器色は、赤褐～暗赤褐色を呈する。胎土に石英・長石を多量に含み、焼成は検知である。**00045** は、高坏々部破片である。裾部は急激に外側に開く。調整は、外面がヘラナデで、内面筒部はケズリを加える。器色は、明褐灰～灰黄色を呈する。胎土は密で、焼成も検知である。底部径 12.4cm を測る。**00046** は、高坏々底部破片である。口縁部との境は明瞭な段をなす。脚部に挿入する臍突起が残る。器色は、黄橙～明褐色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。**00047** は、口縁部が長く外開する杯部にやや中膨らみの中空脚部をもつ高坏である。器面の荒れで調整は不明である。器色は、にぶい橙色を呈する。また、胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径 16.8cm、器高 13.4cm を測る。**00048** も浅い杯部に中空の脚を有する高坏である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は、内外面共ににぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒を含み、焼成は堅緻である。口径は 17.8cm、器高 12.8cm を測る。

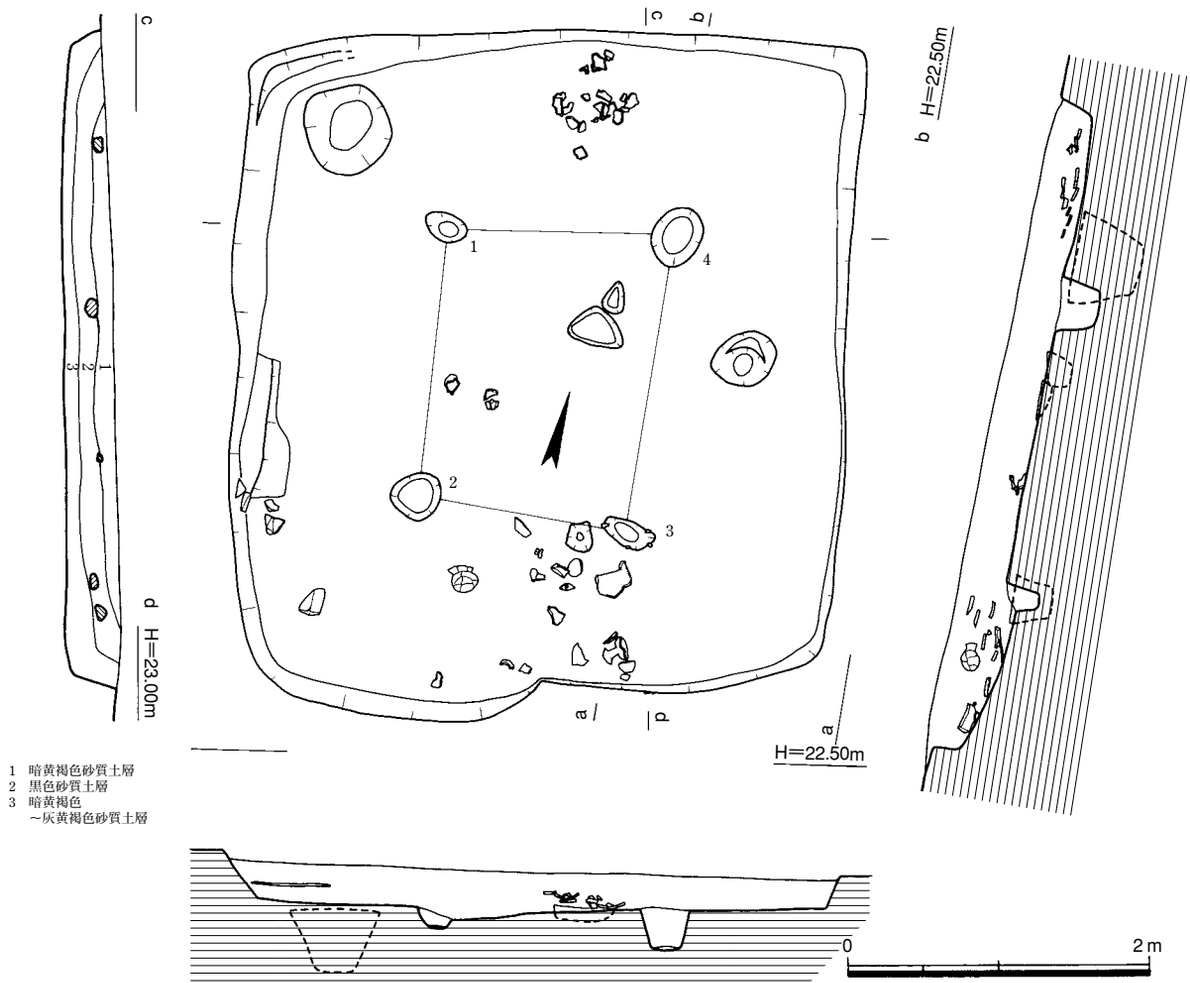


Fig.30　SC09 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

00049 も同様の高坏である。調整は、脚筒部の内部にヘラケズリを加える以外は荒れのために不明である。器色は、黄橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径は 17.3cm、器高 13.2cm を測る。**00050** は、口縁部を欠くが、倒卵形の胴部をもつ甕である。胴部の中位以下は丁寧なヘラケズリ調整で器壁厚さ 2 ～ 2.5mm までに仕上げている。器面調整は、外面胴部の中位にハケメ調整・頸部～口縁付近はヨコナデが残る。内面胴部は全面ヘラケズリで、使用時の焼けこげが見える。器色は、褐灰～黒褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。頸部径は 14.6cm、胴部最大径 24.2cm を測る。**00051** は、中型の丸底壺で、口縁は内湾気味に立ちあがる。調整は、口縁部内外面がヨコナデ・胴部外面荒いナナメ方向のハケメ・胴部内面はナナメ～タテ方向のヘラケズリである。器色は、黒褐～褐灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径 12cm・器高 15cm を測る。**00052** は、球状の胴部に直線的に外開する口縁を有する中型甕である。調整は、胴部外面がタテ・ヨコ方向の荒いナデで、胴部内面はヘラケズリが残る。器色は、灰白～褐灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径 14.6cm・器高 19.8cm を測る。**00054** は、半球状の胴部に内湾気味の口縁部を付す中型甕である。胴部中位には 1 条の沈線を巡らす。調整は、口縁部の内外面でヨコナデ、胴部外面の上半はヨコハケメ･下半はタテハケメを施し、内面はヘラケズリである。器色は、暗青灰～灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 12.7cm・器高 13.6cm を測る。**00055** も半球状胴部に直線的に外開する口縁部を付す中型甕である。胴部下半を欠く。調整は、胴部外面にタテ・ヨコ方向のハケメ・頸部・口縁部の内外はヨコナデ・胴部内面に荒いヘラケズリを施す。器色は、灰褐～にぶい橙色を呈

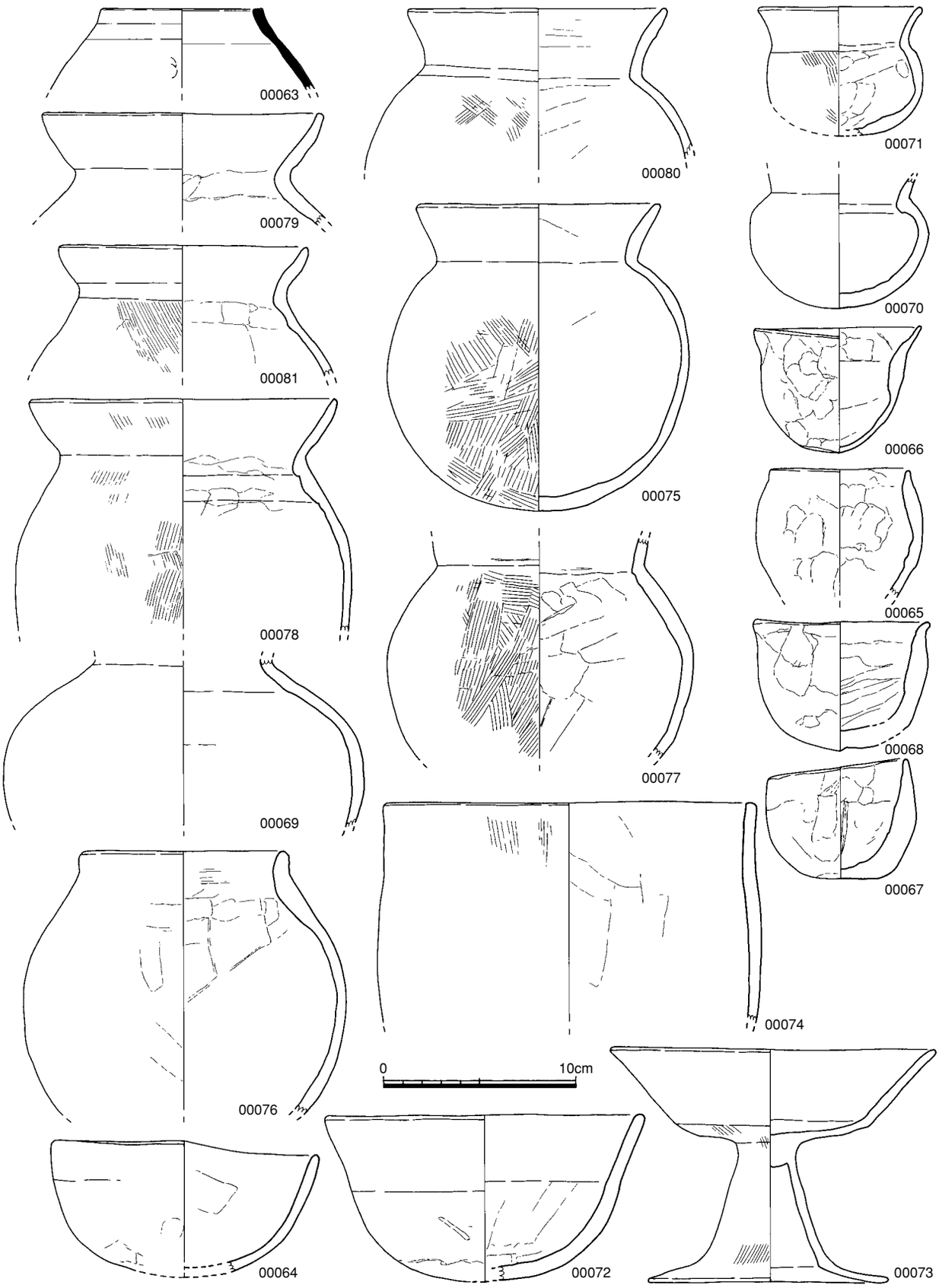


Fig.31　SC09 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

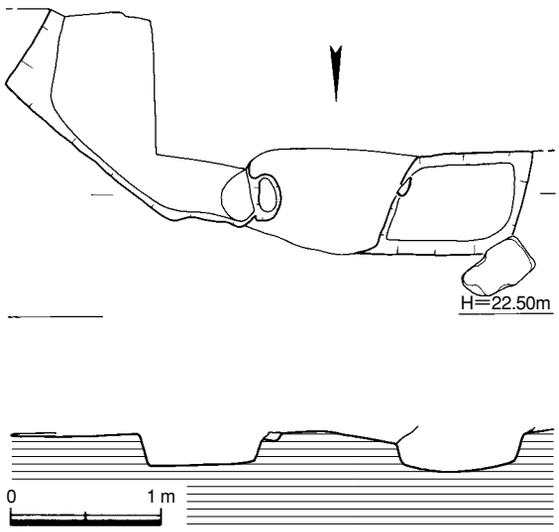


Fig.32　SC11 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。復原口径 13.8cm を測る。**00056** は、短い直線的に開く口縁部を有する甕である。調整は、口縁部の内外面がヨコナデ、胴部外面に細いタテハケメ調整、胴部内面には荒いヘラケズリを施す。器色は、にぶい橙～浅黄橙色を呈する。胎土は、密で、焼成も堅緻である。口径は 18.5cm を測る。**00057** は、短い「く」字形口縁をなす甕破片である。器面調整は、口縁部の内外面がヨコナデ、胴部外面でナナメハケ、同内面で荒いナナメ方向のヘラケズリを施す。器色は、褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は 15.4cm を測る。**00058** は、半球形胴部に内湾気味に立ちあがり、端部が跳ね上げ状にすぼまる口縁部を有する甕である。底部を欠く。器面調整は、口縁部の内外面が丁寧なヨコナデ、胴部外面で板状工具でのナデ、同内面は、ナナメ方向のヘラナデ？を施す。器色は、にぶい赤褐色～にぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。復原口径 14.8cm・胴部最大径 22.2cm・残存高 22.6cm を測る。**00059** は、頸の良くしまる球状胴部をもつ甕である。器形にはかなりの歪みが見られる。調整は、胴部外面がヘラケズリで、内面もタテ方向のヘラケズリである。また、口縁部の内外面はヨコナデを加える。器色は、褐灰色～にぶい橙色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原胴部最大径は 24cm 前後である。**00060** は、球状胴部に外開する比較的大型の口縁部を付す甕である。頸部は良くしまる。胴部の肩以下には全面にススが付着する。調整は、口縁内外面でヨコナデ、胴部外面上部にヨコハケメ・下部にナナメハケを加える。内面は、ヘラケズリ調整である。器色は、淡黄橙色～灰黄色を呈する。口径 18.5cm、器高 34.5cm を測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は、5 世紀中頃の所産と考えられる。

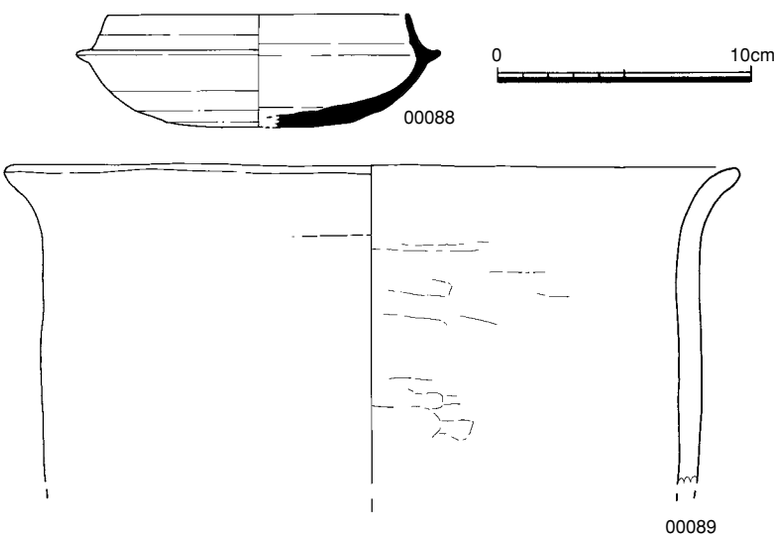


Fig.33　SC11 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

SC08 住居跡（Fig.5・28・29、PL.7）

本住居跡は、7 号支線道路西端部で検出された長方形プランの住居である。住居北壁のコーナーが調査区外である。各壁の規模は、東壁長 0.36m 以上・西壁長 0.465m・南壁長 3.5m・北壁長 3.2m 以上である。また、壁高は、最も良く残る西壁が 0.3m 程度で、他は 0.15m 前後で残りは悪い。床面には主柱穴 4 本が長方形に配置されている。主柱穴 1 は、径 0.2m の円形、同 2 が径 0.2m 強を測る円形である。同 3 は、径 0.3m・深さ 0.2m の円形掘方、同 4 が径 0.25m 弱・深さ 0.3m の円形掘方である。また、主柱穴間の心身距離は、柱穴 1 → 2 間 1.2m、柱穴 2 → 3 間 2.15m、柱穴 3 → 4 間 1.35m、柱穴 4

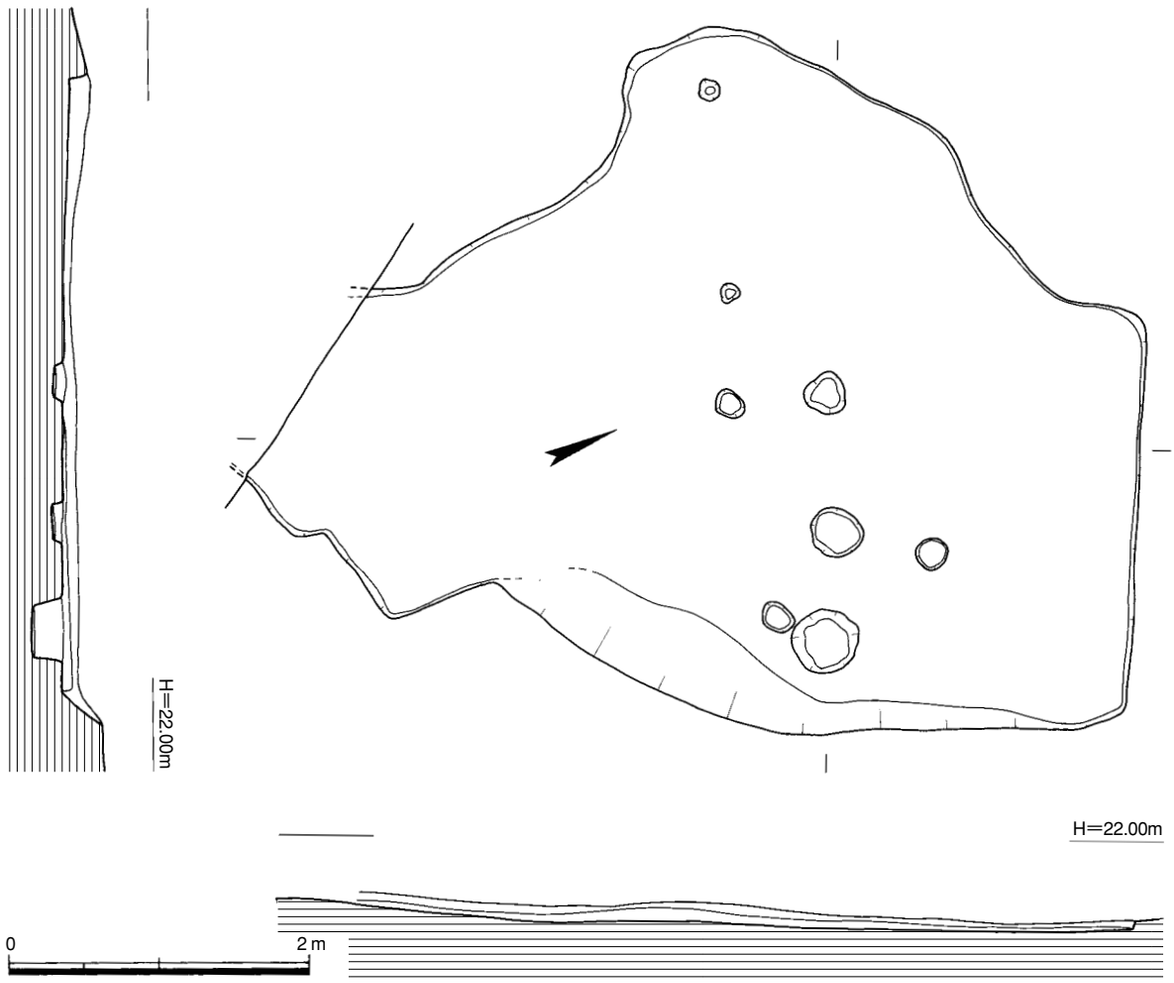


Fig.34　SC12 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

→ 1 間 2.2m を測る。住居埋土内からの遺物の出土は少量であった。

出土遺物（Fig.29）

00061 は、土師器鉢である。調整は、内外面共にヘラナデを施す。器色は、にぶい橙色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原口径 9.5cm・器高 6cm を測る。**00062** は、脚端部を失う土師器高坏である。浅い杯部に中空の筒部を残す。調整は、杯部内外面に荒いハケメを施す。また、屈曲部には指オサエが残る。器色は、にぶい橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原口径は 19.5cm を測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は 6 世紀後半と考えられる。

SC09 住居跡（Fig.5・30・31、PL.7）

本住居跡は、7 号支線道路調査区のほぼ中央で検出された長方形プランの住居跡である。床面にはカマドや壁溝などの施設は見られない。各壁の規模は、東壁長 4.1m・西壁長 4m・南壁長 3.75m・北壁長 4.15m を測る。また、壁高は 0.2 ～ 0.3m を残す。床面には主柱穴 4 本を長方形に配する。主柱穴 1 は、径 0.3 × 0.2m の長円形掘方で深さ 0.1m、同 2 は 0.3 × 0.25m の円形掘方、同 3 は 0.35 × 0.15m の長円形掘方、同 4 は 0.4 × 0.3m の長円形掘方で深さ 0.3m を測る。主柱穴の心身間距離は、柱穴 1 → 2 で 1.85m・柱穴 2 → 3 で 1.4m・柱穴 3 → 4 で 2m・柱穴 4 → 1 で 1.5m を測る。住居跡埋土からは北壁・南壁付近の床面からやや浮いた位置で土師器甕破片を中心に出土した。

出土遺物（Fig.31）

00063 は、須恵器把手付壺と考えられる。胴部に把手基部の破片が残る。器色は、灰白～青灰色を呈

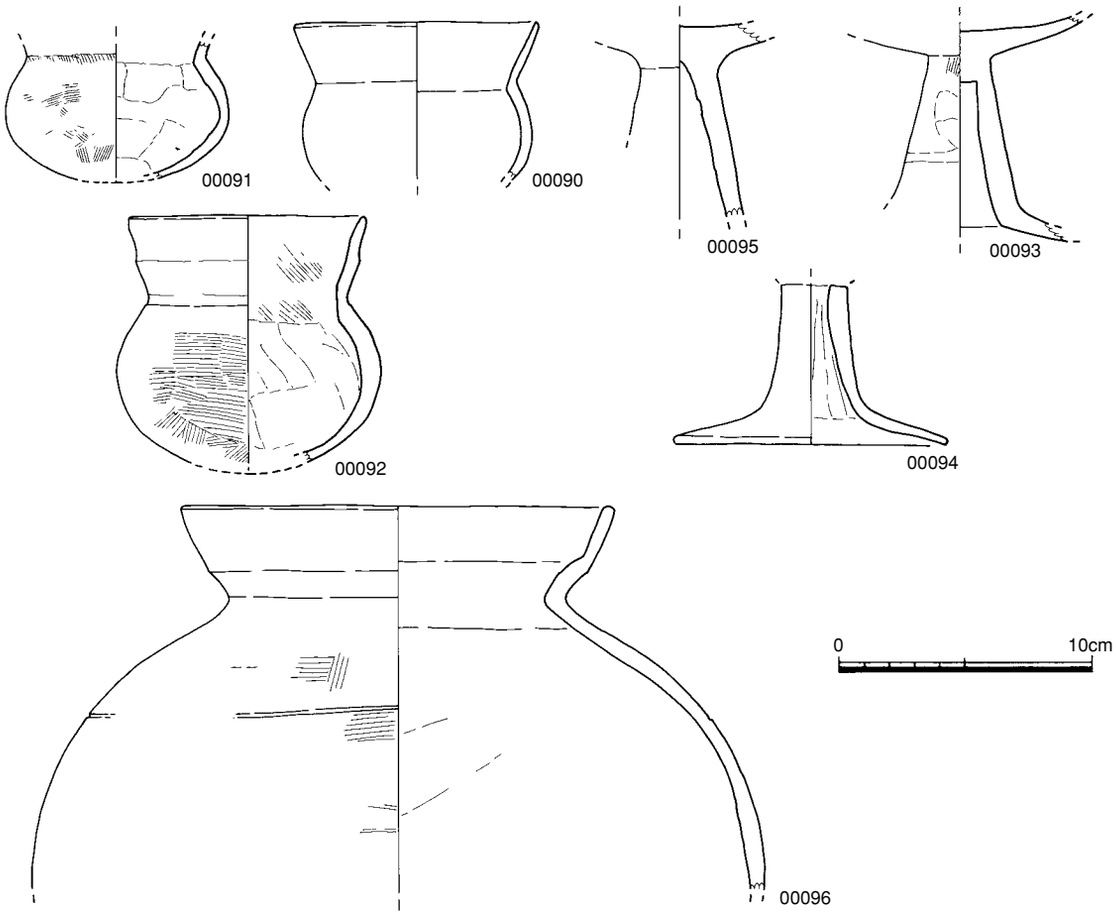


Fig.35　SC12 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

する。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径は 8.6cm を測る。**00064** は、土師器マリである。器色は、灰白からにぶい橙色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 14.2cm・器高 7.2cm を測る。**00065 ～ 00068** は、土師器手捏ね土器である。器色は、褐灰色を呈する。外面に指オサエ、内面オサエとヘラケズリを加える。口径は、それぞれ 7.6・8.9・7.4・9.4cm を測る。**00069** は、土師器壺破片である。胴部は扁球状をなし、調整は内面にヘラケズリを残す。器色は、にぶい橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。**00070・00071** は、土師器小形丸底壺である。器色は、にぶい黄橙色である。胎土は、密で、焼成は堅緻である。**00071** の口径 8.7cm を測る。**00072** は、土師器鉢である。調整は、内面にヘラケズリが残る。器色は、褐色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 17cm・器高 8.8cm を測る。

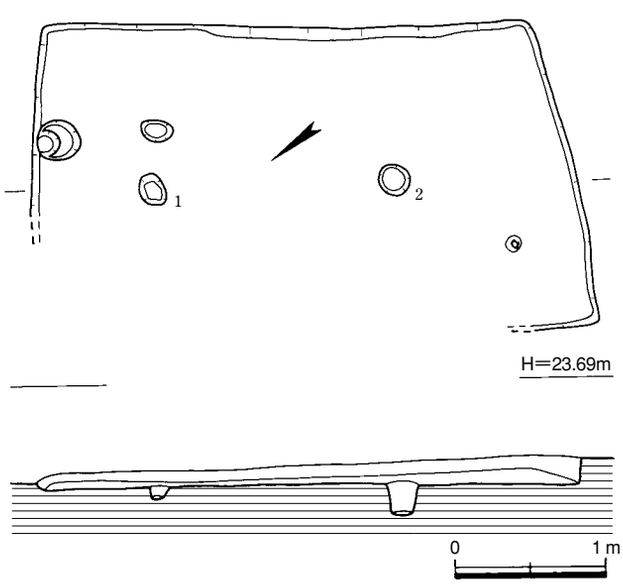


Fig.36　SC13 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

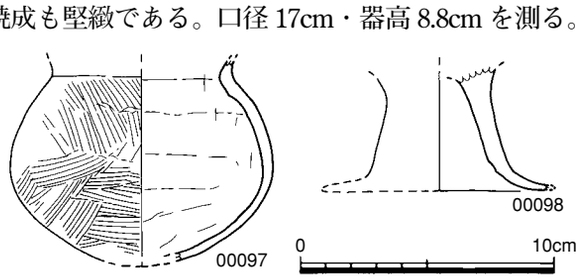


Fig.37　SC13 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

00073 は、土師器高坏である。調整は、外面に一部ハケメが残り、脚内面はヘラケズリである。器色は、橙～赤橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径 17.2cm・器高 12.4cm を測る。**00074** は、土師器甑である。胴部下半を失う。内面にヘラケズリを残す。器色は、灰白～にぶい橙色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径は 19.8cm を測る。**00075** は、断面がく字形をなす土師器の中型甕である。胴部外面に荒いハケメを加え、内面はヘラケズリである。また、口縁部・頸部はヨコナデ調整である。器色は、黄橙～暗灰色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径 13cm・器高 16.3cm を測る。**00076** は、直口する口縁をもつ土師器甕である。外面はヘラナデ、内面ヘラケズリを施す。器色は、褐灰～褐色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径 11.2cm を測る。**00077** も土師器中型甕である。調整は、外面には荒いハケメ、内面に細かいヘラケズリを加える。器色は、にぶい橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。

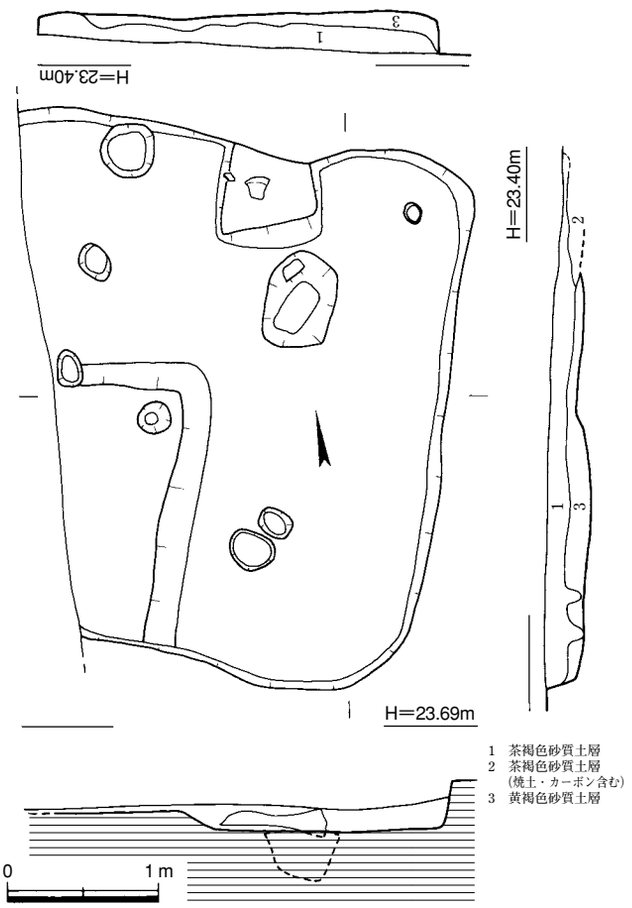


Fig.38　SC14 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

00078・00079・00081 は、口縁部が内湾気味に立ちあがり、扁球状の胴部をなすと考えられる土師器甕類である。調整は、胴部外面にハケメ・内面ヘラケズリ、口縁部内外がヨコナデである。器色は、灰褐～にぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径は、それぞれ 16.4・15・13.2cm を測る。**00080** は、やや口縁が外反して開く。口径は 13.7cm を測る。

これらの出土品から、本住居跡の時期は、5 世紀中頃であろう。

SC11 住居跡（Fig.5・32・33）

本住居跡は、7 号支線道路の西端部で検出された長方形？プランの住居跡である。北壁の一部と考えられる。形状の詳細を十分にうかがうことは困難である。

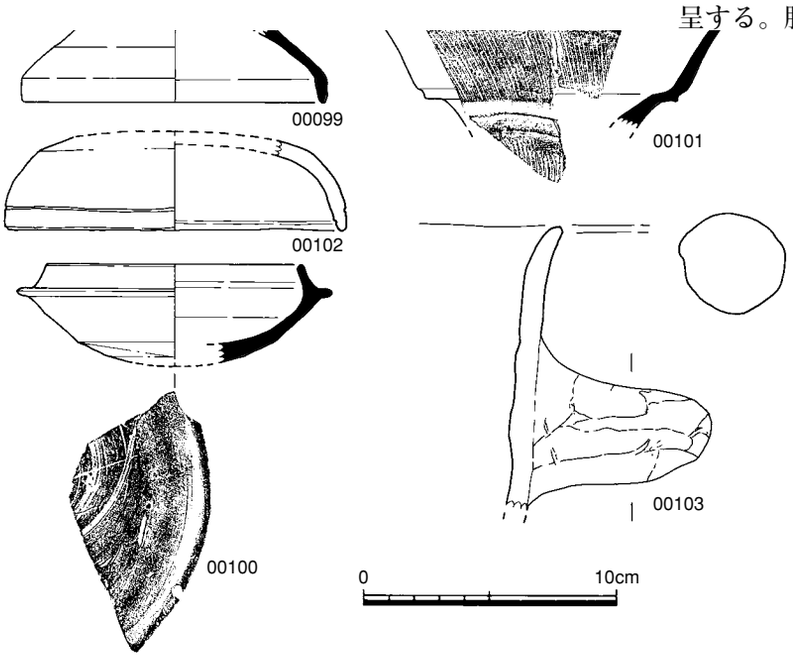


Fig.39　SC14 竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）

出土遺物（Fig.33）

00088 は、やや薄造りの須恵器杯身である。受け部の立ちあがりは比較的高い。調整は、底部の三分の二程度に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、青灰色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径 14.6cm を測る。**00089** は、大型の土師器甑破片である。調整は、荒れのために内面のヘラケズリのみが残る。器色は、橙～明褐色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径 29.6cm を測る。カマド出土。これらの出土遺物から本住居跡の時期は､6 世紀後半と考えられる。

SC12 住居跡（Fig.5・34・35、PL.7・8）

本遺構は、住居跡としたが、北辺ではコーナーと考えられる部位が見えるが、土坑状であり、全体の形状を確認できない。規模は、長軸長 5.7m・短軸長 4.1m・深さ 0.1m 程度である。床面に連続するピットが 3 個知られるが、対向する位置には無く、主柱穴として判断出来ない。埋土から須恵器杯蓋・甕と共に土師器甕・高坏・甑・小形丸底壺等が出土した。

出土遺物（Fig.35）

00090 ～ 00092 は、土師器小形丸底壺である。調整は、**00091・00092** では外面ハケメ・ヨコナデで、内面にヘラケズリを加える。器色は、橙～黄橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径は、**00090** が 9.8cm、**00092** が 6cm を測る。

00093 ～ 00095 は、筒部が中空の土師器高坏の脚部破片である。器色は、にぶい橙色である。

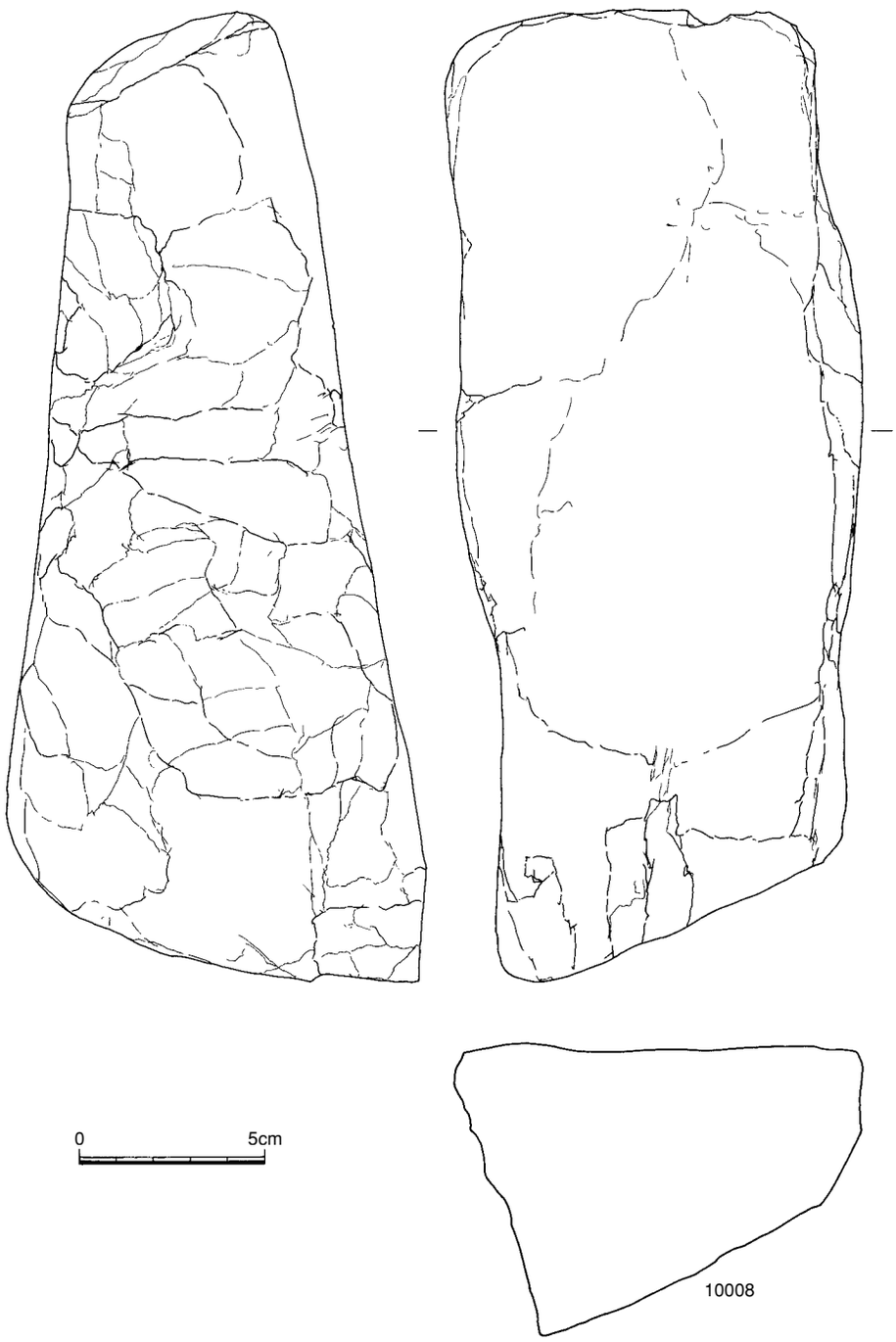


Fig.40　SC14 竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/2）

00096 は、扁球状の胴部に二重口縁状の口縁を付す土師器甕破片である。肩部に横沈線を巡らす。器色は、橙～褐灰色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は 17.6cm を測る。

SC13 住居跡（Fig.5・36・37、PL.8）

本住居跡は、2 号支線道路 4 区の北端で検出された長方形プランの小形住居跡である。北壁と東壁の大部分を失う。各壁の規模は、東壁が 1.3m 以上・西壁が 2.1m・南壁が 3.3m を測る。壁高は 0.2m 程度を残す。床面には主柱穴 2 個が配置される。主柱穴 1 は、径 0.2 × 0.15m の長円形掘方で深さ 0.1m・同 2 は径 0.2m の円形掘方で深さ 0.25m を測る。また、柱穴間の心身距離は、1.6m である。埋土中

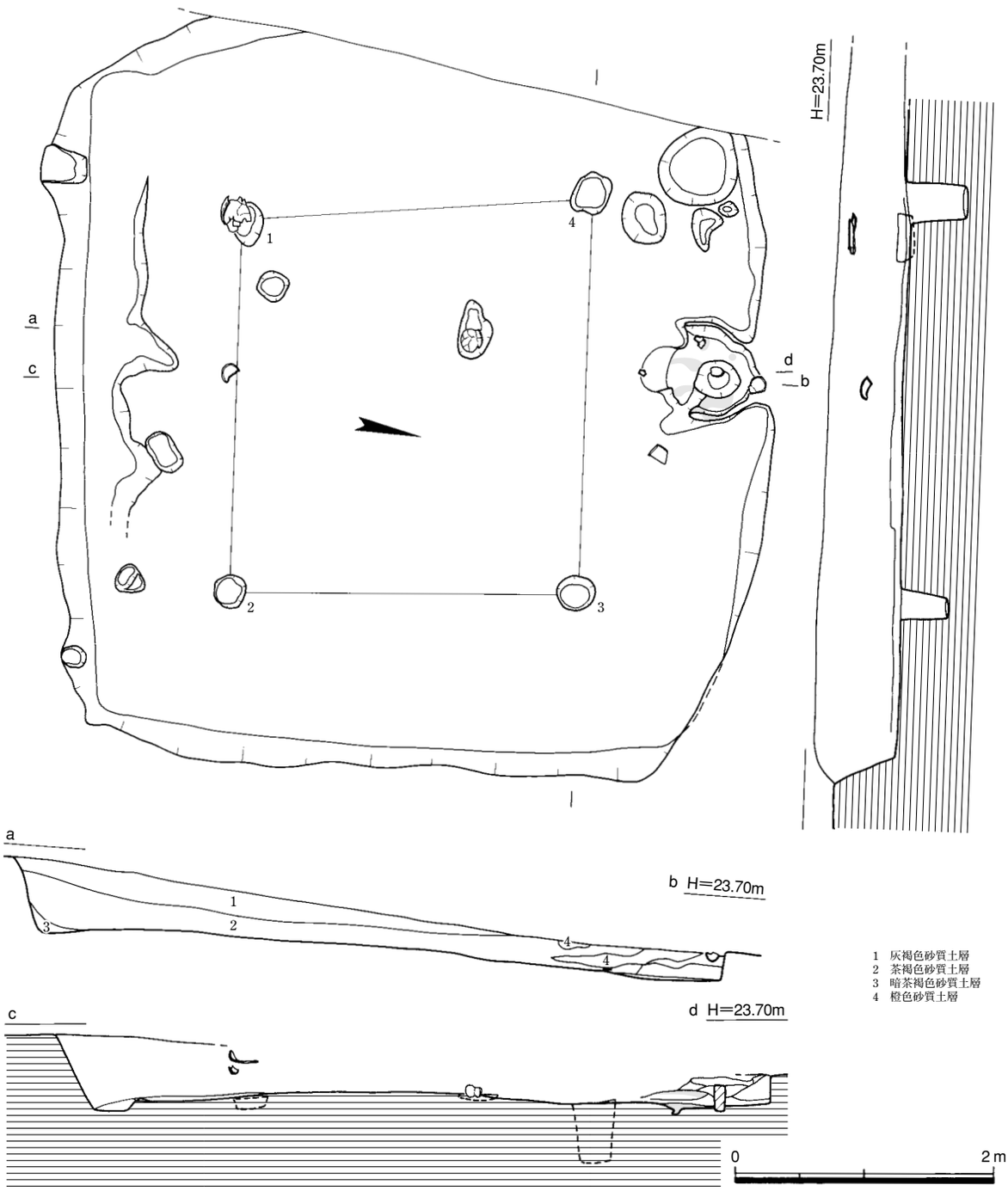


Fig.41　SC15 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

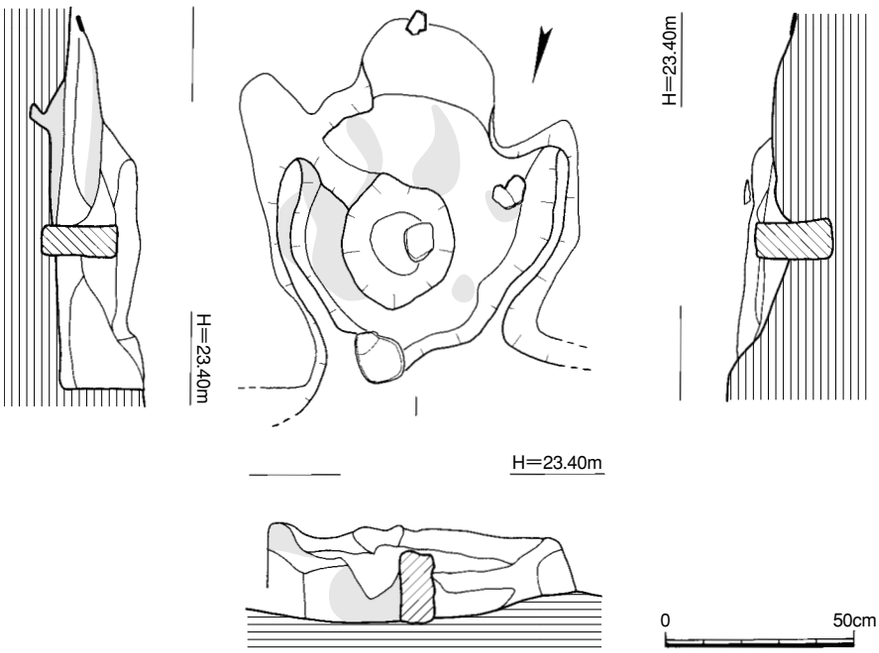


Fig.42　SC15 竪穴住居カマド出土状況実測図（1/20）

からは、土師器甕破片を中心として丸底壺・高坏甑などが出土した。

出土遺物（Fig.37）

00097 は、土師器小形丸底壺である。口縁部を欠く。外面が荒いハケメで、内面はヘラケズリ調整である。器色は、暗灰～灰白である。胎土は密で、焼成も堅緻である。胴部最大径 10.6cm を測る。**00098** は、低い高坏脚部破片である。器色は、橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原底部径は 9.5cm を測る。

SC14 住居跡（Fig.5・38・39・40、PL.8）

本住居跡は、2 号支線道路 4 区の北端部で検出された長方形プランの住居跡である。全体プランのほぼ東半部を調査した。各壁の規模は、東壁長 3.5m・南壁長 1.8m 以上・北壁長 3.1m 以上で、壁高 0.25m 程度を測る。南壁に沿って段状の低い高まりが残る。床面では数個のピットが検出されたが、主柱穴は特定出来ない。埋土内からは、須恵器蓋杯やハソウ、土師器杯蓋・甑などが出土した。

出土遺物（Fig.39・40）

00099 は、口縁が嘴状に折れる須恵器杯蓋である。調整は、ヨコナデである。器色は、灰色を呈し、焼成は堅緻である。口径 12.2cm を測る。**00100** は、小形の須恵器杯身である。底部下半が回転ヘラケズリで、他はヨコナデである。外底部にヘラ記号あり。器色は、青灰色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 12.6cm を測る。**00101** は、須恵器ハソウ破片である。口縁下に鋭い突帯 1 条を巡らす。外面にはタテ方向に櫛目を施す。器色は、暗青灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径は 14cm を測る。**000102** は、擬須恵の土師器杯蓋である。口縁部の内外面に浅い沈線を巡らす。天井部三分の一ほどにヘラケズリを施す。器色は、淡黄橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 13.8cm を測る。**00103** は、土師器甑破片である。器色は、にぶい橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。**10008** は、原位置を保たないが、カマド支脚と考えられる。角礫の側辺に打剥を加えて三角柱に仕上げる。法量は、長さ・幅・厚さが 26.4 × 11 × 11.2cm で、重さ 3700g を測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は、6 世紀後半頃と考えられる。

SC15 住居跡（Fig.5・41 ～ 45、PL.3・8）

本住居跡は、2 号支線道路 4 区の中位で検出された不整な長方形プランの住居跡である。西壁側のコーナーが未調査である。北壁の中央に作り付けのカマドを付す。床面には壁溝は無く、主柱穴は 4 本を長方形に配する。各壁の規模は、東壁長 4.3m・西壁長 1.5m 以上・南壁長 5m・北壁長 5.1m 以上で、壁高が南壁 0.6m・北壁 0.2m を測る。主柱穴 1 は、径 0.4 × 0.25m の不整円形掘方、同 2 が径 0.25m の円形掘方、同 3 が径 0.3m 弱の円形掘方、同 4 が 0.3 × 0.25m の不整円形掘方である。また、主柱穴

間の心身距離は、柱穴１→２で 2.9m、柱穴２→３で 2.7m、柱穴３→４で 3.1m、柱穴４→１で 2.7m を測る。埋土からは須恵器蓋杯、土師器甕・高坏・小型丸底壺などが床面近くで出土している。

カマド（Fig.42）

北壁中央に作り付けのカマドは、他の住居例よりも若干小形である。火床の中央に花崗岩角礫を据える。また、窯体の残りもあまり良くない。

出土遺物（Fig.43 ～ 45）

00104 は、須恵器杯蓋である。調整は、天井部の二分の一に回転ヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は青色を呈する。胎土は粗で、焼成も堅緻である。口径 13.2cm・器高 4.2cm を測る。

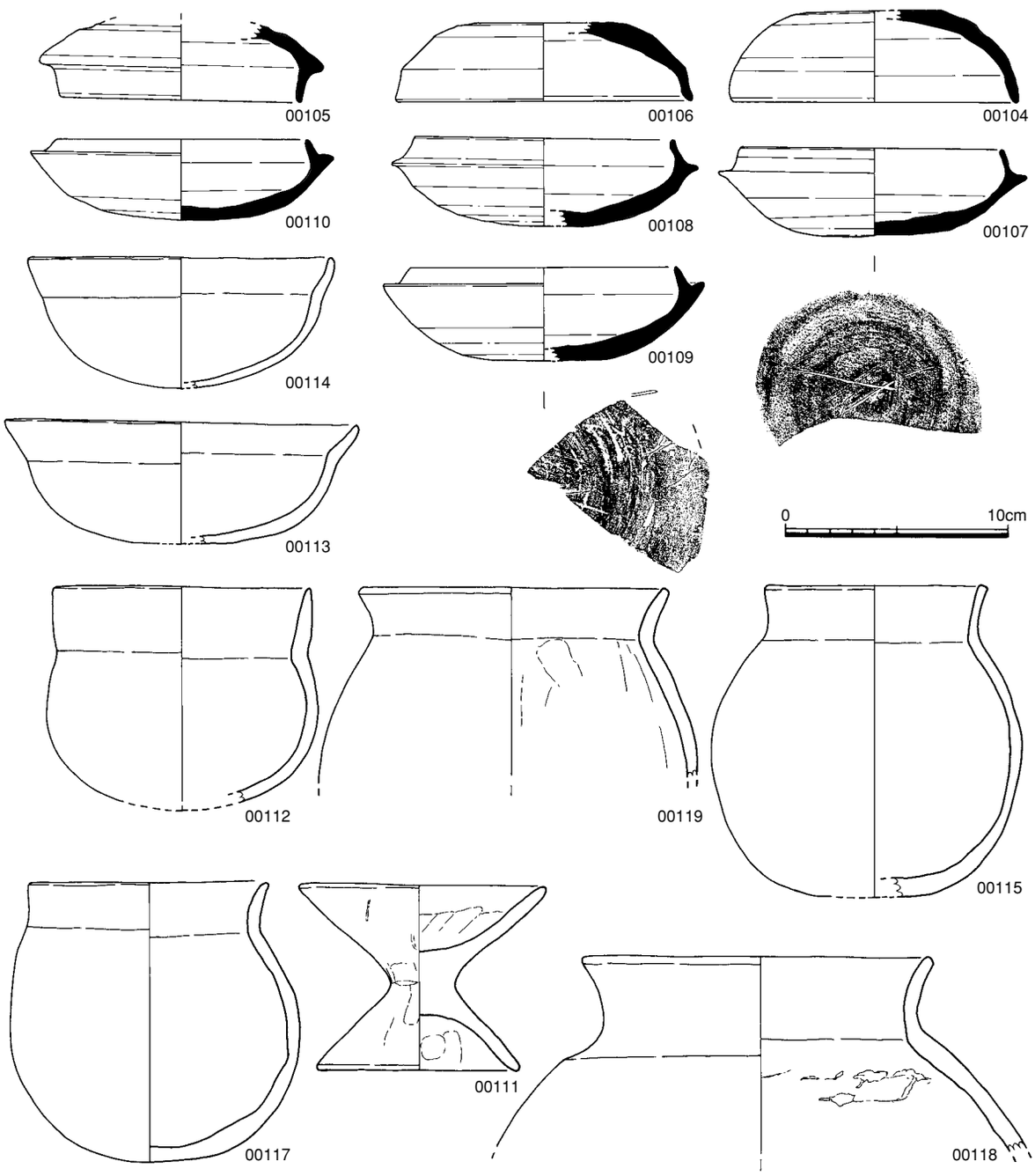


Fig.43　SC15 竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）

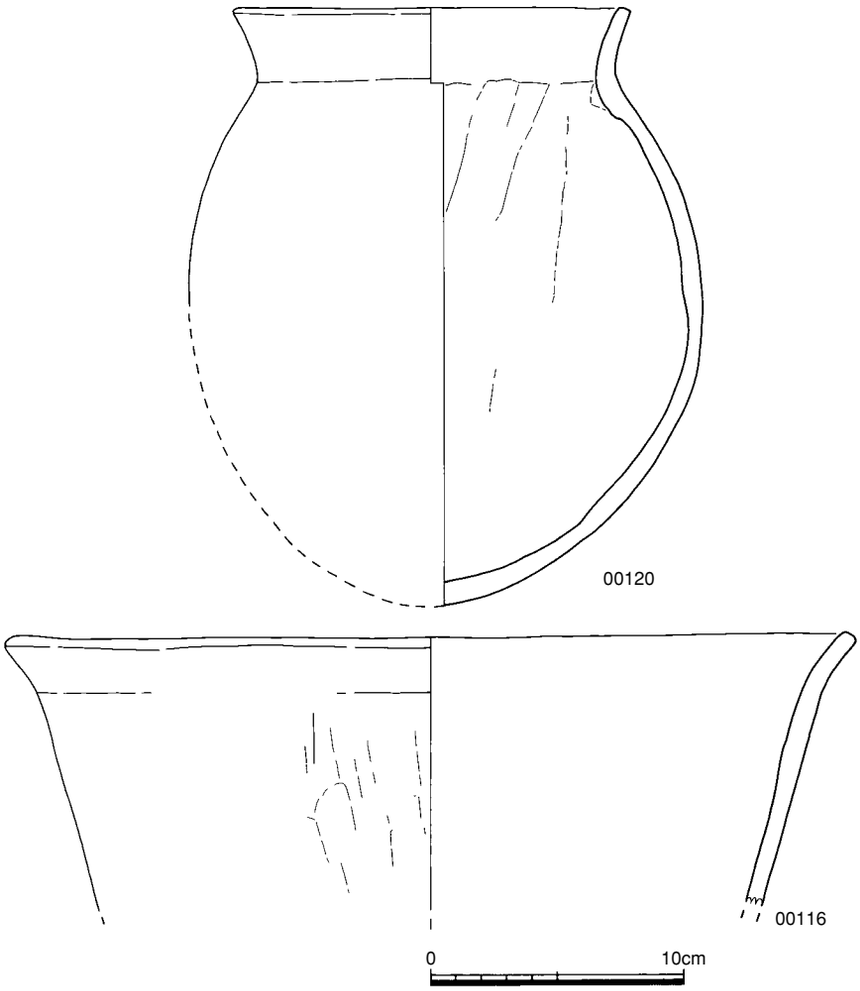


Fig.44　SC15 竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/3）

00105 は、小形の須恵器蓋である。天井部の約二分の一に回転ヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は、青灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 13cm を測る。**00106** は、天井の低い須恵器蓋である。口縁部は外側に踏ん張る。天井部のヘラケズリは小さい。器色は、明青灰～灰白色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 13.6cm・器高 4.5cm を測る。**00107** は、浅い須恵器杯身である。受け部は薄造りで、立ちあがりも低い。外底部には「く」字形のヘラ記号を描く。底部のヘラケズリは約二分の一程度で、他はヨコナデである。器色は、灰白～青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。受け部径 14.1cm・器高 4.1cm を測る。

00108 も須恵器杯身である。受け部の立ちあがりは非常に薄造りで、低い。調整は、底部のほぼ全面に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、暗青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。受け部径 13.8cm・器高 4cm を測る。**00109** は、受け部立ちあがりの内傾化が著しい須恵器杯身である。調整は、底部のほぼ全面に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。内底部にはアテ具痕が残る。また、外底部にヘラ記号を描く。器色は、青灰色～明青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。受け部径 14.8cm・器高 4.2cm を測る。**00110** は、受け部立ち上がりが低く、内傾化の著しい須恵器小形杯身である。調整は、底部の約二分の一程度にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は、灰黄～灰白色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は軟質である。受け部径 13.8cm・器高 3.7cm を測る。

00111 ～ 00120 は土師器である。**00111** は、脚台付鉢である。口縁は直線的に開き、脚も相似形である。調整は、内外面共にヘラナデである。器色は、外面が灰褐色で、内面は鈍い橙色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 11.3cm・器高 8.5cm を測る。**00112** は、口縁部がほぼ直立する丸底壺である。調整は、荒れのために不明である。器色は、外面が暗赤灰、内面はにぶい橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径 11.8cm・同器高 10.2cm を測る。

00113 は、浅い鉢である。口縁部は小さく外方に折れる。器面調整は、荒れのために不明である。

器色は、外面が灰褐色で、内面はにぶい橙色である。胎土は密で、褐色粒を含み、焼成は堅緻である。復原口径1.2cm・同器高5.5cmを測る。

00114も同様の鉢である。口縁部は、やや内湾気味に伸びる。調整は、口縁付近はヨコナデで、他は摩滅のために不明である。器色は、内外面共ににぶい橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径14cm・器高6cmを測る。**00115**は、直口する口縁を有する小形の甕である。外面は使用による二次焼成を受ける。また、外端部は、リング状にススが付着する。器面調整は、不明である。器色は、外面が淡赤橙色で、内面はにぶい黄橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径10.2cm・器高14.3cm・胴部最大径14cmを測る。カマド内出土。

00116は、大型甑破片である。器面調整は、口縁端部付近はヨコナデで、胴部外面はヘラナデか。同内面はヘラケズリである。器色は、内外面共ににぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。復原口径は、34.6cmを測る。**00117**は、やや短い口縁部が外開し、球状の胴部を有する甕である。調整は、内外面ともに器面の剥落で不明である。器色は、外面が褐灰色で、内面は灰白色を呈する。胎土は、やや粗で、焼成は堅緻である。口径13cm・器高12.8cm強を測る。**00118**は、短く、緩く外開する口縁を有する甕破片である。調整は、胴部内面にヘラナデ？調整が残る他は罷免の荒れのために不明である。器色は、外面が黄橙色で、内面は鈍い橙色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径は16.2cmを測る。**00119**は、口縁部の断面がく字形に屈曲する小形の甕である。器面調整は、外面が荒れのために不明であるが、胴部内面にはヘラケズリが残る。器色は、外面が褐色で、内面は黒褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は14.3cmを測る。

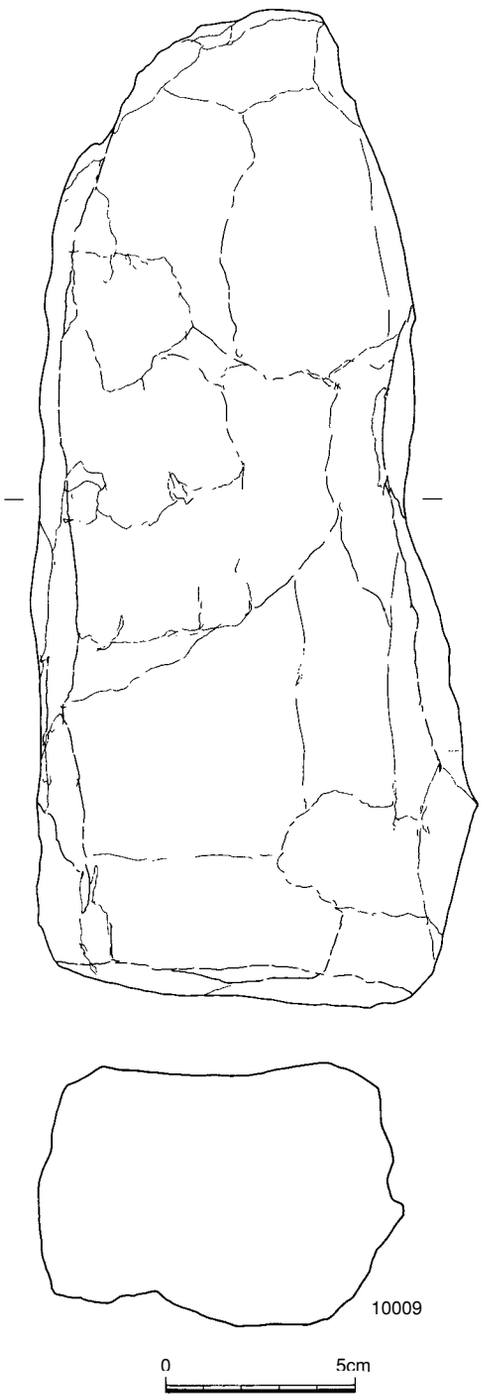


Fig.45　SC15竪穴住居跡
出土遺物実測図（3）（1/2）

00120は、緩く外開する口縁部と倒卵形胴部をもつ甕である。外面胴部は使用による二次焼成のために桃色に変化する。器面調整は、胴部内面にヘラケズリを残す以外は荒れのために不明である。器色は、外面が淡赤橙～赤内面は黒褐色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径16cm・器小24.2cmを測る。

10009は、カマドの支脚として使用された花崗岩角礫利用の角柱である。細く尖った部分を火床の中央に据え、大径部が頭部となる。素材の角礫周辺部にくまなく敲打調整を加えて方柱状に整形している。また、頭部には使用によると考えられる摩滅が認められる。

これらの出土遺物から、本住居跡の時期は6世紀後半～末頃と考えられる。

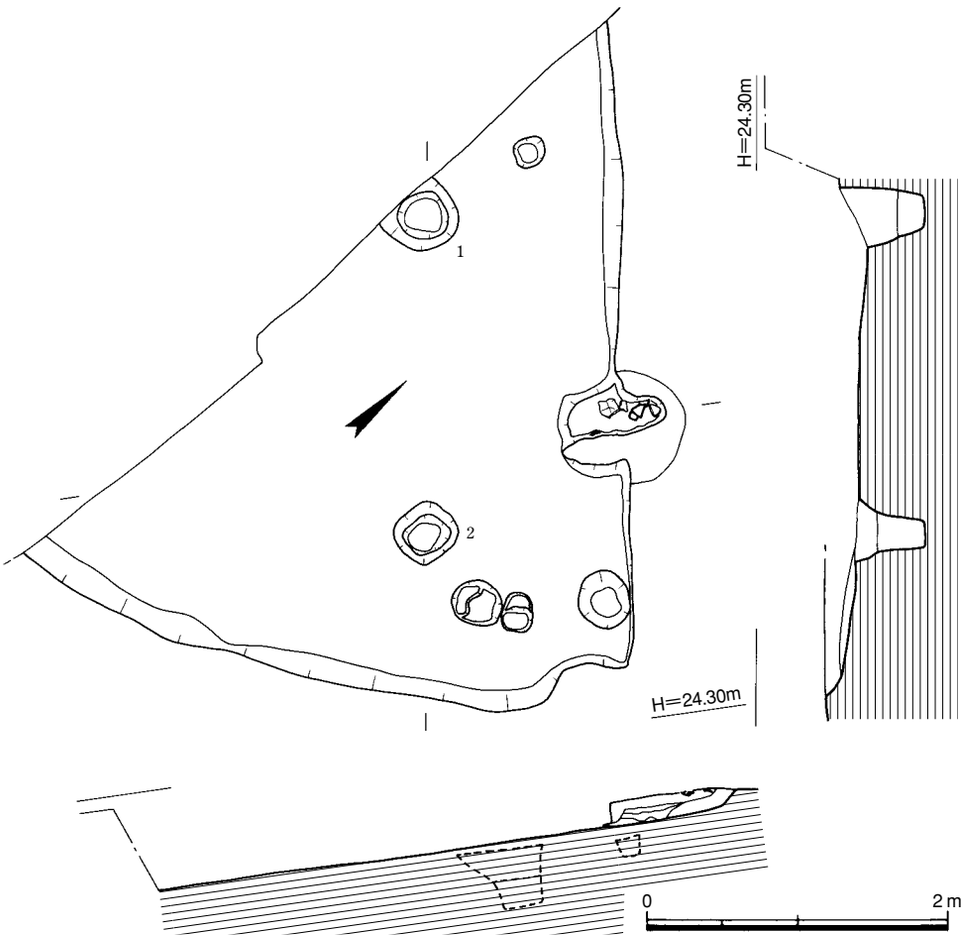


Fig.46　SC16 竪穴住居跡出場教実測図（1/50）

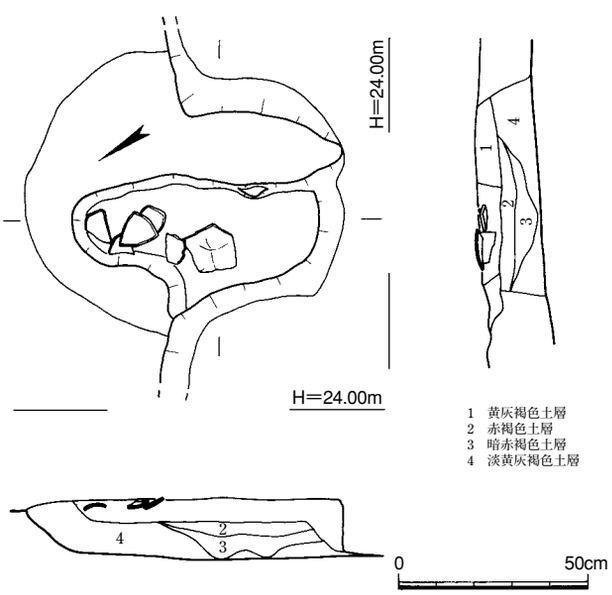


Fig.47　SC16 竪穴住居ｶﾏﾄﾞ出土状況実測図（1/20）

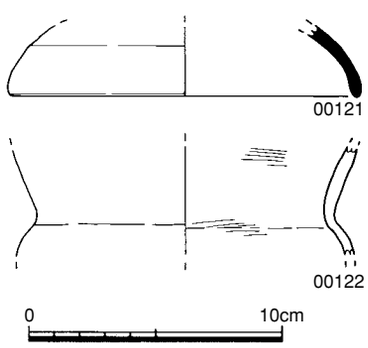


Fig.48　SC16 竪穴住居跡出土遺物実測（1/3）

SC16 住居跡（Fig.5・46 ～ 48、PL.3・8・9）

本住居跡は、2 号支線道路 4 区の南側で検出された長方形プラン？の住居跡と考えられる。プランは、南・北壁の一部が調査された。壁の規模は、南壁長 4.1m 以上・北壁長 4.3m 以上を測る。壁高は、南・北壁共に 0.2m 程度である。北壁のやや南寄りに作り付けのカマドを付設する。また､床面には主柱穴 2 本が認められる。主柱穴の規模は､柱穴 1 が径 0.45m の円形掘方で､同 2 が 0.4 × 0.35m の不整円形掘方である。なお、主柱穴間の心身距離は、2.15m である。住居埋土からは須恵

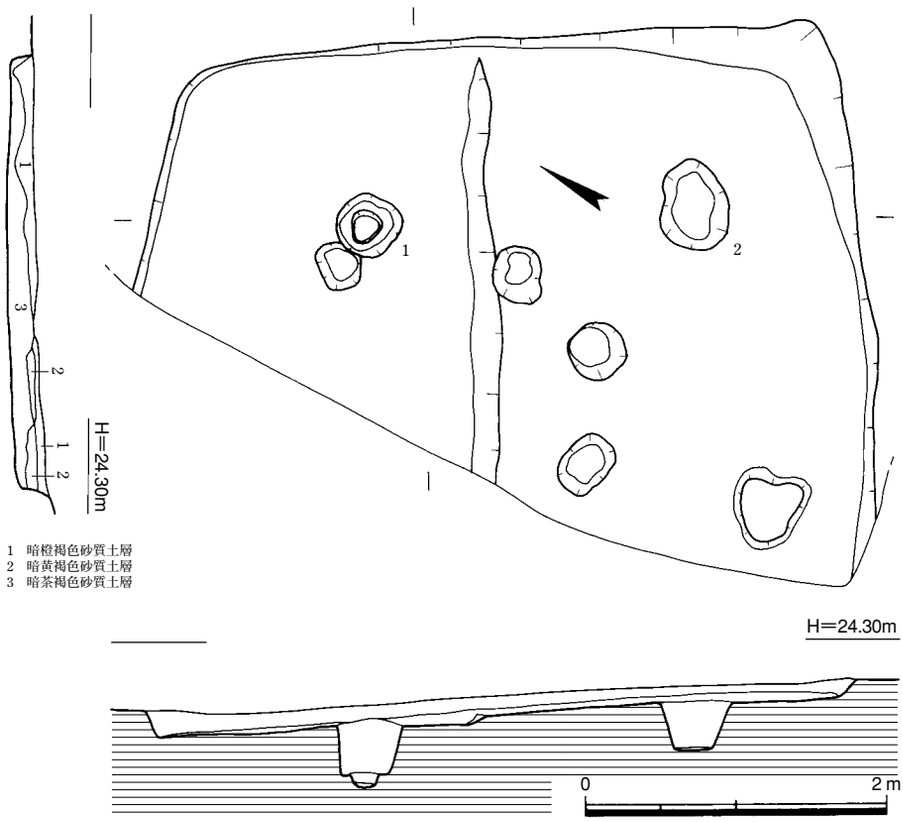


Fig.49　SC17 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

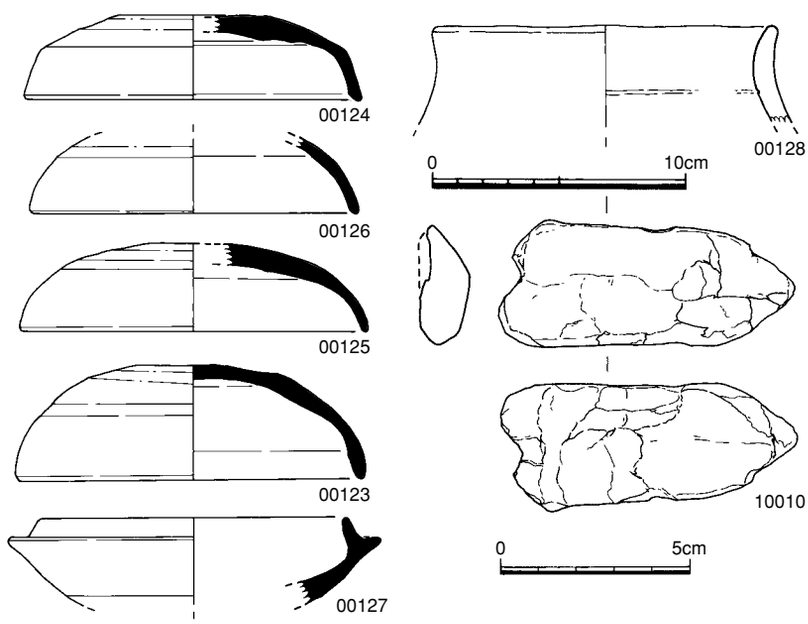


Fig.50　SC17 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

器甕・蓋杯、土師器甕・高坏・小形丸底壺等の小破片が出土した。

出土遺物（Fig.48）

00121 は、須恵器杯蓋である。丸みを帯びた口縁部をもつ。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は、外面が灰白～暗灰色で、内面は青灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径は 14.2cm を測る。

00122 は、頸部のしまりのない土師器の小形丸底壺破片である。器面調整は、外面がヨコナデで、内面はハケメ調整後にヘラケズリを施す。器色は、内外面共に赤色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原頸部径は 12cm を測る。カマド出土。このような出土遺物から、本住居跡の時期は 6 世紀後半と考えられる。

SC17 住 居 跡（Fig.5・49・50、PL.3・9）

本住居跡は、2 号支線道路 4 区の南側で検出された長方形プランの住居跡と考えられる。プランはやや不整形であり、西壁と南・北壁の一部は調査区外である。壁規模は、東壁長 4.1m・南壁長 3.35m 以上・北壁長 1.5m 以上を測る。なお、壁高は 0.2m 程度が残る。床面では東西方向に区切るようにベッド状の段が設けられている。また、主柱穴は、東壁側の 2 本が認められる。主柱穴 1 は、径 0.4m 程度・深さ 0.35m の不整円形掘方で、同 2 は径 0.6 × 0.45m・深さ 0.35m の長円形掘方である。なお、柱穴 1 から柱芯の経は 0.2m 程度と考えられる。主柱穴間の心身距離は、2.2m 程度を

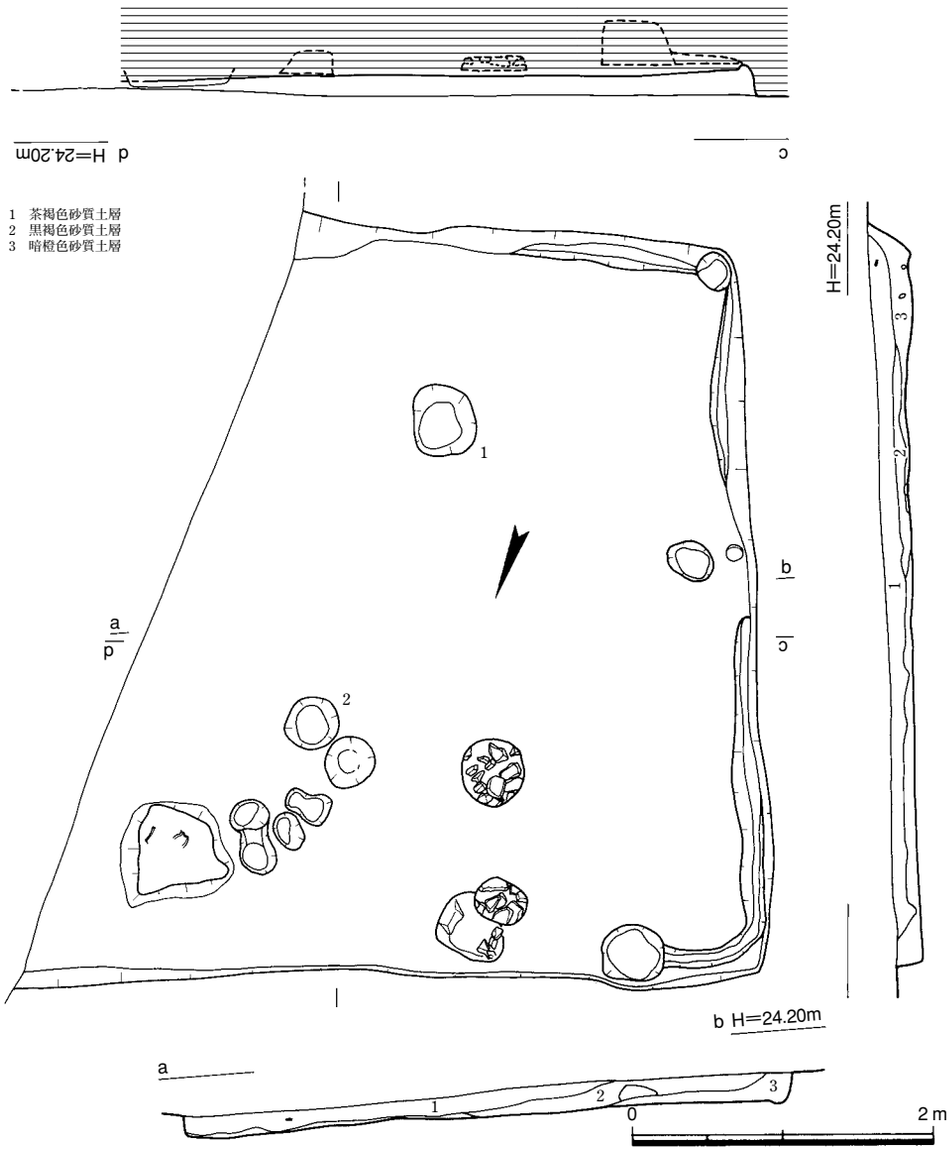


Fig.51　SC18 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

測る。住居埋土からは土師器甕破片を主に高坏、須恵器蓋杯、滑石製石錘等が出土した。

出土遺物

（Fig.50）

00123 は、須恵器杯蓋である。丸みを帯びた口縁を有する。天井部の一部に回転ヘラケズリを加え、他はヨコナデ・ナデ調整である。器色は、内外面共に青灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径14.1cm・器高 4.7cm を測る。

000124 は、天井部から口縁部への移行が「く」字形に屈折する須恵器蓋である。器色は、灰白～明青色を呈する。胎土は密で

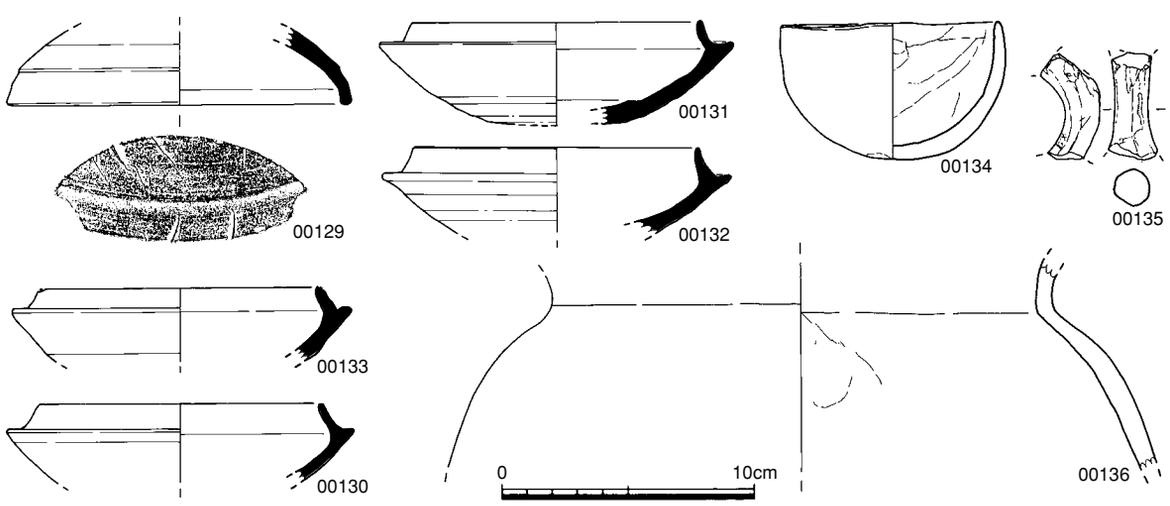


Fig.52　SC18 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

焼成も堅緻である。口径 13.6cm・器高 3.4cm を測る。**00125・00126** は器高の低い須恵器杯蓋である。調整は、いずれも天井部の上半に回転ヘラケズリを加え、他はヨコナデである。また、いずれも薄造りである。**000125** は器色外面が灰黄褐色、内面が明青灰色で、胎土は密で、焼成は堅緻である。口径 14cm・器高 3.5cm を測る。また、**00126** は、器色が青灰色を呈しする。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 13.2cm を測る。**00127** は、受け部立ち上がりの低い須恵器杯身である。全体にしまりがない。器面調整は、外底部に僅かにヘラケズリを残し、他はヨコナデである。器色は、内外面共に青灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。復原受け部径 15cm を測る。

000128 は、口縁部が緩く立ちあがる土師器小形甕である。器面調整は、内外面共にヨコナデを施す。器色は、内外面共に灰褐色を呈する。胎土は密で、雲母を含む。焼成は堅緻である。復原口径 13.8cm を測る。

10010 は、滑石使用の石錘である。長方形をなし、頭部に抉りを施し、反対側は尖っており摩滅が見られる。また、側辺部にも浅い抉りが 2 ヶ所に見られる。法量は、長さ・幅・厚さが 7.9×3.4×1.3cm で、重量 51g を測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は 6 世紀後半～末と考えられる。

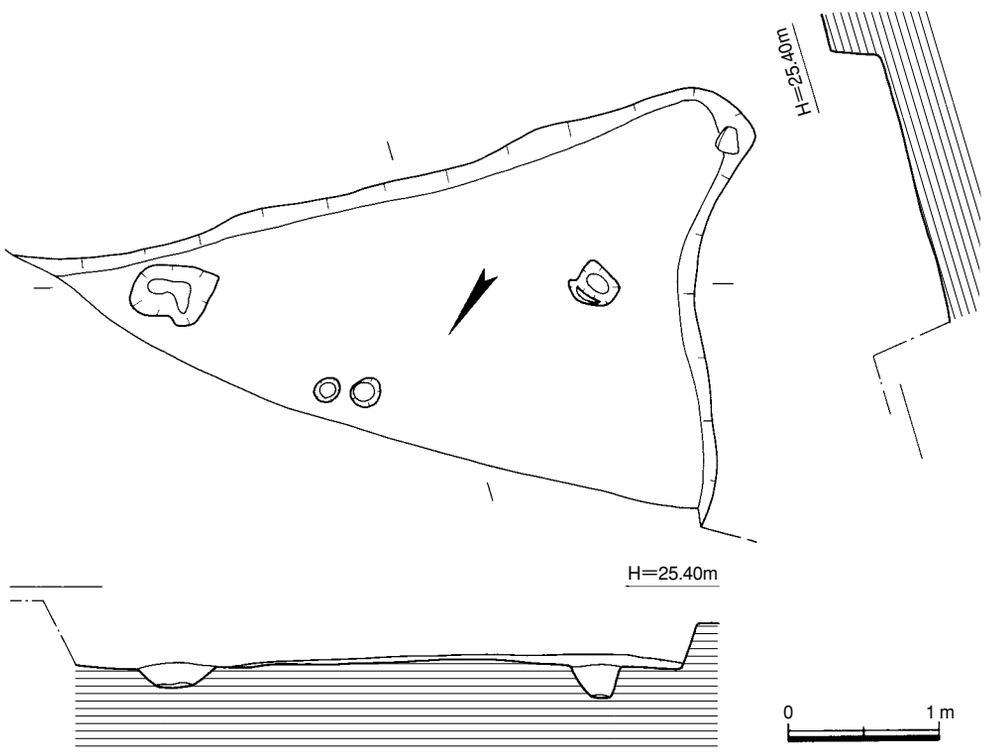


Fig.53　SC19 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

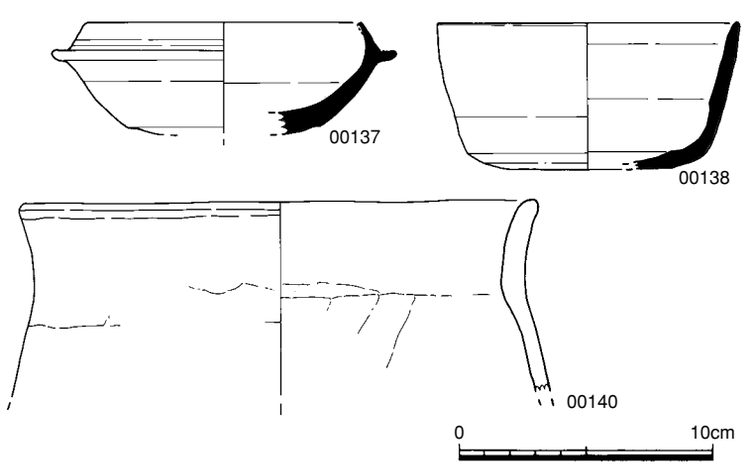


Fig.54　SC19 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

SC18 住居跡

（Fig.5・51・52、PL.3・9）

本住居跡は、2 号支線道路 4 区の南端近くに検出された長方形プランと考えられるやや大型の住居跡である。東壁と南・北壁の一部が調査区外である。壁の規模は、西壁長 4.8m・南壁長 2.9m 以上・北壁長 5m 以上である。また、壁高は、0.2m 程度を残す。床面では西壁の両コーナーに浅い壁溝が付設される。主柱穴は、明確に壁辺に平行して配置されるものは認められないが、柱穴 1・2 がこれにあたるものか。埋土中からは、

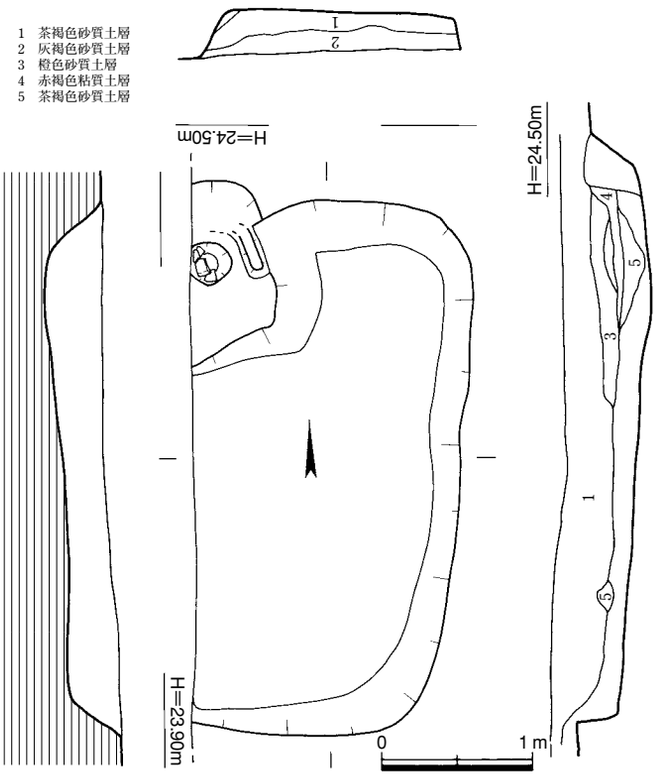


Fig.55　SC20 竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

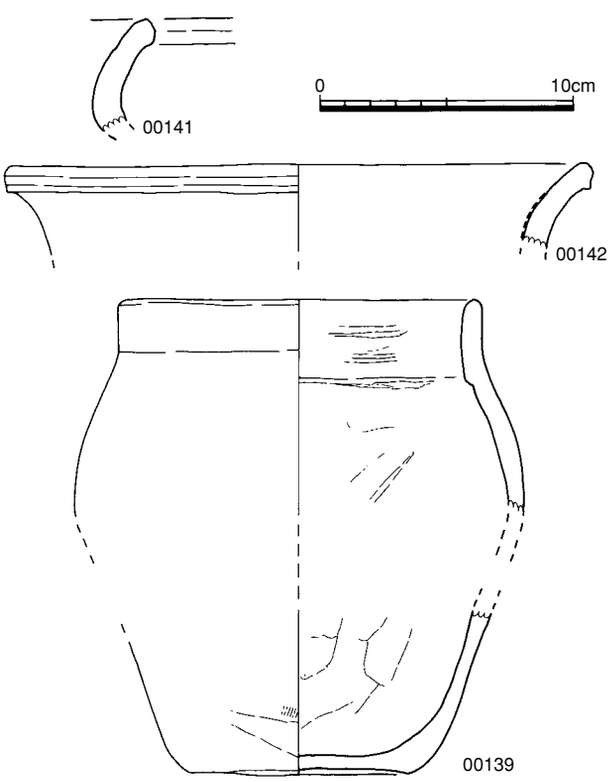


Fig.56　SC20 竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

土師器甕破片と共に高坏・マリ・把手、須恵器甕・蓋杯等が出土した。**00129** は、低い天井部の須恵器杯蓋である。口縁部との境には弱い段をなす。器面調整は、ヨコナデである。器色は、灰～明灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径は 14cm を測る。

00130 は、小形の須恵器杯身である。全体に薄造りである。受け部立ち上がりは強く内傾する。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は、外面が明青灰～灰色で､内面は明青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原受け部径 14cm を測る。**00131** も受け部の立ちあがりの内傾化の著しい須恵器杯身である。底部の約二分の一に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、内外面共に明青灰色を呈する。胎土は密で､焼成も堅緻である。復原受け部径 14.2cm を測る。**00132** も須恵器杯身破片である。底部はやや尖り気味で､ほぼ底部全面に回転ヘラケズリを施す。口縁･内面はヨコナデ調整である。器色は、外面がにぶい赤褐色で、内面は明褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原受け部径 14cm を測る。**00133** も受け部の立ちあがりが非常に弱い須恵器杯身である。調整は､底部下半にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は、外面が灰白色で､内面は青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。受け部復原径 13.8cm を測る。**00134** は、土師器マリである。手捏ね土器である。調整は、指によるナデである。器色は、にぶい黄橙色である。口径 9cm・器高 5.4cm を測る。**00135** は、把手破片である。断面は円棒状をなす。器色は、淡赤橙色である。全長 4.3cm を測る。

00136 は、大型の土師器甕破片である。調整は、内面にヘラケズリが残り、他はナデか。器色は、外面が褐灰で、内面はにぶい黄橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原頸部径 20.4cm を測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は 6 世紀末～ 7 世紀初め頃と考えられる。

SC19 住居跡（Fig.5・53・54、PL.9）

本住居跡は、2 号支線道路 5 区の北端部で検出された長方形プラン？と考えられる不整な住居跡である。プランは、西壁と南壁の一部が調査された。壁規模は、西壁長 2.9m 以上、南壁長 4.7m 以上を測る。また、壁高は、0.2m 程度を残す。主柱穴などは不明である。埋土内から土師器甕破片･高坏、須恵器蓋杯等が出土した。

出土遺物（Fig.54）

00137 は、須恵器の小形杯身である。受け部もいびつな造りである。外底部に僅かにヘラケズリを施す。器色は、明青灰～灰白色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。受け部復原径 13.8cm を測る。**00138** は、須恵器の小形杯である。調整は、底部外端にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は、青灰～灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径 12.2cm を測る。**00140** は、中型の土師器甕である。調整は、内面にナナメのヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色はにぶい橙色である。胎土は密で、雲母を含む。復原口径は 20.8cm を測る。以上の出土遺物から本住居跡の時期は 6 世紀末頃と考えられる。

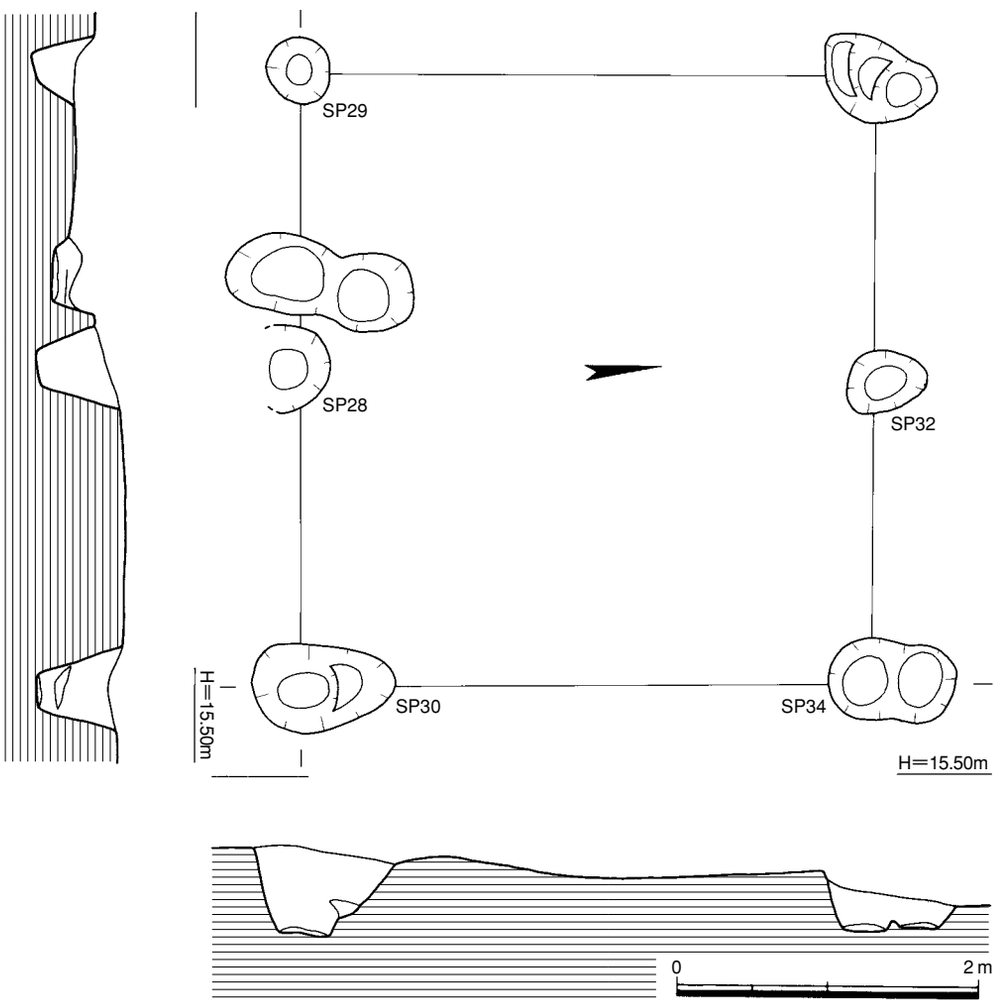


Fig.57　SB01 掘立柱建物出土状況実測図（1/50）

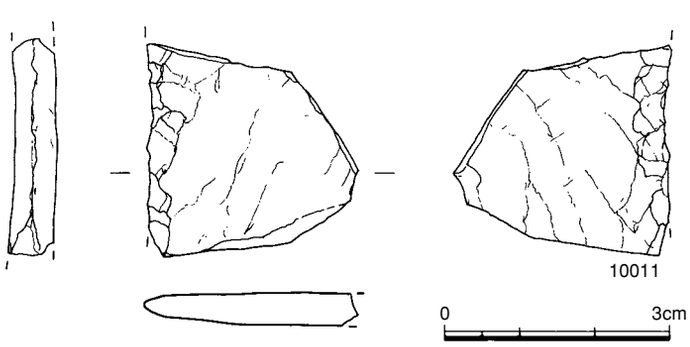


Fig.58　SB01 掘立柱建物出土遺物実測図（1/1）

Fig.59　SK01 土坑出土状況実測図（1/40）

SC20 住居跡（Fig.5・55・56、PL.9）

本住居跡は、391-1 地区の西壁で検出された長方形プラン？の住居跡である。東壁と南・北壁の一

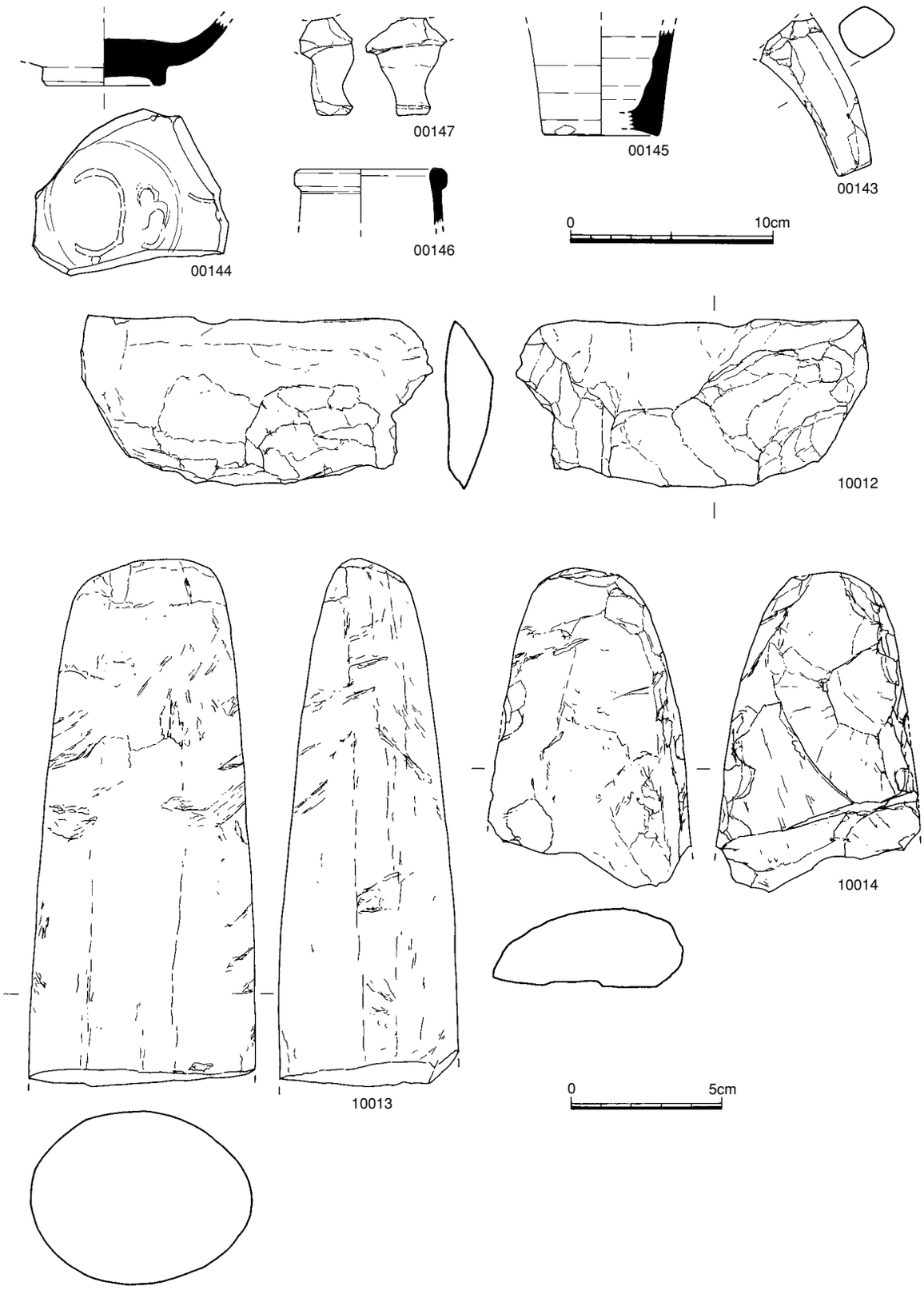


Fig.60　SK01 土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）

部を残す。壁規模は、東壁長 3.5m・北壁長 1.7m 以上・南壁長 1.4m 以上を測る。また、壁高は、0.4 ～ 0.5m を残す。北壁にカマド状の施設が残るが、やや東よりの一と考えられる。床面には他の施設は見あたらない。埋土内より土師器甕破片や黒曜石石核などが少量出土した。

出土遺物（Fig.56）

00139 は、やや底部が上げ底の土師器甕である。口縁は直立し、胴の肩が張る。胴部内面にヘラケズ

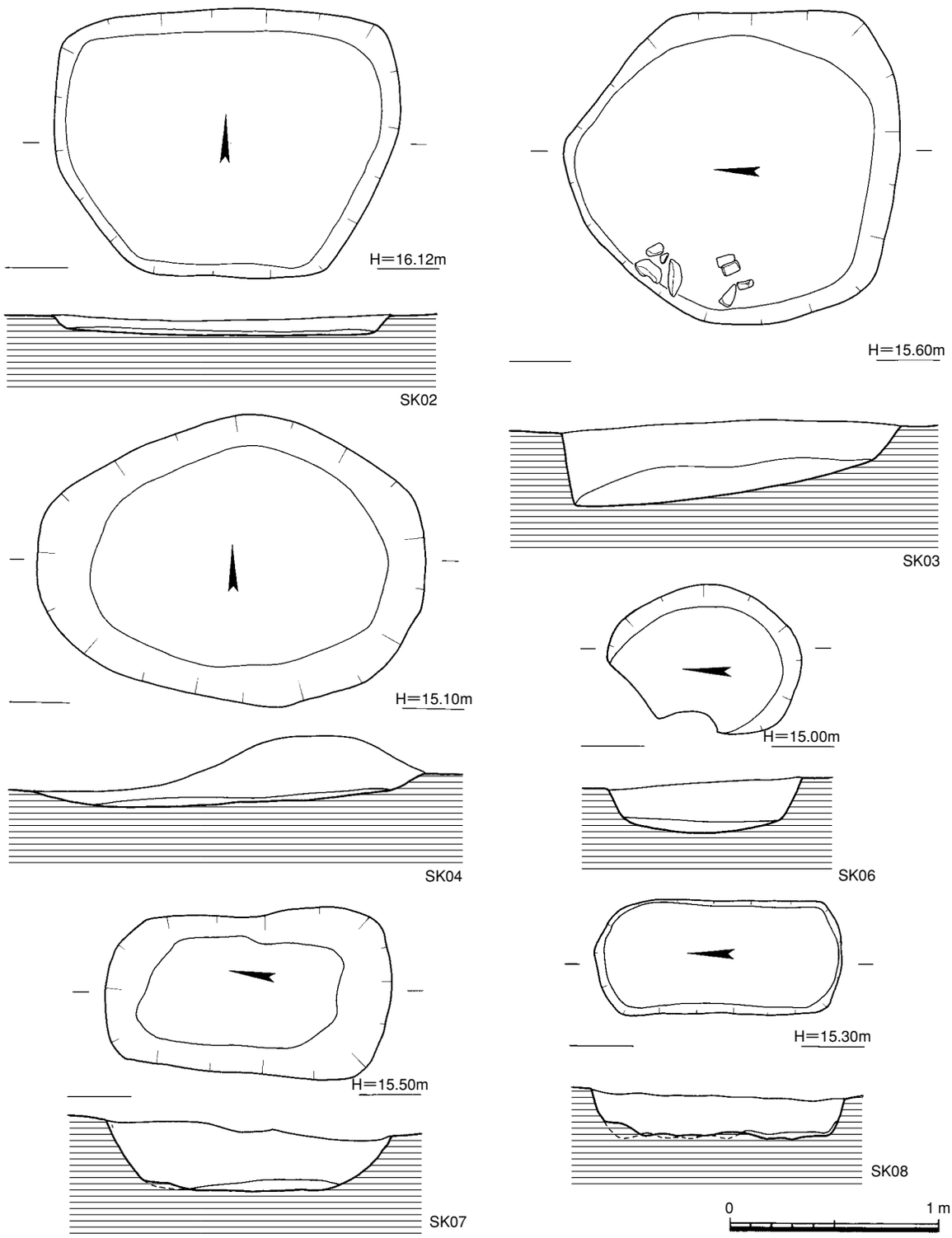


Fig.61　SK02・03・04・06・07・08 土坑出土状況実測図（1/30）

リが残り、他はヨコナデ・ナデである。器色は、灰褐からにぶい橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 14.6cm・推定器高 19.2cm を測る。**00141** は、擬須恵土師器の甕口縁部破片である。端部は角張った仕上げである。調整はヨコナデである。器色は、橙～にぶい橙色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。**00142** も同じく擬須恵土師器の甕破片である。調整はヨコナデである。器色は、にぶい赤橙～橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原口径は 23.8cm を測る。これらの出土遺物から本住居跡の時期は、6 世紀後半と考えられる。

2. 掘立柱建物（Fig.4・57・58）

本建物は、2 号支線道路 1 区で検出された 1 × 2 間規模の南北棟建物である。掘方規模は、SP29 が径 0.4m の円形･SP28 が径 0.55m の円形･SP30 が径 0.6m･深さ 0.6m 程度の長円形。SP34 が径 0.55m･深さ 0.4m の円形･SP32 が径 0.6m の円形をなす。また､南北の桁行きは心身で 4.2m を測り､柱間は 0.2 ～ 0.22m である。また､東西の梁間は 3.8m 程度を測る。本建物の時期を示す土器類は掘方などでは伴っていないが、SD02 溝との切り合いから中世期と考えられる。

出土遺物（Fig.58）

10011 は､サヌカイト使用のエンドスクレイパーと考えられる。不整な剥片の端部の両面からリタッチを加え、刃部を作り出している。SP30 内出土。

3. 土坑（Fig.4・5・59 ～ 88、PL.2 ～ 4・10 ～ 13）

一概 要一　調査区全体では､42 基の土坑が検出された。内訳は､2 号支線道路 1 ～ 4 区で 27 基(SK01 ～ 27)、6 号支線道路 1・2 区で 5 基（SK37 ～ 41)、7 号支線道路で 4 基（SK28 ～ 30・42)、8 号支線道路 1 基（SK31)、391-1 地区で 5 基（SK32 ～ 36）が検出された。土坑は、調査区全域で散発的に検出され、平面形は、長方形や不整円形のものが見られ、総じて不整なものが多い。規模は、比較的大型で、調査区内に収まらないものも多い。

SK01 土坑（4・59・60、PL.10・13）

本土坑は､2 号支線道路 1 区南端で検出された不整形の大型土坑である。短辺長が 3.8m･長辺長 7.4m 深さ 0.8m を測る。壁の立ち上がりは緩く、床面も不安定である。埋土中より龍泉窯青磁や褐釉陶器、瓦質土器それに弥生期の磨製石斧・石包丁未成品・黒曜石チップなどが出土した。

出土遺物（Fig.60）

00143 は、土師質土器土鍋の脚破片である。断面は不整な隅丸方形をなす。残存長 7.9cm を測る。器色は、にぶい橙色である。**00144** は、龍泉窯青磁碗破片である。見込みに花文を描く。また、外底部はケズリを加え、露胎となる。釉は明オリーブ灰色に見える。高台部径 6.1cm 強を測る。**00145** は、長胴の壺底部である。外面には灰色釉をかける。露胎部は青灰色を呈する。また､底部端に目跡が残る。朝鮮青磁か。底部径 6cm を測る。**00146** は、施釉陶器瓶破片である。口縁は外側に肥厚させて玉縁状となす。内外面共に暗赤褐色釉をかける。露胎部では灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。復原口径 8.7cm を測る。**000147** は、龍泉窯青磁香炉である。短い脚部のみの破片である。外面には緑灰色の釉をかけ、底部端及び畳付・一部に残る本体部分の内面は灰白色の露胎となっている。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。**10012** は、打剥整形途中の石包丁未成品である。残存長 11.7cm

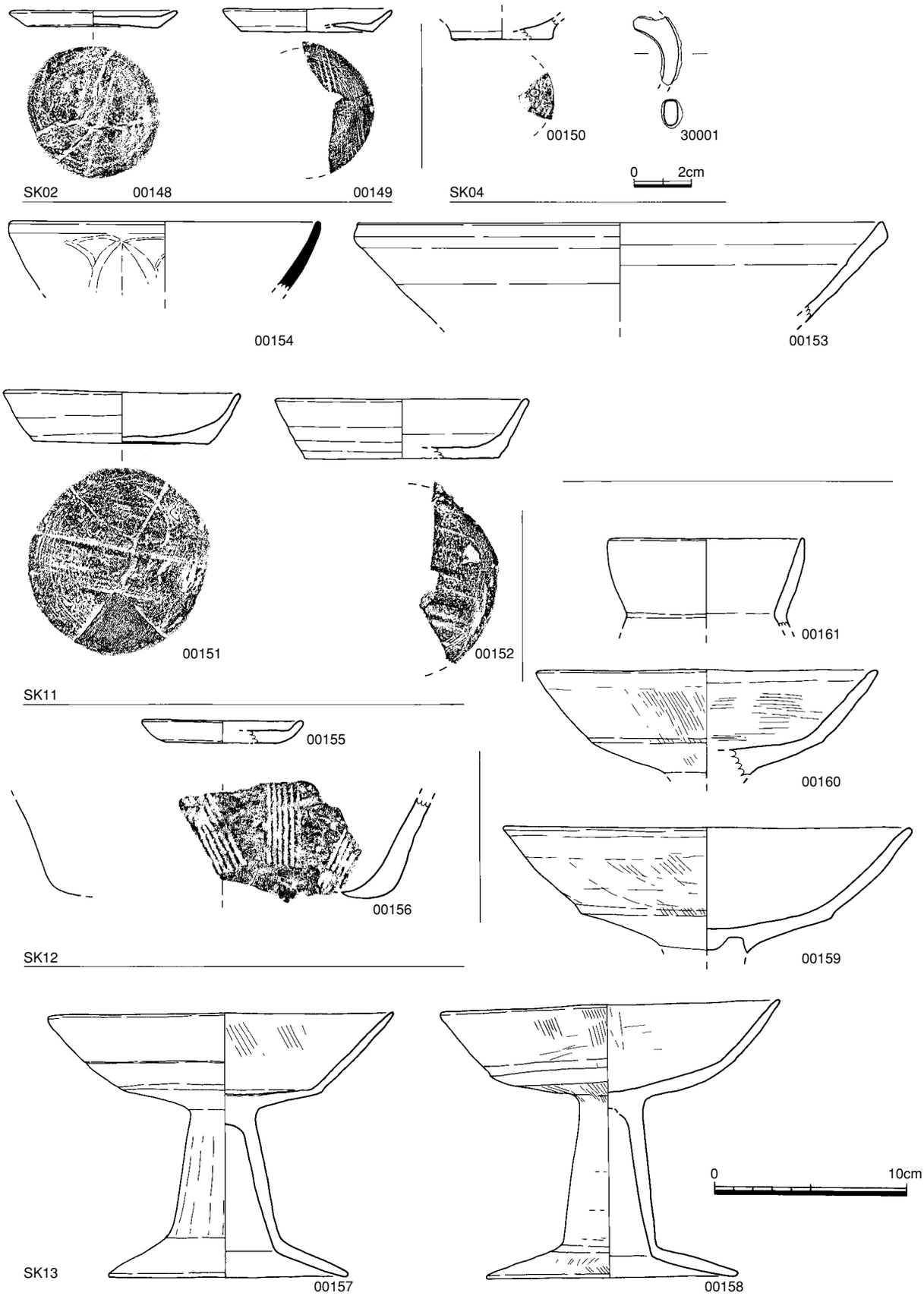


Fig.62　SK02・04・11・12・13 土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）

を測る。完成形は半月形石包丁となろうか。**10013** は、今山産太形蛤刃石斧である。刃部を失う。残存する上半頭部には製作時の剥離痕がやや多く残ることから使用時に柄穴に挿入された部分と考えられる。玄武岩製。残存長 17.5cm・重さ 1266g を測る。**10014** も磨製石斧頭部破片である。砥石として二次使用されている。玄武岩製か。残存長 10.6cm・重さ 261g を測る。

SK02 土坑（Fig.4・61・62）

本土坑は、2 号支線道路 1 区中央で検出した不整円形の浅い土坑である。短辺長 1.3m･長辺長 1.7m・深さ 0.1m を測る。埋土内からは土師器糸切り皿が出土した。

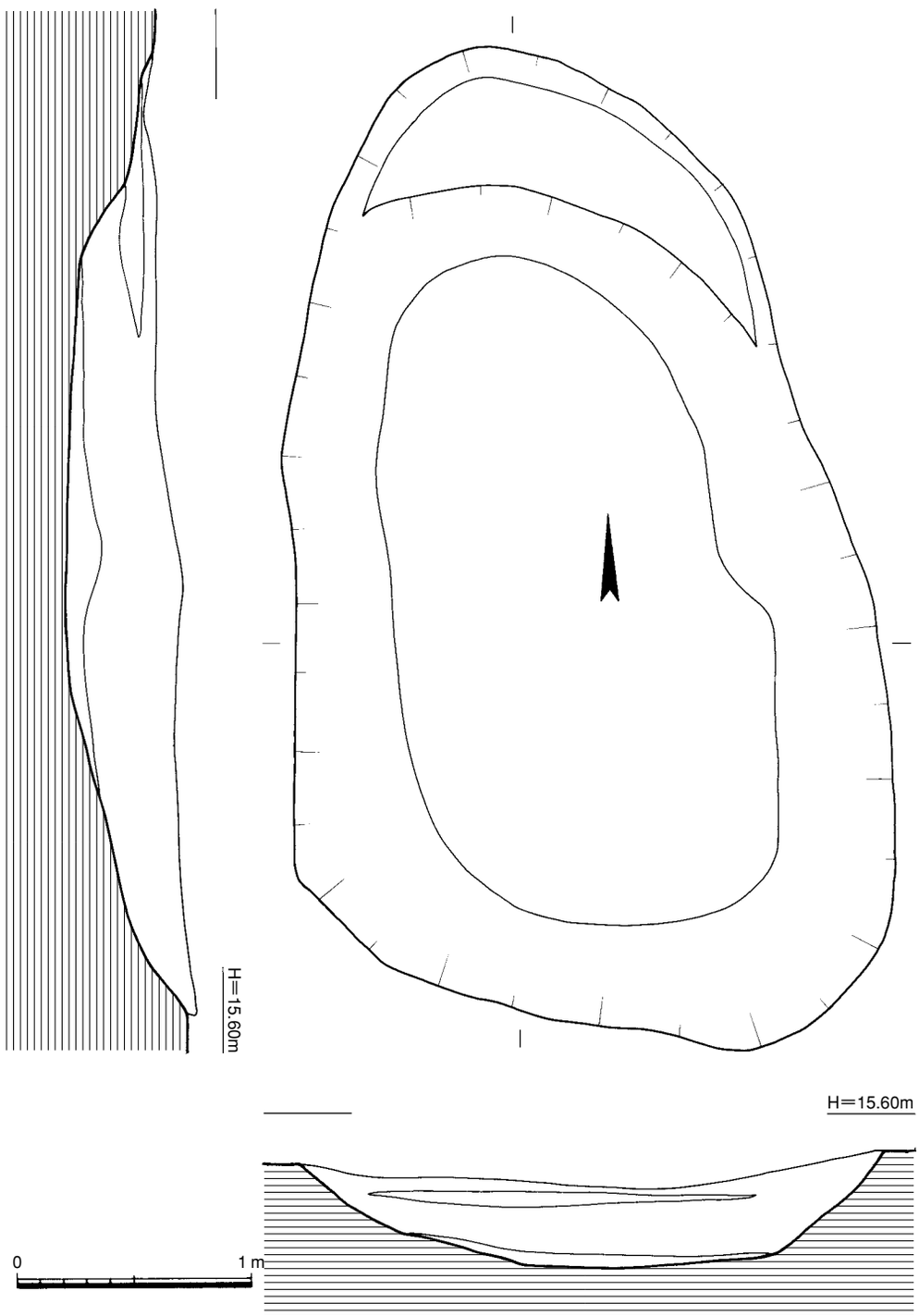


Fig.63　SK05 土坑出土状況実測図（1/30）

出土遺物

（Fig.62）

00148 は、小形の土師器皿である。糸切り離し後の板目が残る。調整はヨコナデである。器色は、にぶい橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 9cm・器高 0.9cm を測る。**00149** も同様の土師器皿である。器色は、にぶい橙色～明褐色である。胎土は密で、茶色粒子を含む。口径 9cm・器高 1.2cm を測る。

SK03 土坑

（Fig.4・61）

本土坑は、2 号支線道路 1 区のほぼ中央で検出された不整円形の土坑である。その規模は、短辺長 1.3m・

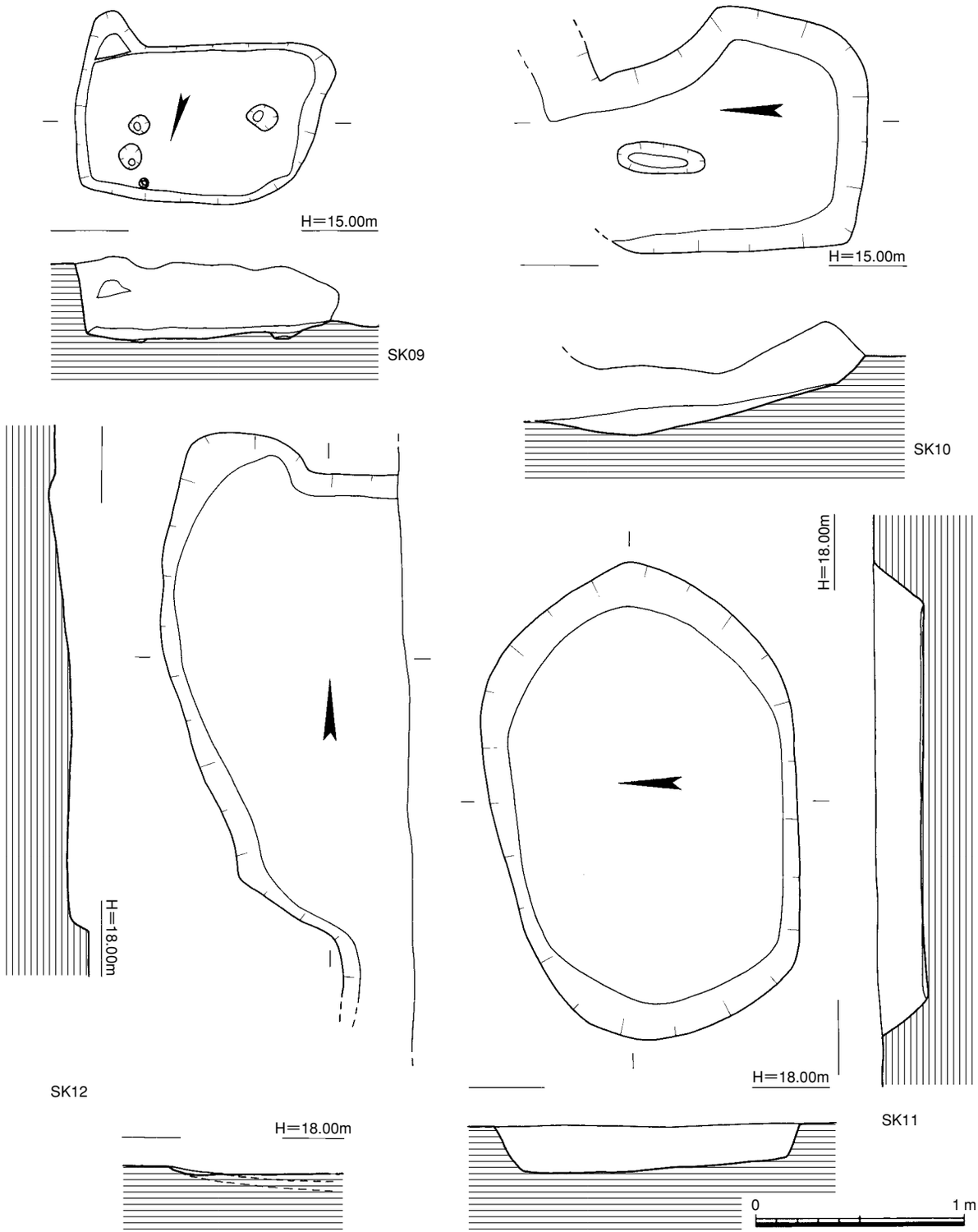


Fig.64　SK09・10・11・12 土坑出土状況実測図（1/30）

長辺長 1.7m・深さ 0.32m を測る。埋土中から土師器甕破片が出土している。図示可能な遺物は無い。

SK04 土坑（Fig.4・61・62）

本土坑は、2 号支線 1 区南側で検出された長円形をなす土坑である。その規模は、短辺長 1.3m・長辺長 1.9m・深さ 0.4m を測る。埋土中から糸切り土師器皿破片や鉄輪等が出土した。

出土遺物（Fig.62）

00150 は、糸切り土師器皿破片である。外底部に板目を残す。器色は、にぶい橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原底部径 5.4cm を測る。**30001** は、不明の鉄輪である。腐食のために両端部を失う。断面形は長円形をなす。残存長 2.4cm を測る。

SK05 土坑（Fig.4・63、PL.10）

本土坑は、2 号支線道路 1 区の北端部近くで検出された長円形をなす大型土坑である。その規模は、

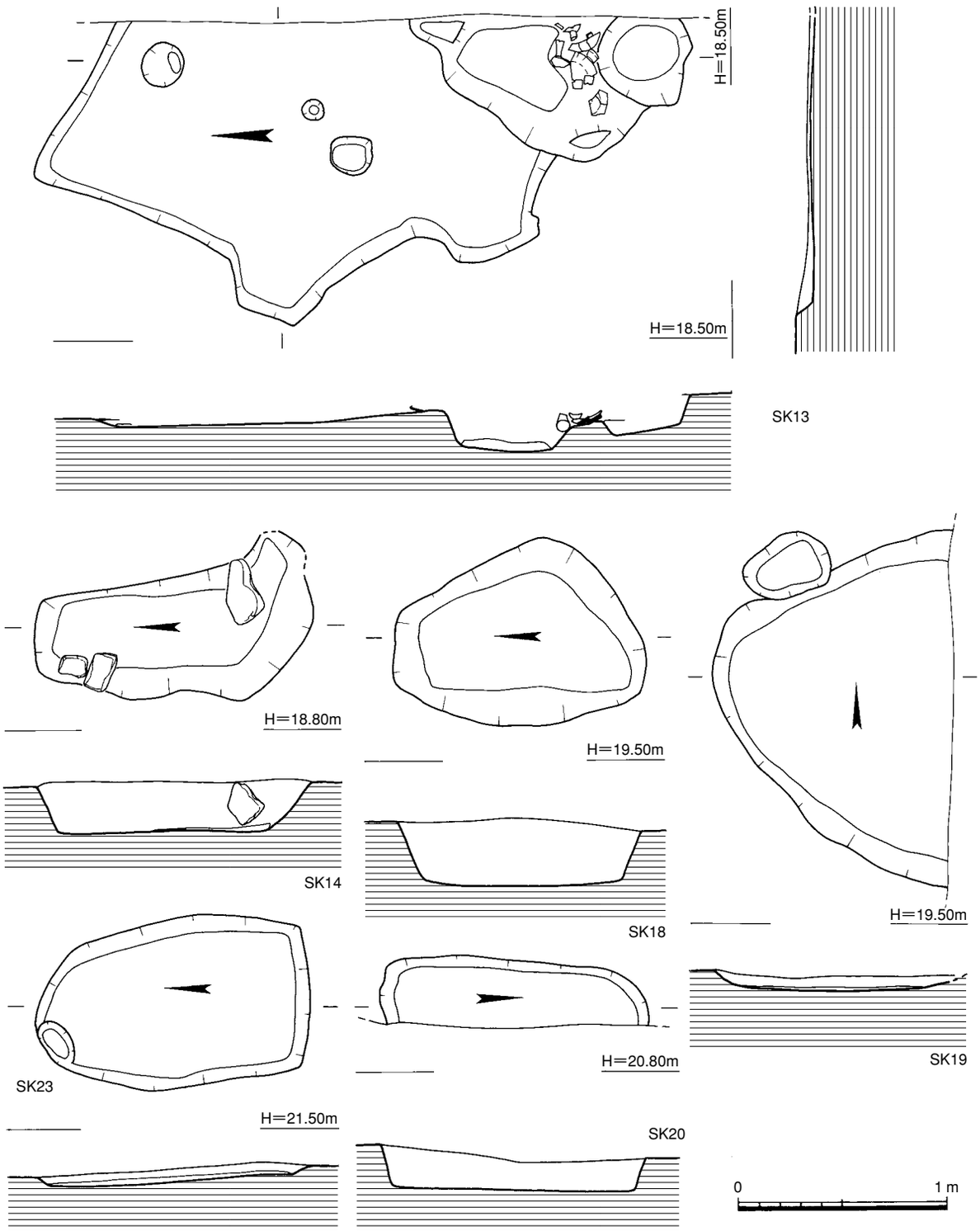


Fig.65　SK13・14・18・19・20・23 土坑出土状況実測図（1/30）

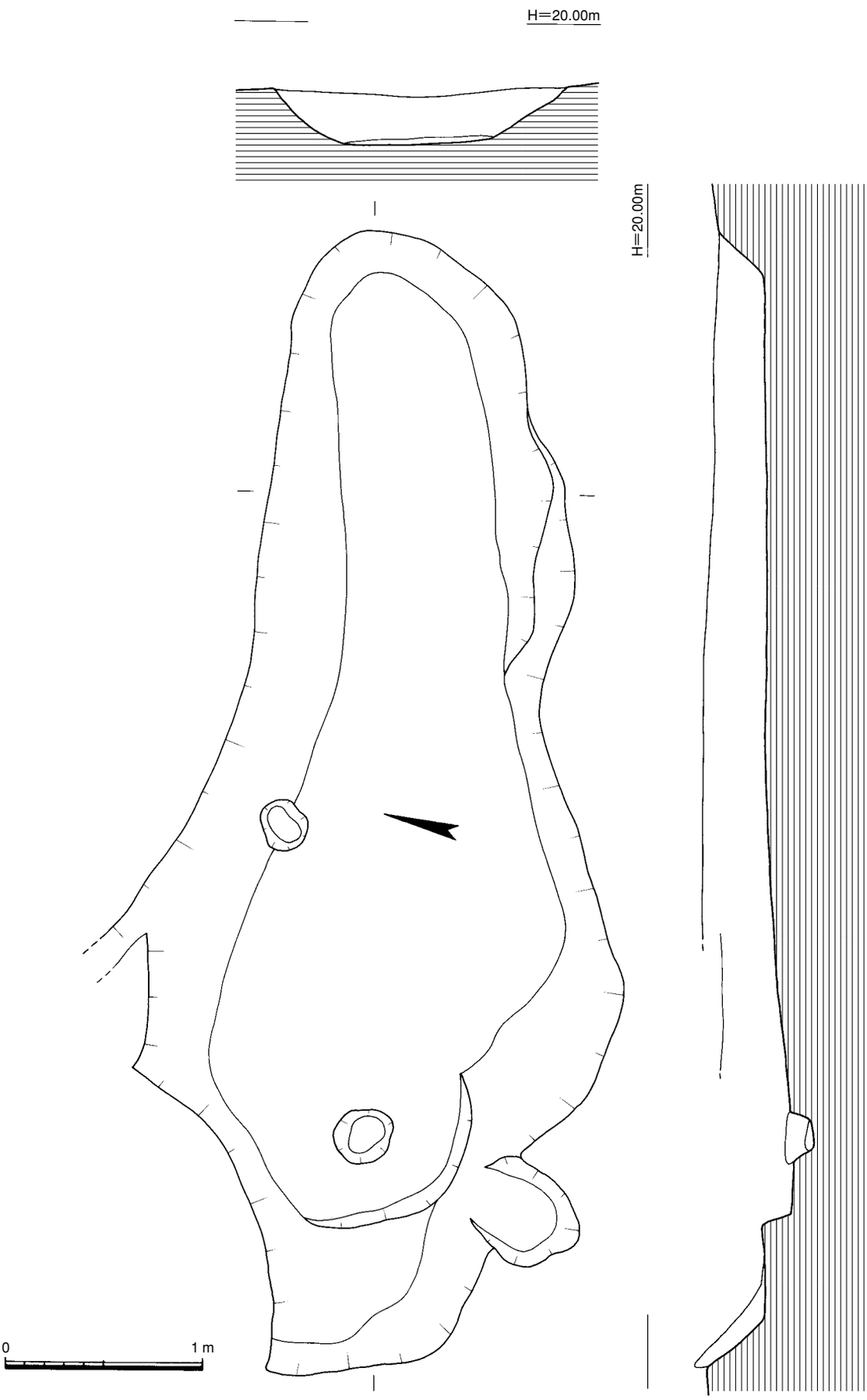


Fig.66　SK15 土坑出土状況実測図（1/30）

短辺長が 2.6m・長辺長 4.4m・深さ 0.55m を測る。断面は皿状をなし、埋土中からは古墳時代土師器甕破片が少量出土した。

SK06 土坑（Fig.4・61）

本土坑は、2 号支線道路 1 区の北端部で検出された小型の円形土坑である。その規模は、径 0.9m・深さ 0.24m である。埋土中から中世期の土師器破片が出土した。

SK07 土坑（Fig.4・61、PL.10）

本土坑は、2 号支線道路 1 区の北端で検出された長円形の土坑である。その規模は、短辺長 1.1m・長辺長 1.4m・深さ 0.15m である。埋土中より中世期の土師器破片が出土した。

SK08 土坑（Fig.4・61、PL.10）

本土坑は、2 号支線道路 1 区の北端部で検出された小型の長方形土坑である。その規模は、短辺長 0.6m・長辺長 1.2m・深さ 0.42m を測る。埋土内からは遺物の出土は無かった。

SK09 土坑（Fig.4・64、PL.10）

本土坑も 2 号支線道路 1 区の北端で検出された長方形の土坑である。その規模は、短辺長 0.8m・長辺長 1.1m・深さ 0.11m を測る。埋土中からは古墳時代土師器小破片が少量出土したのみである。

SK10 土坑（Fig.4・64、PL.10）

本土坑も 2 号支線道路北端で検出された不整形の土坑である。その規模は、短辺長が 1.2m・長辺長 1.6m・深さ 0.1m を測る。埋土中からは古墳時代土師器小破片が少量出土した。

SK11 土坑（Fig.4・62・64、PL.11）

本土坑は、2 号支線道路 2 区の北端で検出された長円形の大型土坑である。その規模は、短辺長が 1.5m・長辺長 2.4m・深さ 0.2m を測る。埋土中からは龍泉窯青磁や褐釉陶器糸切り土師器皿等が出土した。

出土遺物（Fig.62） **00151** は、糸切り土師器皿である。口縁端にスス付着が見られる。外底部には板目が残る。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は明褐灰色である。胎土は密で、金雲母を含む。焼成は堅緻密である。口径 12.6cm･器高 2.7cm を測る。**00152** も土師器皿である。全体にススが付着する。器色は、褐色である。胎土は密である。口径 13.4cm･器高 3.1cm を測る。**00153** は、東播系擂鉢である。器色は、外面が暗灰色で、内面は灰白色を呈する。胎土に石英・長石粒を若干含む。焼成はやや軟質である。口径 28.4cm を測る。**00154** は、龍泉窯青磁碗である。外面に草花文を描く。オリーブ灰色の釉を厚くかける。復原口径は 16.cm を測る。

SK12 土坑（Fig.4・62・64）

本土坑は、2 号支線道路 2 区の北端で検出された不整形の土坑である。その規模は、短辺長 0.7m・長辺長 2.5m・深さ 0.2m を測る。埋土中からは龍泉窯青磁、土師器皿、擂り鉢等が出土した。

出土遺物（Fig.62） **00155** は、浅い、小型の土師皿破片である。器色は、褐色である。胎土はやや粗である。復原口径 .6cm・器高 1.2cm を測る。**00156** は、土師質の擂り鉢底部破片である。6 本単位の櫛歯で摺り目を設ける。器色は、灰白～淡橙色を呈する。胎土は密である。

SK13 土坑（Fig.4・62・65、PL.11）

本土坑は、2 号支線道路 2 区の中位で検出された不整形土坑である。その規模は、短辺長 1.4m・長辺長 2m 以上・深さ 0.15m を測る。埋土中から土師器高坏・小型丸底壺が出土している。

出土遺物（Fig.62） **00157 ～ 00160** は、土師器高坏である。杯部の口縁と底部は緩い段をなし、脚部も確立した製品である。器色は、にぶい橙色を呈する。口径 18cm 前後・器高 14cm 前後のサイズである。**00161** は、内湾気味口縁を持つ丸底壺破片である。器色は灰黄褐色である。口径 10.4cm を測る。

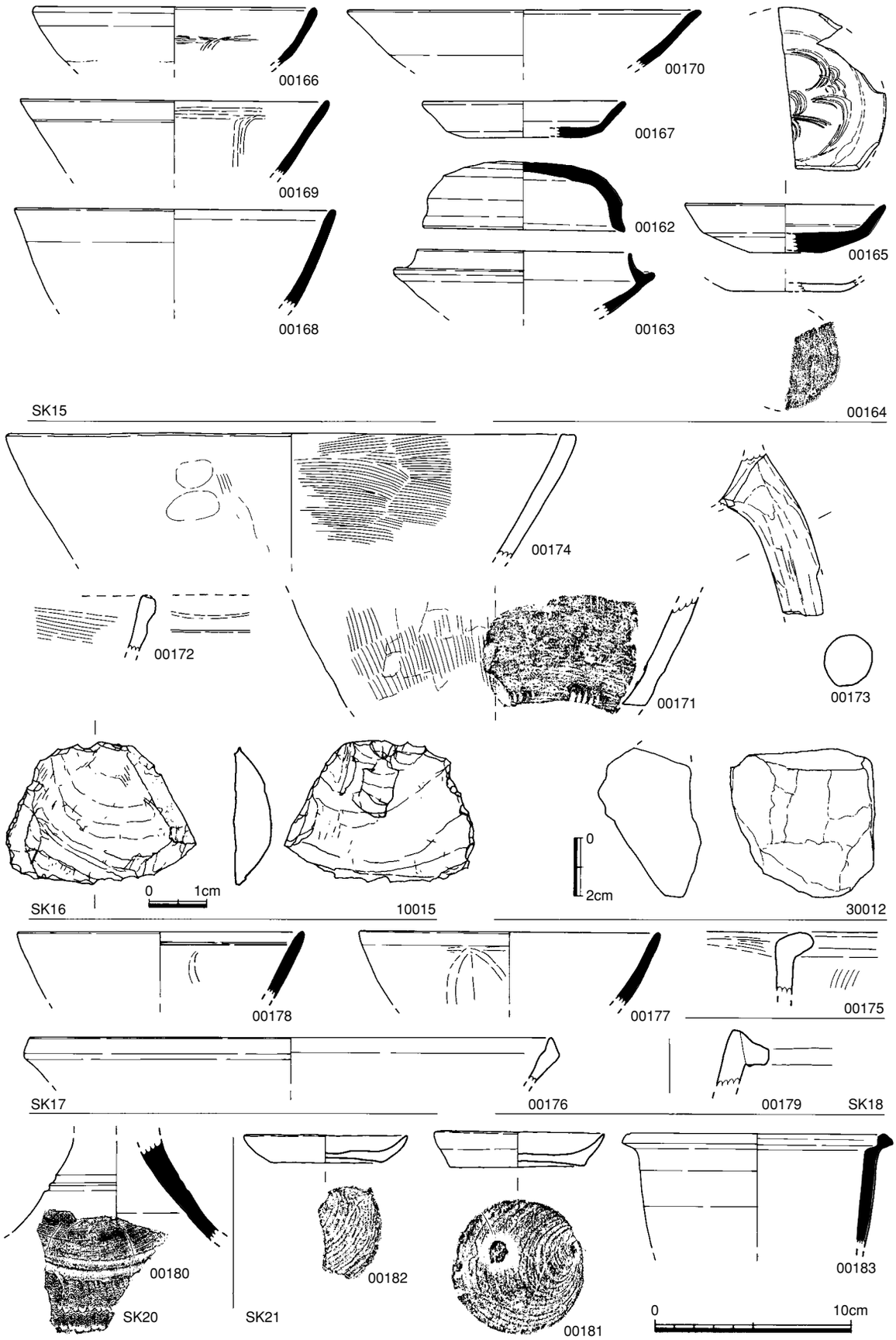


Fig.67　SK15・16・17・18・20・21 土坑出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）

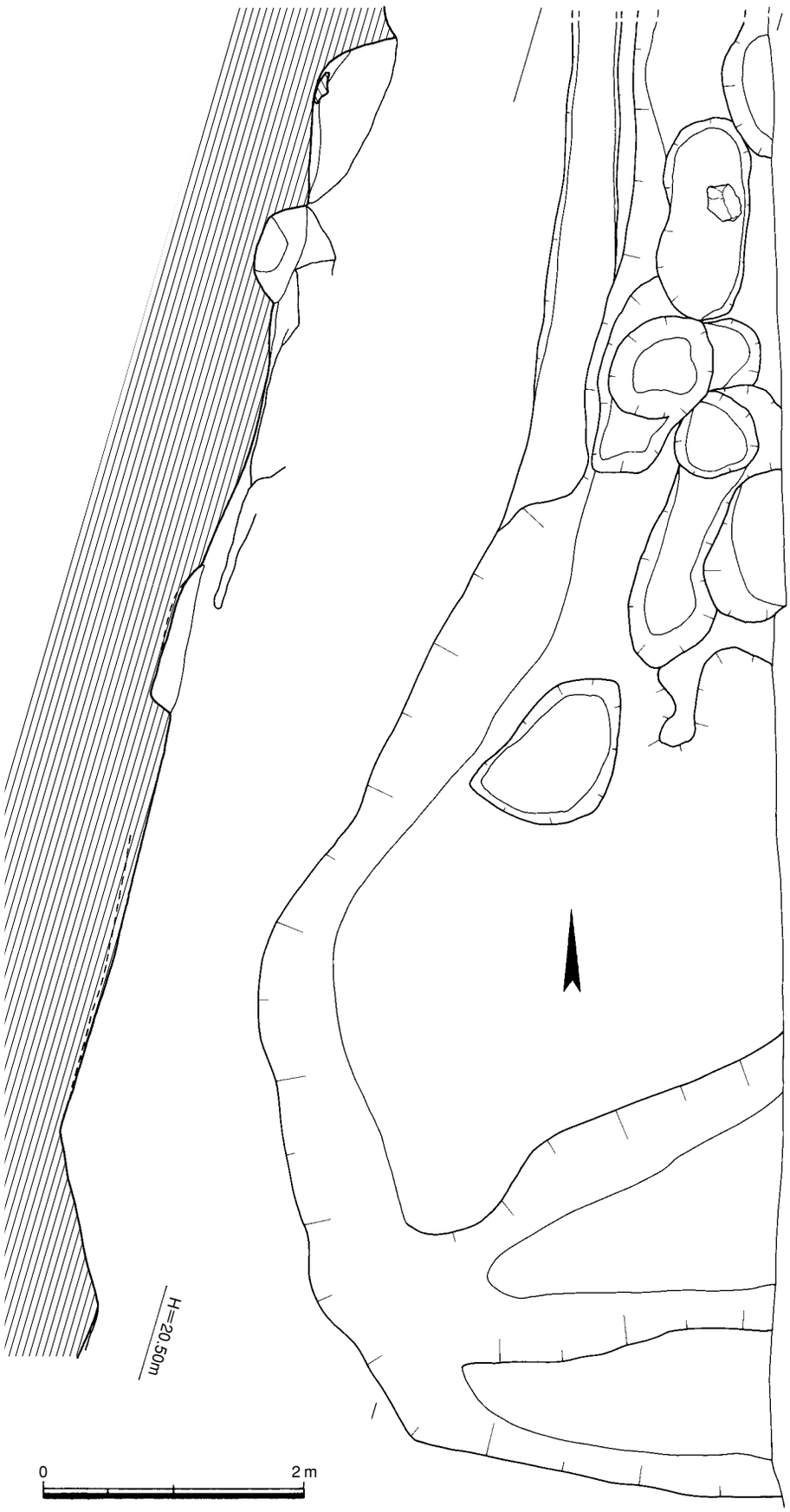


Fig.68　SK16 土坑出土状況実測図（1/50）

SK14 土坑

（Fig.4・65）

本土坑は、2 号支線道路 2 区の南端で検出された不整形の土坑である。埋土中より土師器甕破片が少量出土した。

SK15 土坑

（Fig.4・66・67・94）

本土坑は、2 号支線道路 3 区の北端部の近くで検出された不整形の大型土坑である。その規模は、短辺長が 2.4m・長辺長 5.8m・深さ 0.34m を測る。埋土中からは龍泉窯青磁、白磁、土師器皿、北宋銭等が出土した。

出土遺物

（Fig.67・94）

00164 は、糸切り土師器皿で、復原底部径 5.6cm を測る。また、龍泉窯青磁碗（**00166・00168・00169**）や同皿（**00165・00167**）等が見られる。碗類は、口径が 15cm 弱～ 16cm で、皿類は 10cm 強を測る。白磁 **00170** は、明緑灰の釉をかける。口径はやや大きく 1.4cm を測る。

30011 は、北宋銭の

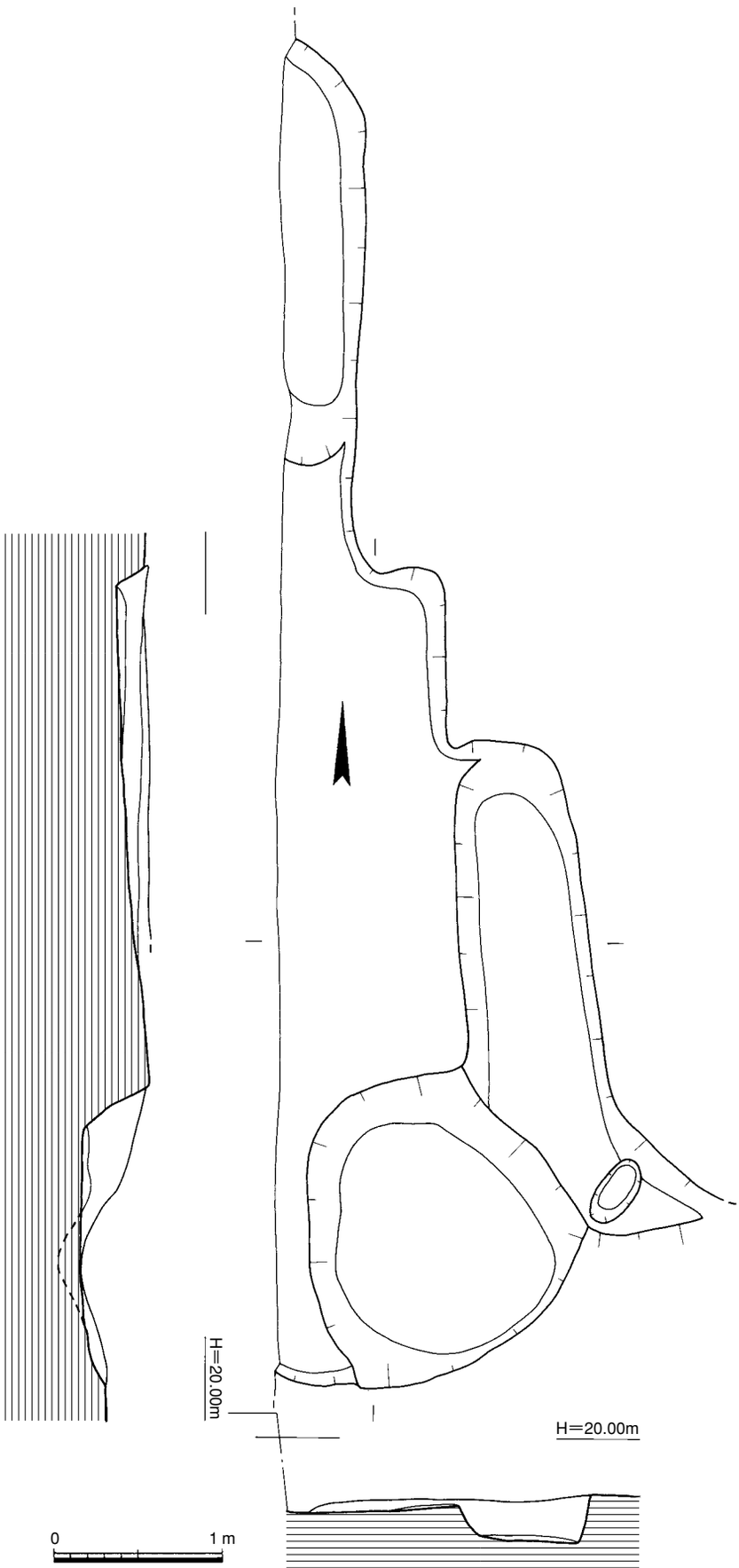


Fig.69　SK17 土坑出土状況実測図（1/40）

崇寧通寶（1102 ～ 1106 年）が 1 点出土している。

SK16 土坑

（Fig.4・67・68）

本土坑も 2 号支線道路 3 区の北端部で検出した不整形の大型土坑である。東側は調査区外となる。床面は段をなし、溝状にうねる。また、幾つもの小土坑が見られる。その規模は、短辺長 4.5m・長辺長 4.3m 以上を測る。埋土内からは土師質擂り鉢、土鍋、火舎、平瓦、鉄滓や須恵器蓋杯等が出土した。

出土遺物（Fig.67）

00171 は、土師質の擂り鉢である。内面は良く摩滅する。**00172** は、土鍋口縁部破片である。また、**00173** は、瓦質の足鍋の脚破片である。断面形は丸い。器色は灰白色を呈する。**00174** は、土鍋の口縁部破片である。外面に指オサエ、内面荒いヨコハケメを施す。復原口径 29.6cm を測る。**10015** は、黒曜石使用の加工痕のある剥片である。**30012** は、小型鉄滓である。重さ 92g を測る。

SK17 土坑

（Fig.4・67・69）

本土坑は、2 号支線道路 3 区の北端部で検出された不整形の土坑である。その規模は、短辺長 1m 以上・長辺長 8m を測る。西側は調査区外である。埋土中からは、龍泉窯青磁、瓦質土器、土鍋等が出土した。

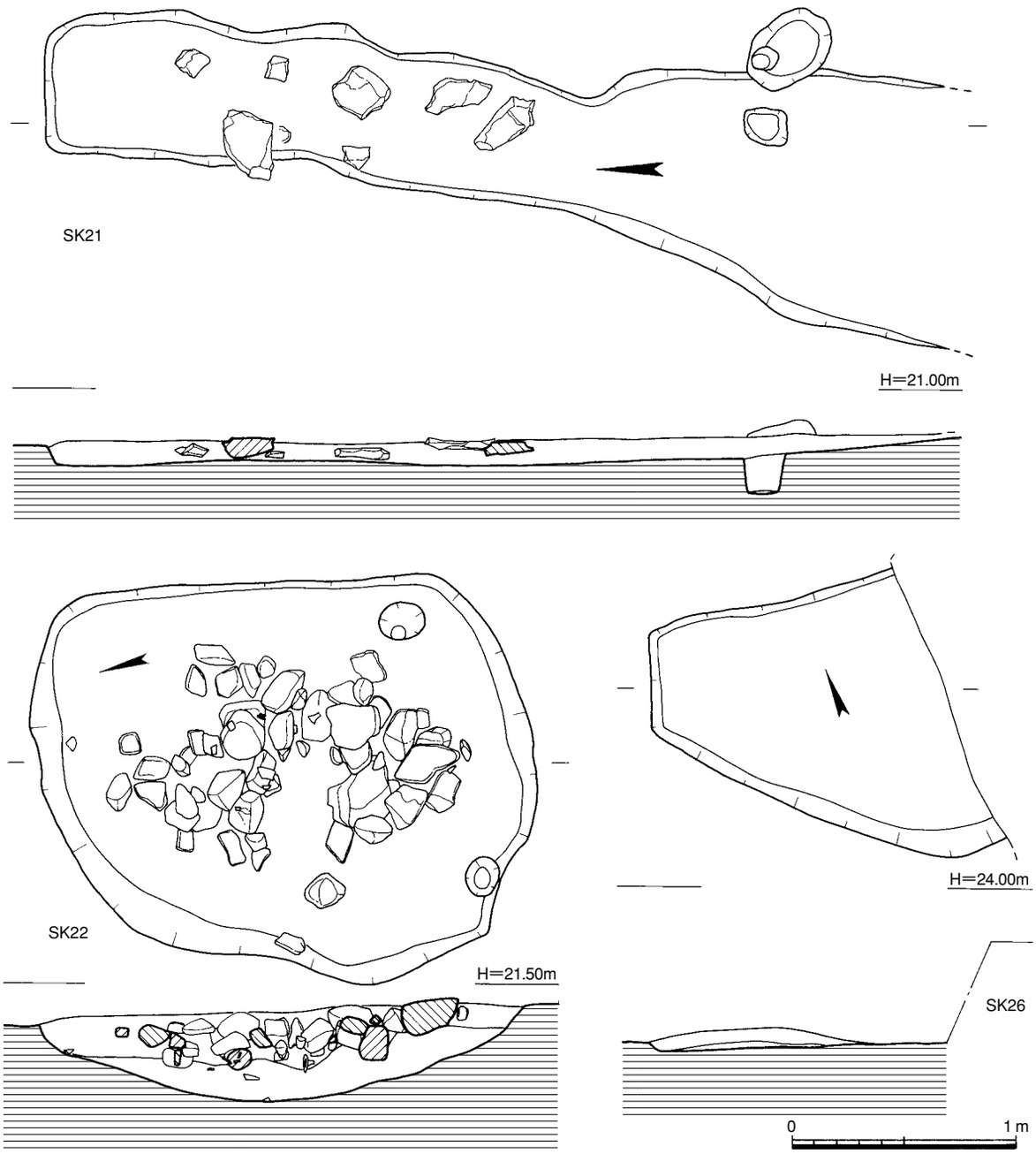


Fig.70　SK21・22・26 土坑出土状況実測図（1/30）

出土遺物（Fig.67）　**00175** は、土師質土器の土鍋破片である。**00176** は、東播系の擂り鉢破片である。器色は、灰白色である。復原口径 27.2cm を測る。また、**00177**･**00178** は、龍泉窯青磁碗である。施釉は厚く、緑灰～オリーブ灰色釉をかける。口径はそれぞれ 15.6cm・14.8cm を測る。

SK18 土坑（Fig.4・65・67）

本土坑は、2 号支線道路 3 区の北端部で検出された不整形の小型土坑である。その規模は、短辺長 0.9m・長辺長 1.2m・深さ 0.34m を測る。埋土内からは土師器甕破片や土鍋破片が出土した。

出土遺物（Fig.67）　**00179** は、土師質の土鍋口縁部の小破片である。器色は、褐灰色である。

SK19 土坑（Fig.4・65・71）

本土坑は、2 号支線道路 3 区の北端部で検出された不整形の土坑である。その規模は、短辺長 1.7m･

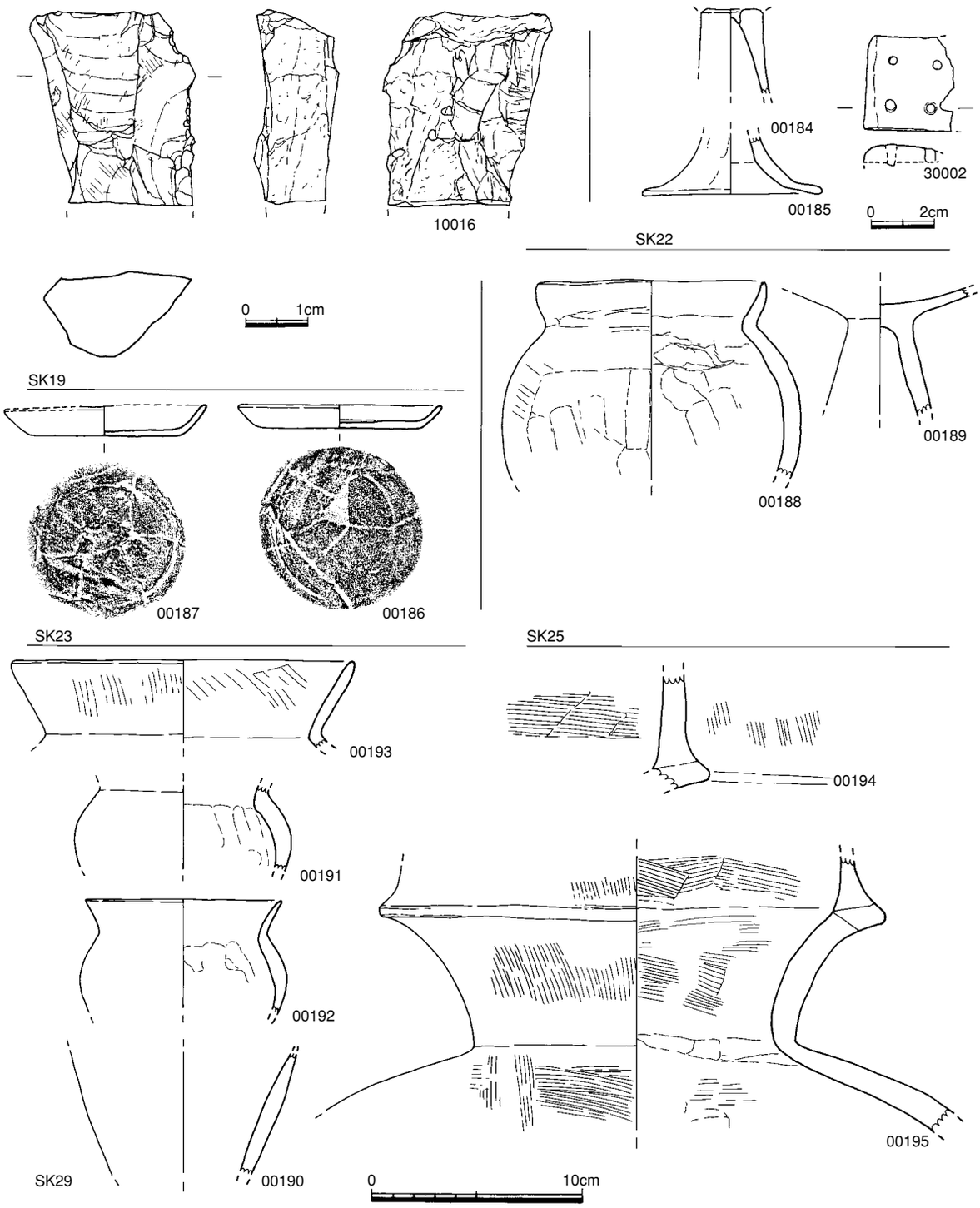


Fig.71　SK19・22・23・25・29 土坑出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）

長辺長 1.1m 以上・深さ 0.1m を測る。埋土内からは古墳時代土師器の小破片が出土した。また、黒曜石使用の石核（Fig.71）**10016** も見られる。

SK20 土坑（Fig.4・65・67、PL.5）

本土坑も 2 号支線道路 3 区の中位で検出された長方形の小型土坑である。その規模は、短辺長 0.3m・長辺長 1.3m を測る。埋土中からは須恵器高坏破片が出土した。

出土遺物（Fig.67）　**00180** は、小型の須恵器脚部破片である。付け根にカキメを施し、裾部には細

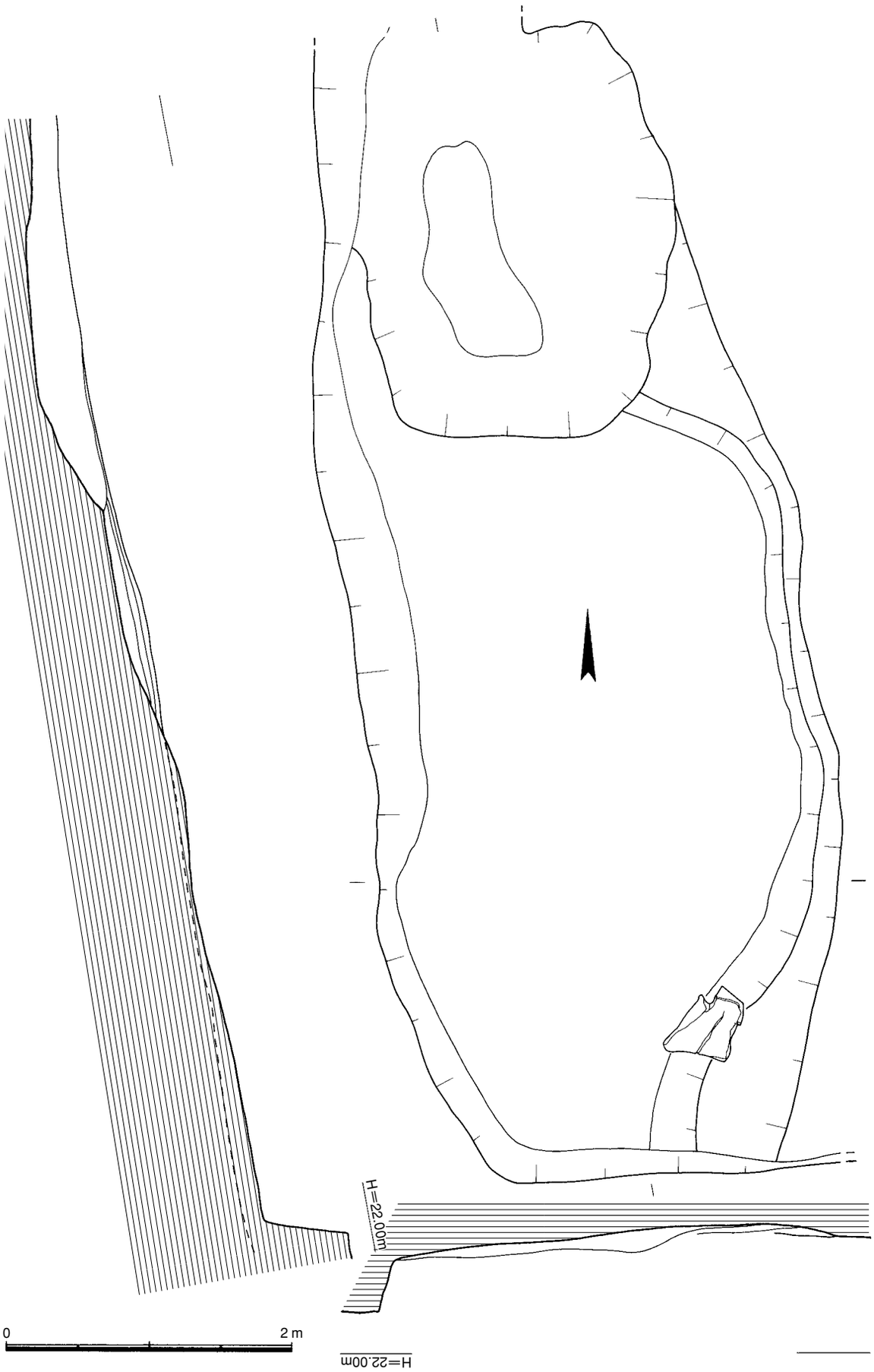


Fig.72　SK24 土坑出土状況実測図（1/40）

かい波状文を巡らす。器色は。青灰色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。

SK21 土坑（Fig.4・67・70、PL.11）

本土坑は、2 号支線道路 3 区の南側で検出された溝状の大型土坑である。内部には角礫が多く出土した。規模は、短辺長 0.6m・長辺長 4.2m・深さ 0.07m である。埋土内より黒褐釉陶器、褐釉陶器、土師器皿等が出土した。

出土遺物（Fig.67） **00181・00182** は、小型の糸切り土師器皿である。また、**00183** は、褐釉陶器盤口壺である。褐灰～灰オリーブ色釉を内外面にかける。口径は 14cm を測る。

SK22 土坑（Fig.4・70・71、PL.11）

本土坑も 2 号支線道路 3 区の南側で検出された長方形の大型土坑である。規模は、短辺長が 1.8m・長辺長 2.2m・深さ 0.27m を測る。内部には玄武岩扁平礫とともに土師器甕・高坏、板状鉄器、炭化木等が投入されている。

出土遺物（Fig.71） **00184・00185** は、土師器高坏の脚部破片である。また、**30002** は、鉄製金具で、四方の孔は鋲止めの痕跡か。

SK23 土坑（Fig.4・65・71、PL.11）

本土坑も 2 号支線道路 3 区の南側で検出された浅い長方形の土坑である。規模は、短辺長 0.8m・長辺長 1.3m・深さ 0.05m を測る。埋土中より土師器皿が出土した。

出土遺物（Fig.71） **00186・00187** は、糸切りの土師器皿である。口径はいずれも 9.8cm を測る。

SK24 土坑（Fig.4・72、PL.12）

本土坑も 2 号支線道路 3 区の南端部で検出された大型の長方形土坑である。規模は、短辺長が 3.2m・長辺長 8m を測る。埋土中から擂り鉢、土師器甕、須恵器甕破片、磨製石斧等が出土したが細片である。

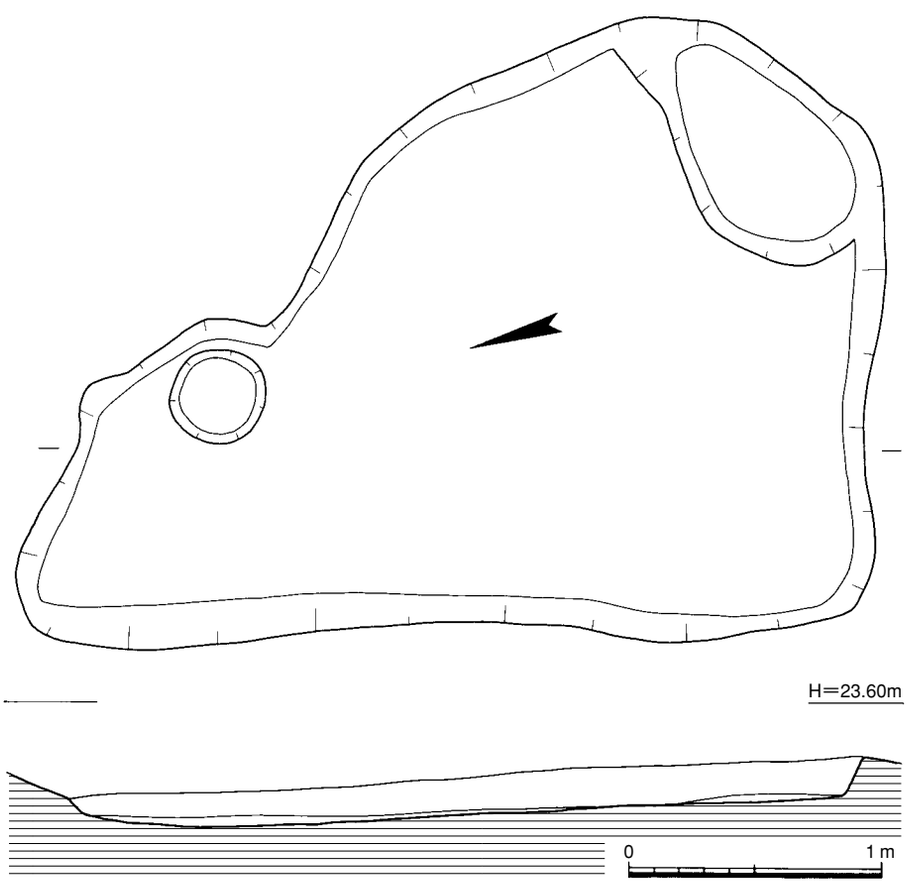


Fig.73　SK25 土坑出土状況実測図（1/30）

SK25 土坑

（Fig.5・71・73）

本土坑は、2 号支線道路 4 区の北端部で検出された不整形な大型土坑である。規模は、短辺長が 2.4m・長辺長 4m を測る。埋土内からは須恵器甕・蓋杯、土師器甕・高坏、手捏ね土器等が出土した。

出土遺物（Fig.71）

00188 は、口縁が内湾する土師器甕で、内外面へラケズリを施

す。口径は 11cm を測る。**00189** は、土師器高坏の脚部破片である。器色は、にぶい橙色を呈する。

SK26 土坑（Fig.5・70）

本土坑は、2 号支線道路 4 区の北端近くで検出された小型の不整形土坑である。東側が未調査である。規模は、短辺長 1.3m・長辺長 1.5m 以上を測る。埋土中からは古墳時代土師器甕破片が出土した。

SK27 土坑（Fig.5・74）

本土坑は、2 号支線道路 4 区の南端部で検出した長方形？の土坑である。規模は、短辺長 1.4m 以上・長辺長 2.5m 以上を測る。埋土内からは土師器甕や弥生前期甕破片が少量出土した。

SK28 土坑（Fig.5・74）

本土坑は、7 号支線道路の北側で検出した長方形の土坑である。規模は、短辺長 1.8m・長辺 m 長 2.9m を測る。埋土中から土師器手捏ね土器甕の破片が出土した。

SK29 土坑（Fig.5・71・75）

本土坑は、7 号支線道路北側で検出された長方形の大型土坑である。規模は、短辺長 3.5m・長辺長 7.3m を測る。埋土中からは須恵器蓋杯、土師器甕・高坏・小型丸底壺・二重口縁壺等が出土した。

出土遺物（Fig.71）　**00190**・**00191**・**00192** は小型丸底壺破片である。また、**00193** は、薄手の土師器甕破片である。外面にススが付着する。器色は、淡黄橙色を呈する。口径は 16.6cm を測る。**00194**・**00195** は分厚い二重口縁壺破片である。

SK30 土坑（Fig.5・76 ～ 79）

本土坑は、7 号支線道路の西端で検出された長方形の大型土

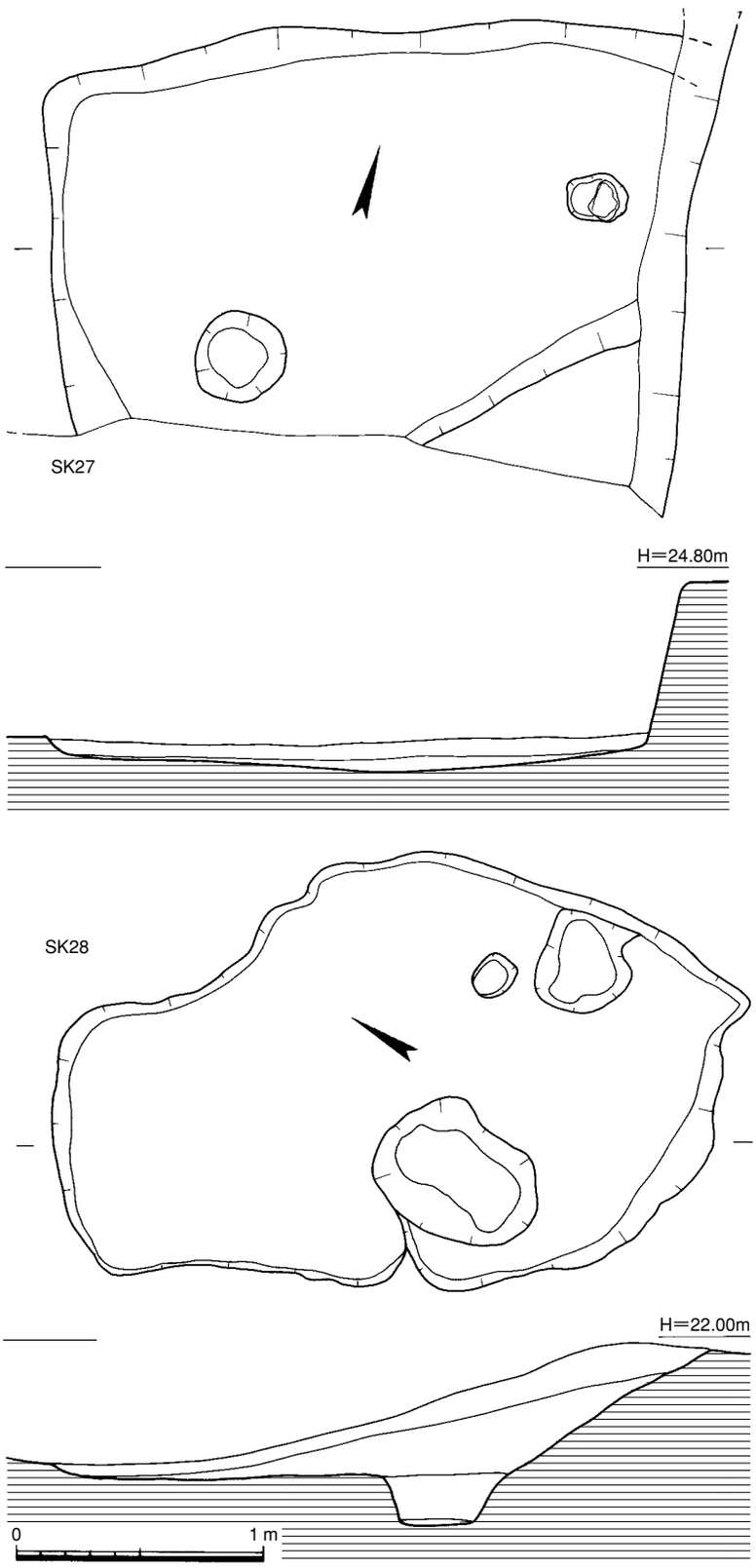


Fig.74　SK27・28 土坑出土状況実測図（1/30）

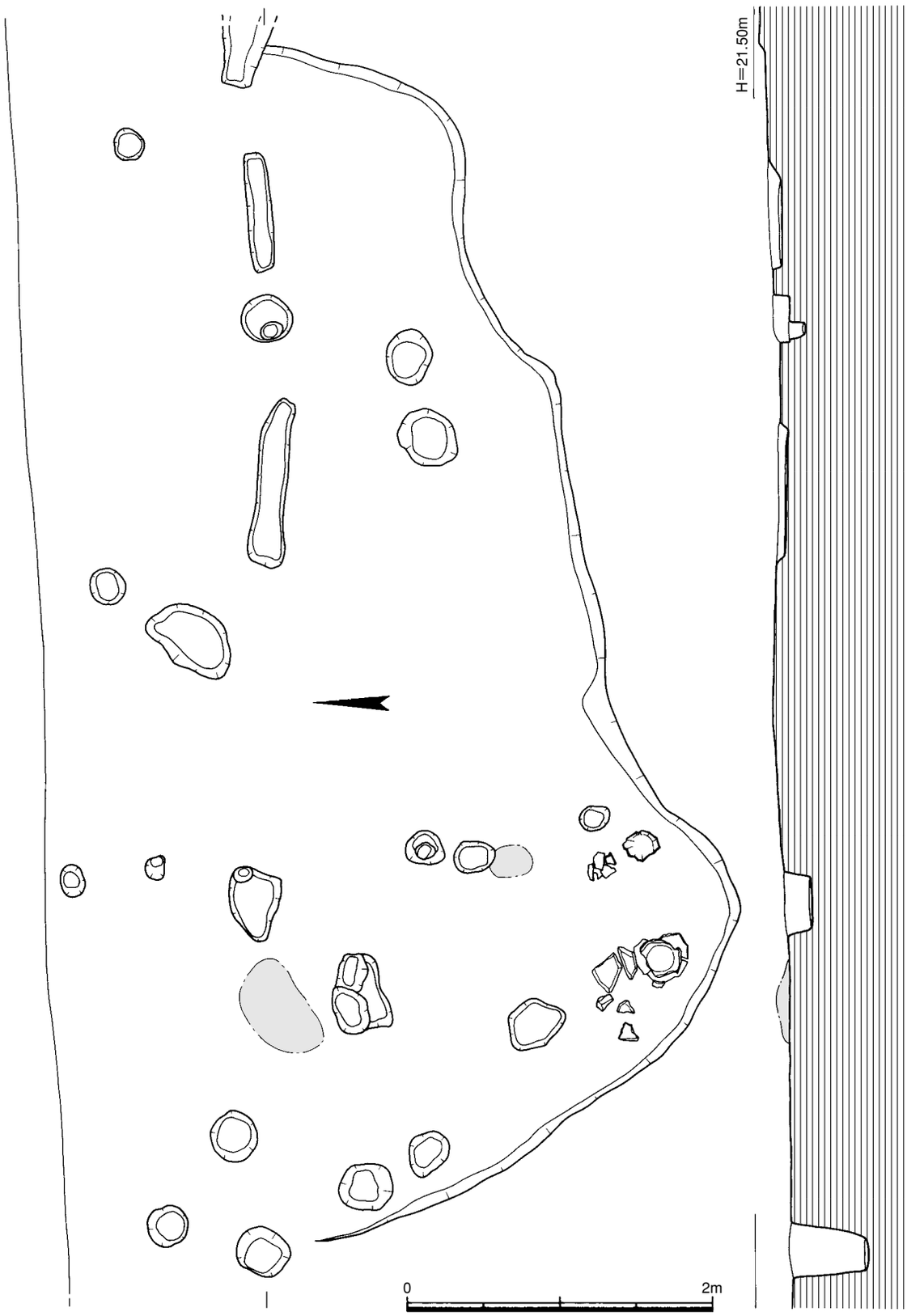


Fig.75　SK29 土坑出土状況実測図（1/40）

坑である。規模は、短辺長 3.4m・長辺長 7.3m を測る。埋土内からは須恵器蓋杯、土師器甕・高坏・小型丸底壺・鉢・甑、フレイク等が出土した。

出土遺物（Fig.77 ～ 79）　須恵器杯身には **00196** がある。また、土師器小型丸底壺には **00198**・**00199**・

00200 がある。鉢 **00197** や高坏 **00201** ～ **00205** はややバリエーションをもつ。また、甕類は、小型から中型までの出土があり、**00206**・**00207**・**00208**・**00209**・**00210**・**00211**・**00212**・**00213**・**00214** を図示する。また、石器では、黒曜石利用の縦長剥片 **10017**、二次加工のある黒曜石使用の剥片 **10018**、使用痕のあるサヌカイト使用の大型剥片等が知られる。

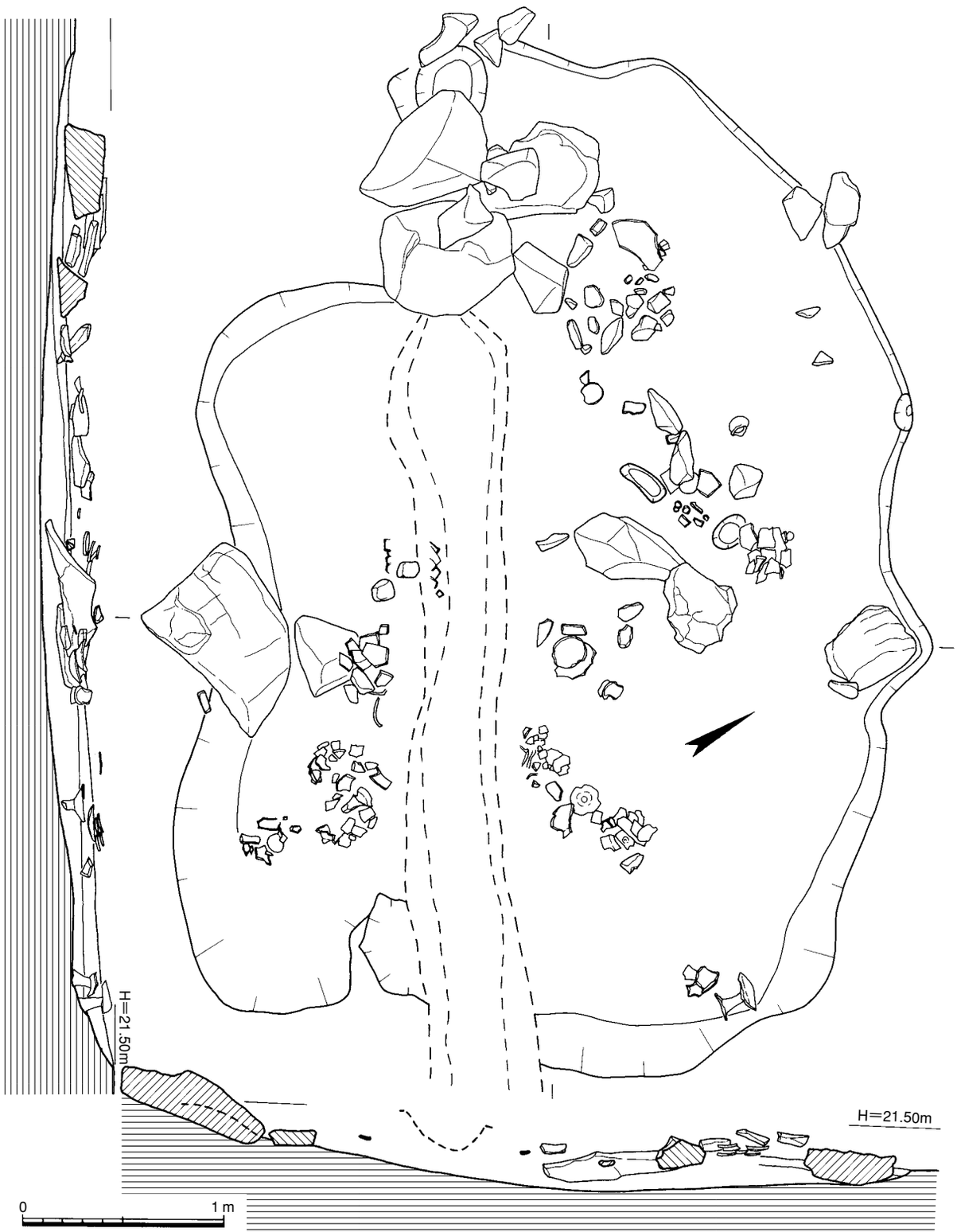


Fig.76　SK30 土坑出土状況実測図（1/30）

SK31 土坑（Fig.5・80・83）

本土坑は、8 号支線道路の西端で検出された大型の不整形土坑である。規模は、短辺長が 3m・長辺長 6.6m 以上を測る。埋土中からは、須恵器蓋杯・甕、土師器甕、土製臼玉、スクレーパー、玄武岩礫等が出土した。

出土遺物（Fig.83） **00215** は､径が 1.4 × 1.3cm･長さ 1.5cm･重さ 3.01g を測る土玉である。器色は、にぶい橙色である。**00216** は、器壁の厚い甕口縁部破片である。口径は、18cm を測る。**10020** は、サヌカイト使用のスクレイパーである。

SK32 土坑（Fig.5・81・83、PL.11）

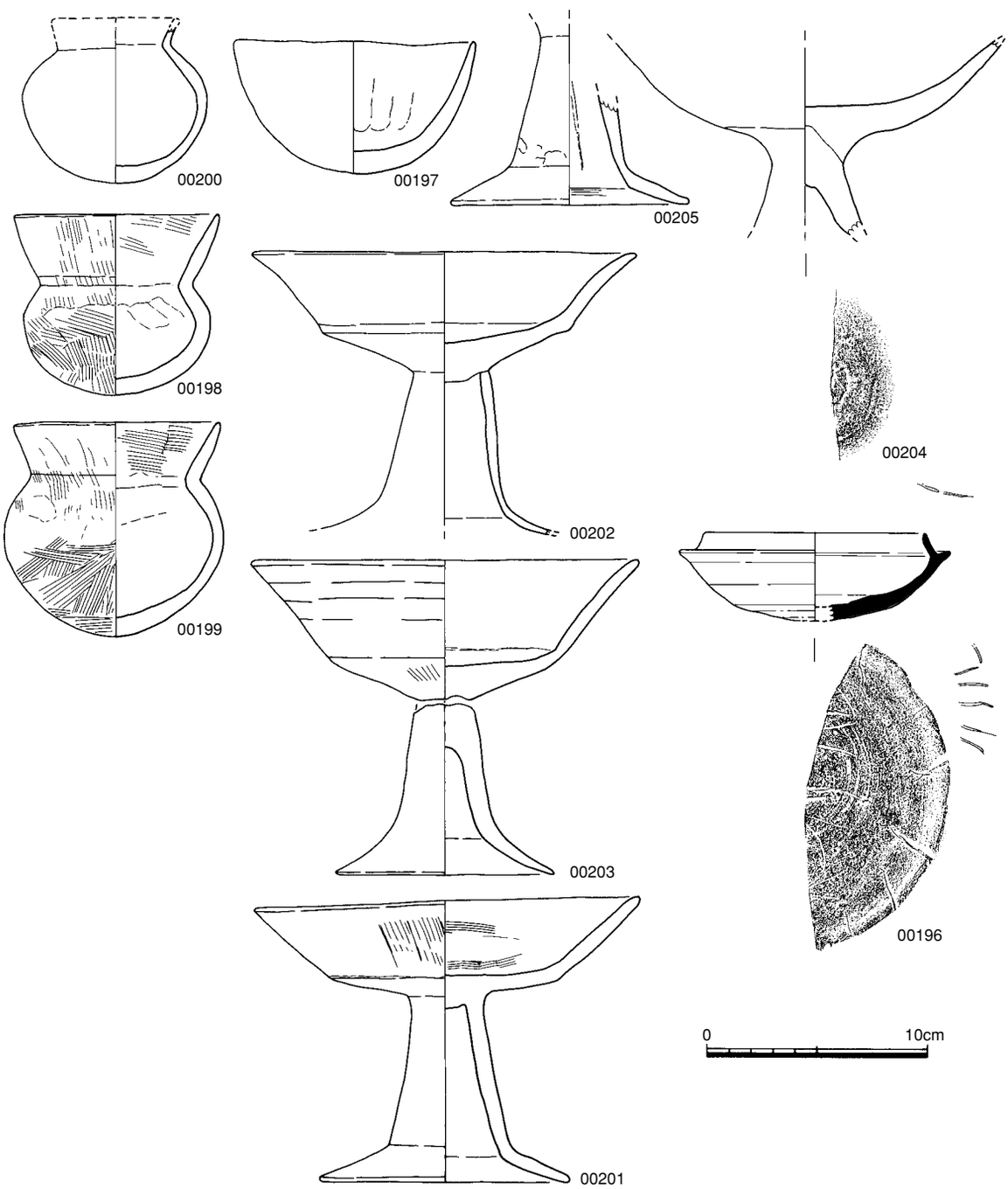


Fig.77　SK30 土坑出土遺物実測図（1）（1/3）

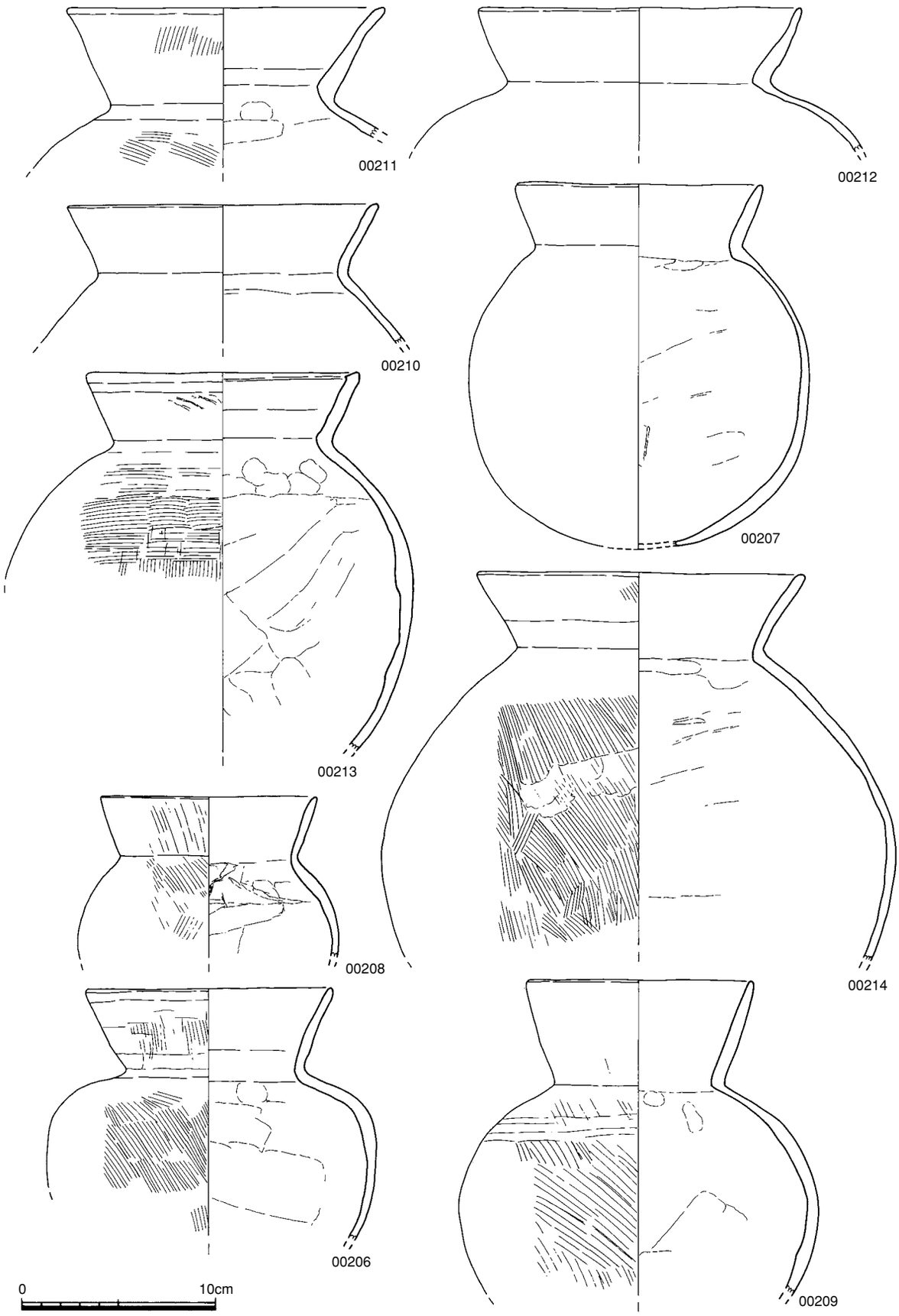


Fig.78　SK30 土坑出土遺物実測図（2）（1/3）

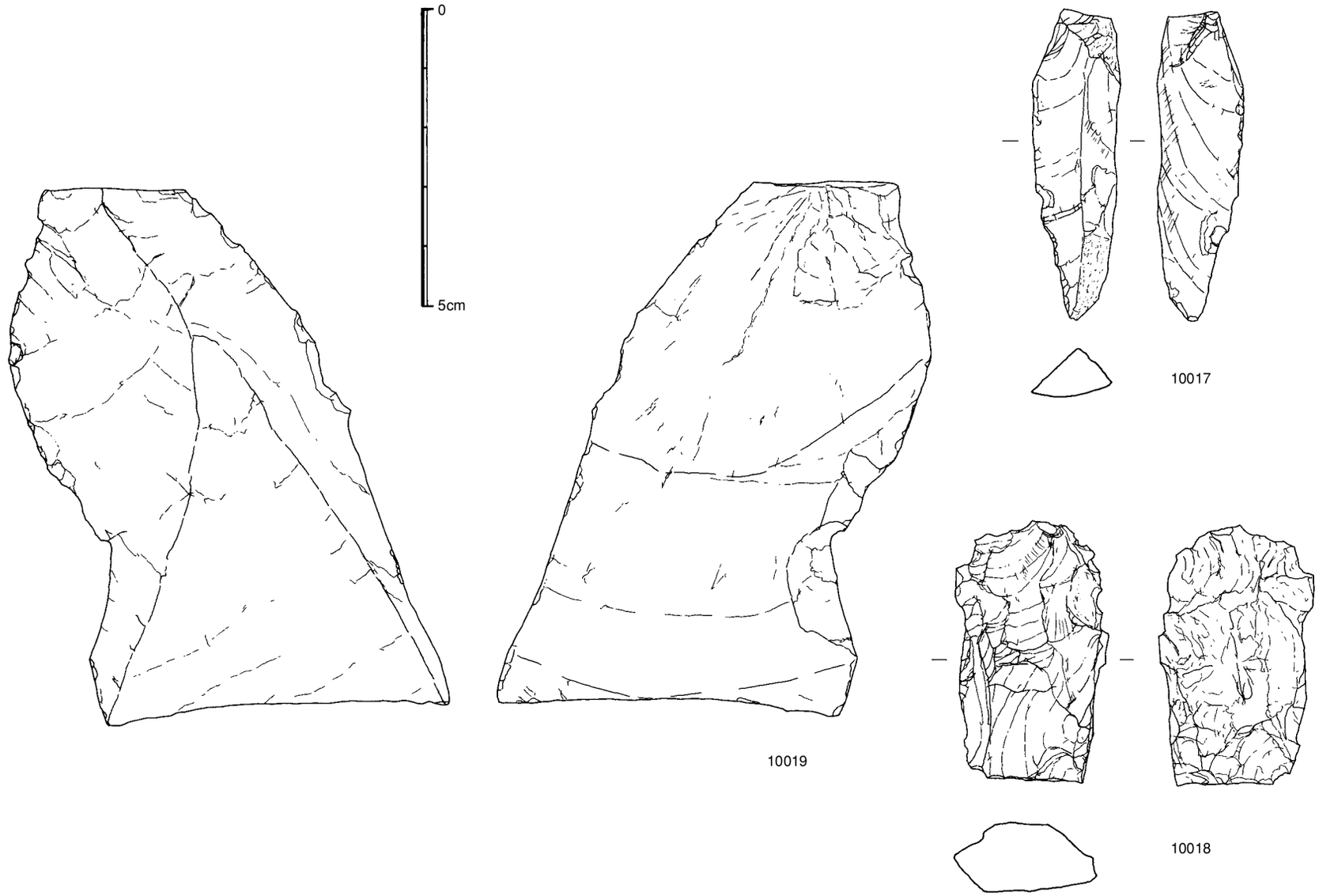


Fig.79　SK30 土坑出土遺物実測図（3）（1/1）

本土坑は、391-1 地区の中央で検出された隅丸方形の土坑である。規模は一辺が 3.1m・深さ 0.2m 程を測る。内部から角礫と共に須恵器杯蓋土師器甕、白磁碗、磨製石斧、石匙等が出土した。

出土遺物（Fig.83） **00217** は、天井部頂部付近にヘラケズリを施す須恵器杯蓋である。口径 13.3cm を測る。**00218** も須恵器杯蓋である。**00219** は土師器小型甕である。**10021** はサヌカイト使用の横形石匙で、**10022** は玄武岩使用の磨製石斧で、砥石として二次利用をしている。重さ 425g を測る。

SK33 土坑（Fig.5・82・83）

本土坑は、391-1 地区の東壁付近で検出した不整形の大型土坑である。規模は、短辺長が 3.4m・長辺長 6.6m 以上・深さ 1m 程度を測る。埋土内からは須恵器杯蓋、土師器皿、瓦質土器土鍋、擂り鉢、青磁器等が出土した。

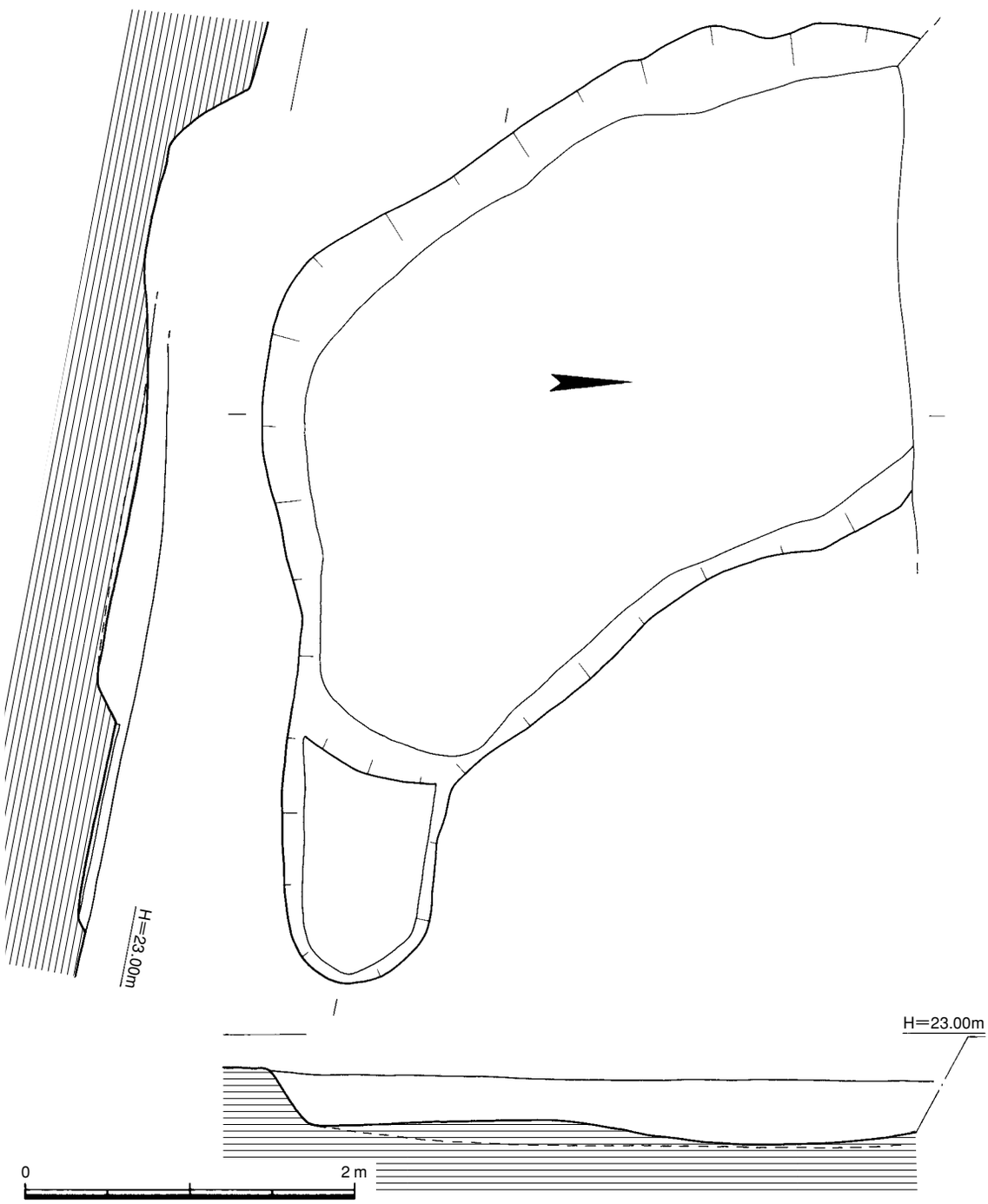


Fig.80　SK31 土坑出土状況実測図（1/40）

出土遺物（Fig.83） **00220** は、小型の須恵器杯蓋である。口径は 11.8cm を測る。**00221** は土師器皿である。底部径 6cm を測る。**00222** は、瓦器質擂り鉢破片である。内面に 7 本単位の櫛描きを加える。底部径 15.6cm である。**00223** は、白磁の碗或いは鉢である。釉は灰白色で、底部径 8.6cm を測る。

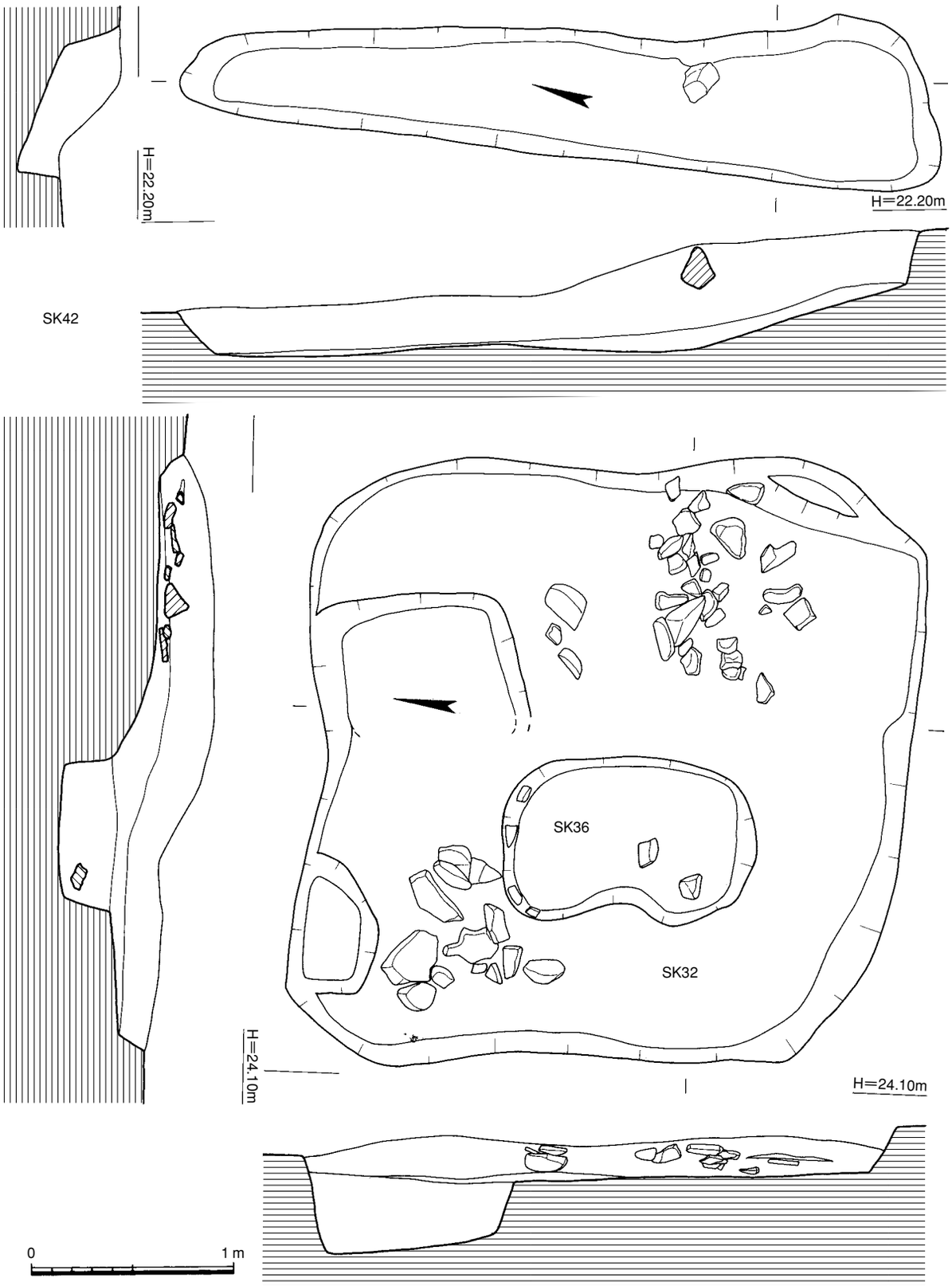


Fig.81　SK32・36・42 土坑出土状況実測図（1/30）

SK34 土坑（Fig.5・84）

本土坑は、391-1 地区の東壁近くで検出した円形の小型土坑である。径は 1.2 × 1.3m・深さ 0.3m 程度を残す。埋土中から須恵器破片、土師器破片が少量出土した。

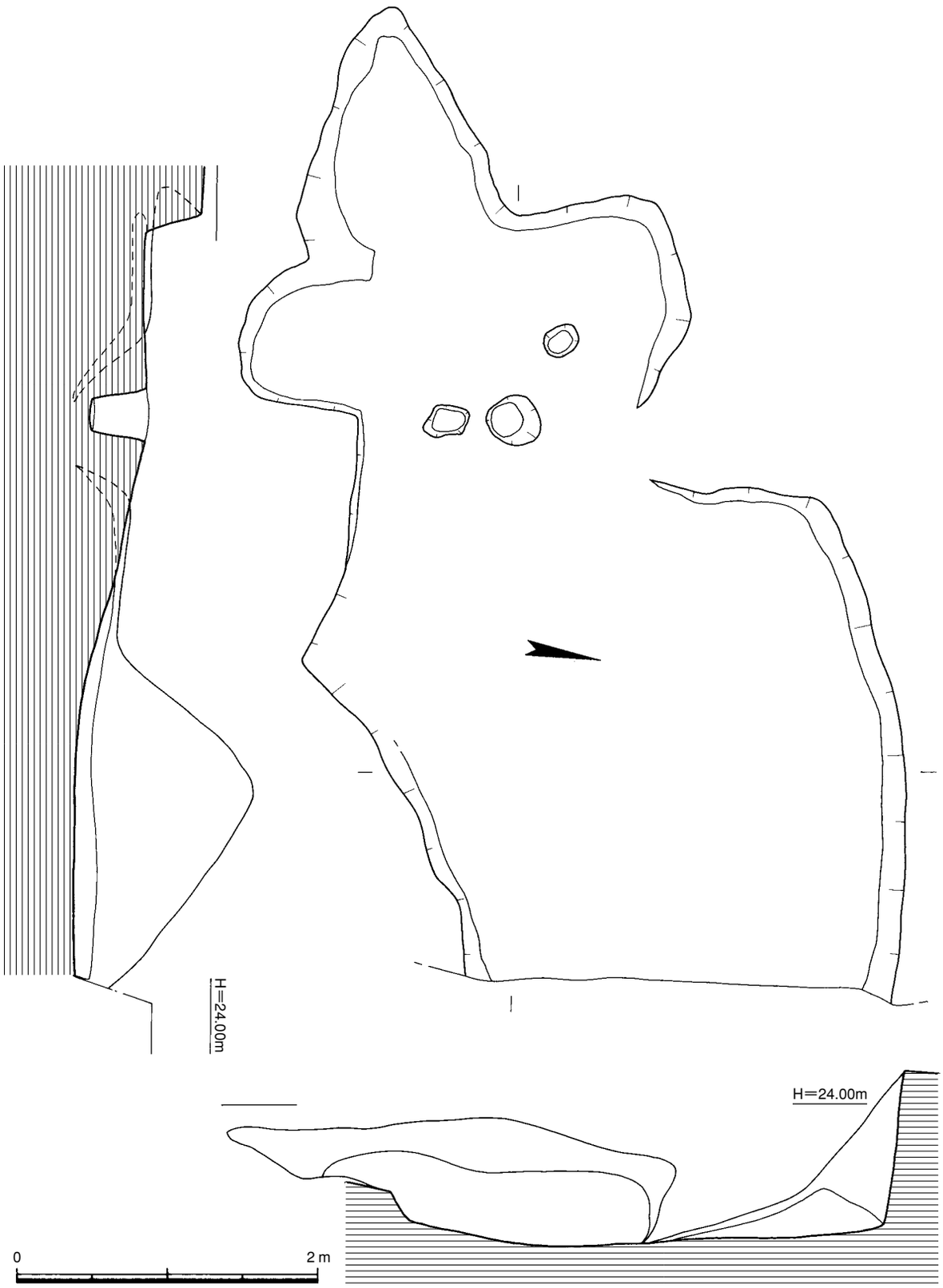


Fig.82　SK33 土坑出土状況実測図（1/40）

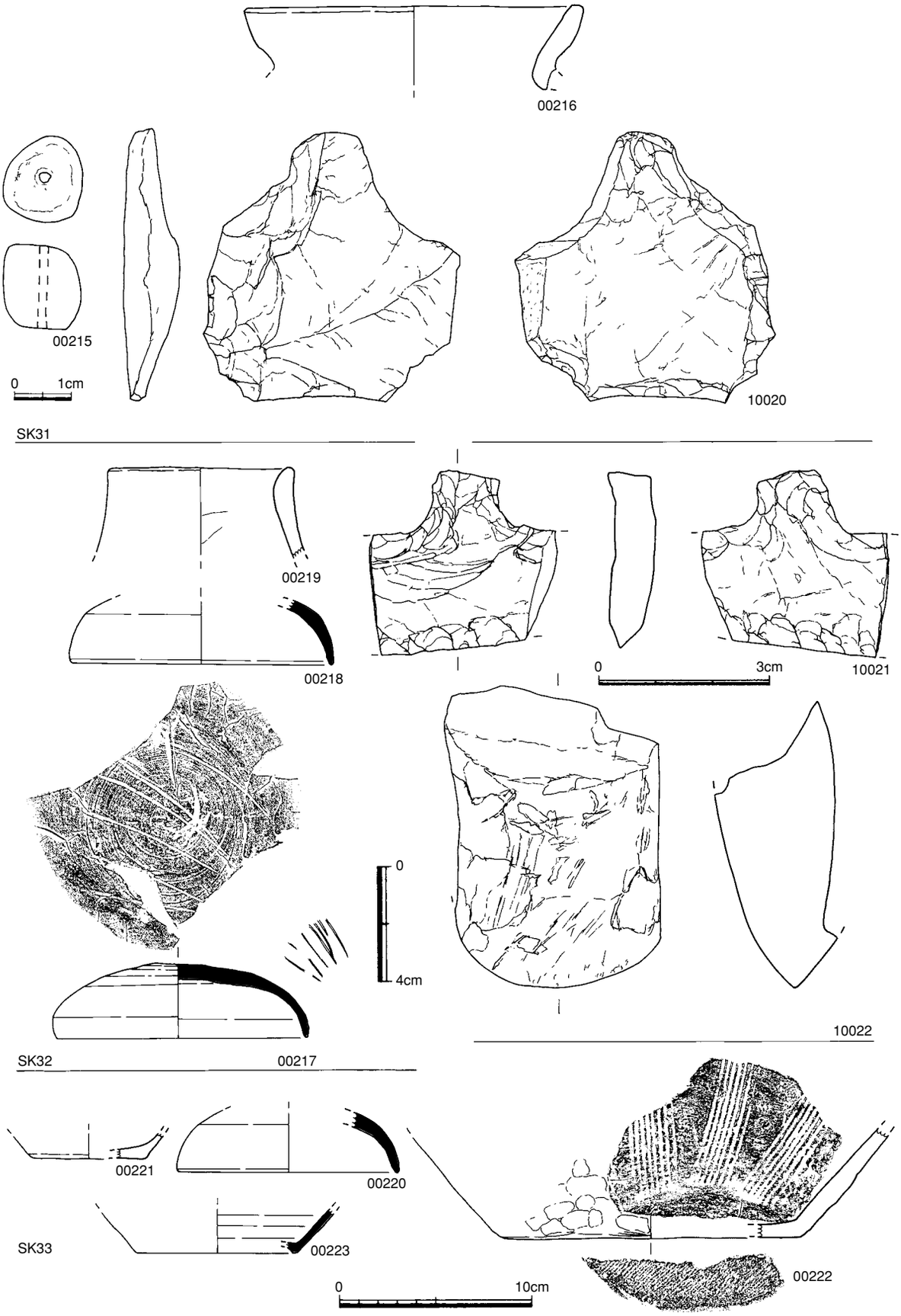


Fig.83　SK31・32・33 土坑出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）

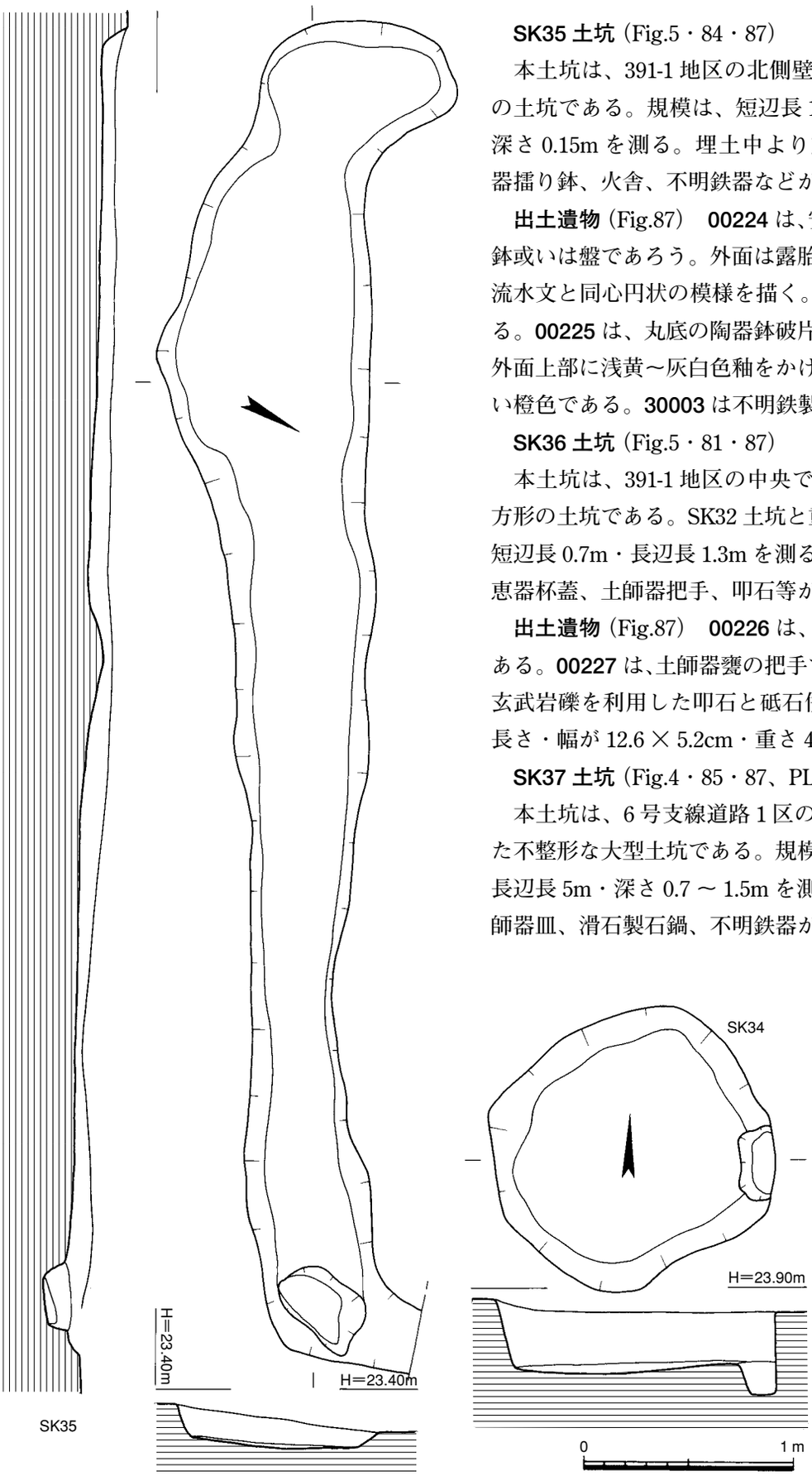


Fig.84　SK34・35 土坑出土状況実測図（1/30）

SK35 土坑（Fig.5・84・87）

本土坑は、391-1 地区の北側壁で検出された溝状の土坑である。規模は、短辺長 1m・長辺長 6.4m・深さ 0.15m を測る。埋土中より施釉陶器、陶質土器擂り鉢、火舎、不明鉄器などが出土した。

出土遺物（Fig.87）　**00224** は、安南地方の陶器か。鉢或いは盤であろう。外面は露胎で赤褐色、内面に流水文と同心円状の模様を描く。底部径 13cm を測る。**00225** は、丸底の陶器鉢破片である。内面及び外面上部に浅黄～灰白色釉をかける。露胎部はにぶい橙色である。**30003** は不明鉄製金具である。

SK36 土坑（Fig.5・81・87）

本土坑は、391-1 地区の中央で検出された小型長方形の土坑である。SK32 土坑と重複する。規模は、短辺長 0.7m・長辺長 1.3m を測る。埋土中からは須恵器杯蓋、土師器把手、叩石等が出土した。

出土遺物（Fig.87）　**00226** は、須恵器杯蓋破片である。**00227** は、土師器甕の把手である。**10023** は、玄武岩礫を利用した叩石と砥石併用の石器である。長さ・幅が 12.6 × 5.2cm・重さ 440.7g を測る。

SK37 土坑（Fig.4・85・87、PL.12）

本土坑は、6 号支線道路 1 区の南端部で検出された不整形な大型土坑である。規模は、短辺長 3.8m・長辺長 5m・深さ 0.7 ～ 1.5m を測る。埋土からは土師器皿、滑石製石鍋、不明鉄器が出土した。

出土遺物（Fig.87）

00228 は、糸切り土師器皿である。調整は、全てヨコナデである。器色は、褐灰色を呈する。口径 12.7cm・器高 2.4cm を測る。**30004** は形態の不明な鉄器破片である。残存長 4.2cm を測る。

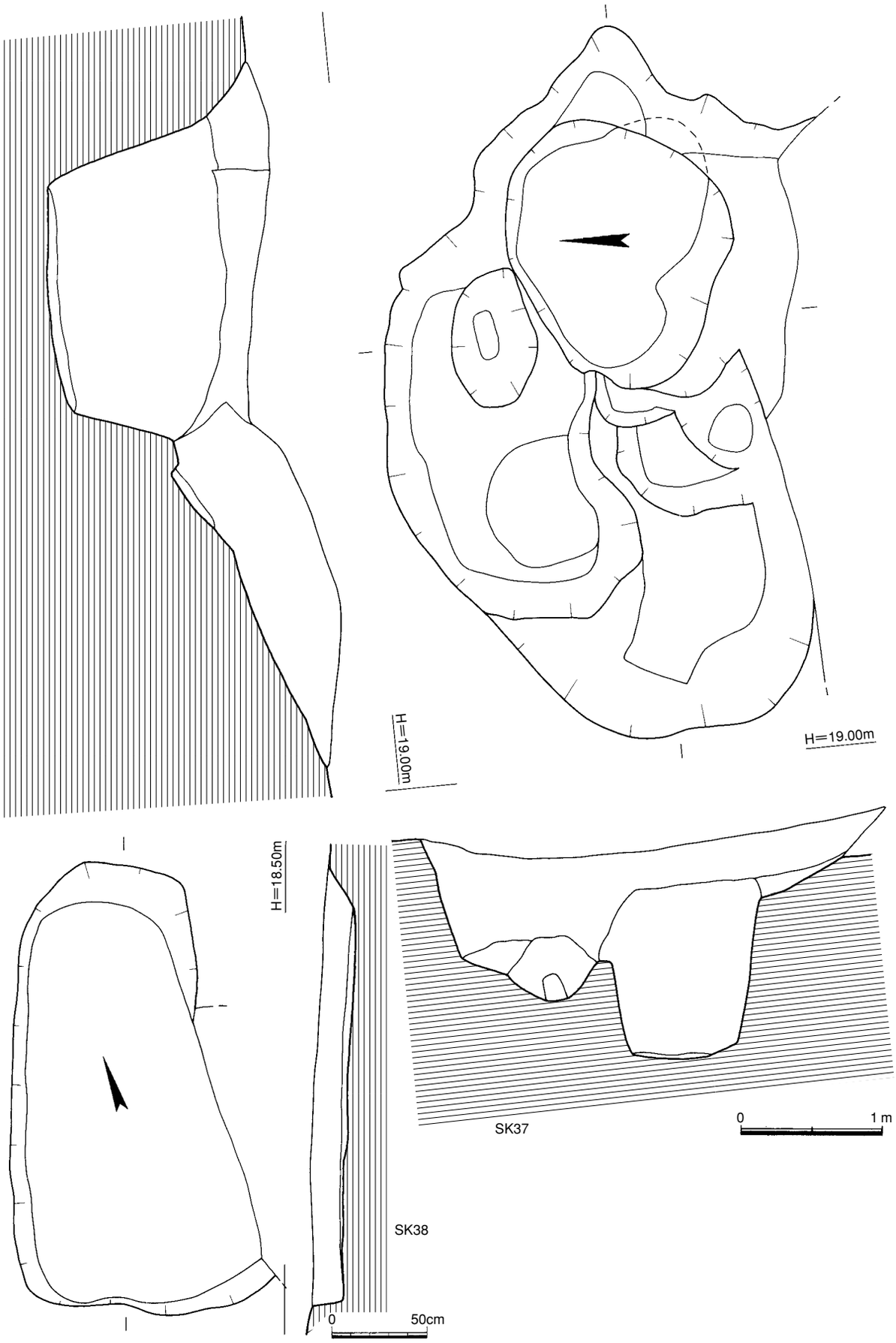


Fig.85　SK37・38 土坑出土状況実測図（1/30・1/40）

SK38 土坑（Fig.4・85）

本土坑は、6 号支線道路 1 区の中央で検出された長方形の土壙である。規模は、短辺長が、1.3m・長辺長 2.3m・深さ 0.2m 程度を測る。埋土中からは、遺物の出土は無かった。

SK39 土坑（Fig.4・86）

本土坑は、6 号支線道路 1 区の中央で検出された不整形の小型土坑である。規模は、短辺長 0.9m・長辺長 1.7m・深さ 0.4 ～ 0.2m を測る。埋土内からは、古墳時代土師器甕の細片とスラッグが少量出土した。

SK40 土坑（Fig.4・86・87）

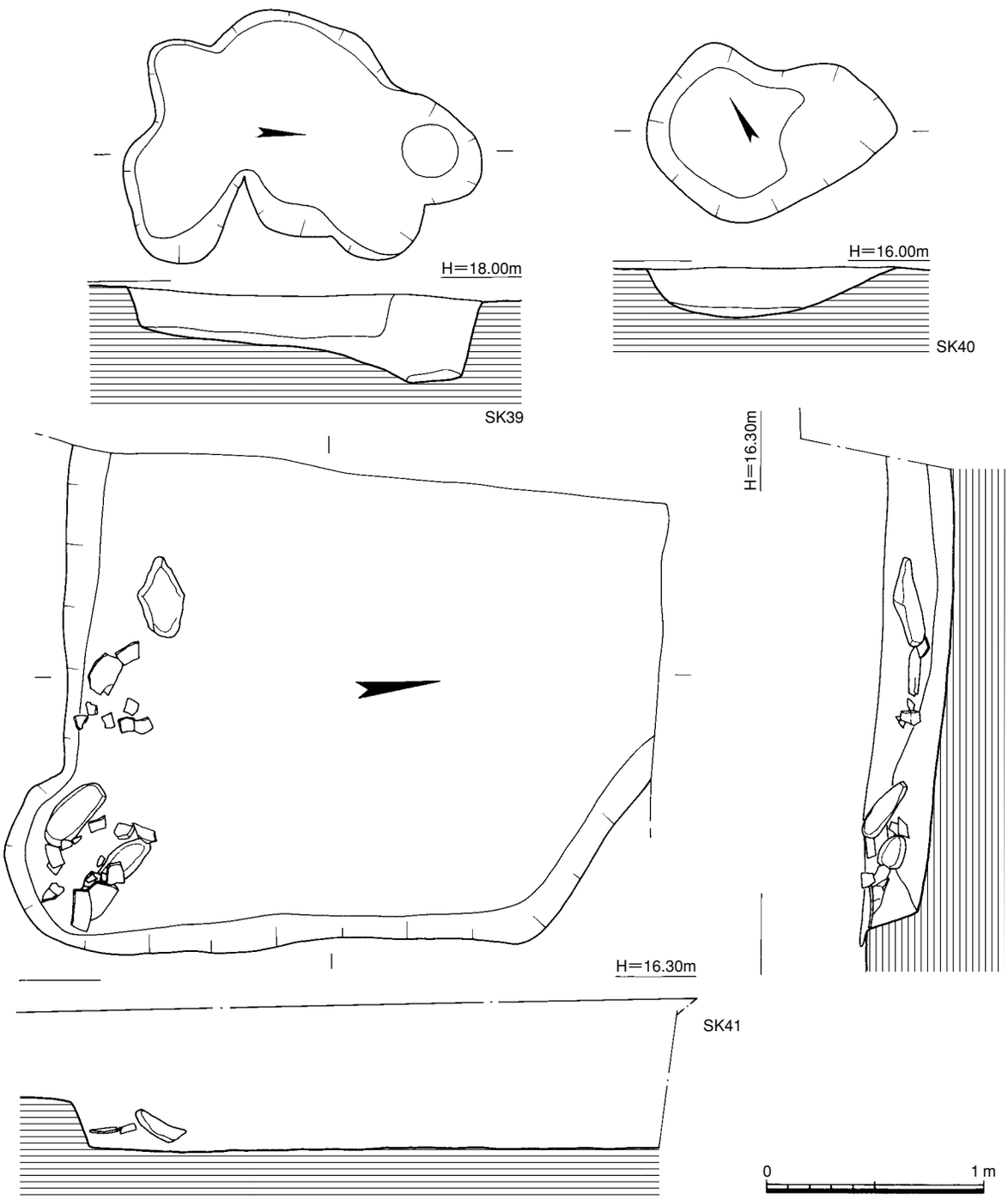


Fig.86　SK39・40・41 土坑出土状況実測図（1/30）

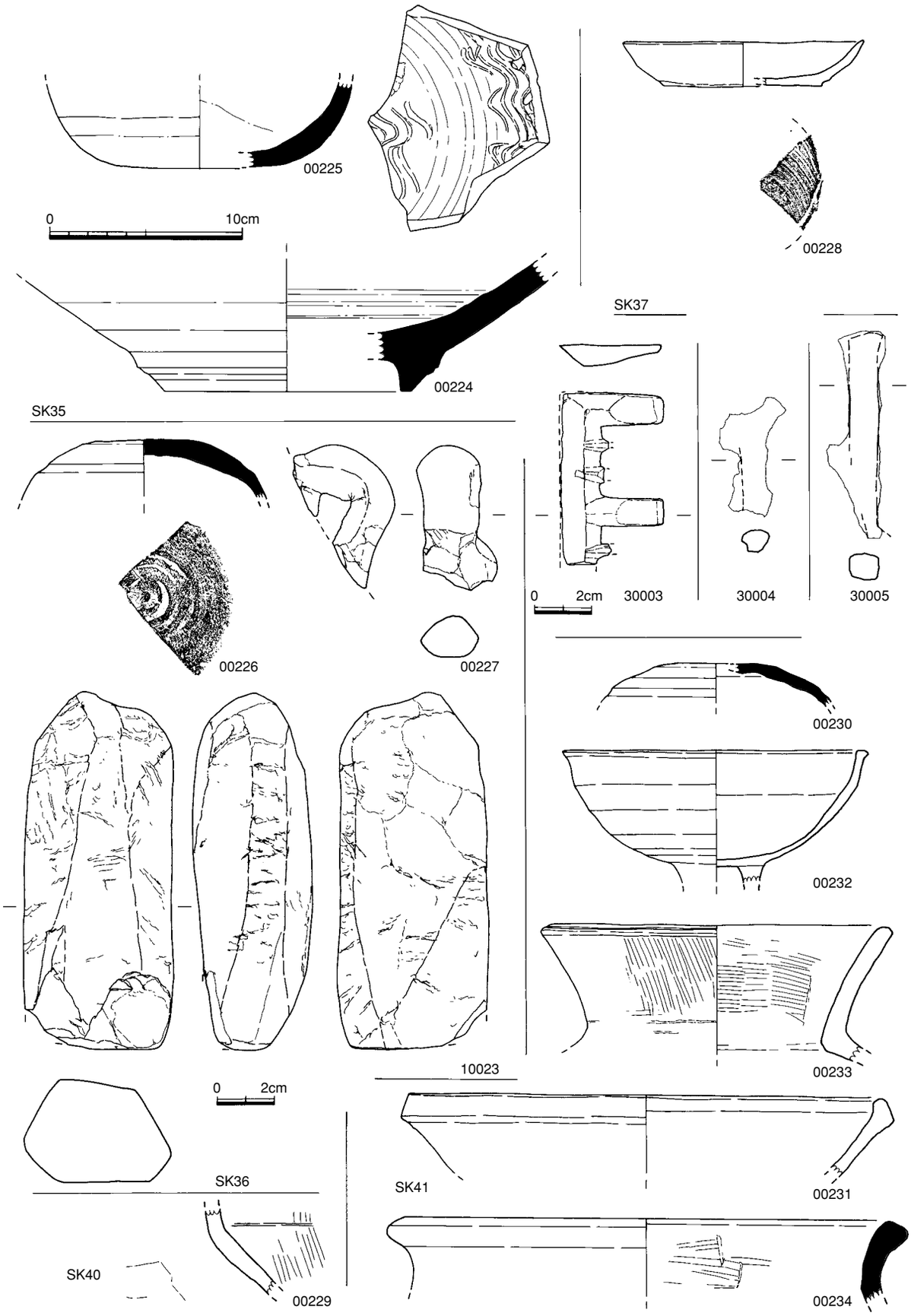


Fig.87　SK35・36・37・40・41 土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）

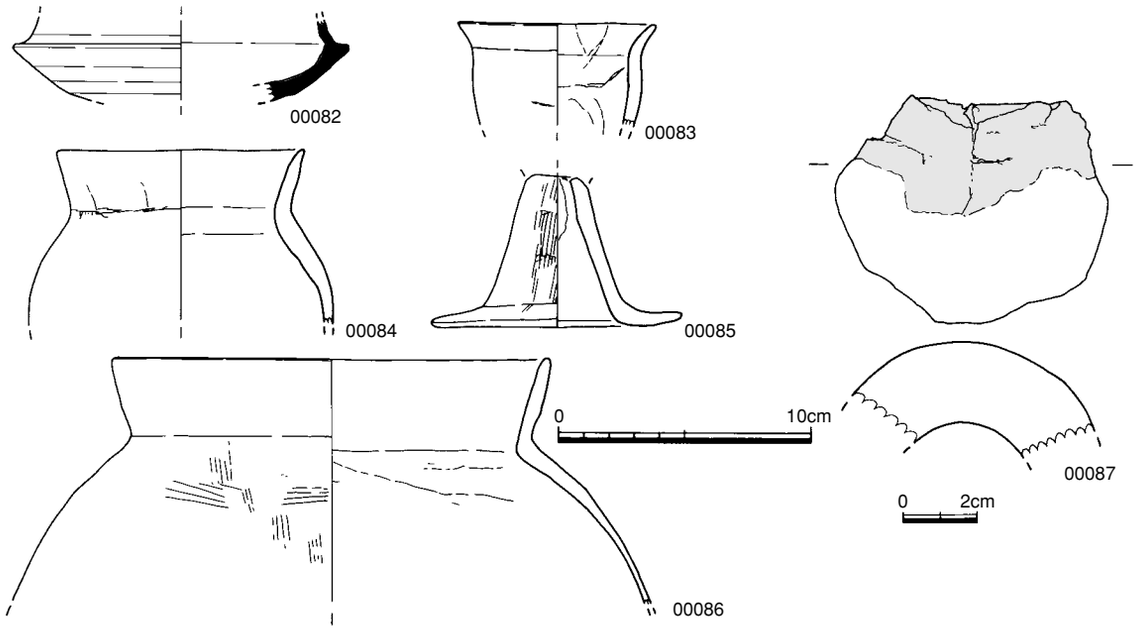


Fig.88　SK42 土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）

本土坑は、6 号支線道路 2 区の中央で検出された小型の不整形土坑である。規模は、短辺長 0.8m・長辺長 1.2m・深さ 0.25m を測る。埋土内からは、古墳時代土師器甕の破片が少量出土した。

出土遺物（Fig.87）　**00229** は、土師器甕の頸部破片である。器色は、明褐灰色を呈する。

SK41 土坑（Fig.4・86・87、PL.12）

本土坑は、6 号支線道路 2 区の北端部で検出された方形？の土坑である。規模は、径 2.5 × 2.4m・深さ 0.2m 程度を測る。南側壁周辺に礫・遺物類が集積している。埋土からは、須恵器杯蓋、土師器甕細片・高坏、須恵質擂り鉢、青磁碗、鉄釘等が出土した。

出土遺物　（Fig.87）　**000230** は、須恵器杯蓋の破片である。**00231** は、東播系擂り鉢である。口径 25.4cm を測る。**00232** は、土師器脚付鉢か。外面はヘラナデか。口径は 16.2cm を測る。**00233** は、土師器甕で、口径 18.6cm を測る。**00234** は、肥前系陶器か。口径 27.6cm を測る。**30005** は、鉄釘破片である。

SK42 土坑（Fig.5・88）

本土坑は、7 号支線道路の北側に位置する SC09 住居跡の東に切り合う土坑である。不整な長方形をなす。埋土からは、須恵器杯身、土師器甕・甑・小型丸底壺・高坏、フイゴ羽口等が出土した。

出土遺物　（Fig.88）　**00082** は、須恵器杯身である。受け部径 13.6cm を測る。**00083** は小型の土師器鉢である。口径 8cm である。**00084** は、小型丸底壺である。口径は 10cm を測る。**00085** は高坏脚の破片である。**00086** は、中型の甕である。口径 17.8cm を測る。**00087** は、フイゴ羽口破片である。上部は熱を受けて黒変する。

4. 溝状遺構（Fig.4・5・89・90、PL.2・3・12・13）

ー概 要ー　溝は、調査区全体を合わせて 14 条を検出した。2 号支線道路では、1 区で 3 条（SD01 ～ 03）･2 区で 2 条（SD04･05）･3 区で 3 条（SD06 ～ 08）･4 区で 3 条（SD09 ～ 11）･5 区で 1 条（SD12）が知られる。7 号支線道路では、1 条（SD13）、8 号支線道路でも 1 条（SD14）が見つかった。規模は SD01 溝のように大型のものも見られるが、全体に小型で、両端が立ちあがる小溝もあり、古墳時代後期住居の排水溝や中世期の集落に伴う溝であると考えられる。

SD01 溝（Fig.4・89・90、Pl.13）

本溝は、2 号支線道路 1 区の南端で検出した大型の東西溝である。全長 7m 以上･幅 3.5m、深さ 0.8m 程度を測る。また、東壁での横断面形は南側がやや急激に、北側が緩く立ちあがり、箱状を呈する。

次に溝内の堆積は、最下層の 4 層が濃茶褐色粘質土で、上層の 3 層は明橙色粘質土で、厚さ 0.35 ～ 0.6m を測る厚層である。内部に大型の花崗岩角礫を含む。また、2 層は 4 層と同様の粘質土でしめられ、層厚 0.5m 程度で小礫を含む。表層は暗黄褐色砂質土である。

溝埋土内からは、内面にヘラ描き花文を施す龍泉窯青磁碗 **00235**・やや上げ底の大型陶器甕 **00236**・砂岩製砥石 **10024** などの遺物が出土した。

SD02 溝（Fig.4・90）

本溝は、2 号支線道路 1 区の北端で南西から北東方向に走る大溝である。幅 3.2m・全長 26.8m 以上を測る。

出土遺物には菊花文のスタンプを施した瓦質土器火舎 **00237**、内底付近に 5 本単位の櫛描きを施す土師質土器擂り鉢 **00238**、サヌカイト製コア **10025** がある。

SD03 溝（Fig.4・90）

本溝は、2 号支線道路 1 区の北端部で検出した南北溝で、北側は立ちあがる。規模は、幅 1.7m 全長 5.3m 以上を測る。

出土遺物には二彩陶器蓋で、外面にオリーブ褐色釉をかける低い返しをもつ **00240** や高台が高く、灰白色釉をかける白磁碗 **00239** がある。底部径は 6.2cm を測る。

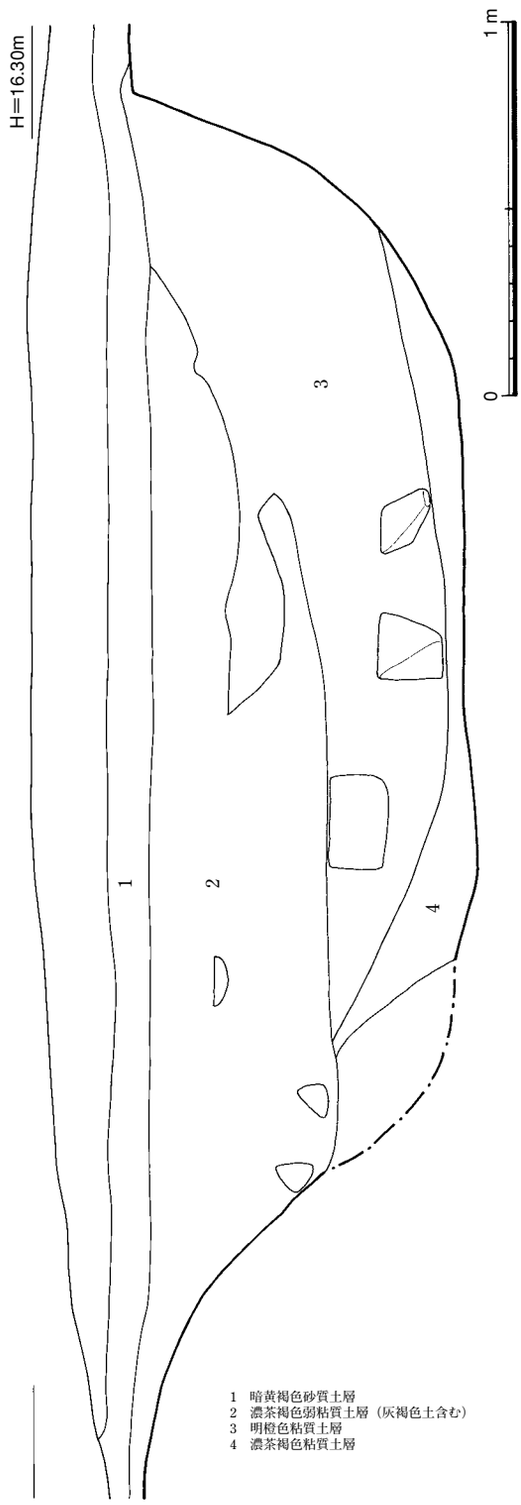


Fig.89　SD01 溝東壁土層断面図（1/20）

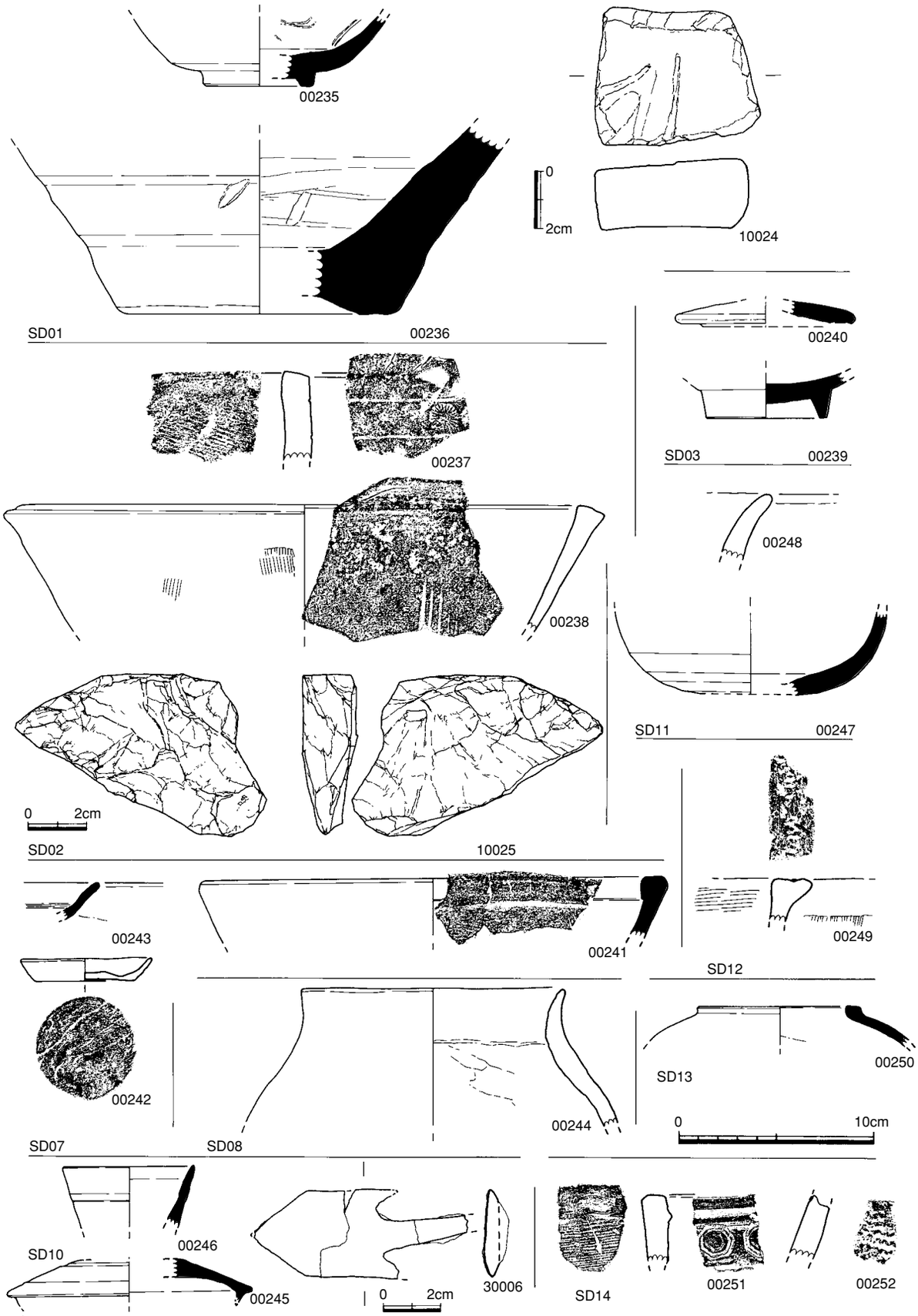


Fig.90　SD01 ～ 03・07・08・10 ～ 14 溝出土遺物実測図（1/3・1/2）

SD04 溝（Fig.4）

本溝は、2 号支線道路 2 区の北端で検出した東西の小溝である。規模は、幅 0.7m・長さ 2.9m 以上である。出土遺物は、龍泉窯青磁碗破片、瓦質土器甕破片、黒曜石チップなどである。

SD05 溝（Fig.4）

本溝は、2 号支線道路 2 区の南端で南北方向の溝である。両端は立ちあがる。規模は、幅が 1.5m・長さ 6m を測る。出土遺物は、瓦質土器捏ね鉢、褐釉陶器破片である。

SD06 溝（Fig.4）

本溝は、2 号支線道路 3 区の北端隅で検出した屈曲する溝である。規模は、幅が 1.0m 程度で、延長は 20m 以上である。出土遺物は、土師器甕の破片が少量である。

SD07 溝（Fig.4・90、PL.5・12）

本溝は、2 号支線道路 3 区の南側を南北にうねって走る溝である。規模は、幅が 1.0m 程度で延長は 35m 以上を測る。出土遺物には龍泉窯青磁皿 **00243** や口径 6.8cm の糸切り底の小型土師皿 **00242**・口径 24.2cm の須恵質土器の捏ね鉢 **00241** がある。

SD08 溝（Fig.4・90）

本溝は、2 号支線道路 3 区の中央で検出された南北溝である。幅員は不規則である。規模は、幅が 0.7m･延長 9m 以上を測る。出土遺物には土師器甕 **00244** がある。器色は､淡赤橙色 ～灰褐色を呈する。復原口径は 13.6cm を測る。

SD09 溝（Fig.5）

本溝は､2 号支線道路 4 区の北端部隅で検出された小溝である。規模は､幅が 0.7m･延長 2.7m を測る。出土遺物には土師器甕破片が少量ある。

SD10 溝（Fig.5・90）

本溝は、2 号支線道路 4 区で検出した南北溝である。規模は、幅が 0.5m・延長 10m 以上を測る。出土遺物には須恵器瓶口縁破片 **00246**・受け部径 12.6cm を測る同蓋 **00245**、残存長 7.4cm を測る剣先形鉄鏃 **30006** がある。錆による膨れが著しいものである。

SD11 溝（Fig.5・90）

本溝は、2 号支線道路 4 区で検出された南北方向に向く小溝である。両端が立ちあがる。規模は、幅が 0.3m･長さ 4m を測る。出土遺物には土師器甕後縁部破片 **00248**･須恵器壺底部破片 **00247** がある。壺は、底部下半に回転ヘラケズリを加える。

SD12 溝（Fig.5・90）

本溝は、2 号支線道路 5 区で検出された南北方向に走る小溝である。比較的直線的に走る。規模は､幅が 1m 程度で延長 14.5m 以上を測る。出土遺物には土師質土器の火舎 **00249** の他に須恵器杯蓋、土師器甕破片が少量ある。

SD13 溝（Fig.5・90）

本溝は、7 号支線道路西端で検出した南東から北西方向へ走る小溝である。東側は立ちあがる。規模は、幅が 0.4m・延長 14.5m 以上を測る。出土遺物には黒釉陶器壺 **00250** の他に須恵器杯蓋、土師器小型丸底壺破片がある。

SD14 溝（Fig.5・90）

本溝は、8 号支線道路東側で検出した溝である。規模は、幅が 1m・延長 3.9m 以上を測る。出土遺物には亀甲文スタンプを口辺に付した瓦質土器火舎 **00251** や山形押型文土器破片 **00252** がある。

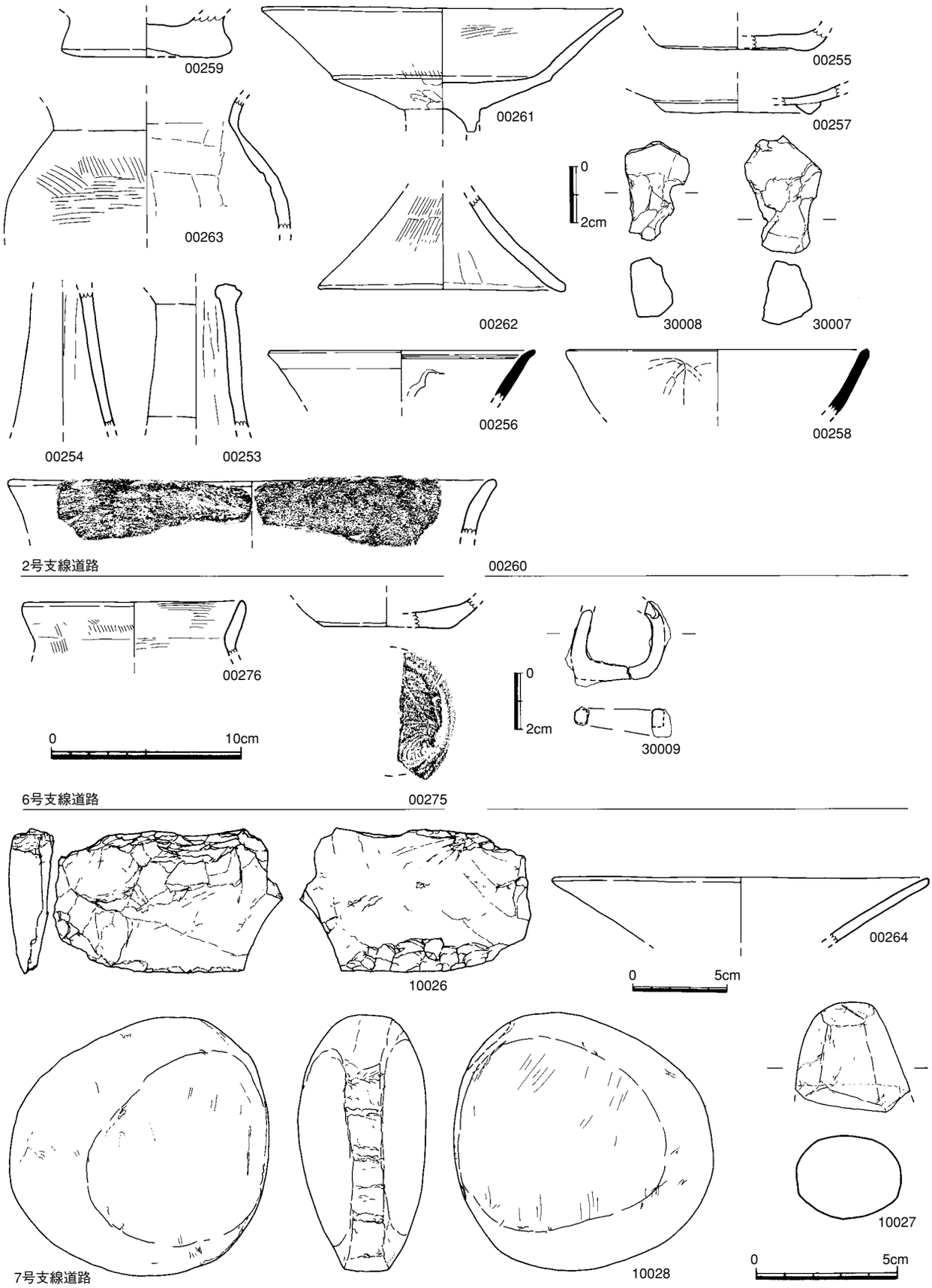


Fig.91　2 号支線道路・6 号支線道路・7 号支線道路・SP 出土遺物実測図（1）（1/3・1/2）

5. 柱穴出土遺物（Fig.4・5・91・92）

各調査区で検出した柱穴は2号支線道路調査区を中心に分布しているが、調査区の狭小なために建物としてのまとまりを捉えきれない。数的には2号支線道路97個、6号支線26個（1区22個・2区4

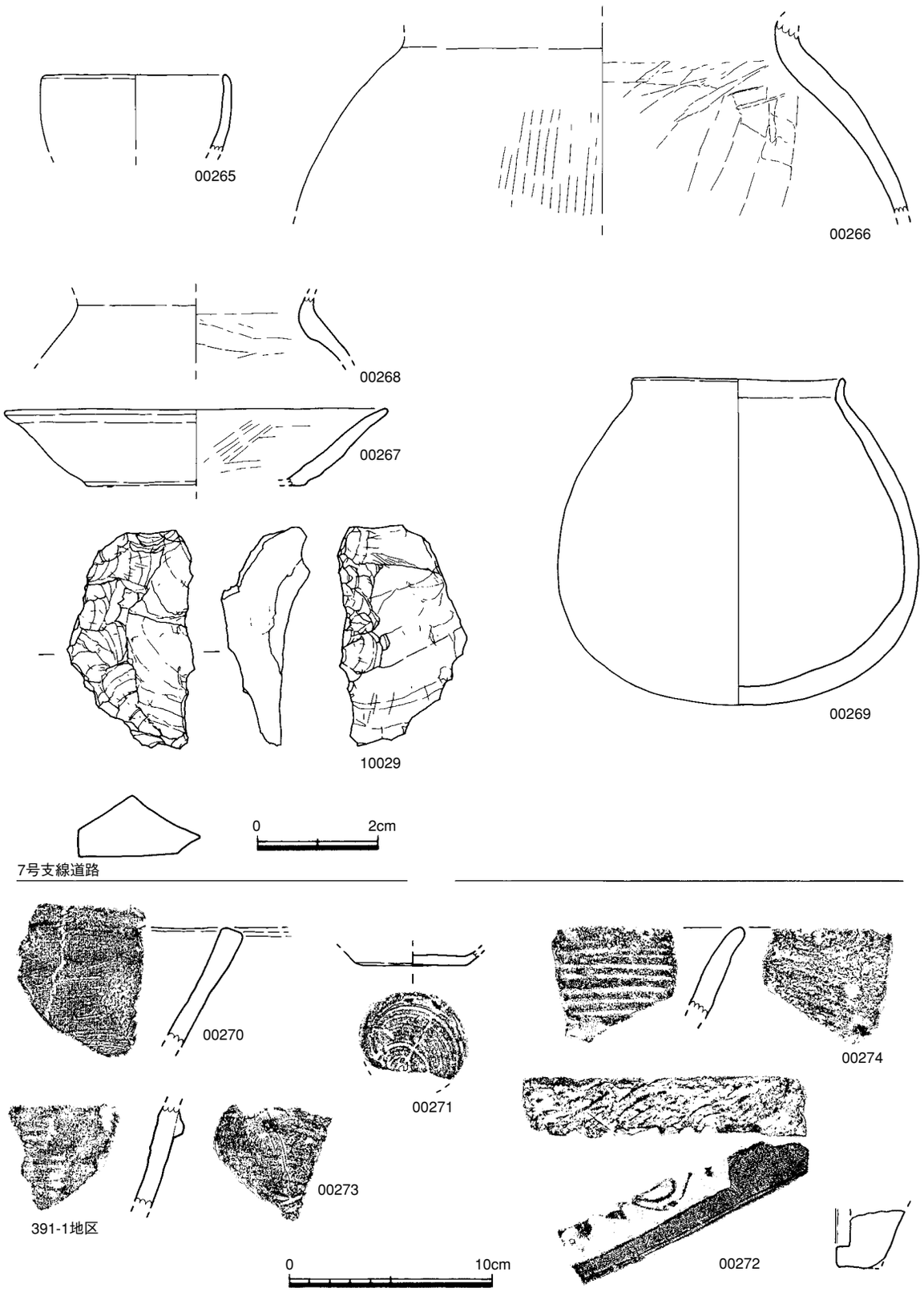


Fig.92 7号支線道路・391-1地区SP出土遺物実測図（2）（1/3・1/1）

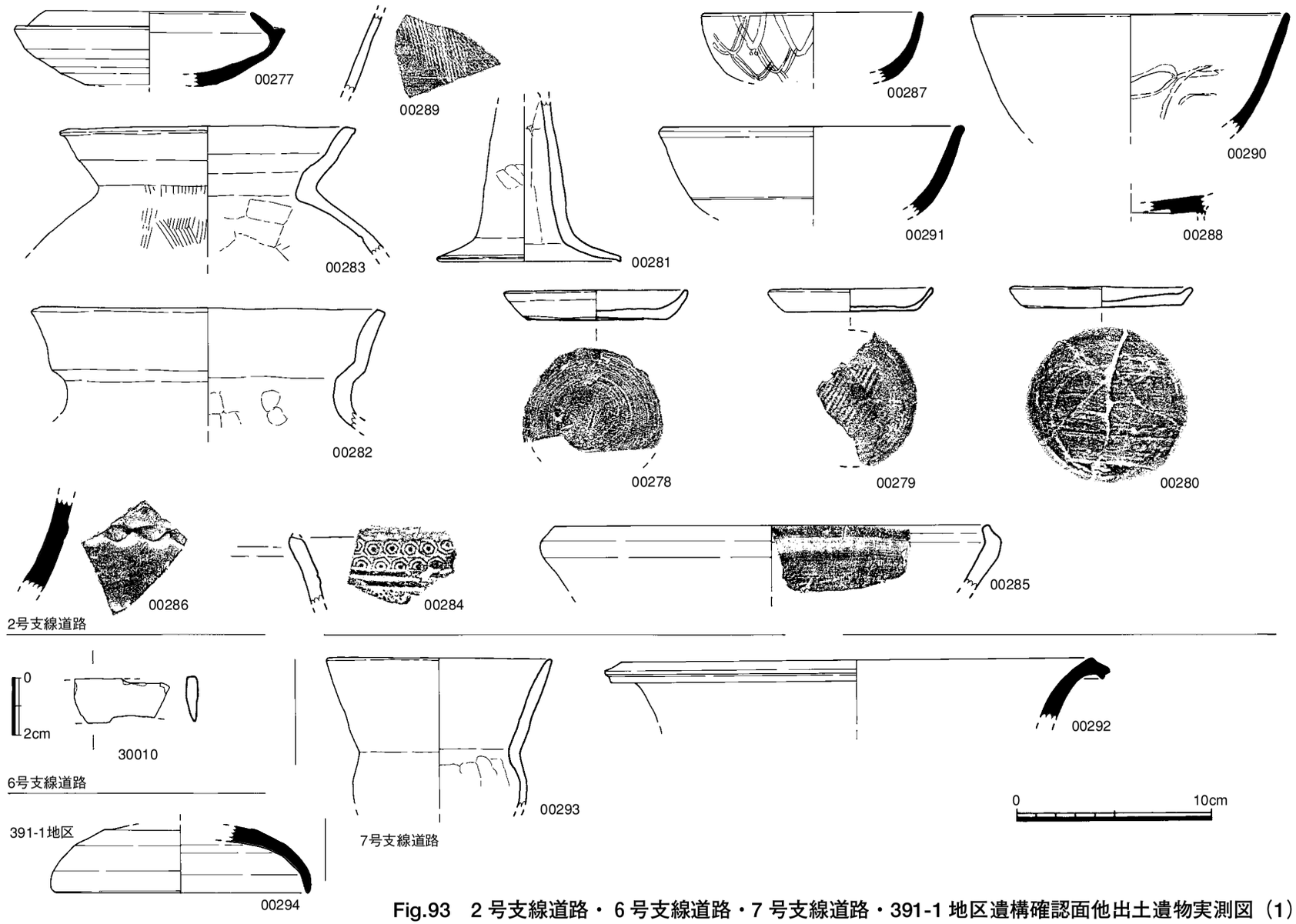


Fig.93　2 号支線道路・ 6 号支線道路・7 号支線道路・391-1 地区遺構確認面他出土遺物実測図（1）

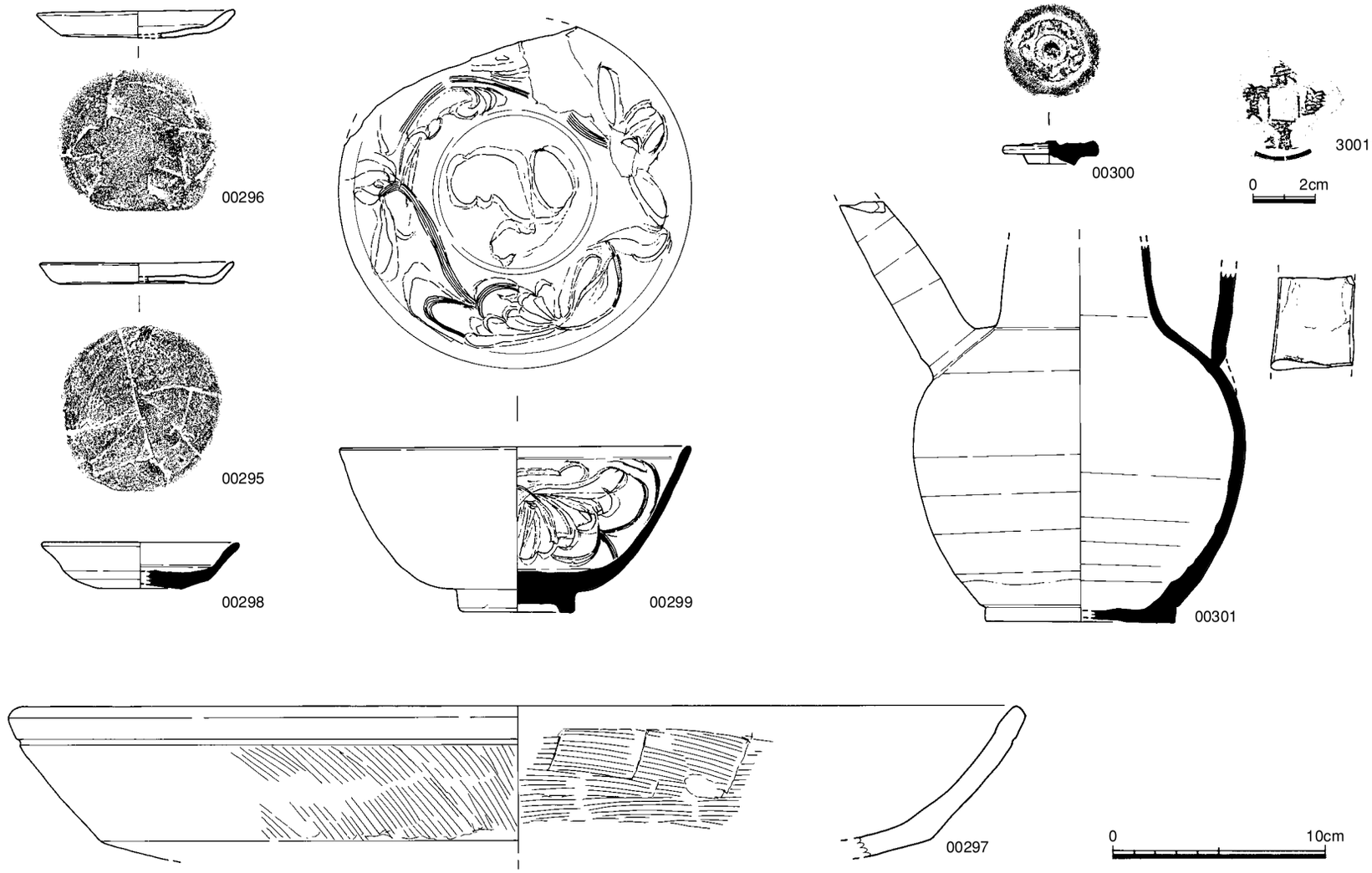


Fig.94　遺構確認面他出土遺物実測図（2）（1/3・1/2）

個)、7 号支線道路 28 個、8 号支線道路 1 個、391-1 地区 13 個が認められる。埋土中から出土した遺物類は何れも細片で、図化に耐えないものが多い。

2 号支線道路では、SP01 では土師器高坏破片で脚が中空となる **00253**、SP12 では土師器高坏破片で脚が中空となる **00254**、SP35 では土師器鉢 **00255** や龍泉窯青磁碗 **00256**、SP54 では小形の鉄滓 **30007**・**30008**、SP55 では土師器高台付椀 **00257** や龍泉窯青磁碗 **00258**、SP56 で夜臼式甕底部 **00259**、SP59 では縄文時代後期の大型深鉢と考えられる **00260**、SP78 では土師器丸底壺 **00263**・浅い杯部に脚端部の開く土師器高坏 **00261**・**00262** が見られる。

6 号支線道路では、SP07 で底部糸切りの土師皿 **00275**、SP10 では細い環状鉄器 **30009**、SP25 で小型土師器甕 **00276** が見られる。

7 号支線道路では、SP19 で土師器高坏杯部破片 **00264** やサヌカイト製サイドスクレイパー **10026** や玄武岩製磨石 **10028**・玄武岩製石斧頭部破片 **10027** 、SP21 で土師器小形マリ **00265**・同甕破片 **00266** が見られる。SP24 では土師器甕破片 **00268**・同高坏杯部破片 **00267**・黒曜石剥片を使用した二次加工剥片 **10029** がある。SP25 では土師器丸底甕 **00269** があり、器色は赤橙色 ～にぶい黄橙色を呈する。口径は 10.6cm・器高 16.2cm を測る。

391 － 1 地区では、SP04 で土師質土器捏ね鉢 **00270**、SP06 で小形糸切り底土師皿 **00271**、SP07 で軒平瓦破片 **00272**、SP09 で条痕文調整の縄文土器甕破片 **00273**、SP11 でヨコ方向の条痕文で外面の器面調整する縄文土器甕 **00274** がある。全体に中世期以降の出土が多い。

6. 遺構検出面他出土遺物（Fig.93 ～ 96）

2 号支線道路では、一部に古墳時代後期の土師器、須恵器破片を一部に含むが、大半は中世期の輸入陶磁器、土師器、瓦質土器類である。

00277 は、須恵器杯身破片である。受け部の立ちあがりは著しく内傾する。器面調整は、底部外面のほぼ全面に回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、外面が灰白色で、内面は明灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。受け部の復原径 14cm・同器高 8cm を測る。

00278 ～ **00280** は土師器皿である。**00278** は、底部が糸切り離しで、器面調整はヨコナデである。器色は、内外面共ににぶい橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径は 9.5cm･器高 1.6cm を測る。

00279 は、やや薄造りの糸切り皿である。外底部に板目を残す。器面調整は、全面ヨコナデである。器色は、外面がにぶい赤褐色で、内面は灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は 8.6cm･器高 1.2cm を測る。

00280 もやや大型の糸切り皿である。外底部には板目圧痕を残す。器面調整は、全面ヨコナデである。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は明褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は 9.4m･器高 1.1cm を測る。

00281 は、土師器高坏脚部破片である。内面にヘラケズリを残し、他は荒れのために不明である。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原底部径 9.4cm・残存器高 8.2cm を測る。

00282 は、器壁の厚い二重口縁の土師器壺である。調整は、内面に指オサエを残す以外は荒れのために不明である。器色は、内外面共ににぶい黄橙色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径

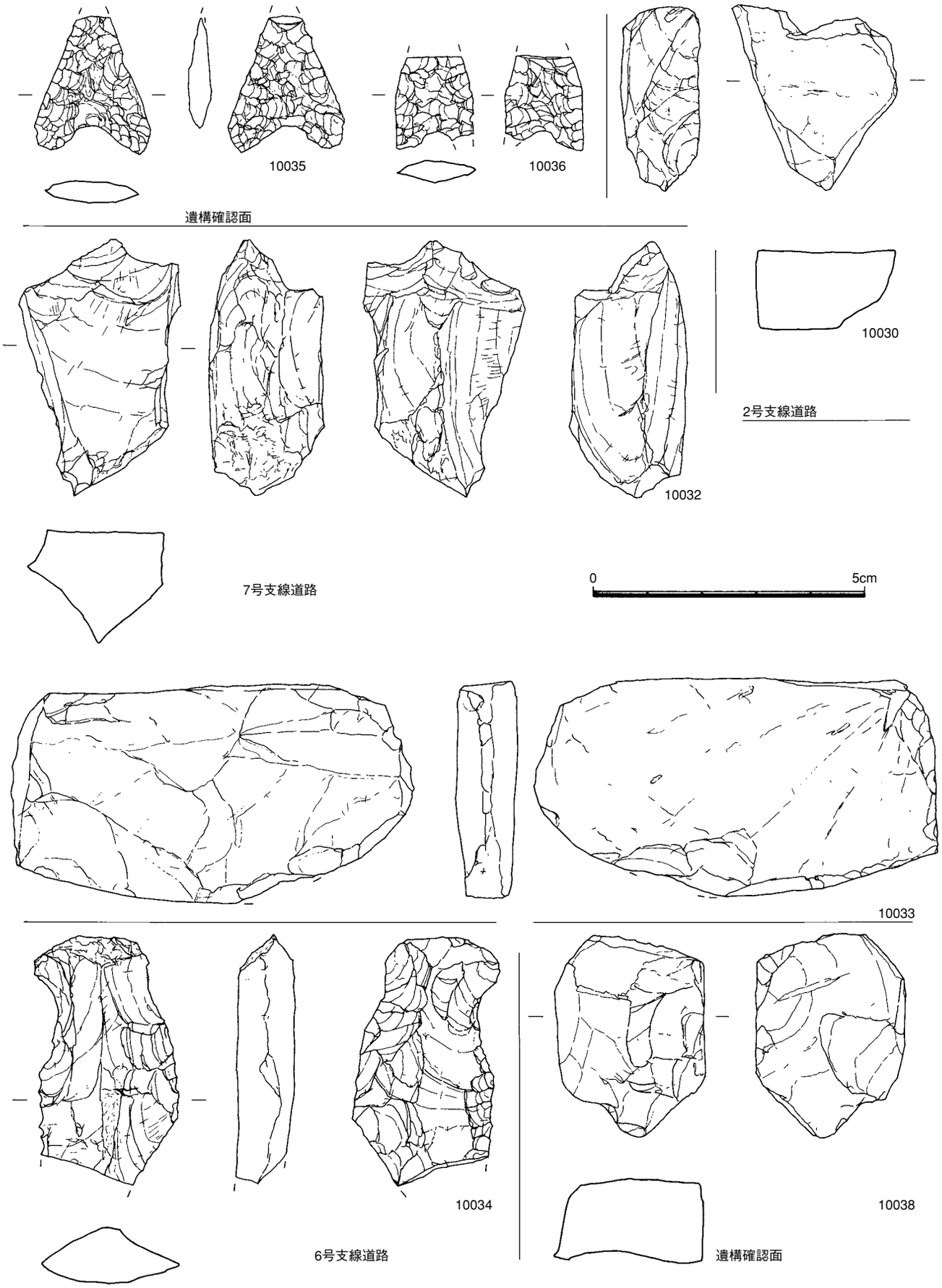


Fig.95　各区遺構確認面出土遺物実測図（3）（1/1）

18.2cm で、残存高 6.2cm を測る。

00283 は、土師器壺破片である。調整は、口縁部内外にヨコナデ、胴部外面に荒いハケメ・同内面にヘラケズリを加える。器色は、褐灰色を呈する。復原口径 15.2cm を測る。

00284 は、口縁部辺に亀甲文スタンプを付す火舎破片である。調整ヨコナデで、器色は褐色である。

00285 は、口縁部が折れる瓦質土器擂り鉢である。調整は、ヨコナデである。口径 26cm を測る。

00286 は、外面に薄く釉をかける陶器破片である。施釉は灰黄色で、内面露胎部は灰赤色を呈する。

00287 は、肥前系の染め付け磁器碗である。外面に網掛け文を描く。施釉部分は暗黄灰で、地は青灰色を呈する。口径は 11.4cm を測る。表面採集。

00288 も近世陶器である。外底部は中央を円形に抉る。施釉部は、灰白色を呈する。耕作土･床土。

00289 は、外面に細かい縄目タタキを残す陶質土器の胴部破片である。器色は、外面が明青色で、内面は青色を呈する。長胴甕破片と考えられる。朝鮮半島産か。表土・床土。

00290 は､龍泉窯青磁碗破片である。内面に草花文を描く。地色は灰白色を呈し､施釉部は灰オリーブ色である。外面は氷裂が見られる。口径 16.4cm を測る。遺構検出面。

00291 は、釉のボッテリと厚くかかる龍泉窯青磁碗破片である。地色は灰色を呈し、施釉部は緑色である。外面には氷裂が著しい。口径 15.8cm を測る。遺構検出面。

6 号支線道路では、**30010** が出土した。横断面形が楔状をなすことから刀子の破片と考えられる。残存長 3.4cm、背部厚さ 3mm を測る。遺構確認面。

7 号支線道路では、**00292** の甕がある。角張った口縁端部はやや垂れる。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は、外面紫灰色で、内面は青灰色を呈する。胎土はやや粗である。古代期のものか。遺構確認面。**00293** は、土師器小型丸底壺である。底部を欠く。調整は、胴部内面に指オサエを残す以外は荒れのために不明である。器色は、外面がにぶい黄橙色で、内面は灰白色を呈する。胎土は粗である。復原口径は 11.6cm・同残存高 7.8cm を測る。遺構確認面。

391-1 地区では、須恵器の小型杯蓋の **00294** がある。天井部の一部に回転ヘラケズリを施す。他は

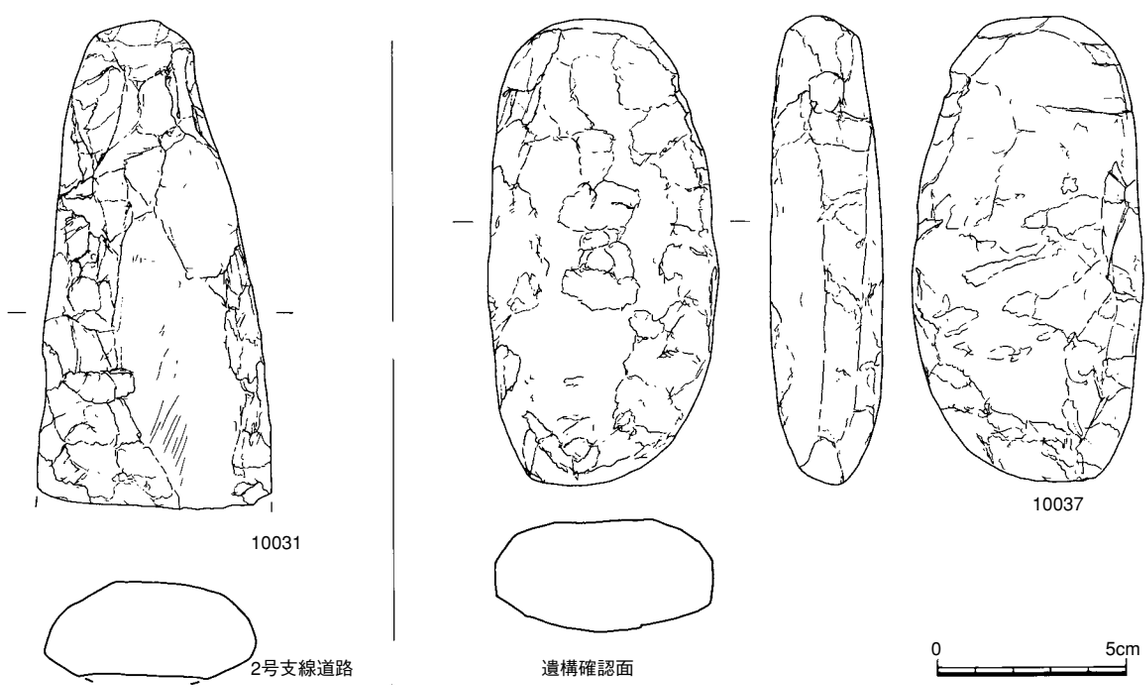


Fig.96　各区遺構確認面出土遺物実測図（4）（1/2）

ヨコナデである。器色は、内外面共に青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径13.4cm・器高3.4cmを測る。遺構確認面。

以下は遺構確認面であるが、地区が不詳な出土資料である。(Fig.94)

00295・00296は、いずれも浅い糸切り皿である。**00295**は、調整が全面ヨコナデである。器色は、外面が灰黄褐色で、内面は明灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径9.2cm・器高1cmを測る。**00296**は、やや整形が甘い造りの皿である。器色は、外面が灰黄色で、内面は黄橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径9.4cm・器高1.2cmを測る。遺構確認面

00297は、土師質土器の大型の土鍋或いは焙烙か。底部付近はヨコナデで、胴部及び内面は荒いハケメ調整である。器色は、外面が褐灰色で、内面は灰白色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径48.4cmを測る。遺構確認面。

00298は、龍泉窯青磁皿である。釉薬は口縁部と内面に厚くかける。釉薬は明緑灰色で、露胎部は灰白色である。復原口径は9.4cm・器高2.2cmを測る。遺構確認面。

00299は、龍泉窯青磁碗である。約1／3を残す。口縁部内面及び見込みに優美な草花文を描く。高台外面から内面には施釉を行い、他は露胎となる。釉薬は暗オリーブ色を呈し、露胎は灰色である。口径16.6cm・器高7.9cmを測る。遺構確認面。

00300は、施釉陶器の蓋である。ほぼ完形である。小壺のものか。中央部に低い摘みを付し、周辺には唐草様の文様を巡らし、平板な感じを受ける。内面突起は中央が窪む。施釉する上面は、暗赤褐色で、露胎部は灰色をなす。胎土は密である。口径4.5cm・器高1.1cmを測る。

00301は、把手付褐釉陶器水注である。半球状の胴部にしまった頸部と比較的太い注口を付ける。また、把手は板状で幅広い。底部はやや上げ底となる。釉薬の大半は剥落している。胴部最大径15.6cm、残存高20cmを測る。遺構確認面。

続いて石器類である。(Fig.95・96)

10030は、チャート？使用の石核である。長さ・幅・厚さ3.4×3×1.4cmで、重さ14.4gを測る。2号支線道路排土。**10031**は、玄武岩使用の石斧である。刃部を欠く。周辺には打痕を多く残し、中央部に研磨痕を残す。残存長12.9cm・重さ306.82gを測る。2号支線道路4区排土。**10032**は、黒曜石石核である。重量23.28gである。7号支線道路遺構確認面。**10033**は、サヌカイトの横長剥片使用のサイドスクレイパーである。長さ・幅は4.0×7.4cmで、重さ35.68gを測る。7号支線道路遺構確認面。**10034**は、黒曜石を使用した剥片頭部の両端にノッチを加えたサイドスクレイパーである。残存長4.6cmを測る。6号支線道路遺構確認面。**10035**は、黒曜石使用の凹基無茎式の打製三角石鏃である。先端部を失う。残存長1.5cm・残存重さ1.74gを測る。

10036は、基部のくり込みの小さい小型鏃である。先端部を失う。黒曜石を使用する。残存長1.7cm・残存重さ0.84gを測る。

10037は、玄武岩使用の敲石である。周辺の全面に摩滅痕は見られる。また、中心部や側辺の全面にも打痕が及び、両側辺は平坦面をなす。法量は、長さ・幅・厚さが12.4×38.7×3.0cmで、重さ387.83gを測る。遺構確認面。

10038は、明緑灰色の珪質岩使用のやや分厚い剥片である。片面には大剥離面が見え、両面からの剥離調整が窺える。玉加工の未成品か。

調査区内では古墳時代や中世遺構の埋土に混じて多くの石器類が出土しており、縄文時代早期から弥生時代までの長い時間の所産を含むと考えられる。

Tab.2　検出遺構一覧（SC：竪穴住居跡、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SD：溝状遺構）

番号	遺構番号	地区	平面形	規模(m) 短辺	長辺	深さ	時期	出土遺物
1	ＳＣ01	2号支線道路3区	長方形？	4.7	2.6<	0.3	古墳後期	須恵器杯身、土師器高坏・甑・甕多数
2	ＳＣ02	2号支線道路3区	長方形	4.6	3.5<	0.1	古墳後期	須恵器杯蓋、土師器盤・甕多数 磨製石斧、2次加工剥片（サヌカイト）
3	ＳＣ03	2号支線道路3区	長方形	5.3	2.6<	0.2	古墳後期	須恵器杯蓋・杯身・ハソウ、土師器甕 太型蛤刃石斧（玄武岩）
4	ＳＣ04	7号支線道路	長方形	4.2	1.8<	0.15	古墳後期	土師器甕・手捏土器、支脚（花崗岩）
5	ＳＣ05	7号支線道路	長方形	5.0	4.8<	0.35	古墳後期	須恵器杯蓋、土師器甕・丸底壺・高坏・甑、 支脚（花崗岩）、2次加工剥片（黒曜石）
6	ＳＣ06	7号支線道路	長方形	4.5	3.9	0.35	古墳後期	須恵器杯蓋・提瓶、土師器甕・甑・丸底壺、 支脚（花崗岩）
7	ＳＣ07	7号支線道路	正方形	4.1	4.1	0.2	古墳中期	土師器甕・手捏土器・小型丸底壺・高坏
8	ＳＣ08	7号支線道路	長方形	4.4	4.7	0.25	古墳後期	須恵器杯・甕多数、土師器甕・高坏多数
9	ＳＣ09	7号支線道路	長方形	4.2	4.5	0.33	古墳中期	須恵器無頸壺、土師器甕・手捏土器・高坏 ・丸底壺・鉢・甑、フレイク・チップ
10	ＳＣ11	7号支線道路	長方形？	0.7<	3.5	0.2	古墳後期	須恵器杯蓋・杯身、土師器甕・甑、フレイ ク（サヌカイト）
11	ＳＣ12	7号支線道路	不整形	5.3	4.4	0.05	古墳後期	須恵器杯蓋・甕、土師器甕・高坏・甑・ 小型丸底壺
12	ＳＣ13	2号支線道路4区	長方形？	3.3	1.5<	0.1	古墳中期	土師器甕・小型丸底壺・高坏・マリ、 （龍泉窯青磁）
13	ＳＣ14	2号支線道路4区	長方形	3.6	3.1<	0.3	古墳後期	須恵器杯蓋・杯身・ハソウ、土師器杯蓋 ・甕・甑、支脚（花崗岩）
14	ＳＣ15	2号支線道路4区	長方形	5.5	5.7	0.5	古墳後期	須恵器杯蓋・杯身、土師器甕・高坏・小型 丸底壺、玄武岩礫、黒曜石原石、 支脚（花崗岩）
15	ＳＣ16	2号支線道路4区	長方形？	4.0<	4.4<	0.22	古墳後期	須恵器・甕・杯蓋、土師器甕・高坏・丸底 壺
16	ＳＣ17	2号支線道路4区	長方形	4.5	3.8<	0.16	古墳後期	須恵器甕・杯蓋・杯身、土師器甕・高坏、 滑石製石錘
17	ＳＣ18	2号支線道路4区	長方形	4.8	4.9<	0.15	古墳後期	須恵器甕・杯蓋・杯身、土師器甕・高坏、 把手、フレイク・チップ
18	ＳＣ19	2号支線道路5区	長方形？	2.9<	4.8<	0.55	古墳後期	須恵器甕・杯身・鉢、土師器甕・高坏
19	ＳＣ20	391-1地区	長方形	3.6	1.7<	0.44	古墳後期	土師器甕、石核（黒曜石）
20	ＳＢ01	2号支線道路1区	長方形	3.8	4.2		中　世	土師器甕・皿、スクレイパー（サヌカイト）

21	ＳＫ01	2号支線道路1区	不整形	3.8	7.4	0.80	中　世	龍泉窯青磁碗・香炉・長胴壺、褐釉陶器甕、瓦質土器鍋・鉢、太型蛤刃石斧（玄武岩・砂岩）、石包丁未製品、チップ
22	ＳＫ02	2号支線道路1区	不整円形	1.3	1.7	0.1	中　世	土師器糸切り皿
23	ＳＫ03	2号支線道路1区	不整円形	1.5	1.7	0.32	中　世	土師器甕破片
24	ＳＫ04	2号支線道路1区	長円形	1.3	1.9	0.40	中　世	土師器糸切り皿、鉄輪
25	ＳＫ05	2号支線道路1区	長円形	2.6	4.4	0.55	古　墳	古墳時代土師器甕破片
26	ＳＫ06	2号支線道路1区	円形	0.9	0.9	0.24	中　世	土師器甕破片
27	ＳＫ07	2号支線道路1区	長円形	1.1	1.4	0.15	中　世	土師器甕破片
28	ＳＫ08	2号支線道路1区	長方形	0.6	1.2	0.42		遺物無し
29	ＳＫ09	2号支線道路1区	長方形	0.8	1.1	0.11	古　墳	土師器小破片
30	ＳＫ10	2号支線道路1区	不整形	1.2	1.6	0.10	古　墳	土師器小破片
31	ＳＫ11	2号支線道路2区	長円形	1.5	2.4	0.2	中　世	須恵器杯蓋、龍泉窯青磁碗、褐釉陶器破片、土師器糸切り皿・擂り鉢
32	ＳＫ12	2号支線道路2区	不整形	0.7	2.5	0.2	中　世	龍泉窯青磁碗、土師器糸切り皿・甕・擂り鉢
33	ＳＫ13	2号支線道路2区	不整形	1.4	2.0<	0.15	古墳中期	土師器高坏・小型丸底壺
34	ＳＫ14	2号支線道路2区	不整形	1.7	1.1<	0.25		土師器甕小破片
35	ＳＫ15	2号支線道路3区	不整形	2.4	5.8	0.34	中　世	須恵器杯蓋・杯身・甕、龍泉窯青磁碗・皿、白磁碗、土師器糸切り皿・甑・甕破片、北宋銭（崇寧通寶）
36	ＳＫ16	2号支線道路3区	不整形	4.5	4.3<		中　世	須恵器杯蓋、土師器擂り鉢、土鍋・火舎、平瓦破片、2次加工剥片（黒曜石）、鉄滓
37	ＳＫ17	2号支線道路3区	不整形	1.0<	8.0		中　世	須恵器甕、龍泉窯青磁碗、瓦質土器捏鉢、土師器土鍋・甕
38	ＳＫ18	2号支線道路3区	不整形	0.9	1.2	0.34	中　世	土師器甕、土鍋
39	ＳＫ19	2号支線道路3区	不整形	1.7	1.1<	0.10	古墳後期	土師器小破片
40	ＳＫ20	2号支線道路3区	長方形	0.3<	1.3		古墳後期？	須恵器高坏
41	ＳＫ21	2号支線道路3区	溝状	0.6	4.2	0.07	中　世	黒褐釉陶器甕、褐釉陶器破片、土師器糸切り皿、骨片
42	ＳＫ22	2号支線道路3区	長方形	1.8	2.2	0.27	中　世	土師器甕・高坏、板状鉄器、玄武岩扁平礫、炭化木
43	ＳＫ23	2号支線道路3区	長方形	0.8	1.3	0.05	中　世	土師器糸切り皿
44	ＳＫ24	2号支線道路3区	長方形	3.2	8.0		中　世	須恵器甕、土師器甕・擂り鉢、蛤刃石斧
45	ＳＫ25	2号支線道路4区	不整形	2.4	4.0		古墳後期	須恵器甕・杯蓋、土師器甕・高坏・手捏土器
46	ＳＫ26	2号支線道路4区	不整形	1.3	1.5		古　墳	土師器甕破片
47	ＳＫ27	2号支線道路4区	長方形？	1.4<	2.5<		古　墳	弥生前期甕破片、土師器甕破片
48	ＳＫ28	7号支線道路	長円形	1.8	2.9		古墳後期	土師器手捏土器甕

49	ＳＫ29	7号支線道路	長方形	3.5	7.3		古墳後期	須恵器杯蓋、土師器甕・高坏・丸底壺・二重口縁壺、フレイク、花崗岩礫、玄武岩礫
50	ＳＫ30	7号支線道路	長方形	3.4	5.2		古墳後期	須恵器杯蓋・杯身、土師器甕・高坏・小型丸底壺・鉢・甑、フレイク（サヌカイト・黒曜石）
51	ＳＫ31	8号支線道路	不整形	3.0	6.6<		古墳後期	須恵器杯蓋・甕、土師器甕、土製臼玉、エンドスクレイパー（サヌカイト）、玄武岩礫
52	ＳＫ32	391-1地区	隅丸方形	3.1	3.1		中　世	須恵器杯蓋、土師器甕、白磁碗、太型蛤刃石斧（玄武岩）、石匙（サヌカイト）
53	ＳＫ33	391-1地区	不整形	3.4	6.6<		中　世	須恵器杯蓋、土師器糸切り皿・甑、瓦質土器土鍋・擂り鉢、青磁碗
54	ＳＫ34	391-1地区	円形	1.2	1.3		古墳後期？	須恵器破片、土師器破片
55	ＳＫ35	391-1地区	溝状	1.0	6.4		中　世	青釉陶器、陶質土器擂り鉢、土師器火舎、不明鉄器
56	ＳＫ36	391-1地区	長方形	0.7	1.3		古墳後期	須恵器甕・杯蓋、土師器把手、叩石（玄武岩）
57	ＳＫ37	6号支線道路1区	不整形	3.8	5.0		中　世	土師器糸切り皿、滑石製石鍋、不明鉄器
58	ＳＫ38	6号支線道路1区	長方形	1.3	2.3		中　世	遺物なし
59	ＳＫ39	6号支線道路1区	不整形	0.9	1.7		中　世	土師器甕、スラッグ
60	ＳＫ40	6号支線道路2区	不整形	0.8	1.2		古　墳	土師器甕
61	ＳＫ41	6号支線道路2区	方形？	2.5	2.4<		中　世	須恵器杯蓋・杯身、土師器甕・高坏、須恵質擂り鉢、青磁碗、鉄釘
62	ＳＫ42	7号支線道路	不整形	0.8	3.8	0.5	古墳後期	須恵器杯蓋、土師器甕・甑・小型丸底壺・高坏、ふいご羽口
63	ＳＤ01	2号支線道路1区		3.8	7.1		中　世	土師器甕・擂り鉢、青磁碗破片、陶器甕、砥石（砂岩）
64	ＳＤ02	2号支線道路1区		3.2	26.8		中　世	須恵器杯蓋、須恵質捏鉢、龍泉窯青磁破片、土師器糸切り皿・擂り鉢、瓦質土器火舎、石核（サヌカイト）、鉄釘
65	ＳＤ03	2号支線道路1区		1.7	5.3<		中　世	土師器糸切り皿、白磁碗、二彩陶器蓋、瓦質土器擂り鉢
66	ＳＤ04	2号支線道路2区		0.7	2.9		中　世	龍泉窯青磁碗、瓦質土器甕、チップ
67	ＳＤ05	2号支線道路2区		1.5	6.0		中　世	瓦質土器捏鉢、褐釉陶器
68	ＳＤ06	2号支線道路3区		1.0	20<		中　世	土師器甕
69	ＳＤ07	2号支線道路3区		1.0	35<		中　世	須恵器杯蓋・甕・壺、須恵質捏鉢、土師器糸切り皿・甕、土師質擂鉢、青磁碗
70	ＳＤ08	2号支線道路3区		0.7	9.0<		古　墳	土師器甕

71	ＳＤ09	2号支線道路4区		0.7	2.7<			土師器甕
72	ＳＤ10	2号支線道路4区		0.5	10<			須恵器杯蓋・ハソウ、土師器甕・高坏、鉄鏃
73	ＳＤ11	2号支線道路4区		0.3	4.0			須恵器杯蓋・壺、土師器甕
74	ＳＤ12	2号支線道路5区					中　世	須恵器杯蓋、土師器甕、瓦質火舎
75	ＳＤ13	7号支線道路		0.4	14.5		中　世	須恵器杯蓋、土師器小型丸底壺、黒釉陶器、チップ（サヌカイト）
76	ＳＤ14	8号支線道路		1.0	3.9		中　世	瓦質火舎、山形押型文土器

第四章　おわりに

これまで第１次調査において検出した各遺構について略述してきた。今回調査では、女原遺跡の南西側の一端を調査したに過ぎない。また、遺構の遺存状況も過去の開田事業に伴って著しい削平を受けていることも明らかとなった。このために遺構の全ての時期を確定することが困難であった。

以下では、本調査での各時期の遺構の区別を行い、簡単なまとめとしたい。

今回確認できた集落は、大きく古墳時代中期（5 世紀前半頃）、同後期（6 世紀後半から末を中心とする時期）及び中世期に区別されよう。

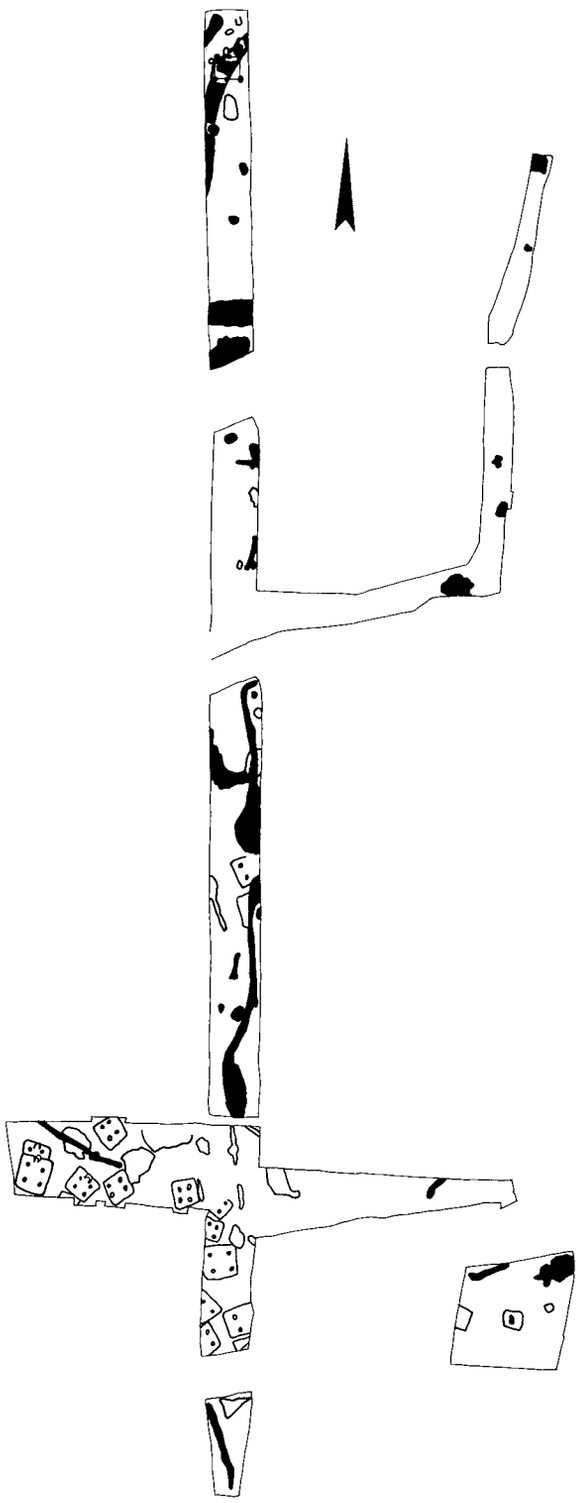
古墳時代集落は各時代を通じて全体的に丘陵上部の斜面（標高 23m 付近）に集合して営まれていると言える。

まず出現した古墳時代中期遺構は、住居跡では平面形が長方形を呈し、床面に主柱穴 4 本を配する。また、カマドが作り付けられた形跡は見あたらない。

この時期に該当すると思われるのは SC07・09 住居跡や SK13 土坑などであり、布留式甕の特徴を引いた球状胴部に内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ甕や小型丸底壺、高坏などの古様相をもつ遺物を出土する。この時期の集落の広がりは不明であるが、立地からは更に西・南側の地区へ拡大する可能性がある。

次に古墳時代後期では、大きく 2 時期に区分されると考えられる。それは主に各遺構から出土した須恵器により、須恵器編年のⅢｂ期（6 世紀後半）とⅣａ・Ⅳｂ期（6 世紀末～ 7 世紀初め）のものである。これらの時期の集落分布は、調査区の最高部区域に限られており、Ⅲｂ期では比較的散在するようであり、Ⅳ期になると南側に集約的に固まった分布を示している。

Ⅲｂ期の遺構は、完掘が出来た殆どの住居の場合、平面形は長方形に近く、作り付けのカマドを北壁中央に設ける。また、床面の主柱穴は 4 本である。SC01・02・03・08・11・14 住居跡が該当し、他に SC13・20 住居跡も包含されるものと考えられる。カマドは、殆どが円形であり、燃焼する火床の中央に花崗岩角礫を加工した角柱を支脚として据えている。



第１次調査の遺構分布

また、住居跡に伴うと考えられる不定形の土坑のうち、SK36 土坑が該当し、他に SK20・25・28・29・31・34 土坑もこれに含めて良いと思われる。

次にⅣa 期及びⅣb 期と考えられる集落である。Ⅳa 期でも住居は、平面形がほぼ長方形を呈し、床面に主柱穴を 4 本配する。サイズは殆ど変わらない。また、同様に北壁の中央に作り付けのカマドを設けている。カマドの位置は時代性というよりも高所にあり、立地上今津湾から吹き上げてくる風の方向に対応したものとも考えられる。SC05・06・15・16・17・18 住居跡が該当し、SK30 土坑が伴うと考えられる。続くⅣb 期では、明確な遺構は少なく、SC19 住居跡や SK42 土坑などが該当するかと思われる。

次に中世期（12 世紀を中心とする）では、調査区が道路建設予定地部分などで範囲が面的な広がりをもたないことから、北端部に 1 × 2 間規模の掘立柱建物 1 棟が検出されたが、他は南から北側へ流下する不規則な溝や区画溝或いは雨落ち溝と考えられる小溝群及び不整形な土坑で構成される。

時期的に中世期と想定出来たのは、掘立柱建物 1 棟、土坑 24 基、溝状遺構などである。これらの遺構等からは、糸切り皿や瓦質土器土鍋や捏ね鉢、土師質捏ね鉢、同火舎などの国産品と共に龍泉窯青磁碗・皿を中心に青磁香炉、長胴陶器壺・褐釉陶器甕・水注、黒釉陶器甕などの輸入陶磁器破片も多く出土した。また、青磁類と共に北宋銭「崇寧通寶」の出土が特筆されよう。

次に女原遺跡の中の各時期の変遷については、女原遺跡第 3 次調査での成果がある。この地点では古墳時代中期から 13 世紀以降までの遺構が検出されており、古墳時代中期（5 世紀初め）から同後期（6 世紀～ 7 世紀前半代）の竪穴住居跡 4 軒（方形・長方形）、土坑 11 基、溝状遺構 6 条と掘立柱建物 3 棟以上があり、国産土師器とともに韓国産陶質土器・赤色軟質土器が伴って出土している。

また、古代末から中世初頭期にも掘立柱建物群が検出されており、これよりやや下る 13 世紀以降の水田跡 13 筆以上（面積 47・48・58・77・82 ㎡のものがある）が見つかっている。

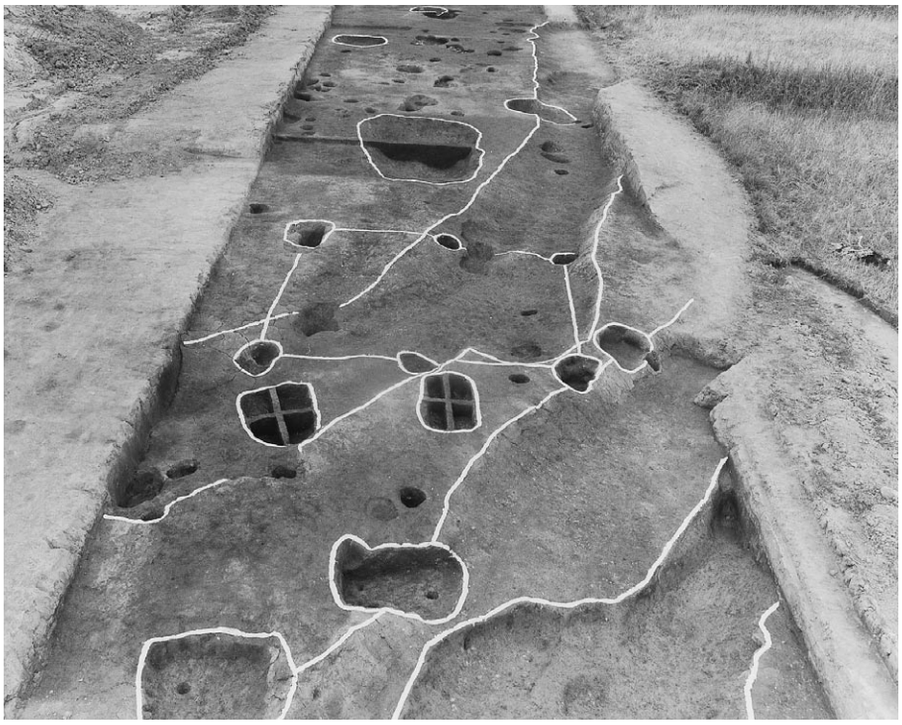
この地点は、第 1 次調査地点からは約 400m 程北側の低地に位置しており、古墳時代或いは中世期とこれ以降の時期においても同一の集落或いは別固の単位として集散を経たものと推定される。

本遺跡は、その周辺に数多く分布する前方後円墳や円墳からなる今宿古墳群の造営、太宰府主船司の設置、中世の南宋貿易或いは元寇時の緊張などの歴史的事象を多く経験した地域にあり、今後とも様々な発見の可能性を秘めた地域と言うことが出来よう。

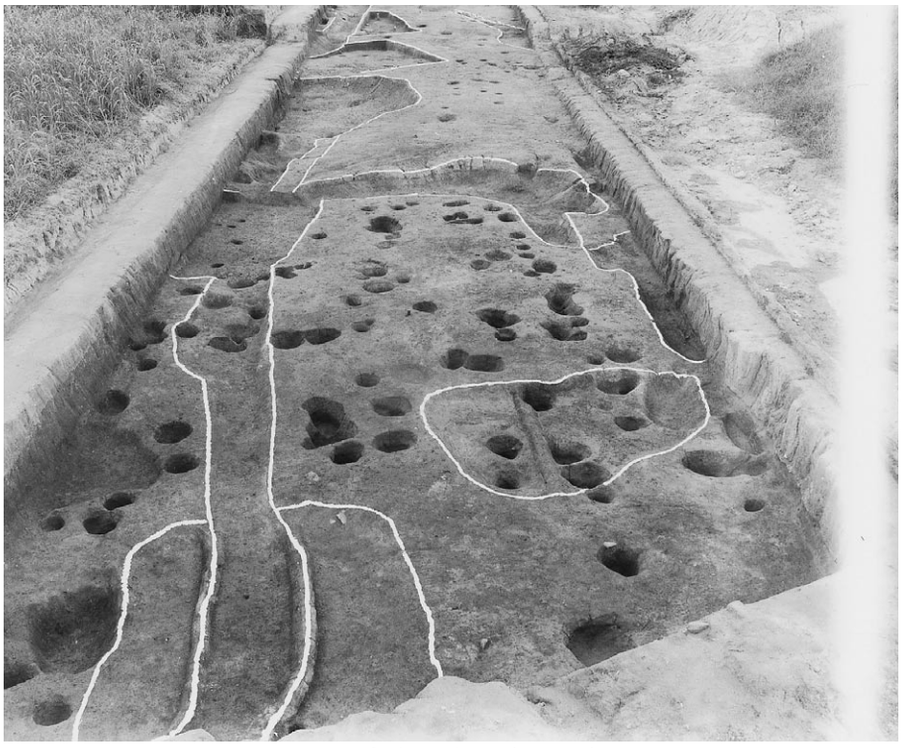
図　　版

PLATES

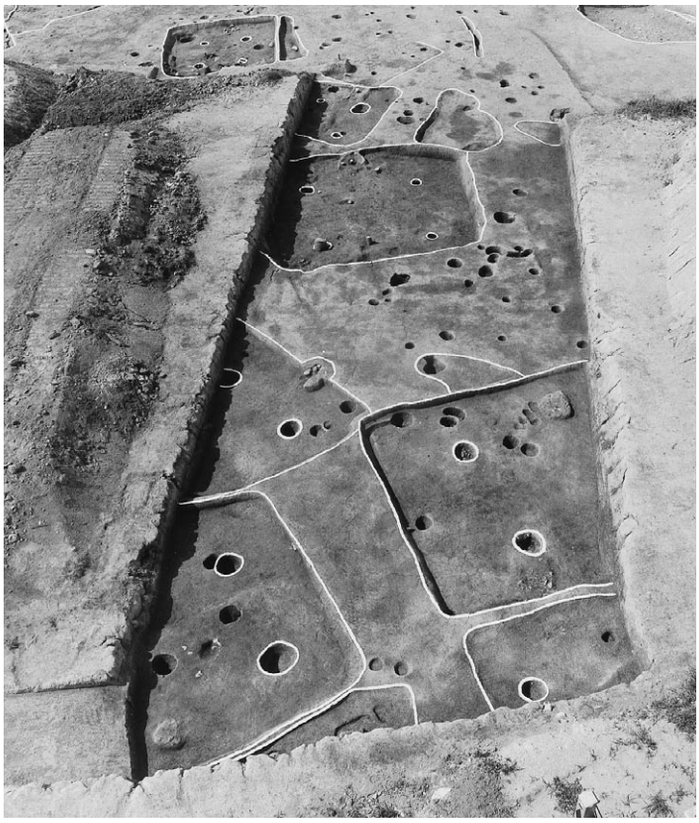
女原遺跡遠望（南から）



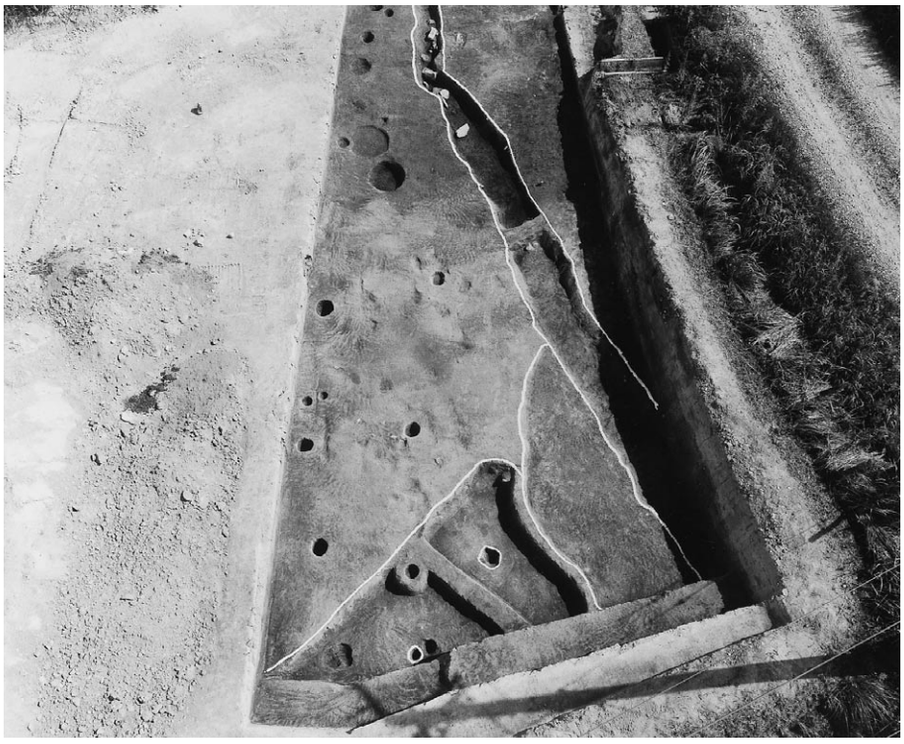
1．2号支線1区全景（北から）



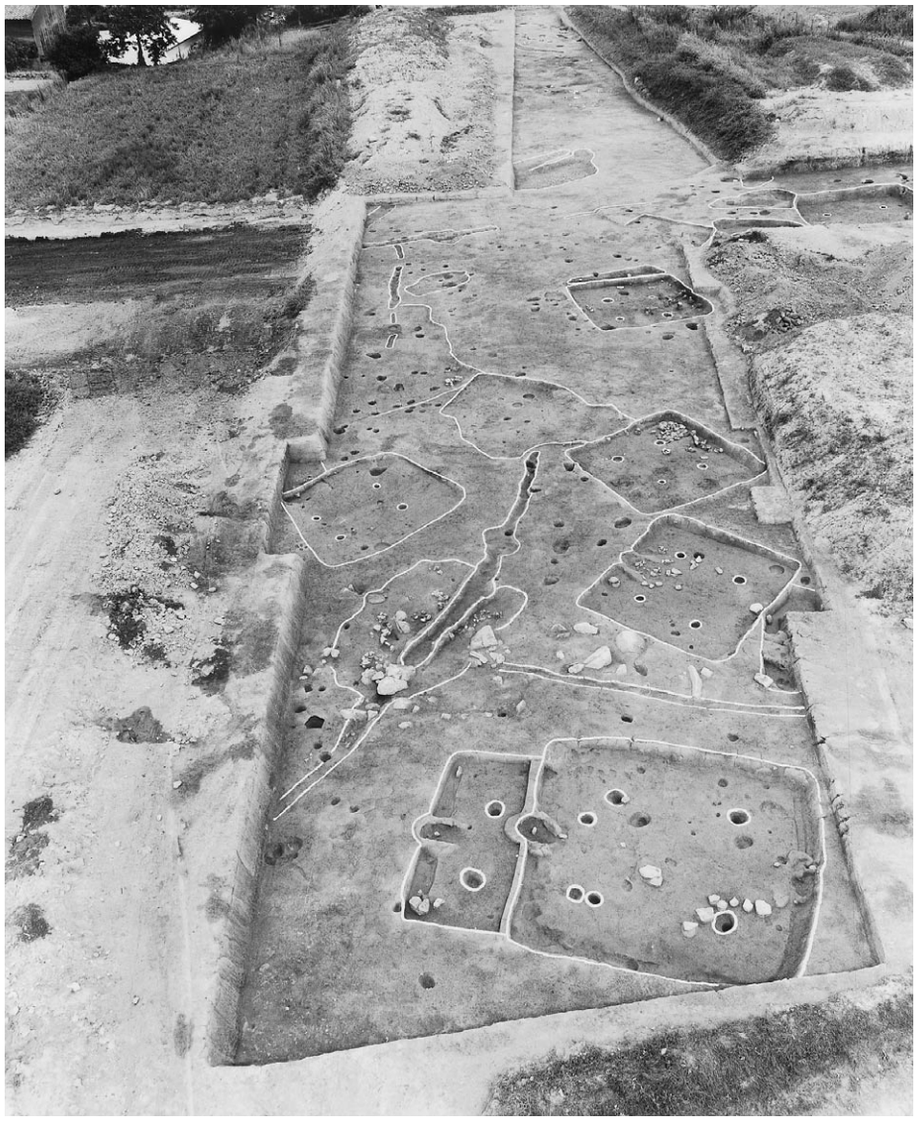
2．2号支線3区全景（北から）



1．2号支線4区全景（南から）



2．2号支線5区全景（北から）



1．7号支線全景（西から）

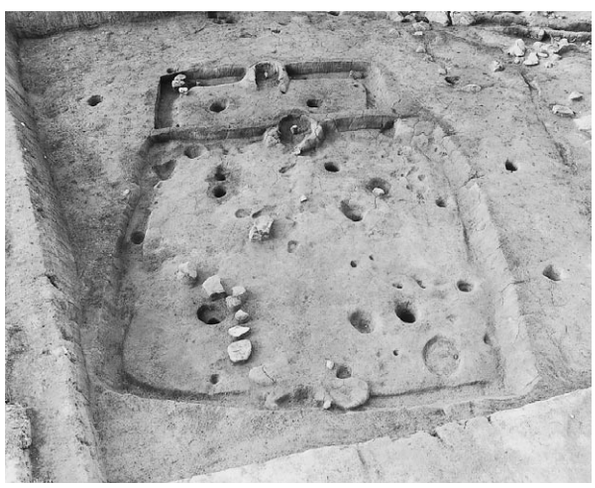
2．391-1地区全景（西から）

1．SC01 住居跡出土状況（2号支線3区）（北から）

2．SC02 住居跡出土状況（2号支線3区）（北東から）

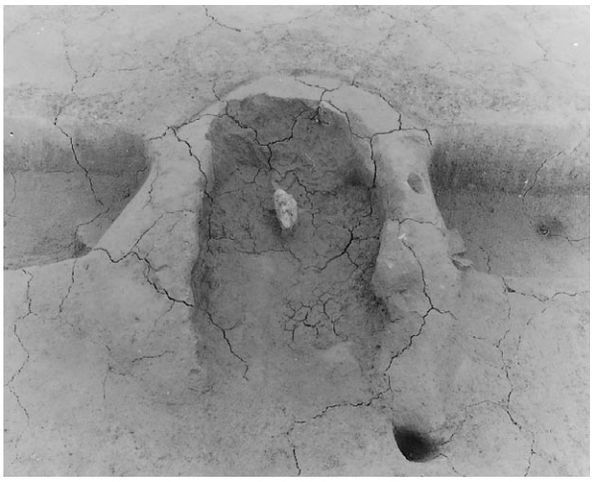
3．SC02 住居跡出土状況（2号支線3区）（北西から）

4．SC03 住居跡、SD07溝、SK20土坑出土状況
（2号支線3区）（南から）



5．SC04・05 住居跡出土状況（7号支線）（南から）

6．SC04・05 住居跡出土状況（7号支線）（北西から）

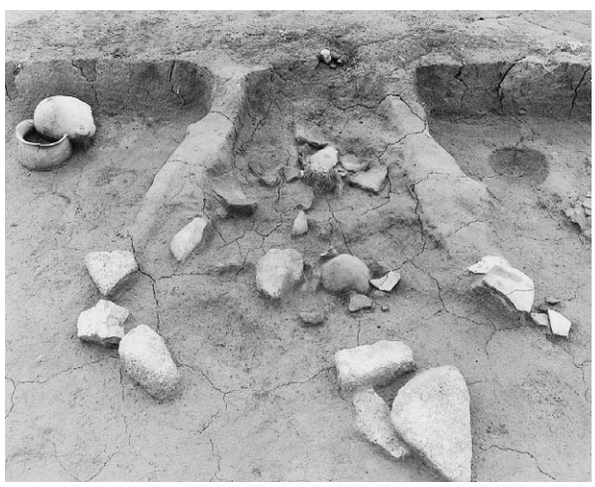


1．SC04 住居跡カマド出土状況（7号支線）（南から）

2．SC05 住居跡カマド出土状況（7号支線）（南から）

3．SC06 住居跡出土状況（7号支線）（北西から）

4．SC06 住居跡出土状況（7号支線）（南西から）

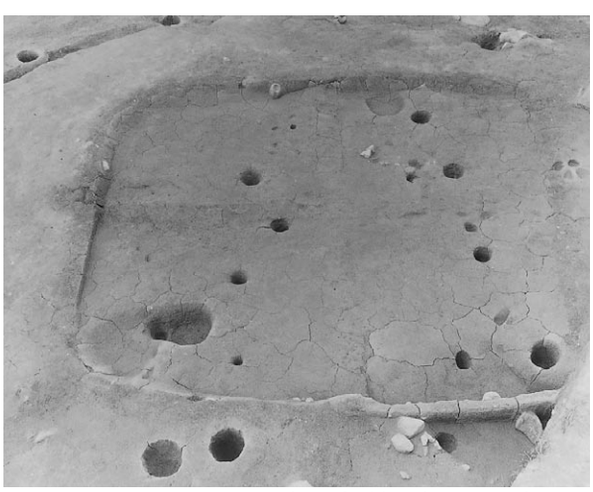


5．SC06 住居跡カマド出土状況（7号支線）（南西から）

6．SC07 住居跡出土状況（7号支線）（北西から）

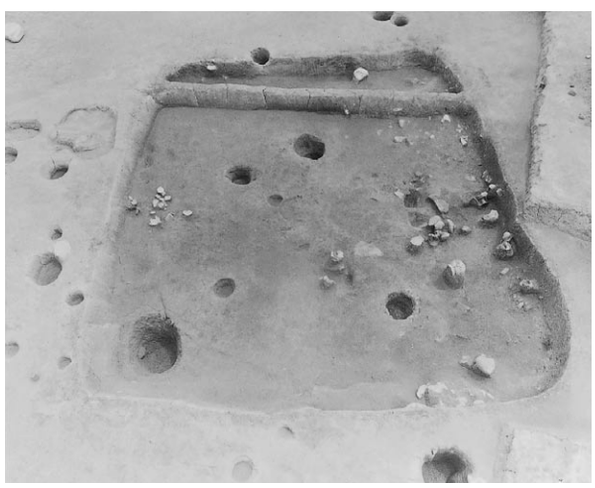
1．SC07・12 住居跡出土状況（7号支線）（南西から）

2．SC07 住居跡遺物出土状況（7号支線）（北西から）



3．SC08 住居跡出土状況（7号支線）（北東から）

4．SC09 住居跡遺物出土状況（7号支線）（北から）



5．SC09 住居跡出土状況（7号支線）（西から）

6．SC09 住居跡出土状況（7号支線）（北から）

1．SC12 住居跡出土状況（7号支線）（北東から）

2．SC13 住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）

3．SC14 住居跡出土状況（2号支線4区）（東から）

4．SC15 住居跡出土状況（2号支線4区）（東から）

5．SC15 住居跡カマド出土状況（2号支線4区）（南から）

6．SC16 住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）

1．SC16 住居跡カマド出土状況(2号支線4区)(南西から)

2．SC17 住居跡出土状況（2号支線4区）（南東から）

3．SC18 住居跡出土状況（2号支線4区）（南から）

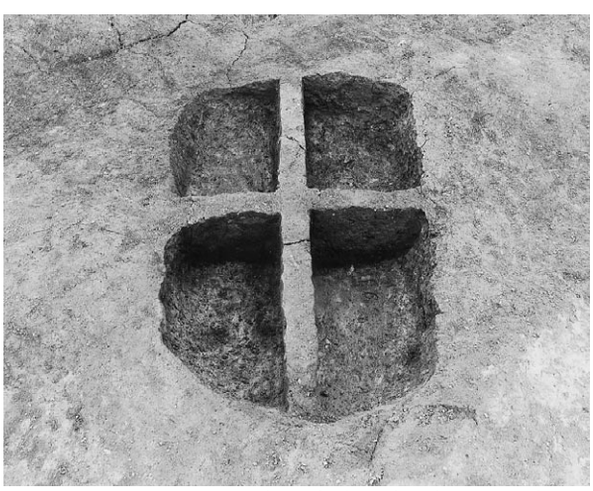
4．SC19 住居跡出土状況（2号支線5区）（北東から）

5．SC20 住居跡出土状況（391-1 地区）（東から）

6．SC20 住居跡出土状況（391-1 地区）（南から）

1．SK01 土坑出土状況（2号支線1区）（南西から）

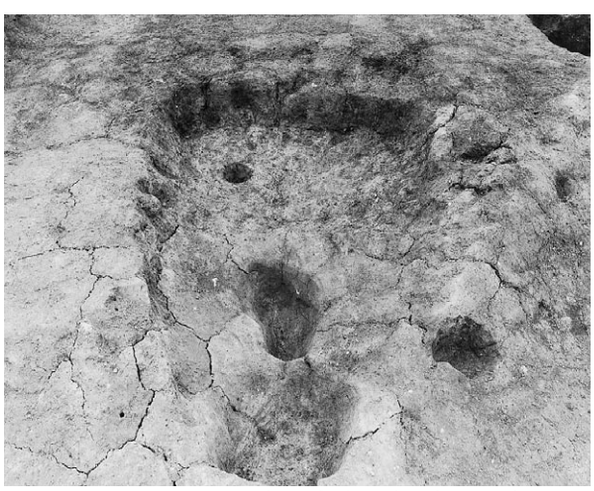
2．SK05 土坑出土状況（2号支線1区）（南から）



3．SK07 土坑出土状況（2号支線1区）（北東から）

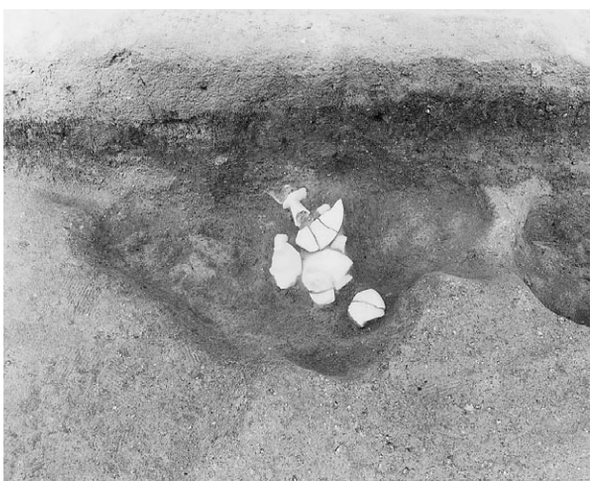
4．SK08 土坑出土状況（2号支線1区）（南から）

5．SK09 土坑出土状況（2号支線1区）（西から）



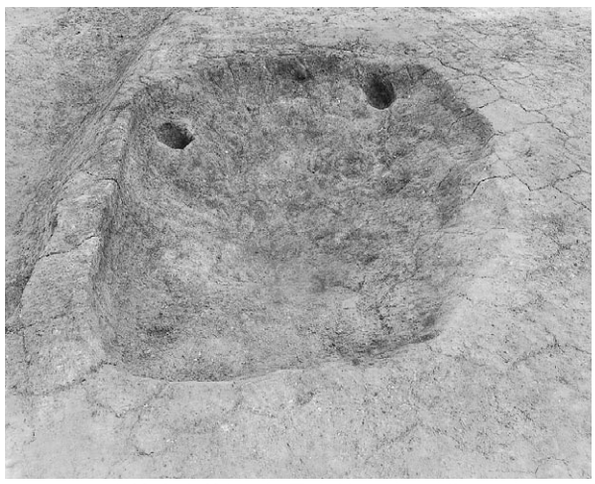
6．SK10 土坑出土状況（2号支線1区）（北から）

1．SK11 土坑出土状況（2号支線2区）（西から）

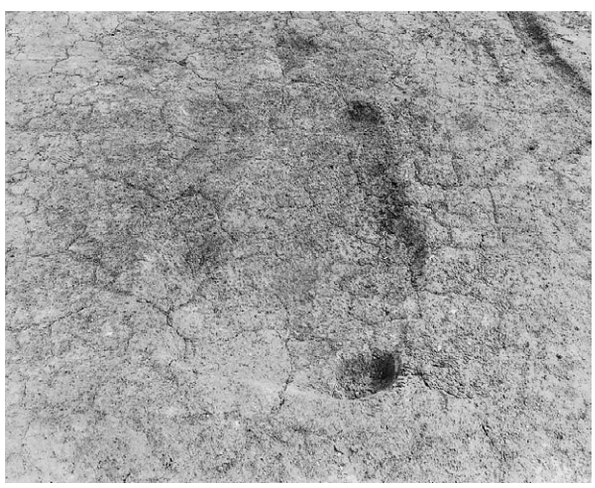


2．SK13 土坑出土状況（2号支線2区）（西から）

3．SK21 土坑出土状況（2号支線3区）（南から）



4．SK22 土坑出土状況（2号支線3区）（北から）



5．SK23 土坑出土状況（2号支線3区）（北から）

6．SK32 土坑出土状況（391-1 地区）（南から）

1．SK37 土坑出土状況（6号支線1区）（西から）

3．SP08 小土坑出土状況（2号支線1区）（北東から）

2．SK41 土坑出土状況（6号支線2区）（北から）

4．SP04・05 小土坑出土状況（2号支線1区）（東から）

5．SK24 土坑・SD07溝出土状況（2号支線3区）（南から）

1．SK01 土坑・SD01 溝出土状況（2号支線1区）（南から）

2．SD01 溝東壁土層断面（2号支線1区）（西から）

1．6号支線2区全景（南から）

2．8号支線全景（東から）

報告書抄録

書名	女原遺跡 4		
副書名	－第1次調査報告－		
巻次	4		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1053集		
編集者名	横山邦継		
編集機関	福岡市教育委員会	発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20090317	作成法人ＩＤ	40134
住所	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1	電話番号	(092)711-4667
遺跡名のふりがな	みょうばるいせき		
遺跡名	女原遺跡		
所在地ふりがな	ふくおかしにしくみょうばる		
所在地	福岡市西区女原		
市町村コード	40135		
北緯	33°34′15″	東経	130°15′58″
調査期間	1985.05.27～1985.08.12	調査面積	3,000㎡
調査原因	圃場整備事業	種別	集落
主な時代	古墳時代後期　中世		
遺跡概要	古墳時代中期－竪穴式住居+土坑 古墳時代後期－竪穴式住居+土坑+溝状遺構 中世－掘立柱建物+土坑+溝状遺構		
特記事項	中世期の遺構には龍泉窯青磁・褐釉陶器・北宋銭崇寧通寶などが伴う。		

女原遺跡 4

－第１次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1053集

２００９年３月３１日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1－8－1
電話　092－711－4667

印刷　株式会社 宣技堂
福岡市東区箱崎埠頭6丁目6-47
電話　092－631－2055